
ひるまのよぞら

三浦平原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひるまのよぞら

【Zコード】

N3019V

【作者名】

三浦平原

【あらすじ】

地球で忘れられたものが空からふつてくる世界のお話。ソフトビニール人形がお人好しだったり、リカちゃん人形が服を探して彷徨つたり、電気ケトルが神様だつたりする世界のお話。そこに落とされた少年が、恋人のために179万と1回世界を繰り返すお話。

終の廻転／懸想する在りし日の殺害機構（前書き）

地球で忘れられたものが空からふつてくる世界のお話。
ソフトビニール人形がお人好しだつたり、リカちゃん人形が服を探して彷徨つたり、電気ケトルが神様だつたりする世界のお話。
そこに落とされた少年少女の恋のお話。

終の廻転／懸想する在りし日の殺害機構

「最初からやり直そ」

時間が失速していくなか、俺は彼女に告げた。

「はじまりの日に、俺たちはまた出会つんだ」

彼女はなにも言わない。おそらくもつ、なにも見えていない。聞こえていない。

それでも俺は言葉を続けた。

「大丈夫。たとえキミが俺を忘れても、たとえ世界が俺たちを拒んでも」

そう、この世の全てを騙してでもはじまりの扉から光が逆流する。

俺は『今回』の彼女に笑つて見せた。

「俺は何度だつて繰り返して、永遠にキミを愛し続けるから」

そうして俺は、世界のネジを巻き直した。

キミが好きだと彼は言った。

出会いの日から五年、わたしたちはこの世界の真実に辿り着いた。

世界の秘密は残酷だった。

不思議の仕組みはどこまでも機能的で、優しさの入り込む余地を

認めなかつた。

彼とわたしはこの世界で出会つた。

この世界だから出会えた。

この世界だから愛し合えた。

しかし手にした真実は、全てをなかつたことにしてしまつ。

彼がわたしを愛したこと。

わたしが彼を愛したこと。

わたしと彼が共に生きたこと。

わたしと彼が出会つたこと。

全部、全部 なかつたことになつてしまつ。

わたしたちは話し合つた。

毎晩毎晩、話し合つた。

答えのないクイズに悩み続けた。

離れたくないとわたしは泣いた。

俺に任せろと彼は言つた。

俺がなんとかするからと、そつ言つて泣いた。

そんな手段が無いことは互いに知つていた。

執着は劣化する。

心は磨耗する。

変容しない気持ちなどない。

いつしかわたしは彼を諦めた。

この世の誰より愛する彼を、手放すことを決断した。

その日はわたしの誕生日。妊娠発覚からちょうど二ヶ月目のことだつた。

これ以上はいけない、と思つた。子どもが生まれたら取り返しが付かなくなつてしまつと。わたしは言つた。

「あなたを愛してる」

知つている、と彼は言つた。

「あなたを誰より愛してる」

「知つている」

「だけどもう、これ以上は誤魔化せない。いつまでもこの世界には居られない。優しいだけの楽園なんてどこにもなかつたのよ」

「それも、知つていい」

壊れた笑顔で彼は言った。

愛した人はわたしと違い、眞実を知つても微塵も変わらなかつた。もとより、彼は人の意見を聞く人ではなかつた。一人で何でもできるから、人に頼ることを必要としなかつた。そんな人だから、わたしは彼を欲し、そして受け入れた。誰も、何も必要としない彼だから そんな人に必要とされたらどんなに素敵だらうかと。そんな邪悪な願いを抱いて。

気持ちが通じ合つてからの毎日は金平糖のような日々だつた。願えば彼は何でもくれると知つていたから、わたしは何も願わなかつた。「キミは欲がない」と寂しそうに笑う彼が好きだつた。「もつと我が侶を言ってくれてもいいのに」。そういうつてわたしの髪を撫でるガサガサの手が好きだつた。

初めての恋だつた。

わたしにとつても、彼にとつても。

最初で最後の恋になるはずだつた。

それをいま。

わたしは手放した。

「もう、元の世界に帰りましよう。これ以上、自分に嘘をつき続けても悲しいだけだわ」

わたしは笑つて彼の手をとつた。

ちゃんと笑えていたと思う。嘘をつくのは得意だ。うまく笑顔を作っていたと思う。彼も笑つてくれた。

彼の笑顔はやっぱり寂しそうだつたけれど、それでもわたしの手を握り返してくれた。思えば彼はこれまで一度もわたしを拒絶しなかつた。間違つている時でさえ否定をしなかつた。わたしの意見も、わたしの行動も、わたしの在り方も、全てを肯定してくれた。キミ よいつまでもキミであれ。それだけが俺の願いだ。いつだつて、そ

う言つてわたしを認めてくれた。十歳でこの世界に迷い込み、そうして彼と出会つてから、これまでずっと。 そう、この不器用な男の幸せは、わたしというカタチであったのだ。

準備はいい、とわたしは聞いた。

いつでもいい、と彼はこたえた。

不思議の秘密は知れている。世界の仕組みは解けている。わたしたちはこれまでだつて、いつでもこの世界から脱出すことが出来たのだ。

わたしは彼の手をぎゅっと握る。彼もそれに応える。二人の体がぼんやりと光り出す。

わたしは元の世界を思つた。そこにいない彼のことを。彼を覚えていない自分のことを。彼は穏やかな声で「大丈夫」と言った。

「俺がぜつたい なにもかも、なんとかするから」

その言葉の意味はわからなかつたけれど、わたしは「うん」と頷いて笑つた。

光は強さを増していく。いよいよ目を開けているのがつらくなる。わたしは最後の瞬間まで彼を見ていようと、涙を堪えてまばたきを我慢した。彼の顔がゆっくりと近づいてくる。わたしたちは一人、目を開けたままの不恰好なキスをした。 そうして唇がゆっくりと離れていき、微笑みあつたその瞬間

「すまない、あさ」

彼がわたしの手を離した。

「最初からやり直そう。《はじまりの日》に、俺たちはまた出会うんだ」

時間が止まつて感じられた。

「大丈夫。たとえキミが俺を忘れても、たとえ世界が俺たちを拒んでも 俺は何度だつて繰り返して、永遠にキミを愛し続けるから」凍つた時の中で、彼だけが動いていた。この世の全てを置き去り

にして、彼の時計だけが時を刻んでゆく。

呆然と手を伸ばすわたしをよそに。宝石のような笑みを浮かべて。彼はこの世界に対し 最初で最後の我が仮を口にした。

「私は願う。終の廻転を私は願う。輝ける日々よ永遠なれ。世界の永続を私は願う」

うるさいほどの光が、目に見える景色の全てを覆つてゆく。わたしも、彼も、一人で暮らした小さな家も。何もかもが光に飲まれていく。

その間際、わたしは確かにその声を聞いた。

寂しそうな声。

悲しそうな声。

それは紛れもなく、わたしの愛した優しい人の声だった。

「キミを忘れるくらいなら、正しさなんて要らない。この世の全てを騙し抜いて 僕が真実になつてやる」

世界が光りに包まれる。

わたしはまもなく意識を手放した。

小鳥の歌声で田を覚ました。

俺は森の中に寝転んでいた。

樹々の合間から溢れる光があたたかい。土は僅かに湿り氣をおび、

体を動かすと落ち葉が音を立てた。うんと力を入れて体を起こす。何年も寝ていたように骨や筋肉がギシギシ鳴いた。栗鼠に似た小さな生き物が何かの実を抱えて枝の上を走っていく。風が髪をそつと撫でる。全てが気持ちいい。世界はまさに、優しさで溢れていた。

ああ。

帰ってきたんだ。

耳を澄ませば寝息が聞こえる。どこにいるのかは知れている。俺は彼女の元へと早足で向かった。

この森で一番の長老、樹齢何百年という大樹の足元に彼女はいた。まだ十歳の少女 生まれて十年と九日の少女が静かに眠っていた。

俺の愛した、ただ一人の女。

俺は少女の隣に腰をおろした。大樹に背をあずけ、そつと少女の髪を撫でる。彼女は小さくんつ、と唸つて顔を顰めた。五年経つても変わらない、この嫌そうな顔。幼くても、彼女は彼女だった。俺は空を見上げた。穏やかな気分だった。彼女が起きるのは7分と19秒後。それまで愛しい人の寝顔を見つめていらざることが幸せでならなかつた。

時間は過ぎる。やがて彼女は目を覚ました。彼女ははつと体を起こして自分の体をあちこち触り、そして周囲を見回して、隣に座る俺を見つけた。彼女は地に尻をつけたまま後退りし、警戒心を剥き出しにして言った。

「あなた、だれ？わたし、どうして、こんなところにいるの？……おじいちゃんはどこ？」

嗚呼……あさこ。また会えたんだよ。

俺たちはまた会えたんだ。

俺は涙が溢れそうになるのをぐつと堪えた。

そうして解りきった質問を。

もつ何度も繰り返した、台本通りの出来事の台詞を口こした。

「おい、ちびすけ。俺を呼んだのはおまえか？」

世界は繰り返す。

何度も、何度も、俺が諦めない限り永遠に。
可能性は無限にあるといつ。

ならばその全てを網羅してやろう。

俺と彼女が愛し合つ六年という時間の、全ての可能性を。

この日。

俺たちは179万回目のファーストコンタクトを果たした。

せじまつーーひるまねじめりとひるまのせかい

ひるまです。

空に引っ張られたような感がありました。ダイソンの何万倍も強力な掃除機が、人工衛星の周回する高さから、わたし一人を吸い込もうとしている。そんなカンカクです。

そして実際、わたしの髪は空をさしてまっすぐに逆立つていました。

弟が目を大きくひらき、口をパクパクしています。可笑しな顔です。

頭の中の常識的なわたしが分析します。「興味深い。立ちくらみが酷くなるとこんな幻覚を見るのか」

普段は滅多に顔を出さないアーチキストのわたしが笑います。「凄いな、葉っぱやキノコなんか田じやない。」そのまま空まで飛んで行こう。少女時代の夢を叶えるんだ」

幼い頃の夢は「うちゅうひこうし」でした。わたしは今も少女です。

空の掃除機はそのパワーを弱から中に上げたらしく、わたしの体はどんどん軽くなっています。これが強になつたとき、いよいよわたしは空へと飛び立つのでしょうか。ワクワクは止まるとこを知りません。

ねえさんーと叫んで弟がわたしに駆け寄ってきます。走り幅跳びの選手のような走り方です。トトロに飛びつくメイさえ軽く超える勢いに、戦慄が走りました。弟はどんどんスピードにつてゆき、わたしの悪寒も加速します。弟は平均的な男子中学生より一回りは大きく、体には立派な筋肉が付いています。それに引き換えわたし

の背は小学五年で止まつたまま。体も痩せつぱいで、学級でのあだ名はもちろんチビ子です。

嫌な予感は的中しました。地球で見た最後の光景は、こちらに向かって飛び込んで来る弟の必死な顔でした。

弟は助走を殺さずわたしに飛びつきました。

わたしはクフフと息を吐いて気を失いました。

よぞらだ。

ソフトビールの怪獣に揺すられて目を覚ました。体長20センチほどの小柄な彼は「絶対にここを動かないでくれよ」とだけ言つて、木々の合間に消えた。俺は切り株に座つて彼の帰りを待つてゐる。ここはぞら森の深くであるらしい。それも普通でない森のだ。携帯電話は圏外であつた。近くに姉がないことは「匂い」でわかるが、それ以外は何から何まで不明である。

複雑怪奇な気持ちであった。

姉に言わせれば俺の頭の中は年中複雑怪奇だそうであるが、今現在、怪奇な趣きは俺以外の全てにこそあつた。俺は姉に教えてやったかった。俺の頭の外にもわけのわからぬものはあるのだぞ、と。

その姉も今はいない。俺はひとりだ。

なぜ俺はこんな所で寝ていたのか。ここはどこなのか。なぜ玩具の怪獣が喋つたのか。怪獣氏は何をしにどこへ行つたのか。疑問は尽きない。

そして、目を背けてはいけない疑問。姉はどうなつたのか?これが最も重大な問題だ。

気を失う直前、俺は姉を抱いていた。性的な意味で含むところはない。話してもおよそ誰も信じないであろうが、買い物の帰りに姉

が突然空に向かつて浮かび始めたのである。俺はその様子を見て咄嗟に姉に抱きつき、地面に引き止めようとし、そしてなぜか気を失つたのだ。気付けば俺はこの森の中にいた。あとは冒頭のとおりである。

姉はいつたいどこに消えたのであるつか。あれは軽い喘息持ちであるし、チビである。あまけに非力であり運動音痴である。数え役満である。大自然に一人で立つにはあまりにも脆弱な存在である。「ここ」がどんな場所であれ、姉よせめて人の大勢いる所にいてくれ、と俺は切に願つた。我が姉の真価は人間社会でこそ強く發揮されるからだ。

怪獣氏は五分ほどで戻つて來た。彼は体よりも大きな2㍑のペットボトルを抱え、膝を曲げない軍人歩きで俺のところまでやつて来る（怪獣氏の膝・肘には関節の機構がない）。そうして俺にそれを差し出した。未開封であつたが、ラベルが剥がされていた。キヤップには「伊藤園」の四つ葉のマーク。緑茶だった。「飲みな」と彼は言った。俺はキヤップを開けた。

「それ飲んで、深呼吸するんだ。ぐいっとやれ。もう一度。そう、そうして大きく息を吸つて。心を落ち着けて。よろしい。それじゃあ、自分が誰だか言ってみる。名前を思い出せるか？年齢は？出身地は？」

彼の顔は動かないが、口調はこちらを労るようなものだった。俺には彼が心優しい人に思えた。俺は何かにつけ、簡単に人を信じてはいけないと姉や母たちに叱られる愚か者だが、彼ならば信じてもいいような気がした。根拠は勿論ない。しかし彼はビニールの怪獣だ。人ではない。信用しても問題はないだろ？ 俺は切り株からおりて地面に正座し、彼に頭を下げた。

「礼を言います。助けてくださいありがとうございました。自分は夏野よぞらと申します。14歳です。新潟県の山奥に姉と父と母たちと暮らしています……いました」

「これはご丁寧に。おいらは大怪獣ギモギモと申します。見てのと

おり、おもちゃのビニール人形だ。対象年齢は3歳以上。アマネ屋
ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズの第一弾。シリアル
ナンバーは019で『ゼロ』です。ジュークって呼んでくんna

「ジュークに聞きたいことがあります」

「わかつてゐる。おいらも教えたいことが山ほどあるんだ。はじめは
おいらに話させてくれ。疑問に思つたことはその都度聞いてくれて
いい。 まず、おまえさん、この世界の人間じやないだろ？？」

木々がざわめいたような気がした。日の光が田に刺さつた。俺は
頷いた。

「たぶんそうだと思います」

「やつぱりな。おいらもそいつが、あつちで忘れられてこの世界にや
つてきたんだ。あつちじやソフビ人形は喋らない。そうだな？」

俺は頷いた。『あつち』というのは俺の元いた世界のことであろ
う。忘れられて云々というのはわからないが。

「この世界がどういう場所なのか、それは、残念だがおいらにもわ
からねえ。現状わかつてるのは、どうやらこの世界はあつちの世
界と深く関係しているらしいってことだ。おいらはここに来てもう
21年になるが、その間、いろんな物が空から降つてくるのを見た。
それは本だつたり、家具だつたり、おいらみたいなおもちゃだつた
りした。共通しているのは、みんなあつちの世界に居場所がなくな
つた物だつてことだ。どうしてか、おいら達にはそれがわかるんだ。
他の連中もわかつてゐる。ああ、こいつもあつちの世界で自分の役目
を終えたんだな、つて。おいらは自分がおもちゃとしての価値を失
つたことを、空から落ちながら理解した。あつちの世界での持ち主
のことは覚えてねえ。他の連中、机や車椅子や電気ケトル達もそ
だつたんだろう。そのことが互いにわかるんだ。言葉では説明しづ
らいんだが、圧倒的な共感がある。向き合つと、こゝ、心で強い悲
しみみたいなものが感じられるんだ。理解し、理解されたこともそ
の時わかる」

ジュークは一時間ほど使って（体感だがそれなりの精度だと自負

している)俺にこの『不思議な世界』のことにについてのあれこれを教えてくれた。俺は時には相槌を打ち、時には聞かれたことに答えながら彼の話を聞いた。突拍子も無い内容であつたが、彼の言葉は俺の中に抵抗なく染み込んだ。

俺はジュークに姉を見ていいか聞いてみた。彼は、今日この森で見た人間は俺だけだと答えた。この森を北に抜けるとジソという大きな街があるから、そこでなら何かわかるのではないか、とのことだつた。今いるここは『ギモギモの森』と呼ばれる森の西側あたりであるらしい。

「ところで、なぜ俺がこの世界の人間でないとわかつたのですか？」

俺が彼と同じように『忘れられたもの』だからだろうか。しかし俺の心に悲しみは無い。共感も無い。あるのは姉の不在からくる、恐怖と焦燥だけだ。

「服だよ。そんな上等な服を着た人間が森でぶつ倒れてるわけがない」

俺の服装は黒のジーンズに姉とおそろいで買った紺のコート、それと鞄だ。別段上等な衣装では無い。この世界ではこんなものでも上等と分類されるのだろうか。

「それに態度だな。この森でおいらを見て、驚き以外の反応を見せない。そんな奴はこの国にはいないぞ」

「普通はどういった態度を？」

「そもそも普通の奴はこの森に入らない。おいらたちはそこそこ有名人でね。人間はこの森を避けて通るのや。それでも会つちまた時は…… そん時はみんな、耳を塞いで走つて逃げていくよ」

「おいら『たち』? まだ会つていない電気ケトルや机のことだらうか。

「ジューク意外の『忘れられたもの達』も、あなたのように喋るのですか?」

「おいらたちが恐れられてる理由は訊かなくていいのかい?」

「興味ありません。誰かを信じることは噂に左右されて決める問

題ではないと考えます」

ジュークは少し黙つた。何か言おうとしたようにも見えたが、表情は変わらない。気のせいかも知れなかつた。

「……椅子や机は喋らないし、動かない。動いて喋るのは『かつて人間の友達だつた』物だけだ。会つたことのある奴だと、ティベアや、着せ替え人形、それにおいらみみたいなソフビ人形なんかがいたな。大抵は森の外に行つちまつたが」

「その彼らと連絡をとることはできますか」

「世界各国にざつと98人つてところかね」

「自分はこれからジソの街に向かいます。自分が気を失う直前まで一緒にいたので、おそらく姉もこの世界にいると思うのです。しかし一人の力では限界がある」

「仲間に連絡をとつて、お姉さん探しに協力してほしいと?」

「はい」

「一つ、条件がある」

「はい」

「おいらにはやらなきゃならないことがある。正直に言えば、今おいらがおまえさんにおせつかいを焼いているのだって、その目的のためだ」

ジュークは真面目な声で言つた。

「おいらは、化け物に捕まつたおいらの仲間を救い出したい。取り引きだ。それをおまえさんが手伝ってくれるなら、おいらはおまえさんの『本当の味方』になつてやる」

ジュークがソフトビニールの手を差し出す。

「どうする?」

俺は迷わず彼の手を握り返した。

「そこに、自分を案内してください」

一本の指で触れた彼の手は、硬くて冷たかった。

せつせつへんねんせんじがんせんのかこ（後輪轍）

はじまり／ひるまどよやらとでかいじら

ひるまです。

音というものについておはなししようつと思ひます。

心理学的に音と言えば人間の耳に聞こえる音だけを指しますが、ここでわたしがするのは物理学的な意味での音のお話です。

小さな頃　生まれて間もない幼い頃から、わたしは「音が得意」な子どもでした。

特に動物の発する音が「得意」で、幼稚園に入園する頃には鳥の鳴き声を正確に再現し、庭にスズメやカラスや鷹を呼び寄せては、首を傾げる鳥たちを縁側から眺めて喜んだものです。父の声を真似て「おまえたちとはもうやつてられん！俺はこの家を出て行くぞ！」と叫び、11人いる母たちに大目玉を食らつたこともあります。あの時の母たちの顔は今でも忘れません。小さな悪戯心が人を絶望させることがあるのだと学びました。地動説を認めるなどを決断したクリスチャンでももっと明るい顔をしていたに違ひありませんでした。

小学校に上がる頃には、猫や犬などの身近な動物であれば、それが鳴き声によって伝達するメッセージの内容をかなり正確に読み取る（聞き取る）ことができるまでになっていました。夜中に猫の喧嘩を仲裁した回数は両手の指では足りません。カラスに「ミ漁りをやめるようお願いした回数はその倍です（彼らにとつては死活問題ですので、ワンブロック離れたゴミ置き場を教えることで了承をいただきました）。その頃になつてようやくわたしは「超音波」や「低周波音」という言葉を知りました。わたしが普通に聞いたり出したりしていた音は、母たち普通の人間にの耳には聞こえていなかつたのです。音圧についても、たつた三百メートル先の会話をえ

普通』の彼らは聞き取れないのでした。弟のよぞらは聞き取ることもできましたが、あれは普通ではないので横に置いておきます。それに弟は応用・分析というものがとことん苦手ですから、同じ音や同じ声を出すことはできても、動物たちと意思疎通することはできませんでしたし、できるようになると努力することもありますでした。「おれのねえさんはすごいのだ」と一人で納得してウムウム頷くだけでした。わたしに言わせれば弟のほうがよほど「凄い」のですが、それもまた今は横に置いておきます。

中学校に入学してまもなく、一番若い母の口ネで、ある大学のえらい先生のお話を聽講する機会を得ました。その内容は、大脑聽覚野における音情報の処理機構についてわかりやすく説くもので（要するに、聽覚の構造は犬も猫もヒトも同じなのにどうしてヒトは子音や母音などの微妙な音の違いを聞き分けて言葉として認識できるの？というお話です）、かつて拝読した同氏の論文では解り辛かった部分に関しても説明がなされ、わたしにとつてはたいへん満足のいく30分がありました。

事件が起きたのは先生のお話が脇道に逸れ、質問の時間と言いながらも、本筋とはあまり関係の無い、ちょっとした雑談に入った時のことでした。

「だからまあ、犬や猫や牛なんかは、人間がするような言葉による細かな意思疎通というものを、同じ生き物同士でもしない、いや、できないのである、ということになるわけですね」

「えつー？」

先生の何気ない一言に、弟が大袈裟なまでに反応したのです。そこからは散々でした。

「どうしたのかな？気になることがあつたら、遠慮無く聞いていいんだよ？」偉い先生が優しく促しました。

「動物が、言葉を解さないというのは、本当なのですか？」

弟がわたしのほうをチラチラと見ながら丁寧な調子で先生にたずねました。

「キミが言つてるのは、『お手』や『お座り』のことかな？あれらは学習を経たうえでの行動であつて、厳密には言葉ではないんだ。イルカの曲芸なんかも学習の成果だね。わたしがいつた言葉というのは、『今日はいい天氣ですね』とか『そろそろ寒くなるけど冬服はもう出したのかい？』とか、そういう意味疎通のことさ。もつとも、『お手』や『お座り』にしても、まったく躰をしていない野生の狼に、初対面のキミが声によつてそれらの行動をさせることができたら、それは狼にも言葉があり、その言葉をキミが正しく理解しているということになるけどね。……もしかして、そういう意味で聞いたのかな？」

「はい。自分は、動物にも人間と同じようにそれぞれの動物の言葉があると考えます。ただ、人間にはその言葉がわからないのです。動物の言葉を理解できる頭と再現できる器官さえあれば、彼らとの会話は成り立つものと考えます」

「キミ、気持ちいいくらいハキハキ喋るね。自分の考えをしつかり持つて、それを順序立てて人に話すこともできている。まだ高校生だろう？うちの学生たちにも見習つてほしいもんだ」

「いえ、自分は小学4年生です」

「ええっ！？」

ここまでで終わつてくれれば良かつたのです。先生が弟を褒めて、弟の大きな体と態度に大学生の皆さんのが驚く。それでいいではないませんか。そう願つていたのですが、そうはなりませんでした。先生が「冗談めかして弟にこんなことを言つたのです。

「キミはもしかして、動物と会話ができるのかい？」

わたしは必死で目をパチパチやって、弟を止めよつとしました。もちろんそんな合図は通じませんでした。

「自分はできません。しかし姉は優秀なので、およそ鳴き声を発する全ての生き物を意のままに操ることができます。見たことのない動物でも、一時間も観察すれば言葉のパターンを覚えるそうです」失笑でした。大学生の皆さんが一様にわたしを見て失笑していました。

した。講師の偉い先生も苦笑していらっしゃいました。部屋にいる半数の人がわたしを「純朴な弟に嘘を教える性根の捻くれた姉」と思つたに違いありません。もう半分は妹だと思つたでしょう。わたしは真つ赤になつて俯きました。消えてしまいたい、穴があつたら入りたいとはまさにこのよだな状況かと思いました。そこで、おもむろに母が立ち上がりました。母は大学生たちの間を縫つて窓へと向かいます。

「あんたたち、そんなことできつこないと思つてるでしょ? うちの子は、ちょっと凄いのよ? 笑つた奴、全員謝つてもらうから」ぽかんと口を開ける皆さんを置き去りにして、母はわたしを呼びました。

「ひるま、見せてやりなさい」

豪快な人でした。そんなところが密かに好きでした。

わたしはキツと顔を上げると、母のもとまで歩いて行き、窓を大きく開けて、外に向かつて叫びました。

「カアー」

背後からざわめきが聞こえました。わたしの鳴き真似が想像以上に上手だったので驚いたのでしょう。でも、まだです。わたしは力アカアと何度も呼びました。しばらくすると、カラスがこちらに向かつて飛んできました。

「おい、まさか」「マジだ」「ホントかよ」「これ、ひょっとして

……

大学生の皆さんは「よ」よ立ち上がって窓に寄つて来ます。講師の先生が「なんてことだ」と呴いたのが聞こえました。カラスは速度を落として窓枠にソフトランディングを決めました。わたしはカラスの彼女にお願いします。「怖いことはしません、中に入つてくださいませんか」。カラスが室内に入つてきます。部屋中がシーンと静まり返ります。「その大きな生き物の肩に止まつてください」。カラスが弟の肩に止まります。

「そつちの端まで飛んでください」

「この帽子を持つてみてください」

「焼きそばパン食べますか？」

カラスの彼女にしてもらう内容は、一度日本語で黒板に書いたあとにカラス語でお願いしました。

教室はいまや興奮の嵐のただ中にありました。カラス氏にお土産のパンを持たせ、お礼を言つてさよならしたあとは寮生が飼育しているイグアナのマリリン氏にダンスを披露してもらい、飼い主のお兄さんに彼女からの不満や改善要求を伝えてあげました。

「わたしのこれまでの研究は何だったんだ。すべて間違いだったのか……？」

講師の偉い先生はしばらく呆然としていました。

見せられることがあらかた終わると、わたしたちは当初の主役であつた講師の先生から研究室に呼ばれ、頭を下げられました。

「お願いします！どうか我々の研究に協力してください！」

これは話を聞いた母がバツサリと切り捨てました。

「ゴールラインが同じでも、出発点を違えたアプローチは合一されるべきではないわ。あなた達の目指す場所には、うちの子が既に別方向からたどり着いている」

そのあとも色んなことがありました。学生さんが携帯電話で撮影したわたしの映像をネットに流したり、それを見たテレビ局の人が我が家に訪ねてきたり、そこでキッパリと断つたにもかかわらず心霊番組の一幕で『怪奇！カラスの言葉を解する少女！』と題された映像とその解説がモザイク付きとはいえ三十分にもわたって全国のお茶の間に放送されたり、顔も体もボロボロになつたテレビ局の人たちが20人ほどで謝りに来て、その後すぐに「あれはやらせだった」とテレビで謝罪がなされたり（朝早くの誰も見ていないような時間でなく、ちゃんと夕方七時に放送されたところに父の影響力の大きさを感じました）、東京湾に謎の死体が浮かんだり……本当に色々ありました。

長々と語りましたが、わたしが言いたいことは一つです。おそらく

く今までにわたしと似たような境遇にあるであらう弟が、これまたおそらくわたしの心配をしているであろうことは、杞憂どころか、余計なお世話であると、わたしは声を大にして言いたいのです。わたしは大丈夫だから、よからこそこそ頑張つて、おうちで帰る方法を探しなさい。そう伝えたいのです。

勿論、そんな手段は無いのですけれど。

さて、わたしひるまがイエシゲさんの背中に乗つて森を抜けると、なんとか歩いて行けるくらいの距離に小さな集落が見えました。近くの畠には人の姿も確認できます。これでなんとかなりそうです。わたしは安心しました。

グゴゴブ、ヒイエシゲさんが唸ります。イエシゲさんは銀色の牙を四本もはやした大猪です。両頬のキューートな膨らみと、三十秒も歩くと一度止まってお小水をすることから、イエシゲさんと名付けさせていただきました。ちなみに今の唸り声は「毛のない生き物の村が見えた、小さい生き物よ」という意味です。

「ええ。ここまででいいです、イエシゲさん。ありがとうございます。本当に助かりました（グゴゴブ、ゴボ、ブヒヒ、ゴゴゴ、イエシゲ）」

わたしは歯と喉と唇を使って「イノシシ語」でお礼を言います。イエシゲさんはゴゴヒヒゴ（また会おう、不思議で小さな生き物）と鼻を鳴らして森の奥に戻つて行きました。私は彼の大きなお尻を見送ります。キューートで力持ちで、それでいて気取らない紳士的な雄猪でした。彼はわたしに雌としての価値を見出しませんでした。それでもわたしの頼みを聞き、見返りも無しにここまで運んでくれたのです。おまけにお亡くなりになつたお父様の牙までいただいてしまいました。なんて大きな雄なのでしょう。わたしの心をポカポカした液が満たします。心地良い失恋でした。

「キピ、ピッ、ピイッ、ピペッ（歩け、ゆこつ、毛の長い大きな生き物。我还是まだ見ぬ世界を田にするのだ）」

ヒテタダ君がわたしの頭の上で羽根をパタパタさせます。ヒテタダ君はウグイスに長い尾をくつ付けたような小鳥さんです。手の平ほどの大きさしかありません。彼はもつじばらくわたしと行動を共にしてくれるそうです。

「そうですね。行きましょうか、ヒテタダ君（ペペペッ、キビ、ヒデタダ）」

わたしは頭にヒテタダ君を乗せたまま、集落に向かつて歩きはじめました。

「おや、これは、魔女さまでいらっしゃいますか？」

畠仕事をしていらしたおじいさんに「ここにちは、ご精が出ますね」とご挨拶したところ、帰ってきた言葉がこれでした。魔女です、魔女。いよいよきな臭くなつて参りました。わたしは頭からヒテタダ君を落とさないように気をつけながらお辞儀をしました。

「旅のものです。弟……いえ、兄を探してここまでやつてきました。背の高い、わたしと同じく真っ黒い髪をした男です。額に大きな傷があります。それらしい人を見なかつたでしょうか？」

「見てはおりませんなあ。わたしはもうボケかかつておりますが、少なくとも、きのう今日に見た記憶はありません。ここにはおらんでしょう。なにぶん小さな村です、他所から人が来ればすぐにびこやれ知れますよって」

「そうですか……」

「どうやら弟はここにはいないようです。よだらつたら、いつたい

どこに行つてしまつたのかしら？知らない人について行つてはいけないと教えたその日の夜に隣の県で警察に保護されるような子です。牛がこっちを見ていたから」という理由でトラックに乗り込んだと言つのだから頭の出来に救いがありません。それ以降『夏野家のきまり』に「よぞらは動物について行つてはいけない」の一文が加筆されたことは言つまでもありません。わたしは弟が心配でした。

現状も心配ですが、将来的な意味でも心配でした。

「魔女さまは、青の森から来なさつたんで？」

青の森といふのは、わたしが田を覚ましたあの森のことでしょうか？　ところで今、森を越えて、ではなく、森から、と言つた？　とりあえず、わたしは「そうです」答えました。

魔女ではないのですけれど、訂正はしないでおきました。よそらがいないとわかつた以上、長居する場所でもありません。不愉快な気分にさせるのは不本意です。

「もし止まるあてが無いのでしたら、村長の家に行けば邪険にはされんでしょう。『次の街』まで一日はかかりますよつて」

次の街？　どういう意味でしょつか？

すつきりしませんでしたがあまり引き止めても悪いと思い、わたしはおじいさんにお礼を言つてその場を後にしました。おじいさんは「気にすることはありません」と言つて農作業に戻ります。そうしながら、彼は最後にポソリと一言もらしました。その一言がなぜかわたしの頭から離れませんでした。

「なにせ、わたしら村のものは舞台装置ですか？」

意味はわかりません。でも、背筋がとても寒くなりました。

「キビ、ピー、ペペツ、ピー（震えているぞ。何を恐れる、毛の長い大きな生き物）」

ヒデタダ君が心配してくれます。大丈夫ですよ、とわたしは言いました。だから頭皮を突付くのはやめてください。

わたしは父の大きな腕を無性に恋しく思いました。

村に入り、一時間ほどかけて情報収集をしました。もちろん時間は携帯電話で確認しました。わたしの体内時計はあてになりません。電波は圏外でした。

村には名前がありませんでした。住む人達はただ「村」と呼んでいるそうです。

9人の村人さんに聞きましたが、やはり弟はこの村を訪れていないようでした。そしてどうやら、わたしがいるこの場所は夢の中か、

或いは『地球以外のどこか』であるようでした。外の畠にいらした
どう見ても「一カソイドなおじいさんが流暢な日本語を話した時
点で、薄々そうではないかとは思っていたのですが、しかしながら、
わたしの頭の中にはいる常識的なわたしが「そんなわけあるか！そん
なわけあるか！」と強く否定するのでいまいち信じ切れずにいたの
です。けれども村に一歩入って、すぐにわたしは確信しました。

村に八つある家はみんなモンゴルの遊牧民が使うテント（ゲルと
かパオとか呼ばれるあれです）のような建物でした。ただ、家畜は
殆どいませんでした。村の真ん中にある厩舎に馬が五頭と、あとは
繋がれていらない山羊が村の中をうろうろしているくらいです。家が
遊牧民のそれに似ているというだけで、別段移動生活をしているわ
けではないのでしょう。それはいいのです。重要なのは、村にある
全ての家の入り口扉の上に、わたしたち日本人がよく見慣れたある
プレートが取り付けられていたことです。

『保健室』、『理科室』、『音楽室』、『職員室』、『校長室』、
『家庭科室』、『美術室』、『1年3組』

そう、学校の各教室入り口に付いているあのプレートです。男子
がジャンプしてタッチし、壊して先生に怒られるあのプレートです。
汚れてところどころ茶色くなったり黄ばんだりしていましたが、間
違いなくあのプレートです。あれが家々の入り口に付いているので
す。

ちなみに村長さんの家は『1年3組』でした。畠でお話を聞いた
おじいさんの家は『校長室』です。

いよいよわたしは参りました。

どうやらわたし、夏野ひるまは不思議の世界に迷い込んでしまつ
たようでした。

わたしに優しい姉はいません。優しくない姉もいませんが。

しかしそれではいつたい、わたしはいつどこで、誰の隣で田をさ
ませばよいのでしょうか？

よぞらだ。目的地に着いた。

ジュークを左手に持ち、彼の道案内で森の奥のそのまた奥に俺は進んだ。雑談しながら20分ほど歩いた頃に目的地は見えた。いま俺の目の前には、大型トラックが余裕をもって通れるサイズの洞窟が口を開けている。ジュークによると、この中に化け物と、そいつに攫われた彼の仲間がいるそうだ。俺には化け物とやらのおおよその位置は、音と匂いによつてここに着く五分も前にはわかつていて。しかし、なるほど。呼吸音が妙にこもつていたのは穴の中にいたからか。姉であれば鳥を先行偵察に出して情報を集めるくらいのことはするのであろうが、残念なことに俺には動物の言葉を解する頭がない。細心の注意を払つたつもりでも、結局は『行き当たりばつたり』『為せば成る』が俺の行動指針の常となつていた。

俺は手のひら大の石を拾い、洞窟の中に軽く投げた。石は洞窟の壁に当たつて粉々に砕けた。乾いた大きな音が洞窟に響いた。

一秒の時間差で左手のジュークがビクリと震えた。

「おまえ……おまえさん、いま何をした？」

「石を投げました。洞窟の地面は硬いので、ここまでおびき出します」

「な、投げた……？すごい音がしたぞ。動きもまるで見えなかつたし。手に握られてるおいらが揺れを感じなかつたなんて……。それに、地面が硬いっていうのはどういう意味 むぐつ」

「来ました」

俺はジュークを『トー』の胸ポケットに押し込んだ。

洞窟の壁で反響した唸り声がひびき、岩穴の中から化け物が現れる。

それは虎だった。

銀色に輝く一本の牙を長く伸ばした、頭のてっぺんの高さが俺の背の倍以上ある巨大な虎だ。

虎は俺を見てグルルルと唸つた。ここから虎までは10メートルもない。あの大虎のサイズと筋肉であれば、ぴょんと跳んだらもう爪が届くだろう。

「なんで隠れないんだ！これじゃいい獲物だぞ！」

「隠れたらジュークの仲間を助けられません」

「虎の王様が外に出ている隙に忍び込めばいいだろうが！」

それではまだ危険がある、と俺は首を横に振つた。

化け物は虎の王様というらしい。確かに王様と呼ぶに相応しい大きさだ。俺が四歳の時にネパールの山で倒した虎が乳飲み児に見えるサイズである。

「……これだけ大きかつたら、洞窟の中でもよかつたかもしれないな」

「え？ なんだつて？」

「いえ、独り言です」

俺は肩の力を抜いた。

「ところでジューク。あの虎に言葉は通じますか？」

ジュークはすこし黙つたあと、罰がわるそつに「わからねえ」と言つた。「そもそもおいらは、あいつにここまで近付いたのは初めてで」

「そうですか」

「……すまねえ。攫われたのはおいらの仲間なのに、おいら、あいつが怖くて」

「問題ありません。本人に聞きます」

「…………え？」

俺と会話する間、緊張した様子で一瞬も虎から目を離さないようになっていたジュークが、間の抜けた声を上げてこちらを向いた。

「おい……まて……何を……」

俺は虎に向かつて叫んだ。

「虎つ！俺の言つていることがわかるか！」

虎がスッと目を細める。ジュークが手をバタバタさせ、慌てた声で「おい馬鹿やめろ！やめろつたら！」と言つた。この怪獣は仲間を助けたいのか助けたくないのか、どっちなのだ。俺はかまわず話しかけ続けた。

「おまえが攫つた怪獣人形を返してもらいたい！おまえの足の爪ぐらいの、小さなソフトビニール人形だ！要求を飲んでくれるなら、俺は今後一切おまえに干渉しないことを約束する！こちらは平和的解決を望んでいる！」

要求を伝え終えた俺は大きく息を吐いた。よし、これでいいだろう。

どこの家庭にもルールというものがあると思われるが、俺の家にも法律がある。姉と母たちが作った我が家のかの法『夏野家のきまり』だ。そこには俺のためだけに考えられた約束事がいくつも記載されている。その一つが『暴力に関するきまり』の三つ目、『殴つていののは、言つてもわからない奴だけ』というきまりだ。かつて俺がやむなく人を殴つてしまつた時に作られた法である。その時は法の制定と同時に三食抜きの罰が家族全員に下され、俺を大いに動搖させた。もちろん俺は父に噛み付いた。

「痛え！本当に噛む奴があるか！」

悪いのは俺ではないか、どうして姉や母たちまで巻き込むのだ。俺は父に詰め寄つた。父は笑つて答えた。

「それじゃあ罰にならないからだ。おまえが恐れるのは身内の痛みだろう」「う。

よぞらは俺に生き写しだからな、と父は歯型のついた腕をさすりながら続けた。

「相手の大学生、歯六本も折れてたそうじゃないか。今回は飯抜き

程度で済んだが、おまえが成人していく、尚且つ相手が訴えを起こしていたなら、こんなものじゃ済まなかつたぞ。おまえは逮捕され、おまえの姉さんや母さんたちは犯罪者の家族になつていただろう。人間社会で生きるなら、自分の行動にはいつでも他者を巻き込む結果が付いて回ると知れ」

俺は父に西瓜の皮を投げて書斎をあとにした。ドアの向こうから「痛い！青臭い！」という声が聞こえた。

当時七歳の俺はこうして少しだけ賢くなり、暴力を振るうことを恐れるようになつた。

しかして俺は姉と母達に泣きながら謝つた。家族は苦笑して「次から気をつければいい」と言ってくれた。「俺も飯抜きなんだがな」と言つた父は無視した。父の書斎の棚にカステラや栗饅頭が隠されていることを俺は知つていた。

虎がのそりと一步一ちらに踏み出す。仕方が無いので俺も踏み出した。

俺は胸ポケットからジュークを取り出し、彼を高く掲げて最後通牒した。

「これだ！こういう人形だ！そいつを渡してくれたら何もしない！」
「ギヤーーーギヤーーーやめて、食べられるー！」

「本当に何もしない！俺はおまえを傷つけたくないんだ！」
「ギヤーーギヤーーイヤー！死にたくないーーー！」

虎がまた一步、こちらに踏み出す。

「虎、人形を返してくれ！俺は本当ににも

突然、目の前の虎がふくらんだ。

そう思えるほどの速さだつた。

「グルアアッ！」

一瞬で俺の目の前に迫つた虎は、勢いのままに右の前足を俺に振り下ろした。

俺は、ため息をついた。

とんつ。

小さな音がした。

虎の前足と俺の靴が触れた音だつた。

虎の放つた一撃は俺の右足で止められている。虎は大きく目を見開いて動きを止めていた。

起こつたことが理解できない。そんな顔をしていた。

一秒たつた。コン、と音がした。木の実が地面に落ちた音だつた。その音で我に返つたように、虎がもう一度吠えて、今度は左の前足を横から振るつた。

「傷つけたくない」と、言つてゐるのに……」

俺はそれを右手で止めた。今度は音もしなかつた。虎がガタガタと震えだした。

虎の両前足は俺の右手右足で防がれたまま。動けば殺されるとでも言つよう、虎は目を見開いたまま俺の顔を見ていた。

「本当にこれで最後だ」

俺は左手に持つたジュークを虎の鼻先に突きつけた。

「こういう人形を知つてゐるだろう? 返してくれ」

虎が震えたままジュークを見て、俺を見て、そして牙を剥いた。

「グルアアアアアアアアッ!!」

狙いはジュークだつた。

両前足を抑えられた虎は、手足が使えないのはこちらも同じと考えたが、大きく口を開けて俺の左腕ごとジュークを噛み殺そうとした。「ひいっ」とジュークが言つた。

俺は左足で飛び、虎の鼻つ面に、上から下に向けて頭突きをぶちました。

パン、と 限界まで膨らませた風船を二ダースほどまとめて割つたような音がした。

カキン、と涼しい音が鳴り、虎の銀色の牙が一本、宙を舞つた。

俺は音を立てずに着地した。同時に一本の牙がザクリと地面に突き刺さり、太陽の光を浴びてきらめいた。一本は折れ、一本は根元から抜けていた。ジュークが思い出したように両腕を前後にバタバタさせた。

「……なんて……なんて出鱈田な。……虎の王様を、倒しちまつた俺とジュークの目の前には、牙を失い、白目を剥いて氣絶した巨大な虎が、頭の半分を地面にめり込ませて横たわっていた。俺はやるせない気持ちでため息をついた。

この程度の大きさと速さに俺が脅威を感じることはない。姉が音で動物と繋がるよう、俺は力で動物を押さえつける。全盛期の父を超える化け物でも現れない限り、武装もしていない一個の生物が俺をぐだせるとはどうしても思えなかつた。

先月に父に勝つて以来、運動能力・戦闘能力という点で地球の陸生動物最強は俺になつた。俺はもう肉弾戦では誰にも負けることができないし、相手がいる戦いで本気を出すこともできない。ゴリラと腕相撲をしても勝つたし、象を持ち上げたこともあるし、逃げるチーターを捕まえたこともある。水中で一時間息を止めた時、だつて、退屈でさえなければもつといけた。　　大袈裟でなく、人類は俺で完結している。ちょっとでかいだけの虎に負けるはずがないのだ。俺は虎の頭を撫で、耳を澄ました。心臓の音が聞こえる。呼吸の音も。よかつた、生きてる。食べもしないのに生き物を殺すのはよくないことだ。俺は安堵の息を吐いた。

「それじゃあ、ジューク。ジュークの仲間を助けに行きましょう

はじまり／ひのまとよれ／とれわぞれのみち

ひるまです。悪い女です。

イエシケさんのお父様の牙一本を、村長さんの馬+銀貨一枚と交換してしまいました。

お水や干し豆やナシ。それは毛布など よそひわかしは必要そ
うなものをいくつか買い揃えましたので、残金は銀貨一枚と銅貨一
枚です。……それと、牙の残りが三本。

何度でも言わぬ
憂鬱ひぬ思ふ懸け女です

現在 れだしはシムネ君（お馬さんです）頭を振るときの鳴き声が俳優の松平健さんの咳に似ています）の背に跨つて西へ西へと進んでおります。気分は三蔵法師です。西にはバジという街があるそうで、我々『ひるまと愉快な仲間たち』一行はそこへ向かっているところであります。

北の方には大きな森が広がっていました。わたしは兼を思いました。どうか北にはいないでちょうどいいね。お姉ちゃんは西よ。西ですかね。

森は世界の果てまでも繋がっているように見えました。

「村の西から道なりに真っ直ぐ行きんしゃい、子どもの足でも、一日もありやあバビに着く。馬なら半日もかかるん。学校もある大きな街だから、お兄さんの情報も見つかるかもわからん」
泊めてくれるというお申し出を辞して村の外へ向かうわたしに、
村長さん(1年3組)から地図を持ってきて見せてくださいました。

「間違つても北にだけは行かないことだ」

「北に街は無いのですか？」

「ある。ジソつて街だ。バビに劣らず大きな街で、そこにも学校がある。だがジソに行くには、ギモギモの森を越えなきゃならん。これからも、ホレ、見えるだろ？あの森だ。地図だとここだ。道らしい道はないし、体が痒くなる木は生えどるし、虎の王様もおる。悪いこた言わん、いくら魔女さまでも、あの森はやめといたほうがええ」

虎の王様には興味が惹かれましたが、体が痒くなるのは御免です。わたしの中で北行きは却下されました。

「ギモギモどこの地名ですか？」

「森に住んどるなんだかよくわからん魔物だ。わしも直接見たことはないが」

「魔物……。それは危険な生き物ですか？」

「子どもの膝くらいの小さな生き物さ。毒にやられたという話も聞かんし、ギモギモそのものに危険は無いだろ？気をつけなきゃならんのは、奴らの声に耳を傾けてはいけない、ということだ」

「それはなぜでしょう？」

「奴らは言葉を話し、言葉巧みに人を騙すんだ。そつして虎の王様のもとへと連れていき、餌にしちまうのさ」

弟の天敵のような生き物ではありますか。わたしはなんだか嫌な予感がしました。相手が虎であれ恐竜であれ、弟が非武装の単体に倒される姿を思い浮かべることはわたしにはどう頑張ってもできませんが、言われるままに身ぐるみ剥がされる様子は、楽に想像できてしまつのでした。

「どうか弟が北になどこませんよ！」。ギモギモとやりて騙されてなどいませんように。わたしは夕暮れの空に祈りました。

村を出てから、一度の休憩を挟み、かれこれ五時間ほど道なりにパカパカ進んでいますが、街は一向に見えてきません。時刻はもう夕方の五時です。そろそろあたりも薄暗くなつてきました。真つ暗

になる前に寝場所（もちろん野宿です。慣れています）を決めなくてはならないのですが、どうしたものでしょ。もつちよつと進んでしまいましょうか。それとも無理をせず、このあたりをキャンプ地に定めるべきでしょうか。

「どう思いますか、ヨシムネ君（ブルルル、ブルブフ、ヨシムネ）」「ブルルン、ブフ、ブフ（ぼくまだ疲れてないよ。行けるよ。まだ歩けるよ）」

「それじゃあ、もう30分だけ、お願ひしますね（ブル、ブルルフ、フン）」

「ブブブルン、ブルフ、ブルフ（がんばるよ。つらくてもがんばる。ぼくがんばるよ）」

「つらかつたら言ってくれていいんですよー言つてくださいよー」「ブルウン、ブルル（なんて言つたの。わかる言葉で話してよ）」「同行者のいる旅路は心強く、楽しいものです。誰かと話すことがこんなに心の救いになるなんて。まさに旅は道連れというものです。昔の人はいいことを言います。」この調子で、よぞら探しも世は情けとこう具合にいけばいいのですが。弟を見ませんでしたか？見てなにけれどあたしも探すわ。僕も探すよ。俺も手伝うぜ。そんな具合にいかないでしょうか。いかないでしょうね。

のんびりとヨシムネ君に揺られていると、遠く上空から聞きなれた羽ばたきの音が近づいていることに気付きました。黒い点がこちらに向かって飛んできます。空中偵察の任務から戻ったヒデタダ君でした。

「キピキピピー・キピッピー（戻つたぞ、大きな生き物！そして馬！）」

「ブフブフ、ブルルフ（人間、こいつなんて言つたの？）」

「お疲れ様です、ヒデタダ君（キピキピピ、ピッ、ヒデタダ）。

ただいまー、つて言つたんですよ、ヨシムネ君（ブルフフ、バルブフ、ヨシムネ）」

「ブルルルフ、バフフ、バフ（おかれり、小さい鳥。頭に乗つてい

いよ)」

「是非とも頭に乗つてほしにそつですよ(ペペッ、ペ、ペペペッ)」

「キピッ、ペーッ(ウム、褒めてつかわすぞ、馬)」

「ありがとうだそつです、ヨシムネ君(バルフフッ、ブフン、ヨシムネ)」

同時通訳はちよつぴりあたまが疲れます。伝えたい事を伝えるだけの動物さんたちでさえこれですから、外交交渉の場で活躍していらっしゃる先生方にはとても頭が上がりません。人間の複雑な心理を取捨選択して相手に伝えるなんて、わたしには逆立ちしたつてできそうにありません。

わたしはビデタダ君に干し豆を与え、偵察の報告を受けました。彼が偵知した内容は次のようなものでした。

- 1・道は正しい。このまま道なりに進めばよい。
- 2・ゴールは近い。今速度で進めば三時間で街に到着する。
- 3・道中に危険は無い。途中に林があるが、大きな動物はいない。
- 4・何か来る。大きい生き物の群れがこちらに向かっている。あと一時間ほどで接触する。

道が合つて「こと、二時間で街に着くこと、危険が無いことはよしとしましょう。三時間で着くのでしたら、野宿はしなくていいかもしません。嬉しい報せです。

しかし、四つ目はどうなのでしょう。なにかの群れって何でしょうか?

わたしはビデタダ君に四つ目の報告についてもっと詳しく聞きました。どうやらそれは人間の商隊か、兵隊さんのようでした。

馬に乗つたキラキラした生き物が十匹くらいと、一頭の馬が引く大きな四角い塊。

キラキラというのはわかりませんが、四角い塊の方は十中八九、馬車でしょう。

わたしは悩みました。このまま進むべきでしょうか？それとも、ここは隠れてやり過ごしたほうがよいのでしょうか？商人さんか兵隊さん、どちらかはわかりませんが、彼らとわたしは接触することで問題は起こらないでしょうか？わたしは17の女です。見た目なぞ、良くて発育の悪い中学生です。元いた世界でさえ、若い女性の一人旅は決して安全なものではありませんでした。ましてやここは右も左も知れぬ異世界です。事が起きた時にどう対処していいものか、そのあたりのことがわたしにはまるでわかりません。

わたしも父の子ですから、奥の手の一つや二つは、持っています。相手が聴力をもつた人間であるならば、わたしの体に傷がつくことは万に一つも無いでしょう。遠くから銃で撃たれでもすれば話も変わりますが。

「でも、できればあの方法は、使いたくないな……」

「最後の手段。あれは少し、残酷すぎるから。」

わたしは考えましたが、結局このまま進むことにしました。他人よりも、家族の方が大事です。優先すべきはよぞらです。わたしは弟の手がかりを探すため、一刻も早くバビの街に到着しなくてはならないのです。心苦しいですが、邪魔をする人たちには、苦しんでもらうことになりました。

『殴つていいのは、言つてもわからない奴だけ』

我が家は法律、『夏野家のきまり』にしたがつて、相手が言つてもわからない人ならば、こちらは力でもつてわからせてさしあげることにいたしました。

1キロメートルくらい先でしょうか？前方にポツポツと小さな点が見え始めました。もちろん『音』はもつと前から聞こえていました。彼らの会話から、向こうもこちらに気付いたことがわかりました。距離が半分に縮まる頃には耳を澄ますまでもなく、彼らの会話の内容も、それぞれの心臓のリズムも、歩き方の癖も、わたしには余さず聞こえていました。彼らは森に出る魔物を退治しに来た兵隊

さんたちのようでした。別段わたしに対して思つとこりは無いよう
です。わたしはほつとむねを撫で下ろしました。一応、顔は隠して
おきましょう。わたしはコートのフードをかぶりました。……キラ
キラした生き物つて、鎧を着た兵隊さんのことだったのですね。
「ヒヒーン、バヒヒヒーン！（なにか来る。いっぱい来る。なにあ
れこわい。こわい！）」

「ペペッ、ピロロロロロッ！（大きな生き物だ！大きな生き物の群れ
だ！それと四角い塊！）」

臆病なヨシムネ君が怯え、好奇心旺盛なヒテタダ君が羽をバタバ
タやつて体で喜びを表現します。わたしは彼らに、兵隊さんたちが
危険な存在でないこと、我々《ひるまと愉快な仲間たち》が兵隊さ
んたちに深く関与しないことを伝えました。ヨシムネ君は落ち着き
を取り戻し、ヒテタダ君はあからさまに意氣消沈しました。

ついに兵隊さんたちが目の前までやつて来ました。ヒテタダ君の
報告どおり、部隊は槍を持つた騎兵さん十名と一頭引きの馬車とい
う編成でした。わたしは作戦通り、お辞儀をしてすれ違うことにし
ました。絶対にうまくいくと思つていました。結果は失敗でした。
先頭をゆく三十歳くらいの兵隊さん（おそらく隊長さんでしょう）
がわたしに声をかけてきました。

「少年。ちょっと聞きたいのだが

わたしは脱力しました。少年つて、あんまりじゃないでしようか。
「何でございましょうか」

わたしは意識して丁寧な、目下の者の口調で言いました。隊長さ
ん（仮）はわたしの声を聞いて慌てました。

「むつ、女であつたか。すまん。そんな格好をしているものだから
「村では変わり者と呼ばれておりました」

テキトウなことを言つもので。ところでこの格好、変だったの
ですね。村長さん、言つて下さつてもよかつたのに。

「して、わたくしに聞きたいことと仰いますのは？」

「ああ。この先の、青の森に棲む魔物・ボラボについて聞きた

いのだ。森の近くに村があるのはわかるな？」

「はい。わたくしもその村を経由して参りました」

「では、被害はどうだった？子どもや年寄りが襲われたり、畑が荒らされたりはしていなかつたか？」

わたしはあの村で一時間程度の聞き取りしかしていませんが、魔物が出るなどという話はありませんでした。村長さんも、安全だけが取り柄の村だと言つていました。

「失礼ながら……なにかの勘違いではございませんか？魔物による被害が出たなどという話は聞いたことがありません。少なくとも、わたくしが見たところは長閑で平和な村でございました」

「隊長。やつぱりデマだつたんですね……」

若い兵隊さんが隊長さん（本当に隊長さんでした）に耳打ちします。隊長さんはガックリと肩を落としました。

「むう……。そうか。無駄足であつたか」

正義感の強い人なのでしょうか。なんとなく、罪悪感のようなものが胸の中であぐらをかきました。

「そもそも、ボラボというのはどんな魔物なのでございましょうか？」

「巨大な猪だ」

「えつ」

「四本ある牙にはボラビーという特殊な金属が混じつていて、そいつを混ぜて作った服は剣も槍も通さないそうだ。市場には滅多に出回らん。俺もかれこれ三年は狙つているのだがなあ」

わたしの背中を汗がつづーと落ちてゆきました。口の中がカラカラになりました。

「……ち、ちなみに、その牙といつのはお幾らほどになるのでしょうか？馬を一頭買つて銀貨一枚のお釣りがくるくらいでしょうか？」

「まさか」隊長さんは、馬鹿を言つなど笑いました。「ケンケラの

競走に勝つような白馬を三頭買つても金貨で釣りが戻るほどや」

「馬三頭に、金貨……」

ケンケラというのが何かはわかりませんが、村長さんが牙の適正価格を知らなかつたことはわかりました。

「と、ともあれ、わたくしは青の森にも入りましたが、そのような『危険な魔物』は見ませんでした。やはり何かの間違いで『ございましょう』

イエシゲさんは森から出たことはないと言つていました。自分は森の主だ、とも言つていました。わたしたち人間には理解しづらいかもしませんが、言葉によつて嘘をつくというのはかなり高度な言語行動です。殆どの動物にはこれができません。痛くないのに痛いふりをする、疲れないのに疲れたふりをする。これくらいであらば群れで生きる動物の多くがします。けれども、同じことを『言葉』で伝えることは難しいのです。これは多くの動物が生活するうえで、言葉によつて相手を騙す必要がないからだとわたしは考えます。イエシゲさんは村を襲つたことなどありません。おそらく彼はあの森にひつそりと棲む最後のボラボなのでしょう。

「時間を取らせてすまなかつたな。行つていいぞ」

「はい。それでは失礼致します」

わたしはヨシムネ君に乗つたままお辞儀して彼らの横を通り過ぎました。

馬車の窓から中学生くらいの少年がこちらをじっと見つめていましたが、わたしは努めて気付かないふりをしました。兵隊さんたちはわたしのことを勉強の旅に出された商人の娘だと思つているようでした。あんな小さな女の子を旅に出すような親だ。きっと碌でも無い、業突く張りのデブオヤジだらう。今は真つ直ぐ育つてゐるようだが、女の子だ、これから酷い目にあうことだつてあるだらう。体を売つて金を稼がせることも田的のうちかもしれん。とんでもない親もいたもんだ。　五百メートルほど離れた頃、兵隊さんたちのそんな会話が聞こえてきました。父の株価、本人のあずかり知らぬところで大暴落です。

「じゃ、行きましょーか。目指すはバビですよ

「ヒヒーン」

「ピロロロロロ」

わたしはバッグを肩にかけ直し、弟の行方を求めてバビの街へと向かうのでした。

よぞらだ。

救えなかつた。

ジュークの仲間は洞窟の奥にいた。彼は手足を失い、黒く汚れて元の姿がわからなくなっていた。

「わかつてはいたんだ。15年前、こいつが連れ去られたあの日から、生きてるわけがねえつてよ」

それでも諦めきれなかつた、亡骸を奪い返したかつたんだ、と彼は言つた。俺たちは枯れ木で火を熾し、遺体を荼毘に付した。黒く縮んで小さくなつた彼の欠片は俺が目を覚ましたあたりに穴を掘つて埋め、虎の王様の折れたほうの牙を突き刺して墓とした。もう一本も捧げようとしたが、ジュークが「売れば金になるから持つておけ」と言つたのでバッグに突つ込んだ。そのほうがきっとファイブも喜ぶ、と彼は続けた。ジュークの顔が動くことはないが、俺には彼が泣いているように思えてならなかつた。

「奴はシリアルナンバー005番でな。虎の王様が現れるまで、おいらたちのリーダーだつたんだ。この洞窟だつて、もとはおいらたち『ギモギモ族』の家だつたんだ……」

ジュークは遠い思い出を俺に聞かせてくれた。

アマネ屋ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズの第一弾『大怪獣ギモギモ』、シリアルナンバー005 ファイブ氏はジュークの親友だつた。地球から百体一緒にこの森へと落ちてきて恐

慌に陥る彼ら『大怪獣ギモギモ』を一つにまとめたのがファイブ氏だった。氏はリーダーとして、この世界で生きていくための道を他のギモギモ達に示したのだ。その辺の森はまだ、『虎王の森』と呼ばれていた。

「オレたちは自由だ。この世界のルールに従つて、自由に生きていいこうじやねえか。かつて我らが盟友・人間たちがそつだつたように。オレたちはもう、ただの人形じやねえ。動けるし、喋れるんだ！この世界について学び、ルールを守つて楽しく生きよう。オレたちは別々の生き物だ。それぞれが心を持っている。だが、どこにいたつてオレたちの心は繋がっている。そのことだけは忘れないでほしい。今日からオレたちはギモギモ族だ！」

この世界に来て心を獲得したばかりの大怪獣ギモギモの中にあって、ファイブ氏だけが合理的精神・理性というものを初めから持っていた。彼の指導のもと大怪獣ギモギモ　否、ギモギモ族の啓蒙思想は成つたのである。

百人いたギモギモ族は一人また一人と森の外の世界へと出巣立て行つた。彼はその門出を見送り続けた。三年後、森に残つていたのはファイブ氏とジュークだけだつた。

「ジューク、おまえも旅に出たつていいんだぜ？」

「おいらがいなくなつたらファイブ、おまえさんはどうする気だ？」
「オレは残るさ。巣立つて行つた同胞たちが歩き疲れた時、足を休める場所はきっと始まりのこの森だから」

「なら、おいらも残るよ。頑張り屋のおせっかい焼きが疲れちまた時、隣で支える役は誰にも譲れねえから」

それから三年間、彼らは洞窟で仲睦まじく暮らした。性別など無く、元々は生物でさえなかつた彼らの関係は、夫婦のようであり、友人のようであり、親子兄弟のようでもあつたという。ギモギモ族は心で繋がつている。森を出た仲間から『ギモギモ通信』で連絡が届くことも多かつた。ギモギモ通信はギモギモ族全員に同時に繋がる電話のようなものだ。一人は仲間たちの現状を聞いてはアドバイ

スし、時に励まし、遠い仲間と一緒に一喜一憂した。幸福な時間だつた。

しかし幸せは長くは続かなかつた。

ある夜、彼らの洞窟を虎の王様が発見した。巨大な虎にとつて自分の体がすっぽり入る洞窟は理想の住居であった。

「ジューク、振り返るなー走るんだ！」

一人は迷わず洞窟を捨てた。仲間たちとの思い出の詰まつた家であつたが、彼らにとつて災害にも等しい巨大な肉食動物に逆らう気など起きるはずもなかつた。六年という期間が熟成させた未練を振りきつて未来を見つめた。彼らはもう一度と虎に出会わぬよう、生活範囲を変えることを決めた。

だが、虎は違つた。

虎はネコ科の動物である。小さな生き物がチヨコチヨコ動く様子はさぞかし狩猟本能を刺激したことであらう。気付けばファイブ氏が虎の前足に抑えつけられていた。

「ファイブっ！」

もちろんジュークは助けようとした。だが、そこで虎の王様と目が合つた。動けば殺す。そう言われた気がした。彼は動けなくなつた。そこにファイブ氏が呼び掛けた。その声は底抜けに明るいものだつたという。

「おーいジューク、ちょっとこいつと遊んでいくからよ、先に行つてくれ！すぐに追いつくから、おまえは森を出るんだ！オレは丈夫だ、じゃれてるだけだから！」

そんなはずがなかつた。

大丈夫なはずがなかつた。

ずっと一緒にこの森で暮らしそう。そう約束した相手が森を出ると叫ぶ。いつまでもこの森で仲間たちを待つ。そう言つたリーダーがすぐに追いつくと嘯く。それはなにより残酷で、世界で一番やさしい嘘だつた。

虎はファイブ氏を咥えて洞窟の奥へと消える。ジュークはそれを

追うことができなかつた。自分たちの家だつた洞窟に、バリバリと何かの碎ける音が響いた。

ジュークは森を出た。

全てが終わつた氣がした。何をしていいかもわからなかつた。彼は自分が依存していたことに気付いた。支えているつもりで、支えられていたのは自分のほうだつたのだ。彼は考えることをやめてしまおうと思つた。

そこに煌びやかな馬車が通つた。

「お父様、なにか落ちております。これは何でありますか？」

それは王城帰りの貴族の父子であつた。彼らはジュークをたいそう珍しがつた。

ジュークは神の救いを見た氣がした。彼は貴族に頭を下げた。

「この先の洞窟で、おいらの仲間が大きな虎に攫われちまつたんだ！貴族様。どうか、どうか、仲間を助けてください！」

「なんということだ！弱きを助くは我ら貴族のつとめ。任せたまえ、小さき友よ。この私がきたからにはもう安心だ。虎など我が剣の錆にしてくれようぞ！」

貴族は息子の前で張り切り、護衛の騎士を連れて意氣揚々、森の奥へと向かつて行つた。

そうして、ボロボロになつて戻つてきた。

「虎は！虎はどうなつたのですか、お父様！」

目を輝かせて尋ねる息子に、貴族の男は忌々しげに言つたのだという。

「我々は謀られたのだ！」

間もなく、国内にある噂が流れるよつになつた。

『ジソの南の森には小さな魔物が出る。

魔物は言葉巧みに人を騙し、虎の王のもとへと旅人を誘い込む』時が経ち、いつしか森の名前も、虎王の森からギモギモの森になつていた。

その頃には仲間たちからギモギモ通信でジュークとファイブ氏を

心配する事が何度も伝えられていた。彼らの中には、特徴が似ていることや『ギモギモ族』を名乗っていることから差別を受ける者もあつたが、ジュークとファイブ氏を疑う者、また責める者は一人もいなかつた。

ジュークは仲間たちにファイブ氏の最期を伝えた。

「仲間たちから聞いて、事の真相を知つたよ。あの時の貴族が噂を流していたんだ。恥を搔かされた仕返しに、つてね」

「……馬鹿な。貴族は虎に戦いを挑んで、それで敗北したのでしょうか？それだけのことではないですか。勝負をしたのは虎と貴族だ。魔物だの騙すだの、他の要素は介在していない！」

「人間みんながおまえさんみたいに気持ちのいい奴だつたらよかつたんだがね……。面子や恥つてもんは、おいらたち『物』が思つてる以上に、人間にとつては重要なもんらしい」

おまえさんには本当に感謝してるよ。彼は小さな声でそう言つた。

涙声だつた。

俺はなにも言えなかつた。

何を言つても嘘になる気がした。

「本当に、いいのですか？」

「おうともさ。もう未練はなにも無い。ほんと言つと、そろそろおいらも世界つてやつを見てみたいと思つてたんだ。言つたろう？『本当の味方になつてやる』つてよ」

ジュークは彼の仲間たちに連絡をとるだけでなく、俺の姉探しの旅に同行してくれることになつた。これは嬉しい誤算であった。俺は各地の情報をジュークから仕入れるために、定期的にこの森に戻ることになるものと思っていた。想定より探索の効率が大幅に上がるものと考えてよいであろう。

「あらためて、『俺』はよぞら。じがない異世界人です。これから

宜しくお願ひします「

「おいらはジューク。しがないソフビ人形で、おまえさんの相棒だ。

宜しく頼むぜ」

夕日に染まる森を背に、俺たちは固く握手を交わした。

こうして、俺の姉探しの旅、ジュークの世界を見る旅は始まったのであった。

「ところで相棒。もう日も暮れるが、野営の準備はどうするんだ?」

「野営?ジソの街までは馬でも半日あれば着くのでしじう?」

「おまえさん、もしかしてジソまで走つて行くつもりじゃないだらうな?」

「全力で走るのはいつ以来かな。荷物もあることですし、気を遣つて走る必要がありますね」

俺は膝の屈伸運動をして、ジュークをポケットに入れた。

「念の為に聞いておきたいんだが……おまえさん、どれくらい『出せる』んだ?」

ジュークが恐る恐るという声音で聞いた。俺はバッグを肩にかけ直し、胸ポケットに向けて笑つてみせた。

「少なくとも、十歳の時点でランディ・ジョンソンの投げる球よりは速く走れましたよ。さあ、もう行きましょうジューク。日没

前には街に着きたいので

「ちょっと、ちょっと待て!おいらまだ、心の準備が、ひああああああ

ああ

「

夕焼けの土道を俺は駆ける。

ドップラー効果を奮発したジュークの叫びが直線上に大地に響き渡つた。

風が最高に気持ちよかつた。

ある女子中学生の日記

11/1 (晴れ)

今日は初めてのデートになるはずだった。

7歳の時にヤク中の大学生から助けてもらつてからずっと好きだつた人とのデートだ。

死ぬほど楽しみにしてた。昨日なんかほとんど寝れなかつた。けど、デートは一方的に中止になつた。

Yが見事にすっぽかした。

寒空の下、3時間も待つた。ちょっと泣いた。

こういう時、携帯持つてないのは致命的だと思つた。お父さん地獄に堕ちる。

帰つてすぐYの携帯にかけたけど出なかつた。というか電源入つてないつぽかつた。

何回かけても繋がらないから家の方にかけてみたら、Yのお母さんが出た（Yにはお母さんがいっぱいいる。授業参観の時とかやバイ）。

お母さん　曰く、Yは旅行に行つてしまふ帰つて来ないらしい。なんだそれ。

学校どうするんですか、とか色々聞いたけど全部はぐらかされた。ぜつたい何かある。

だいたい、あのYが約束やぶるつていうのがまずありえない。そう思つてHさんにかけてみた。わたしとHさんはけつこう仲いいからいろいろ教えてくれると思つた。なんとこつちも繋がらなかつた。

家の電話がおかしいのかもと思つてお兄ちゃんの携帯でかけてみたけど、やつぱり繋がらなかつた。

絶対おかしい。

もしかしてHさんもYと一緒に旅行？

でも、ただの旅行だったりあの仲良し家族はみんなで一緒に行くと思う。

何を隠してるんだるい？

なんかイラッときたから「お兄ちゃんエセに着替わねてるんじやない？」ってからかった。

お兄ちゃんのマジ泣きを見たのは幼稚園以来だった。

「どうしよう…どうしよう…」って、知らんがな。付き合つてもないくせに。

とにかく、明日からYの行き先を探そうと思つ。

手始めにYの家を探る。

熊とか出そうな山奥でちよつと怖いけど、手がかりがあるとしたらやつぱり家だ。

本当に旅行なら、準備の形跡ぐらいあるだろいし、もしかしたら行き先のパンフレットとかあるかも。

ちょうど明日は日曜だし、お父さんと送つてもいる。

よそらだ。脱税した。

地球では世界中およそどこであつても、交通の要所には『税関』というものがあつた。要は関所のことであるが、それはこの世界にもあつた。これを通してには通常、通行税と、場合によつては物品税を支払わなくてはならない。盲点であつた。俺もジュークもこの世界の金を持つていなかつた。

林道を抜けて街の入口に辿り着いた頃には、あたりはもう薄暗くなつていた。

「旦那、若旦那。よかつたねえ、もう閉めるとこだつたよ」
速度をおとして大門に駆け寄る俺の姿を認めるなり、馬に乗つた鎧の男は人のいい笑みを浮かべてそう言つた。この世界に来て初めて目にした『まとも』な人間だった。彼の他にも、彼と同じ恰好をした男が門の左右で馬に跨り槍を握つていた。ジュークによると、大門の守衛警固であるそつだつた。

男は俺の前まで来て馬から降りた。

「旅の者です」

俺は道中ジュークと打ち合わせた台詞を口にした。

「このような大きな街に来るのは初めてなのですが、なにか気を付けることはあるでしょうか」

「いやあ、特にありませんよ。問題を起こさないでくれればそれでいい。道で糞をたれたり、盗みをやつたりなんて、旦那はせんじょう?」

「もちろんです」

「なら問題はありますか？」

「ありがとうございます」

卷之六

俺はお辞儀して門に向かつた

しかしすぐに馬で通せんぼされてしまった。

「ちょっと、ちょっと！通行料、払つてもらわないと」

「えつ？」

俺は驚愕した。

門にほど近い一人がこちらをチラチラ見ていた

「え、じゃありませんよ。しつかりしてくださいよ」那

「……か、金はありません」

「馬鹿言わんでください。そんなナリして銅5枚ぼっち、

いわないでしょ。髪だってそんな
あ、いえ……」

男は最後まで言い切らず、なぜか口をつぐんだ。

「本当にありません。つまり、……そう、財布だ！財布を落として

しまつて！

男は怪しむような目で俺を見た。

「いいまで、急いできたので。あとで必ず払います、倍払つてもいい

「
」
！

男は馬に乗つて門に入つて行つた。大門がゆっくりと閉じてゆき、完全に閉まると門を止めるガチャンという音が聞こえた。門が閉じる間際に見えた守衛の彼の目には、間違いなく嫌惡の色があつた。

閉じた門の向こう側から声が聞こえた。

「貴族さまだか魔法使いさまだか知らねえが、金で何でも解決できると思つたら大間違いですぜ」

「周りに人がいなくなると、コートの胸ポケットで無生物のふりをしていたジュークが口を開いた（比喩だ。彼の口は開閉しない）。

「すまねえ。税なんてもんがあるとは……」

「いえ、俺も迂闊でした。姉さんなら、金がなくてももっとう手くやつたと思います」

「しかし、じうなると明日までは街に入れねえなあ。夜が明けたらおこらの仲間に連絡して、金を持ってきてもらつとしよう。借りた金は、まあ、虎野郎の牙を売つて返せばいいだらう」

「いえ、堀を飛び越えましょう。一刻も早く姉を探したい」

「飛び越えるつたつて、あれ4メートルはあるぞ？ たぶん街せんぶを囮んで……いや、おまえさんなら余裕か」

「よく、体育館の天井に引っかかったバレーボールをこいつそり取つていきました。証拠写真と一緒に持つて行くと、近所のおじいさんが買つてくれるんです」

「とんでもねえな」

「たしかに変わつたおじいさんでした」

「おまえさんのことだよ」

ジュークは苦笑した。

「けどよ、飛び越えて中に入るのはいいとして、パスポートとかビザみたいなもんは無いのかね？ そういうもんがあるなら、おこらはともかく、おまえさんは持つてなきゃうまくないと思つぜ」

俺はジュークの言いたいことがわかつた。

「俺の髪ですね」

「気づいていたか。子の成長を喜ぶ親のような声でジュークがそう言った。

「さつきの連中はみんな金髪だった。茶色っぽいのが混じつてゐもいたが、少なくともおまえさんみたいな真つ黒い髪をした奴はいなかつた。街の中もそつたすりや、おまえさん、ぱつと見てすぐにわかる外国人だぜ」

「どうしたものか。俺は腕を組んで考えた。

「まあ、待ちな。いま仲間に連絡をとつてみるからよ」

「そう言つとジュークはバンザイしたままダランと脱力し、黙り込んだ。そして2分ほど黙つてから「よしわかつた」と両手をバタ

バタさせた。

「エイトとサー・ティと吉田に聞いたところ

」

「ちょっとまつてください。……吉田氏は、何番ですか？」

「うん？ 吉田はじめは〇七六だが、それがどうかしたか？」

「……いえ。続けてください」

下の名前ははじめというらしい。東北だけで十人いるであろう名だ。ギモギモ族には、シリアルナンバーに因んだ名をつけるといった風習は特段無いようであった。

ジュークは話を続けた。

結論から言うと、ビザのようなものはあった。正確には滞在許可証である。その発行が必要であった。これは在留、労働、入学の権利を保証するものであった。そんなものが身元確認も無しに金で買えるというのだから驚き呆れた。しかし好都合ではあった。金さえあればこの街で姉を探すことは容易というわけだ。見つかるかどうかはまた別の問題だが、スタートラインに立つことはできるのである。俺は大いに喜んだ。

この街ジソにはジュークの仲間『ギモギモ族』が三人ほど滞在しているそうだ。内一人、吉田氏とサー・ティ氏は俺の姉探しに協力してくれるそうである。

「エイトは偉い貴族さまの家庭教師をやつてるみたいでな。その人間にはたいそう世話になつたそうで、情報漏えい対策でギモ通も一部閉ざしてゐるくらいなんだ。努力はしてみるけど、たぶん協力はできないと思う、だとよ。悪く思わないでやってくれ」

もちろん悪く思つはずがなかつた。協力してくれる一人、吉田氏などは娼館を経営しているというではないか。情報にも人脈にも期待できるであろう。早速彼は虎の牙を買い取つてくれる、信頼できる店を教えてくれたそうだ。俺にはジュークが神に見えた。

それから、黒い髪はやはり珍しいそうである。十年以上この街にいるエイト氏、サー・ティ氏、吉田氏が一度も見たことがないというのだから相当であった。守衛の彼が俺の髪について言い淀んだのも

そういう理由であろう。だがこれはよい報せである。姉の髪は黒いのだ。目立つものは探しやすい。姉も俺を探しよいはずだ。幸先は明るいよつに思われた。

「それじゃあ、サクッと虎野郎の牙を売つちまつて、情報収集をはじめるとするか」

「そうしましよう。それじゃあ、飛びますよ」

「えつ、それはちょっと待つ」

宵の口、薄ぼんやりと輝く月を俺たちの影が横切つた。

ジュークだ。まだ頭がフラフラしやがるぜ。

おいらと相棒は今、吉田に紹介された店に向かっている。相棒はフードを被つて顔を というか髪を隠して。絵物語の騎士様み

たいな顔が拝めないつてんだから、女どもが可哀想つてもんだぜ。

おいらたちの（おいらの、といふべきだらうが日本生まれとして謙遜しとくぜ）考えた作戦は単純だ。

？虎公の牙を売つぱらう。

？紙を買い、サーティの食堂で飯を食いながら（おいらじやない、相棒がだ）お姉ちゃんの特徴とお姉ちゃんへのメッセージ、おいらたちの居場所を書いたチラシを作る。

？相棒の荷物を店に置き、夜明け前に堀を飛び越えて北の大門で滞在許可証を買う。

？正面から堂々と街に入り、チラシを配つてまわりながらお姉ちゃんの手掛けりを探す。

惚れ惚れするほど完璧な作戦だらう、なんたつて現状じやこれ以上やりようがないからな。この程度が精一杯だ。まあ、街に入つてわかつたことだが、相棒の髪は目立つから、もしもお姉ちゃんがこ

の街にいるつてんなら、案外あつちの方が先に相棒を見つけるかもわからん。相棒いわく、お姉ちゃんは随分と頭が回るらしい。なんでも、動物の言葉がわかるとか。そんなとんでもねえお姉ちゃんなら、もしかしたらおいらたちが思い付きもしないような方法で、実はもう相棒の居場所を掴んでる、なんてこともあるかもしれん。ふと思つ。お姉ちゃんが見つかるまで、いやさ見つかっても、相棒はどうやって生活していくつもりなんだろうか？

人間が生きるには金がいる。眠るには屋根がいるし、歩けば腹が減る。毎日毎日金がかかる。今はまだいい。相棒が頭突き一発で倒しちまつたクソッタレの虎野郎は、あれで虎の王様とまで言われる魔物だ。そいつの牙ともなれば大金といつていい額になるだろう。だけどそれはいつまでもつ？一年か？五年か？それとも数ヶ月か？

どこにいるとも知れないお姉ちゃんを探そうつていうんだ。普通に暮らすより金のかかる生き方だろう。そのうえ相棒は、人間とは思えないほど純粹だ。それは素晴らしいことだが、人間として生きる分には短所でしかない。この世界に来たばかりでおいら以上に世間知らずなこともあるし、ちょっと口の巧い人間が現れたら口ツと騙されちまうだろ？こんなザマで生きていけるのか？

「ジューク、そろそろじやありませんか？」

思考は遮られる。ギモ通で聞いた店はもうすぐ先だつた。

「すまねえ、すまねえ。そこを右だ、ああ、あの店だな」

店は、一般客の入れる範囲はボロいが、地下は厳重警備の宝の山。店主は丸禿で喧嘩つ早いマツチヨ爺で、吉田の店から二人ほど女を身請けしてる。ギモ通で吉田と記憶を共有した際に触れた意識にはそうあつた。

店の前に着く。「ここですね、と相棒が言つ。おいらはおう、と頷く。

「ジュークがいてくれてよかつた。ジュークには本当に感謝しています」

自然な調子で相棒が言つ。真つ直ぐ前を向く目に嘘は一つもなか

つた。

「感謝してるのは……おいらも一緒に」

本当に単純で、不器用で、正直な生き物。人間であることが疑わしいくらいの……。

「ああ、そつか。そんな感じがファイブ……おまえさんに似てるんだ。」

おいらは覚悟を決めた。もう相棒の心配はしていなかつた。

「入りますよ、ジューク」

「おうや。信用できる店だ、安心して売つぱらつちまおつ」
相棒がドアを開ける。おらたちは店に入つていつた。

大丈夫。おらがいるから、大丈夫。

世間知らずな相棒が騙されたりしないよつ、おらがすぐ側で支えてやればいい。

今度こそ本当に、大事な相棒を支えて、守つてやるんだ。

「おへ、らつしゃい。どんな御用で？」

店の親父のハゲ頭が、おいらと相棒の未来を照らしていふよつこ思えた。

「金貨16枚つて、価値としてはどれくらいなんでしょう。ジューク、わかりますか？」

「ちよい待ち、聞いてみる。おおつ、すじこぜ相棒！4年は暮らせるそうだ！」

「4年つ！？」

「そうだ、4年だ！質素に暮らせば5年はいけるらしー！」

「4年だ！」

「4年だ！」

「4年だあああつ！」

4年だ。よぞらだ。金が入つた。

無一文から小金持ちに出世した俺たちは、足取りも軽く小道具屋を後にした。

石畳の街をわざと足音を立てて歩く。街は月のある夜の山と大差ない暗さで（俺の家は山にある）、ときおり鎧を着た衛卒がランプを持って巡回していた。俺は姉から反響定位（エコーロケーション。音の反響で周囲の状況を知る技法）を習つてゐるし、そもそもこの程度なら昼間と同様に見えるが、平均的な能力しか持たない人間にはつらい暗さであろう。まだ十時前であるのに家々の明かりはみな落とされ、灯がともされているのは宿と飲み屋、それからいかがわしげな匂いと雰囲気を撒く大人向けの店ぐらいのものであった。

予定では、このあとは『紙』を売つてゐる店に向かう手筈であつたが、このぶんなら『印刷屋』に行けるぞとジュークが言つたので、今は小躍りしながら向かつてゐるところであつた。印刷屋は客の頼んだ文章を十枚でも百枚でも活版刷りしてくれる店であるという。話し合いの結果、金貨一枚で刷れるだけ刷つてもらう、といふのが俺とジュークの最大公約数となつた。切り良く五枚ほど使つてしまふべきだと主張した俺が大幅に譲歩した形になる。結論から言つと一枚で十分であつた。

「おい、大口のお客様だ！機械一台とも回せー！」

戸を叩くつもりで向かつたが、嬉しいことに店は開いていた。学校関係者が夜訪れることが多いためだそうである。とんとん拍子に事が運び、少々不安になる。

金貨一枚で印刷できるチラシは4800枚であつた。一千枚をあ

すの朝、残りを夕方に受け取ることと約束し、前金で半分だけ支払つた。お釣りは銀貨15枚であった。銀貨30枚で金貨一枚に上がるようだ。

店主と一緒に俺たちの応対をした男は銀色の首輪をしていた。首輪は肉にぎっちりと食い込んでいて、如何にもサイズがあつていな風だった。そのことを指摘したら、男は笑つて「わたくしは奴隸でござりますから」と言つた。背筋が寒くなつた。よく見れば首輪には鍵穴があつていた。

よい意味で驚いたのが文字であつた。日本語だつたのである。

この世界で日本語が使われていることは森で既にわかつていたことだ。ジュークは日本語しか話せない。彼はかつてこの国の貴族と日本語で話したのだから、少なくともこの国の人間が日本語を話すことは知っていた。大門の守衛警固も日本語を話していた。だが文字まで日本語とは思わなかつた。

ただ、完全に日本と同じ、というわけではやはりなかつた。

「どうして漢字が無いんでしょつか」

そう、使われているのは平仮名と片仮名、それにアラビア数字だけなのである。漢字が無いのだ。

「ギモギモ族みんなが不思議に思つてることさ。その謎は未だに解けてない。基本的に片仮名は固有名詞につかうらしくな。おいらは字を書かねえが、隣の国で学校の先生やつてる野口まさるが言つてたよ」

またありきたりな名が出てくる。何を隠そう彼こそがシリアルナンバー001なのだそうな。

「野口氏は、それじゃあ片仮名でノグチ氏なんですか？」

「吉田も片仮名でヨシダだ。おいらたちはみんな森で名前を決めたんだが、仲間はみんな外に出て驚いたつて言つてたよ」

「……ん？隣の国？隣の国でも日本語が使われているんですか？」

「そつらしい。おいらの知る限り近隣三ヶ国はみんな日本語で喋る。確証はないが、この世界ぜんぶがそうだと考えていいだろうな」

不思議な話であった。これを不思議で済ませるあたりが俺が馬鹿だと言われる所以であろう。しかし気にすることはない、とジュークは言った。「さっぱりしてていいじゃねえか。おいらは相棒のそういうところが好きだぜ」と。なんでもはつきり言ってくれるジュークがありがたかった。人間との裏表を気にする会話よりよほど楽しかった。俺が小説や漫画、映画やテレビドラマを楽しめない理由はこれなのだろうな、と思つた。「俺はジュークを騙しませんから、ジュークも俺を騙さないでくださいね」と俺は言つた。当たり前だとジュークは答えた。

「何があつたつておいらはおまえさんを裏切らねえよ。ちやんと相棒を支えて、悪い嘘から守つてやる」

「俺もぜつたい、ジュークを危険から守ります」

暗闇の中、俺たちは小さく笑い合つた。

「助けて、助けてください！」

もうすぐサーティ氏の店に着く、といつところで道の向こうから女が駆けてきた。少し離れて男が三人走つてくる。十分ぐらい前から、遠くで誰かが追いかけっこをしているのはわかつっていたが、遊びではなかつたようだ。

女は俺の前まで来て膝をつくと、息も絶え絶えいま死にます、という様子で俺の足に縋りついた。

「追われているんです！ 魔法使い様、どうかお助け下さい！」

ただごとではない風情であつた。俺は女の肩を持つてしゃんと立たせた。姉からきつく言わわれているのだ。女は男が思つているよりずっと卑怯だから、よぞらなんかすぐに騙されちゃうわよと。筋肉のつき方を見れば非力とは知れるが、それでも女に足を抱かれるのは怖かつた。身長は160センチほど、長い金髪、胸の大きい二十歳ぐらいの女であった。

俺は女の目を見て言つた。

「まず、自分は魔法使いではありません。それが何の隠語かも知りません。次にあなたが追われている理由を知りません。追つてくる男たちとあなたのどちらに非があるのか知りません。最後に、自分は故なき暴力を嫌います。しかし力以外のものを持つていません。

以上の理由から、あなたと追跡者双方から話を聞き、あなたに非がないとジュークが判断した場合のみ、自分が暴力で解決します」「おいらが判断すんのかつ！？」

「俺じゃあ嘘は見破れません」

女はジュークの声の所在を探してキヨロキヨロしたが、やがて不安そうな顔で、「しつこい嫌がらせを受けているんです」と言つた。

「あいつらの主人が、あたしを気に入つたとかで……」

男たちが俺の五歩前方まで来て止まつた。女が俺の背に隠れる。

「貴族の犬だ」とジュークが言つた。男たちの着ている鎧の二ワトリマークが恰好いいな、と俺は思つた。鎧そのものはちょっと殴つたら穴があきそうであるが。

「兄ちゃん、そいつをこっちに渡しな」男の一人が言つた。「怪我はしたくないだろう？」

「彼女を捕まえる理由を教えて下さい」と俺は言つた。「それと、怪我の心配は無用です」

男が剣を抜く。後ろの一人もそれに倣つた。やつぱり二ワトリマークが恰好いいな、と思つた。こちらもすぐに碎けそつだが。

「兄ちゃん、遊びじゃねえんだ。痛い目に会いたくなかったらそいつを渡してくれ」

駄目だな、と思つた。この男には話が通じない。俺は相手を変えることにした。

「後ろの一人に聞きます。彼女を捕まえる理由は何ですか？」

二人は答えなかつた。一人は舌打ちし、一人は唾を吐いた。俺はため息をついた。

「ジューク、話が通じません」

「どう見たって嬢ちゃんに非はねえよー

俺と同じ意見だった。俺は女に少し離れるように言った。

「あなたを助ける」とします

「おー、いいからせと女を渡せー。」

「心、警笛が鳴るが聞こえますか。それ、

卷之二

卷之三

男が一步踏み出したりで、左右から軽めに殴つて両の二の腕を折つた。

ついでに剣も奪つて放り捨てた。

カーンと涼しい音が鳴った
一秒遅れて緋叫が響き渡った

三〇〇〇年九月二日、新潟市にて。

「警告」

二〇

卷之二

櫻痴の歌詞考

「……………」

女は名前をキスイと言つた。なんと17歳であつた。驚いた。姉と同じ年とは色々と思えなかつた。俺が14歳だと言つたら彼女も驚いていた。

道すがら、彼女は俺たちに事情を話した。

「十日前、道で突然声をかけられたんです。その人は貴族さまで、あたしを気に入つたから妻に迎えたいと仰いました。あたし、お断

りしたんです。それなのに、毎日毎日家にやつて来て……」

家に着くと、キスイさんは俺のことを両親に紹介した。俺たちは彼女の両親に何度も頭を下げられた。たいへん感謝され、泊まつていつてくれとまで言われたが、俺は早くサー・ティ氏の店に行つて飯を食いたかったので、頭を下げ返して辞退した。恐縮されてしまつた。男たちから奪つた剣は、道に捨てるには物騒であるし、持つて歩くには邪魔であったからキスイさんの家で処分してもらうことになつた。重要でないが、出されたクッキーの味が、母の一人が作る無添加のクッキーに似ていた。美味かつたので七枚食べた。

「ヨゾラさん、また来てくださいね！ あたし、本当に待つてますからね！ ゼつたい来てくださいね！」

「暇ができたら、またクッキーをいただきに上がりります」

「じゃあな嬢ちゃん」

こうして俺たちは別れた。キスイさんや彼女の両親がジュークを嫌つたり恐れたりしなかつたことが嬉しかつた。『ご尊父がバビという街で、同じくギモギモ族のナイーー氏と会つたことがある』そうであつた。

今はそのことをサー・ティに話しながら、営業時間外の夜食を『駆走になつて』いるところであつた。

「しかしキミ、ギモ通で見て知つてはいたが、恐ろしく強いんだな」「ギモギモ通信は動画を視聴することもできるんですか？」
「録画した映像を見るというよりは、記憶を丸」と共有する感覚だね。そのとき同胞が見たもの、聞いたこと、感じた想いに心で直接触れるんだ

「いいですね。隠し事をしなくて済むのがいい。嘘は嫌いです」

「普通はそこを嫌がるんだがね。本当にキミは、人間にしておくのが惜しいくらい真つ直ぐだ」

「いいだろう、おいらの相棒だぜ」

サー・ティはジュークとまったく同じスケールとデザインの『大怪獣ギモギモ』だが、白い服を着て、ゴックさんの『あの帽子』をかぶっていた。

俺とサー・ティはすぐに仲良くなつた。彼は俺が虎を倒したことを、ファイブの仇をとつてくれた、と大いに喜んだ。殺してはいないと否定したが、倒したことには意味があるのだと彼は言った。

サー・ティは『サー・ティのしょくじ』という名の大きな食堂のオーナーだ。彼と店長のゴルさんがメニューを考え、ゴルさん以下四名のコックが調理し、見習いの一一名が配膳するというスタイルであるらしい。サー・ティは地球の料理や、ギモギモ通信で知った世界各国の料理を多数レシピにしており、そうした珍しい料理を目当てに毎日大勢の客が店を訪れるそうだ。昼には学校を抜けだして食べに来る学生が何人もいるというのだから侮つてはならぬ人気店である。

食事を終えた俺は、二階のベッドを借りて仮眠をとつた。一日や二日眠らなかつたくらいで疲れはしないと言つたのだが、心はそうはいかない、と一人に強制されたためである。そうして3時ちょうどに起きたとき、俺の気分は妙にすつきりとしていた。思えば二人はわけもわからず地球からこの世界に飛ばされた先輩なのであつた。俺は店のポンプから顔を洗わせてもらい、さっぱりとした気持ちでまた明日会おう、とサー・ティと約束し店を出た。しかして俺たちは街壁を今度は北に超えた。きのうの衛兵に会つてはうまくないから南門はよそう、とジュークが言つたためであつた。

北門のまわりには既に多くの人が開門を待つて並んでいた。俺たちは見つからぬように林の中へ跳んだ。そうして何食わぬ顔をして（何食わぬ顔をするんだぞ、とジュークが言つた）列の最後尾に並んだ。

四時半過ぎに門横の小さな扉が開き、そこからきのうの守衛警固と同じ恰好をした別の衛兵が現れた。彼が「いいぞ」と叫び大門は開かれた。

俺たちは今度こそ堂々とジソの街に入ったのであった。

「これが滞在許可証か」

「そいつがあればおいらたちもこの街で生活することができるってわけだ。失くすんじゃないぜ、相棒」

滞在許可証はクリーム色のあまり綺麗でない紙だった。保証される権利、それに義務と禁止事項が平仮名と片仮名で記されていて、てっぺんには俺の名前とジュークの名前があった。ただ、ジュークの名前の横に書かれた『つかいま』の文字が気になった。どういうことかと聞いたら、「人間以外の心もつ者は使い魔や所有物という形でしか街に入れない」という答えが返ってきた。ただ、入った後ならば好きに生きて構わないとのことであった。使い魔や所有物が悪事を働けば所有者が罪に問われるそうである。

「しかし、市民権を買うことはできますよ。市民権があれば家を建てるこどもでできますし、店を持つこどもでできます。まあ、人間の倍の金が必要になりますが」

俺は迷わずジュークの市民権を買おうとし、ジューク本人に止められた。

「熱くなるなよ相棒。おいらたちの目的は何だ? おねえちゃんを探すことだろ? が。この街にお姉ちゃんがいなかつたら、市民権なんぞただの紙切れだぜ?」

赤毛の若い守衛(俺よりは年上であろうが)が、俺を諭すジュークを馬鹿にするように笑っていたが、石を拾つて握り潰したら田を逸らしてガタガタ震えだした。

街に入るとすぐに印刷屋に向かつた。ムロジーのことをさすや店主は留守だった。きのうの首輪の店員(奴隸?)が現れたので、彼に銀貨五枚を払つた。やはり首が痛そつた。残り十枚は夜に払うこととし、俺はできた分のチラシを受け取つた。

「それではこちら、ひとまず一千枚となります」

チラシの紙はコピー用紙より厚く、色も紙本来の色があり真っ白

ではなかつた。

「ありがとうございます。また夜に来ます」

一百枚ずつ縛られたチラシを俺が全部まとめて持ち上げるのを見て、首輪の店員は目を丸くしていた。

「じゃあ、行きましょうかジューク」

「おひ、配つて配つて配りまくろうぜ」

店を後にし、街を隈無く探しまあるべく歩き出す。

こうして俺たちは、この街での姉探し第一歩田を踏み出したのであつた。

ジュークだ。相棒のパワフルさ加減には舌を巻くぜ。

おいらたちは今、「黒髪の女の子を見たらよろしく」を繰り返しながら街のあちこちを歩いている。

相棒は屋根の上をぴょんぴょん飛び回りながら人通りの多い道を見つけてはチラシを配つてゐる。朝早く受け取つたチラシは、もう残り三百枚もない。吉田のコネで学校に八百枚置けたのはデカかつた。全校生徒に配つてもらえるらしいから、大いに時間が短縮できたつてもんだ。これで学校関係者にお姉ちゃんを見たつて奴がいたら解決したも同然なんだが、まあ、そう上手くは行かないだろうな。何事も根気よく、だ。

しかし学校つていうのは、よくよく考えてみるととんでもない所だよな。同年代の子どもをひとつの場合に何年も閉じ込め、全員に同じことを教え込む。そんなことをされて狂わないっていうんだから、人間つてやつはやつぱりどうかしてるぜ。

「あれ？」

そろそろチラシの残りが五十枚を切るといつところで、相棒がピタリと動きを止めた。夜空みたいに黒い頭をした相棒を道行く人間たちがチラチラと見ては通りすぎていく。

「どうした、相棒？」

「いま、キスイさんのお父さんが向こうを走つていたんです

なんだ、そんなことかよ。

「そんなもん、便所かなにかだろ？ 人間は食つたり出したりするからな」

「それにしては、ずいぶん慌てていたように見えましたけど、相棒は腑に落ちないという顔で遠くを見ていた。

「漏らしそうだったのさ。そこに違いない

「そりでしょうか

「何時間もチラシ配りなんかやって、頭が疲れちまつたのさ。そろそろ毎時だ。サーティの店に行こう。飯を食つてちょいと休憩すれば、何でもなかつたと思うようになる。今はまだ無いが、なにか連絡が上がつて来るかも知れないぜ？」

尚も首を傾げる相棒を促して、おいらたちはサーティの食堂に向かつた。

食堂は大繁盛だった。おいらたちは正面から入つて店の奥立つ場所にチラシを全部置き、一旦店を出て配膳口からもう一度入つた。

「ようサーティ、笑えるほど込みようだな。大人気じやないか。刃物と炎で人を笑顔にしちまうつてんだから、コツクつてやつはすごいよな」

「すごいだらうジユーク。僕が一代で創り上げたんだぜ。ゴルも、リケルも、ツーツも、モモ姉妹も、みんな優秀な料理人だ。見習いのノブとヴォンケラも、今に立派なコツクになる。僕はこの店でお客に喜びを与え続けるんだ。すごいだらうジユーク、僕の店はすごいだらう」

サーティは嬉しそうにすごいすごいと繰り返した。

「ああ、すごいよサーティ。おまえの店は街一番の食堂だ」

喜びの心がギモ通で伝わつてくる。店を褒められるのが嬉しくてたまらないのだ。森を出て生きがいを見つけた同胞をおいらは誇らしく思った。

「それはそうとオーナー・サーティ、そのすごい飯をおいらの相棒にも食わせてやつてくれよ。できれば奢つてくれるとありがたい」

「9時間ぶりですサーティ。ここにちは」

「やあ、よぞら！ 我が友よ！ いいとも、いいとも、何でも頼んでどんどん食べてくれージンの街で梅おにぎりがあるのはこの店だけさ

「さあ、一階へ行こう。」

「そういえば、奴隸について聞きたいんですが
飯を食い終えた相棒は、思い出したようにそんなことを言い出した。

「奴隸？ なんで奴隸のことなんか。 よぞらは奴隸を買うのかい？」
サーティが実に嫌そうな口調で聞く。 おいらはそんなわけあるか
！ とギモ通で叫んでやつた。 相棒はいいえ、と首を横にふつた（おいらたちにはできない芸当だ）。

「買うも買わないも、きのうまではそんなものがいる」とさえ知りませんでした。 この世界には奴隸制があるんですか？」

相棒は印刷屋でのことを話した。 おいらはギモ通に潜り、 サーティの記憶に触れて一足先に奴隸について知った。 それは穴だらけの制度だった。

- ・この国《スズカゼ王国》には奴隸制がある。
- ・奴隸におとされるのは逮捕された犯罪者である。
- ・被害者は、犯人に賠償能力がない場合に限り、これを奴隸にできる。
- ・奴隸には首輪を付ける。 これが奴隸の証となる。
- ・奴隸につける首輪は王家と一部の貴族だけが作る。
- ・所有者となる者はそこから奴隸の首輪を買う。
- ・所有者は奴隸を殺してはならない。
- ・奴隸が罪を犯した場合は所有者が賠償する。
- ・奴隸は一定額の金を払うことで所有者から人権を買い戻すことができる。

サーティは忌々しげに、しかし丁寧に、相棒に奴隸制度を説明した。 スズカゼ王国の名前が出た時、相棒は「うん？」と首をかしげた。 まあ、スズカゼって、いかにも日本っぽい響きだもんな。

やがて話が終わると、相棒は納得のいった顔で頷いた。

「滞在許可証にあった『所有物』というのは、奴隸のことだつたんですね」

「ジュークの肩書きは『使い魔』だつたね？使い魔は金貨一枚で三

級市民の市民権を買うことができる。市民権を持つていれば、僕らのような心持つ『物』であつても、この街では人間として認められる。ちなみに僕はゴルの使い魔というかたちで街に入り、最初の年に三級の市民権を買つた。今では二級市民だ」

「二級市民の市民権はいくらなんですか？」

「人間が買うぶんには金貨十枚、使い魔なら二十枚」

「ああ、だから先に三級を買つて『人間になつた』んですね」

「そういうことだね」

サーティは愉快そうにフフフと笑つた。

「奴隸が人権を買い戻す際の『一定の金額』というのは、いくらなんですか？」

「金貨二十枚だ」

「……それは、銀貨一枚の罪でも？」

そんなばかな、という顔で相棒が聞く。サーティが心の中でニヤリと笑う様子がギモ通で伝わってきた。

「銀貨一枚ぶんの食い逃げをやつても、金貨百枚の壺を割つても、人権の買い戻しは等しく金貨二十枚だ」

おかしな話だろ？とサーティは言つた。そして奴はちなみに、と続けた。

「奴隸につける首輪は金貨一枚する。人間の4人家族が三ヶ月は暮らせる額だ」

「待つてください。それだと矛盾が出る。例えば犯人に賠償能力が無くて、被害者が金貨一枚を持っていない、というケースはどうなります？そういうことは今まで一度も無かつたんですか？生活費三ヶ月分の貯金なんて、持つていない人は大勢いるんじやありませんか？」

「あつたさ。そういうケースは過去に何度もあつた
「そういう場合は、どうなるんですか？」

相棒が緊張した様子で聞く。サーティは子どもに社会の矛盾を教える親の声で答えた。

「泣き寝入りだよ」

店を出たおいらたちは嫌な気分で印刷屋へ向かつた。

「まあ、気にしてしまったがねえよ、相棒。おいらたちにじつじつうできることじやない」

「……そうですね。今は姉さんを探さないと」

正しくないことを簡単に認める事のできる奴じやないが、それでも相棒はどうにかこうにか気持ちを切り替えたようだつた。

印刷屋に着くと、ちょうど中から一人の客が出てくるとじつじつた。一人は人間の中ではちびっこい部類に入る真っ赤な髪と目をした女の子で、もう一人はキスイの嬢ちゃんよりは大人の、背の高い茶髪女だ。ふたりとも綺麗な格好をしているが、デカい方の服はあんまりゴテゴテしていなかつた。態度を見ても、デカい方がちつこい方に仕えている様子だつた。

たぶんジソの学校に通う貴族さまとその御付きだらうな。そう思つておいらが見ていると、ちつこい方が相棒の頭を見て目を丸くした。

「黒い髪……こやつが……」

ピリッ、とおいらの頭に刺激が走つた。ギモギモ通信をつなぐ時あの刺激だ。だがそれはすぐに消えてしまつた。たぶんサーティがおいらに、「よぞらに謝つておいてほしい」とかそんなふうなことを言おうとしてやめたんだろう。

相棒はチビ女をチラリと見て「なんですか?」と言つた。チビ女はニヤリと笑つた。

「いいえ、人違いでございました。 クジラ、行きましょう」

「おじよ コホン。 はい、イルカお嬢様」

おいらが言えたことじやないが、クジラとイルカつて、とんでもないネーミングセンスだな。

二人はすぐ而去つていった。 だがどうしたことか、相棒は一人の背を見つめていた。

「どうした相棒? どつちか気に入つて、発情したか?」

「いえ……あの大きい方、ちょっとだけ強いな、と思って」

「戦つてもないのにわかるもんなのか?」

「足運びと体の線を見ればおおよそは。」

でも、そういうんじゃなくて、さつきあの人、袖の中でナイフか何かを動かして俺の反応を見ていたんです。もちろん気付かないふりをしましたけど。たぶん、自分より強いかどうか確認したんだと思います。……こっちの世界にもいるんだ、ああいうタイプ」

「もしかして、そりゃああれか? 相棒より強いかもしけねえってことか?」

「ジューク」

相棒は楽しそうに笑つた。 そいつはまるで他意の無い、ただおかしなことを聞いたから、というだけの純粋な笑顔だった。

「俺より強い人間なんて、この世にいませんよ」

印刷屋からチラシの残り2800枚を受け取り、そいつを配りながら街を歩いていると、ふと相棒が立ち止まつた。 まだ二百枚も配つていらない頃だつた。

「聞こえる……」相棒が言つた。 「泣いてる」

肩に担いだいかにも重そうな荷物と黒い頭を、周りの人間がチラ見して行く。

「うん? なんだ相棒、今度は何がいた?」

「……泣いてる? いや、泣かされて……」

「うん？」

「……向こうで。お父さんもいる。……大勢」
相棒の返答は要領を得なかつた。相棒は東の方を睨みつけていた。
そつちには家しかなかつた。

「きのうの奴だ……あいつら……」

「なあおい相棒よ、おいらにもわかるように説明を
いいい」

相棒はチラシの束を捨てて突然走りだすと、落ちないようにおいら（IN胸ポケット）を手で押さえ、睨んでいた家の屋根を飛び越えた。

「キスイさんが泣いてる！お父さんと、きのうの奴らと、その他にも大勢います！あいつら、懲りてなかつたんだ！」

相棒はいくつもの屋根を飛び越え、あつといつまに『その現場』が見える位置に辿り着いた。

そこは公園だつた。池のある丸い広場だ。

そこには大勢の人間がいた。無関係の野次馬も大勢いたし、剣を持つた『関係者』も大勢いた。

その中に、醜く太つた若い貴族の男と、キスイの嬢ちゃんがいた。

彼女の首には『奴隸の首輪』がはめられていた。

貴族が笑つていた。

関係者の騎士たちも笑つていた。

嬢ちゃんの親父さんが羽交い絞めにされて叫んでいた。
キスイの嬢ちゃんが地べたに座つて泣いていた。

相棒が、
ブチ切れた。

ツキノネ……いや、クジラだ。今、対象とすれ違った。

黒髪の男は報告通り、印刷屋に現れた。背の高い、締まつた体をした男だった。顔もまあ悪くない。

「して、どうじやつた。あやつが言ひほどの腕前か？」

お嬢が期待の眼差しで聞いてくる。オレは首を横に振った。

「弱くはねえな。鍛えてもいる。戦えば一撃貰うこともあるかも知れねえ。だが、それだけだ。そもそも、魔力をまるで感じなかつた。『虎の王』を頭突き一発で倒すとなると、強化魔術のスペシャリス

トで、尚且つオレの十倍の魔力量を持つていてもまだ難しいだろう

わ」

情報では出鱈目に強いとのことだったが、袖に隠したナイフにも氣付かないような奴が、オレでさえ逃げ出すしかなかつた虎の王を倒せるとは思えなかつた。

「つまり？」

「デマ力セだつた、つてことだらうな。だいたいなあ、お嬢。アレを一人の人間が倒した、つてところからしてオレは疑わしく思つてたんだ。虎の王なんて言われちゃあいるが、あいつは虎の魔獣が異常成長したものだ。ただのデカイ虎じやない。魔を喰つた動物は皮膚も体毛も、粘膜までもが硬くなる。剣や槍なんか弾くほどにな。走る速さだつて尋常じやない。来る！と思つたらもう目の前にいるんだ。傭兵時代に一頭狩つたが……オレと同じレベルの一流じこるが五人で協力して、囮い込んでからどれくらい費やしたと思つ？」

「二時間？三時間……いや、五時間か？」

「一日だよ

「い、一日！……馬鹿を言えつ」

お嬢は信じられないといつよに目を剥いた。

「事実だ。傷が入らねえんだ、生半可な攻撃じや。田や口の中を狙つたつて弾かれる。素早い動きを四人で封じたところに、火と風を

まとわせた全力の突きをオレがぶちます。その繰り返しで一日だ。そんな化け物を、しかも魔を喰いまくつて普通の倍以上まで膨らんだやつを倒すとなれば、王城にある『鉄を切り裂く魔剣』が必要になるぜ』

「し、しかし…… そうだ！ ならば牙は？ あれはどうなる？ あのハゲ店主が間違つたものを買うとは思えん」

「牙は本物、入手の経緯は嘘、ってところだろ？ な。 おおかた、凄腕の剣士を雇つて、大人数で罠にかけたうえで牙だけ切つたんだろう。それだって十分すごい。 そいつを持ち逃げしてこの街で売つた、といつのが真相だらうな」

「…………つまらん」

お嬢はめいといっぱい顔をしかめ、思々しげにため息をついた。 高貴な御人がそんなことしていいのか？ 誰の影響だ。

オレじゃねえよな？

「もう帰る。 無駄な時間を過ごした。 まつたく、妾には時間が無いところだ」

ソレしてお嬢とオレは屋敷に戻ることにしたのだった。

池に銭を投げたい。

帰りの道、お嬢様がそんなことを言い出した。 こんな気まぐれは滅多にないことだ。 オレは監視に合図をし、東の公園へ向かう旨を伝えた。 すると『危険・許可できない』といつ返事の暗号がかえってきた。 危険？ オレが近くにいて危険なんであるかよ。 オレは再度暗号を送つた。

『理由問いつ』

『アカブ・馬鹿息子・首輪・使用・不正』

『不正・理由問いつ』

『女』

『理解した』
『感謝』

オレは溜息をつきたい気持ちをぐっとこらえた。アカブ伯爵家の次男、あの豚がまた馬鹿をやらかしたらしい。今度は女がらみだそうだ。あの白豚はオレにも声をかけてきやがったことがある。殺気をおさえるのに苦労したぜ。おそらく、気に入った娘を手っ取り早く手に入れるために、適当な罪をでっち上げて奴隸にするつもりなのだろう。その畜が今まさに東の公園で行われているというわけだ。首輪の不正使用は確かに重罪だが、バレにくい。こんなのはよくあることだ。……まったくもってままならない。

ついつい、と服を引っ張るものがあった。

オレは嫌な予感がした。横を見れば、お嬢がニヤリといだす。子の笑みを浮かべていた。

「ふふふ。酷い話もあつたものじや。罪も無き娘が……の、ツキノネよ？」

ああ、また。

暗号が解読されている。

「何のことかは存じませんが……お嬢様、今はクジラとお呼びください」

「池のある公園へ向かうーなんとしても公園へ向かうぞ、ついて参れ！」

叫び、お嬢が走りだす。なんだなんだ、と注目が集まる。

「……クソッタレ」

オレはガツクリと肩を落とした。

誤魔化しは効かない。

もう、ついて行くほかなかった。

お嬢にきつかり十歩遅れて現場に着くと、予想とは異なる展開が

待っていた。

野次馬が大勢いるのはいい。近付きやすくていいことだ。

騎士たちに囲まれた可愛らしい娘の首に奴隸の証がはめられているのもまだいい。いや、よくはないが、手遅れというほどではない。アカブ伯爵の持つ鍵で外すこともできる。伯爵の領地までは三日もあれば着く。最悪、六日だけ我慢すれば、少女は自由の身になる。だから、これはまあ、いいとする。

大きく予想を超えていたのは、娘を守るようにして、あの黒髪の男が立っていることだ。

「ツキノネ、ギリギリまで手を出すでないぞ」

お嬢の瞳がキラキラと輝く。期待しているのだ。

「言つたろ、お嬢。あいつは、弱くはないが強くもない。あんな人数が相手じや殺されるぞ?」

「問題があるか?」

真つ赤な瞳が輝く。

ああ、オレは……。

わたしは

「あやつは黒髪の男を『異世界人』だと申したではないか」

「この赤が、欲しい。」

「この街の、この国の、この世界の人間でないものが死んで、なにか問題があるのか?」

オレは黙して頭を垂れた。

「それでよい。……なあに。いよいよとなつたら妾が監視どもを動かせばよい。暗号はわかつておるのだし、のう?」

オレは溜息を飲み込んで黒髪の男に目をやつた。

奴と少女を取り囲む騎士は33人。全員がアカブ伯爵家の『獅子の頭』が刻まれた鎧をまとい、同じ『ブランド』の剣を持っている。オレには二ワトリにしか見えないが、武芸を『趣味』として嗜む貴族たちが好んで持ちたがるブランドだそうだ。

黒髪の男　名前はたしか、ヨゾラだつたか　ヨゾラはまつた
くの無表情でアカブ次男（名前は忘れた）に話しかけていた。無理
やりに怒りを抑えているのか。或いは、英雄気取りの馬鹿か。

「それじゃあ、キスイさんの首輪を、外す気は、無いのですね
？」

「ぐじいな。彼女はわたしの家来の両腕を折つたんだよ？それな
に治療費を払えないという。だつたら奴隸になつてもらうしかない
だろ？　ぼくはなにかおかしなことを言つていいかい？」

豚が大仰に両手を広げて叫ぶ。その様は野次馬に問いかけている
ようであつた。正しいのは自分だ、おまえたちもそう思つだろ
う？　まさに甘やかされて育つた馬鹿貴族の鏡だつた。オレは吐き氣
がした。こういう連中がいるせいでこの国は旧態依然として生まれ
変われずにいる。隣でお嬢が顔をしかめたのがわかつた。

ヨゾラは微塵も揺るがなかつた。

「それをやつたのは自分だと言いました。治療費を払うとも言いま
した。それなのにあなたは彼女を奴隸にするという。何の罪もない
彼女をだ。おかしなことを言つているじゃありませんか」

野次馬から失笑が漏れる。何を隠そう笑つたのはお嬢だつた。

「おい、次は無いぞ？」

豚がお嬢を睨みつける。

オレは一步前に出た。

「よい」

お嬢が背を叩いてわたしを　　オレを制した。

「次は無いそうだ。こつちも次は問答無用でいくぜ？」

「好きにせい」

アカブ次男は、今度は少女に目を向けた。そして絞められるのを
嫌がる豚のよくな笑みを浮かべた。

「キスイ、キミの家には我が家で作られた剣が三本あつたね？」

少女がビクリと震えた。

「あれをどこで買ったんだい？ キミの家に、アカブブランドの剣を、それも三本も買つて、うな金があるとは、僕にはどうしても思えないんだがね？」

「あ……あれば、その、拾つて……」

「あれは自分がキスイさんの家に」

「おまえには聞いていない！ 誰が喋つていいと言つた！ その薄汚い口を閉じろ、ブツ殺すぞ！」

豚が唾を飛ばして叫ぶ。その唾が少女にかかる

「えつ？」

今、あの男、娘の顔に唾がかかる直前で、はじいた？

凄まじい速さで……。

「どうしたのじや？」

「い、いや……なんでもない。見間違いだろ？」

目の錯覚か？ 偶然手があたつた？ それとも

「おいキスイ！」

オレの思考を遮るように豚が叫ぶ。

「おまえ、剣を拾つたって言つたな？ 確かに言つたよな？ 拾つたもの在家に持ち帰るなんてことが許されると思つか？ これは立派な泥棒だぞ！ そして被害者は僕だ！ おまえは僕の家の剣を盗んだんだ！ 金貨三十枚ぶんの価値がある剣だぞ！ 払えるか？ 払えないだろう！ だったら奴隸になるしかない！ そうだろう？ そら、論破してやつたぞデカブツ！ なんとか言つてみろ！」

まるでガキだった。これで十九だというのだから笑えない。こんな奴が権力者だというのだから殺意が沸く。オレはヨゾラがどう言い返すか期待した。あの剣は、高いと言つても、ゴロソキ上がりの騎士にくれてやつたものだ。一本金貨十枚などするはずがない。それくらいはヨゾラにもわかっているはずだ。

しかし予想に反して、ヨゾラは、今度は言い返さなかつた。

豚は高笑いして彼の横を素通りし、地面に座り込む少女に手を伸

ばした。

ヨゾラの、目が変わった。

オレは全身から汗が噴き出すのを感じた。

やばい。

あれは、やばい。動く前から体が理解した。

あいつ、隠してやがった……！

「ここまでか

お嬢が動く。今度はオレがそれを止めた。

「なんじゃツキノネ、このままでは」

「いけません姫様。ここから動かないでください」

「なつ、バカもの、こんなところで

「動かないでください！」

「う……むうひ……わかった。なんだと言つんじや……」

ヨゾラが豚の腕を掴んでいた。いつ掴んだかわからなかつた。見えなかつた。

少女が目を丸くしていた。

「おい、はなせよ。どっちが正しいかはもうわかつただろ」

「ごめん」

「あ？」

「ごめん、姉さん。俺には無理だつたよ」

青年が小さく呟いたのが口の動きでわかつた。

お嬢が息を飲んだ。

豚が、空を飛んだ。

「なつ！？」

「くそつ、やつぱりだ……っ！」

時間が止まつたかのよつだつた。野次馬のざわめきが止まつた。
その一瞬が永遠に思えた。ぽたり、と石畳に汗が落ちた。

オレは、間違つていた。

十メトウルほどまで高く高く上がつて、『それ』は池に落ちた。バシャン、と大きな音がして、水しづきが上がつた。

骨がたくさん折れただろう。内蔵もいくつか潰れただろう。悪ければ死ぬだろ。ヨゾラは、『ミミを見る目でそれを眺めていた。

「殴つていいのは、言つてもわからない奴だけ」

小さく口が動く。清々しいほどシンプルな考えだつた。

「そう決められていたのに……俺は、口で負けて力を振るつてゐる。

『ひめんなさい、姉さん、母さんたち。俺には、こんなやり方しかできません。だけど俺はどうしても、こんなのは許せない』

それは謝罪だつた。誰かに向けた謝罪。あの男は、あんな豚にも、筋を通そうとしていたのだ。

そんなことのために、今まで我慢してたつていつの？

貴族が怖かつたんじやなく、ただ、筋を通すために？

「どこまで、善良な……」

ヨゾラが少女の首輪に触れた。

「いま、助けてますから」

お嬢が今度こそ動こうとする。オレはそれを抑えつけて叫んだ。
「馬鹿野郎、待て！ その首輪は無理やり外そうとすると、毒針が

「ヨゾラがこちらを向いた。一瞬、視線がぶつかり合つ。彼はすぐにオレへの興味を失い、首輪に手を戻した。

ヨゾラの手が消えた。そう見えた。

ピシリ と音がした。

それだけだつた。

それだけで、一瞬前まで首輪だつた『粉』がサラサラと風に舞つて消えた。

少女の首に、もつ首輪はなかつた。

「そんなん……馬鹿な……あいつ、いま……」

オレには、奴のしたことが、少しだけ ほんの少しだけ見えてしまった。

「なんじや？ なにがビリなったのじゃー？ 答えよツキノネ、今のはなんじやーなぜ首輪が消えた！」

オレには答えられなかつた。

あまりにも常識はずれなその光景を、頭が認めよつとしなかつたのだ。

「刺さつてない……あれ？ 刺さつて、ない？ 今、なにを……」

少女が不思議そうに自分の首に触れる。ヨゾラは事もなげに答えた。

「針が出るより速く、毒針」と首輪を壊しました。欠片も残らないよつて、37回殴つてやつた」

少女がぽかんと口を開けた。

「怖かつたでしょ。もつ、大丈夫です、」

その日にじわじわと涙が溜まつていいく。やがて彼女はヨゾラに抱きつき、声を上げて泣き出した。

「安心していい。もう誰も、なにもあなたを傷付けはしない」

瞬間、広場を歓声が包んだ。

女たちの黄色い叫びと、男たちの歓喜の咆吼だった。

羽交い絞めにされた、少女の父親らしき男も涙を流して叫んでいた。

「……で、今の今まで呆然としていた騎士たちが、よつやく反応した。

「おい、黙れ！ 黙らねえとぶつ飛ばすぞ！」

「今……何が……」

「坊ちゃんが、空を飛んで……」

「首輪が、消えて……」

お嬢が口をパクパクさせ、オレの方、ヨゾラの方、と交互に何度も顔を動かした。

無理もない。これはありえない出来事だ。

そして、あつてはならない事件だ。

観衆の目の前で、奴隸の首輪を、正規の方法以外で外してみせるなんて。

奴隸制度が根本から揺れてしまう。

フツ、とヨゾラが揺れたように見えた。

ヨゾラと少女の姿が霞んで消えた。歓声の真ん中から忽然と姿を消した。

トン、と真横から音がした。少女を抱いたヨゾラがすぐ隣に立つていた。

ビクッとお嬢がふるえる。オレは咄嗟に袖からナイフを出そうとし、ヨゾラに腕を掴まれた。

動きが、まったく見えなかつた。

腕がぴくりとも動かない。実力差は悲しいくらいに歴然だつた。視線が再び交錯する。その目は語る。守れど。この男は、一瞬で、野次馬の中で一番強い者を見抜いたのだ。オレはぐくりと唾を飲み、頷いた。ヨゾラはパツとオレの手を放すと、満足したように、子どもみたいな顔で笑つた。そうして奴は少女に向き直る。

「キスイさん、コートとジュークを預かつてもらえますか？」

ヨゾラはコートを脱いで少女に渡す。コクコク、と頬を赤く染めた娘が何度も頷く。目はキラキラと輝き、絵物語の騎士に憧れる少女の顔になつていた。

ヨゾラがオレを見る。「頼みます」

オレは力強く頷いた。「任せろ」

「あのつ！……ヨゾラさん！」

少女が不安そうに言つ。

「気を付けて、くださいね？」

ヨゾラは笑つて手をあげた。

「これまでのことも、今後のことも、全部終わらせてきます
もう一度と、あいつらがあなたを狙わないように。」

そう呟くと、ヨゾラの姿がまた消えた。

一瞬ののち、バシャン、と水の音が響く。池に客が増えていた。豚の他にもう一人、騎士が水に浮かんでいる。騎士は腕が妙な向きに曲がっていた。その横に、少女の父を支えるヨゾラの姿があつた。「す、すまない。ありがとうヨゾラ君」

少女の父がそういつた瞬間、歓声がまた響き渡つた。消えたと思われた『英雄』の再びの登場に、野次馬は沸きに沸いた。

到着した衛兵が観衆に押し出されて広場に入れないほどだ。

「いけー！ やつつけるー！」

「容赦なんかいらねえ！ やつちまえー！」

「街の『ミニ』を掃除してくれー！」

それからあつという間だつた。

騎士が次々と空を舞い、そのたびに水しづきが上がつた。池に浮かぶ騎士は、狙つたようにみな両腕が折れていた。広場から逃げようとしてもすぐにヨゾラが神速で追つてきて投げられることを勉強した騎士たちは、むしろ率先して池の近くに向かい、僅かでも飛距離を落とそうと画策した。しかしヨゾラは平等だつた。池からの距離が近い者は、遠い者に較べて高く飛ばされるのだ。

全ての騎士が片付いた時、池はぴつたり満員になつていて。結局、強化魔法もつかわず、運動能力だけで全員を倒してしまつた。性能が違いすぎた。

池には騎士33人と豚一匹が仲良く仰向けに浮かんでいた。そう、『仰向け』に。

誰一人として、水面に顔をつけている者はいなかつた。誰一人として、死者はいなかつた。

真つ黒な髪を搔き上げた青年は、池に向かつて咳いた。

「一度と彼女に近づくな」

大歓声がこだました。

ヨゾラが少女の父親を連れてこちらに向かつてくる。少女が走りだす。観衆はここぞとばかりにはやし立てた。それはまるで演劇の一幕のような光景だつた。

「ツキノネ」

お嬢が言つ。

「なんだよ、お嬢」

オレは溜息をついて聞く。

お嬢が何を言おうとしているのか、オレにはわかつっていた。赤い髪を揺らして、我が主は満面の笑みを浮かべた。

「妾は、あの男が気に入つたぞ」

気に入つた。

だから欲しい。

欲しいものは手に入れる。手にはいる。

そのことを彼女は微塵も疑つていなかつた。

お嬢はオレに向けて手を差し出した。

「……はあ」

溜息をひとつ。

自分より遙かに強い部下なんて、どうやって教育すればいいんだ。そもそもあいつ、人に従つたりなんてするのか？この先の苦労を思うと本気で転職を考えたくなる。

だがまあ。

いいさ。彼女の目的にそれが必要だと言うのなら、仕方ない。全身全靈をもつて、オレはこの小さな恩人の願いを叶えよう。

オレはお嬢　姫様の手をとつてキスをした。

「全てわたくしはお任せ下さい

王女殿

「おいおい、落ち着けよ相棒。壊れるぜ?」

「大丈夫ですよ。こうこうものは見た目より頑丈にできているんで
す」

「まったく、ここに来てから欠けたどんぐりで作るやじるべーみた
いに落ち付きが無くなつたな」

「……あつ」

「おい、今なんかへんな音したぞ? おい相棒……まさか

「いえ、氣のせいです。……氣のせいといふか、俺のせいです」

「相棒おおおおおおおつ!」

よぞらだ。

俺たちは今、豪華な屋敷の一室にいた。

貴族をぼろ雑巾にして屋根の上を逃げているところで声をかけら
れたのである。声をかけてきたのは広場でキスイさんを守ってくれ
た女人であつた。彼女は俺の作ったチラシをピラピラ振つて言つ
た。お姉さんを探しているそうじゃないか、と。

「条件付きで協力してやつてもいい。我が主はこの国有数の権力者
だ。きっと役に立つ。アカブ伯爵の次男をぶつ飛ばした件も帳消し
にできるぞ」

「知らない人について行つてはいけないと教わっています

「オレにおまえのことを教えたのは、エイトという怪獣人形だ」

こうして俺たちは彼女についてこの屋敷まで来たのであつた。
屋敷はこの街にある大きな学校の敷地の中になつた。その一室に
案内され「ここで待て」と言われたきり三十分が経過していた。現

在は、姉の手掛かりを早く知りたい気持ちとジュークの同胞に早く会いたい気持ちで落ち着きをなくした俺が、興奮のあまり部屋に飾られている調度の「コップ（たぶんコップだ）の取っ手を壊してしまつたところである。

「どうすんだ相棒、弁償なんかできるのか」

「今、すぐくドキドキします。こんなにドキドキしたのは、姉さんの留守中に部屋を掃除してあげようと思つてプリンターのトナーに掃除機をかけたとき以来です」

「それは、どうなつたんだ？」

「排気口からインクのガスが出て布団が虹色になりました」

「お姉ちゃんは何て？」

「言いたくありません。……でも、俺は生きています」

「よつぽどつらいことがあつたんだな」

「生きるつていうのは素敵なことなんです。大根はあんな使い方をしちゃいけないんです。大根？……ああ、大根が来る……ドクター ペッパーが醤油と喧嘩して大根が 惣に…惣に…」

「落ち着け相棒！大根はもういない！」

震えだした俺の腕をジュークがさすつてくれる。俺は「ククク」と二度頷いた。

「そここの茶を飲め。それ飲んで、深呼吸するんだ。ぐいっとやれ。もう一度。そう、そうして大きく息を吸つて。心を落ち着けて。よろしい。 それじゃあ、自分が誰だか言つてみる。名前を思い出せるか？年齢は？出身地は？」

「礼を言います。助けてくださいありがとうございました。自分は夏野よぞらと申します。14歳です。新潟県の山奥に姉と父と母たちと暮らしています……いました」

俺たちがひとしきりはしゃぎ終えた頃、部屋のドアはよつやくノックされた。実際のところ、屋敷にいる人間の位置は音と匂いで全て把握しているので、扉が叩かれるより前に、ここに人が向かつて

いることは知っていた。もちろんこの部屋の天井裏で一人の人間が俺たちを監視していることも知っていた（挨拶は大事だと教わっているので、部屋に通されすぐ天井に向かってちゃんと挨拶した）。

「入るぞ」

俺たちをここに案内した人の声だった。。

俺は「はい」とだけ答えた。自分の部屋でもないのにどうぞと言うのは偉そうに思えたからだ。

扉が開いた。入ってきたのは、真っ赤な髪と目をした女の子と、スレンダーな茶髪の女性だった。足音と心音でわかつていて、やはり昼間の二人であつた。最初こそクジラ、イルカ、と呼び合つていたが、広場ではツキノネとお嬢になつっていたあの二人だ。

お嬢（仮）は、腕に怪獣人形を抱いていた。怪獣人形は片手を上げて言った。

「やあ、ジューク。私のことは忘れていないだろうね？」

「エイト！馬鹿野郎、今まで呼んでたつてのに！」

言葉とは裏腹に、ジュークの声には再会を喜ぶ色があつた。エイト氏も同じであるのがわかつた。

エイト氏はギモギモ族だ。素体のデザインはサー・ティやジュークと同じである。だが彼はメガネをかけていた。

「言つたろう？私の生徒は高貴な身分にある子でね。たとえ同胞であつても情報を与えることはできなかつたんだ。だが、私の方からはちよくちよくおまえの心に触れていたよ。印刷屋で合図を送つたらう？」

「あのときのアレはおまえさんだつたのか！てつきりサー・ティかと」「そのようだね。ま、積もる話はまたあとで、だ」

エイト氏はお嬢（仮）に抱かれたまま右腕を大きく上げ（おそらく指さしているつもりなのだろう）紹介しよう、と言つた。
そして彼は俺に、『二つ』の驚きを投げて渡した。

「彼女はこのスズカゼ王国の第一王女、ロカニ・アキト・スズカゼ

殿下だ

「王女様つて……王女様のことか！？」

ジュークがそのまんまのことを聞く。混乱はもつともである。俺も驚いた。

「如何にも。紹介に預かった、口カーニー。この国の姫である。よろしく頼むぞ、ヨゾラ」

につっこりと笑う可愛らしい少女に、俺はただただ頷くことしかできなかつた。

予期せぬところからこの世界のヒントを与えてしまつた。

王女様に招かれたつていうのも驚いたけど、それ以上に彼女の名前……。

口カーニー・アキト・スズカゼ。

鈴風秋斗。

それは。

俺や姉が生まれるずっと前に死んだという。

父方の祖父の名前だった。

口カーニー王女が王都でもないこの街にいるのは、身分を隠して学校に通うためであるらしい。彼女には弟がいて、弟王子の方はここから馬で一日行つたところにあるバビという街の学校に入学するそうだ。

「馬鹿は要らぬ。世の中を見てこい」

危険である、城に人を呼ぶのが決まりであると意見した臣に父王はそう言って突っぱねたそうだ。

口カーニー王女はこの国の王位を狙つている。それは順当に行けば彼女が弟王子に明け渡されるそうであるが、そのことを快く思わない者も少なくないという。王女がこの街にいることを知つているのは

父王と極一部の寵臣だけだが、いずれ気付くものも現れるだらう、と王女は言った。

「妾は弟と真っ向から斬り合つて王位を勝ち取りたいのじや。邪魔が入るのは何としても避けたい」

王女はその野望を俺に語つた。

ジソとバビにある学校、王立第一碩学院と第二碩学院（通称アカデミー）には国内外から力持つ家の子供たちが多く集まる、と王女は言った。彼女は在学中にそんな権力者の子供たちと『王女として』繋がりを持つ氣でいた。つまり、身分を隠すつもりなどはじめから無いのだ。彼女は自分の境遇を正しく理解していた。正攻法では王になれないことを知つていた。

「妾は女じや。それだけで既に弟より出遅れておる」

王都の有力な貴族はみな前例を重んじる。過去、この国に女王は一人もいない。戦う前から勝負の結果は見えているようなものだ。

王女は諦めたくなかった。実力で負けるならばまだしも、戦いの場に立つことさえできないのではやりきれない。なにより彼女は王になりたかった。

そんな彼女の考えた作戦は、目立つて目立つて目立ちまくる、といつものであつた。これは単純だが、そのぶん効果的な作戦だ。王都の貴族たちが弟を推举しても、弟以上に名の売れた姉がいたのでは父王も考へるし、民も揺れる。もちろん簡単なことではない。弟よりも姉のほうが絶対的に優秀である、と多くの人間に思い込ませなければならぬのだから。王女はやる気だった。

しかし、ここで問題が出てくる。

身分を偽つて入学するのには「危険を避ける」というメリットがある。王女だと明かすということは、そのメリットを捨てるということに他ならないのだ。目立つことが目的だが、それで殺されたのでは元も子もない。王女には、絶対の守護者が必要だつた。

そんなとき、家庭教師のエイトが言った。

「我が同胞の旅の連れに、虎の王を一撃で倒した猛者がおります。

彼は今この街で姉探しをしております」

運命だと思った、と王女は言った。

見たこともない黒髪の異世界人。

虎の王を頭突き一発で倒し、三十人以上の騎士を無傷で倒す化け物。

そんな人間が目立たないはずがない。

目立つものなら近くに置いておかなくてはならない。

こいつしかいない、と王女は思った。こいつを自分のものにしたい、と。

「そういうわけで、ヨゾラ。おぬしは妾のものになるとよ」

俺の肩をバシバシ叩きながら満面の笑みを浮かべて口力二王女が言った。

「いつでも妾の後ろをついて歩き、あらゆる敵から妾を守り、妾だけの言うことを聞く騎士になるがよい」

俺は黙り込んだ。俺には彼女が傲慢といつ字の体現者に見えた。尤も、向けられる感情が好意なので、嫌な気がしなかつたというのも本当のところであつたが。

「おぬしはめっぽう強い。だから妾はおぬしが欲しい。妾のものになれヨゾラ。おぬし、サーティとやらの所に厄介になるつもりでいるそうではないか。妾はおぬしをこの屋敷に住まわせてやるぞ。三食きちんと与えるし、おやつもやる。給金も妾の小遣いから払う。おぬしの姉探しにだつて協力してやる」

俺は考えた。

考えるまでもなく答えは出ていた。

ジュークを見る。エイト氏を見る。一人は頷いていふに見えた。

最後に口力二王女を見る。

彼女は屈託なく笑っていた。

どうやら俺は、この子を嫌つていなかった。

ああ。だつてこの子は、最初から俺を利用する気でいる。そ

のことを隠しもしない。

褒美をやるから利用せん。やつ言つているのだ。

そんな正直な人間を嫌えるわけがなかつた。

嫌いじやないひとを守る仕事なら、頑張れる。

俺はいつの間にか笑つていた。

王女が手を差し出す。

「妾のものになれ、ヨゾラ」

「ひとつだけ、条件を付け足してもよろしこうじょうか」

「言つてみろ」

俺は静かに頭を垂れた。

「コップを壊しちやつたことを、どうか許してください」

覚悟と道は定まつた。

姉さんが見つかるその日まで、俺の一一番をこの子にしちゃう。

ある男子高校生の日記

11／2（晴れ）

夏野さんが休学する」とになつた。

理由は知らない。

俺は、もうダメだ。

がつじーへひぬまくわくじーく(電機科)

硕学院
裏躰
姫うき
せきがくいん
りんり
しょうき

がつじぐーーひぬまとおじゆくわよ「うこぎ

「先生、虎に会つた時の『わたしは敵ではありません』はこれでいいでしょうか？」 グワウッ、グワウー！」

「なんだよそれ。ぜんぜん駄目。」 うですよね、先生？」 グラウ、グワウッ…」

「それじゃあ威嚇してるみたいじゃないか？たぶんこうだよ グアウ、ガウ。どうですか、先生！」

「先生、お馬さんに乗る時の『よろしくね』はこうですか？」 ブルル、ヒヒーー」

「先生、ぼくのも見てくださいー森で狼に遭つたときの『怖いことはしません』いきます！」 ウォン、グルル」

「先生、わたくしも先生のように小鳥さんとお話がしたいですわ。是非おしえてください」

「先生、恋人はいますか？」

「ナツノ君、わしのウシ語の発音もみてくれんか。 ウモフッ、モオオ、モオウ。体調はどうだ、元気か？」と言つたつもりなんだが、どうかね？」

「ナツノ君、おとのの大鷲を手懐ける方法を教えてくれー！こどもの内から育てたのでは時間がかかりすぎるー！」

「先生！先生！先生！ナツノ君！」

「ガンホー！ガンホー！ガンホー！ナツノ君！」

ひるまです。

四度目の授業も大成功に終わりました。

今わたしは、バビの街にある大きな学校、『王立第一碩学院』で

教鞭を執つて生計を立てています。

碩学院の校舎は石造りのお城のような建物でした。入り組んだボルト天井、無数に配置された尖頭アーチの小窓、馬蹄型アーチの列柱、獅子や鳥のレリーフが施された壁、纖細なトレーサリーが美しさをいつそう際立たせるバラ窓……。「シックとイスラムを鍋で煮て異世界要素をふんだんにまぶしたかのよつた見たこともない建築様式は、わたしに宿るあるかなきかの乙女心をこれでもかと刺激します。彼らは言います。「思いだせ、おまえは女だぞ」。如何にもわたしは女であります。ヨーロッパの古いお城など大好物であります。家族旅行でチエコに行つた際には聖ヴィート大聖堂（プラハ城のアレです）から一步も動かなかつた女であります。路面電車に乗りたくて仕方なかつた父と弟に引きずられたのはよい思い出です。

さて、わたしが一昨日から働いている王立第一碩学院（通称第一アカデミー）は、日本の小・中・高等学校にあたる十二年制の教育機関であります。プライマリ（初等部。6歳から入学可）が前期四年・後期四年の八年制、セカンドリ（高等部。基本的にはプライマリ修了者が進学）が前後期一年ずつの四年制です。各部ともに前期段階と後期段階の修了時には修了証書が授与されます。セカンドリの前期生をジュニアとよび、後期生をシニアといいます。プライマリもセカンドリも必修教科は数学と社会学のみで、ほかに商業、芸術、音楽、農業など様々な選択科目の中から、おのの身につけたいものを履修します。とくべつ成績のよい学生は飛び級することもあるそうです。

学校の年度は1月中旬に始まり、12月中旬に終わります。この間、4月と8月はまるまる休みで、6月・9月・11月にも7日ずつの休みがあります。国の祝日や週一日の休日（火曜日は休息の日です）、テスト休みなども入れると、年間授業日数は200日あるかないかだそうです。ちなみに義務教育ではありません。
わたしの肩書きは『非常勤講師』　　言うなればパートタイムの

先生です。授業のある日、授業のある時間にだけアカデミーに来て、授業が終わったら経理部からバイト代を頂いて帰ります。なんと気楽な仕事でしょうか。わたしの求めていたものがここにはありました。

わたしの教える『動物語』は自由聴講制の教科です。これは中途半端な時期に教師採用されたわたしのためにわざわざ学長先生が作つてくださつた制度で（まことにまことに恐縮の至りです）、「単位の修得はできなければども、学校関係者であれば学年・所属を問わず自由に参加できますよ」という当校ただ一つの教科です。学校関係者ということですから、先生の聴講も歓迎しております。今日の授業でも農業学（酪農）のロツフオ先生（白髪のおじいさまですが、筋肉がビルダーです）が学生に混じつて熱心にウシ語を学んでいらっしゃいましたし、高等狩猟学のセキ工先生（褐色の肌が素敵で、背の高い女性です）が狩りをたすけてくれる動物についての質問で何度も手を挙げていらつしゃいました。

今日の授業は十時と十四時の二度、外にある剣術練習場の隅で実習をまじえておこないましたが、午前午後あわせて百名以上の参加がありました。授業を終えて経理部に行くと、待つていた学長先生に声をかけられました。聞けば、他の教科との時間の関係で参加できなかつた学生たちから、動物語の日数を増やしてほしいとの嘆願があつたそつでした。学長先生は言いました。

「どうだらう？キミさえよければ、正式な教員としてこのアカデミーに籍をおいてみるとこなのは。研究室にも空きがあるし、職員寮には格安で住むことができる。我が校は結果主義だが、キミは学生たちの間でも人気が高い。給料も今の五倍はかたいだう」

本当にありがたいお話でした。しかしわたしの答えは決まつていました。

「嬉しいお誘いですが、面接の折にも申し上げましたとおり、わたくしは行方不明の弟を探しているのです。いつここを去るとも知れぬ身。せめて弟の居場所だけでもわかれれば、安心してこの街に骨を

埋められるのですが……」

「それについては、私の部下たちが今、アルイ、モルイ、ユキオトの三つの街で聞いて回っている。全力でだ。黒い髪などそういうものではないから、弟くんがいればすぐに見つかるだろ？」
確認するが、弟くんがどこの街にいても、キミはこの街を出て行つたりはしないのだね？」

「勿論会いには行きますが、元氣でいるとわかれればそれでいいのです。バビは活気あふれる美しい街です。遠く異国の方より流れてきたわたくしなどにも人々は優しく接してくださいます。許されたなら市民権を買って小さな家を持ちたい、そう考えてありますわ。ああ、本当に、弟さえ見つかれば……」

「私もコネをあたつている、きっと見つかるとも。ただ、それがいつになるかは、正直なところ私にもわからない。キミは早まらず、じつしりと構えてこの街で連絡を待つべきだ。もし我々が弟くんを見つけても、そのときにキミがいのでは知らせようがない。私と私の部下を信じて、この街で、このアカデミーで待つていればいい。学生からキミのことを探して、是非キミと話してみたいといふ大貴族や商家の方々が、むろん貴族や商家に限つたはなしではないが、保護者たちの中には、そう言つて我がアカデミーを訪ねてきてくださる方も少なくない。無理にとは言わないが、時間ができたら、色々と考えてみてほしい」

「ありがとうございます。少なくともわたくしは、あとひと月はこの街で弟を探すつもりであります。いつまでもここに留まつていったのですが。その間は、よろしくお願ひします。何卒よくしてくださいませ」

「う、うむ。」ちからめぐらしく頼むよ」

学長先生は「一ヶ月……一ヶ月……」と咳きながらお部屋に戻つて行かれました。

初日に野良犬さん野良猫さんたちにマスゲームを披露していただき以降、わたしの教える動物語は人気科目がありました。三日目

の今やわたしの名前はアカデミーの外にまで知れ渡り、貴族さまから是非わが子の家庭教師にとお声がかかるまでになりました。たくさん的情報がわたしの元に集まって来ます。

よぞら、早くお姉ちゃんを見つけてね。

でないと、わたしの方が、先に見つけてしまうわ。

わたしの弟探しは順調に進んでいました。

経理部から今日の分の日当をいただいたわたしは、校舎を出て学生寮の方へとテクテク向かいります。途中、セカンダリの学生たちが声をかけてくれます。

「ナツノ先生、これからお帰りですか？」

「今日は無理でしたが、明日こそは自分も聽講させていただきます！」

「ナツノ君、今度一緒に山へ行かないか？危険種を間近で見てみたいんだ」

「ヒルマちゃん、今度オレと逢引しようぜ。オレいい店知つてぐふつ」

「恋人の前で他の女性に懸想でござりますか？よい御身分でござります。まことにまことによい御身分でござります。ちょっとあちらで教育、いえお話し合いをいたしましょう。うふふふ。ではナツノ先生、また明日お会いできるのを楽しみにしておりますわ」

みんな仲良しさんでした。わたしは一人一人に挨拶を返して家へと向かいました。学生でない方が一名混じっておられましたが、これはいつものことでした。

男女にわかれ了一般学生寮を越えると七つのお屋敷が見えてきます。それぞれのお屋敷には当然のように広いお庭と厩舎がついています。断つておきますが、ここはまだアカデミーの敷地内です。これらのお屋敷は、国内の大貴族さまの「子息様や外国の王族などがアカデミー在学中に滞在する別邸なのでした。わたしはその中でも

「一番田に大きなお屋敷に向かいました。何を隠そう、ここがわたしの今のお家なのでした。

わたしは玄関から中に入ります。もちろん途中、厩舎のヨシムネ君（臆病なお馬さんです）に挨拶するのも忘れません。ヨシムネ君はわたしのあげた人参をおいしいおいしい、と言つて食べました。中に入ると、メイドのスズメさん（手をつかずにスピニングバードキックができます）がわたしに声をかけてきます。

「おかげり。御主人様は書斎よ。あなたが遅いから」機嫌斜め「あらら。すぐに向かいますね」

わたしは部屋に荷物を置き、書斎へと向かいました。中にはわたしの正式な雇い主がいらっしゃいます。わたしはドアをノックしました。

「だれだ」

「じどもの声がします。わたしは言いました。

「ひるまです、坊っちゃん。ただいま学校から戻りました」ドタドタと足音がして、すぐにドアが内側から開けられました。真っ赤な髪をした十歳の男の子が、同じく真っ赤な瞳をキラキラさせて立っていました。

「遅いぞヒルマ！すぐ帰ると言つたではないか！」

「申し訳ございません坊っちゃん。学長から授業のことでお話がありませんで」

「むう……それならが仕方がないか、許す。だが、坊っちゃんは減点だ。言葉遣いも一寧すぎる」

わたしはへつと笑います。

「ごめんなさい、ツバメ様」

「様もダメだ。わかつてやつているであります」

「はい、ツバメさん」

男の子「ツバメさん」と、ギオム王子は「仕方のない奴め」と笑いました。

そう。彼は王子であります。

彼は、わたしが彼の正体に気付いていることを知りません。スマさん（本名はリロさんです）も、他の使用人のひとたちも、みなわたしを遠い国から来た魔女だと思っています。警戒はしていますが、魔女だから動物の言葉がわかるのだと思っています。それはもちろん間違いなのだけれど、わたしはそのことを話していました。

「では、今日も我に『音』のことを教えよ

小さな御主人様はそう言つてわたしを書斎に引っ張るのでした。

見知らぬ森で目を覚ましたわたしは、すぐに弟の姿と『音』を探しました。

わたしの最大の剣であり盾でもある聴覚は、集中すれば1キロ以上はなれた人間の会話も聞きとることができます。わたしは目を閉じ、耳を澄まして音の世界に潜り込みました。弟の音は聞こえませんでした。

わたしの持ち物はバッグだけでした。このバッグを持つて、弟のよぞらと一緒に（というかよぞらに乗つて）山を降り、いちばん近い商店街まで行き、そこでコロッケとおでんを買い食いした帰りに空へと浮かんでここに来たのです。なんと荒唐無稽なお話でしきょうか。

しかしあたしは慌てませんでした。

こんなことが、前にも一度ありました。

あれは、たしか、小学校にあがるまえの頃のことです。

その夜、目が覚めたわたしは、隣で眠る弟を揺すつて起こし、手

をひいて外に向かいました。物音で起きてきた父が玄関前の廊下で待っていて、「どうした、トイレか?」と言いました。わたしは首

を横に振って、「虹をくぐつて白い海に行くの」とこたえました。

「あきとさんが呼んでるの。間に合わなくなつちやうつ、すぐに行かなくちや」

その頃のわたしに「あきと」「など」という前の知り合いはいませんでした。それでも、ぼんやりした頭でそう言いました。そうしなくちゃだめなんだ、とこう強い気持ちが胸の深いところにありました。

父は驚いた顔をしたあと、わたしをギュッと抱きしめました。そうしてまだ寝ぼけている弟の頬をペチペチ叩いて起こしました。

「よぞら、お姉ちゃんの手を絶対にはなすな。はなしたら、ひるまいなくなつちまつ。俺は行けない。俺はもつあそこには入れない。おまえがお姉ちゃんを守るんだ。いいな?」

まだ小さかつた弟は、わたしの手をぎゅっと握つて「わかった」と頷きました。

「まもる。せつたい、はなさない

父はわたしと弟をその大きな腕で抱きしめました。父は泣いていました。

わたしはそのとき、どこか深くて遠いところで、何も感じずにその様子を見ていたような気がします。

父に見送られ、弟の手をひいて山の中へと入りました。わたしの家は深い山奥にあります。家のある山せんぶが我が家の私有地です。周囲一キロに家はなく、夜は真っ暗でなにも見えません。わたしはそんな中をずっと歩き続けました。途中、弟が何度もわたしの手を握り直したのを覚えています。あのときの自分は本当に自分だったのだろうか?何年も後になつてからそんなことを何度も思いました。答えは出でいました。あれは確かにわたしでした。なぜならわたしは、あの時のこととはっきり覚えているのですから。

何時間も歩いたわたしは、森の中のある場所で止まりました。そ

こには大きな切り株がありました。わたしは切り株に向かってお辞儀をしました。弟も、不思議そうな様子でしたがわたしにならいました。

切り株の上に、小さな虹がかかりました。

夜の闇を歯牙にもかけない、明るい、綺麗な虹でした。

丁度こどもが通れるくらいの小さな虹です。虹の向こうには夜の海が見えました。

弟がわたしの手を強く引っ張りました。

「ねえさん。あれはちがう。よくないものだ。よくないかたちだ」「わたしは笑いました。

「知ってるわ。でも、行かなくちゃ。よだらはいいで待っていて」弟は悩んだようでしたが、結局わたしの手をはなしませんでした。わたしたちは手を繋いだまま虹をくぐりました。

そこは砂浜でした。

わたしたちは砂浜を波打ち際に沿つて歩きました。歩いていると、だんだん小さなものが見えてきました。それは子どもでした。真っ黒い髪を膝まで伸ばし、真っ黒い服を着た子どもでした。当時五歳か六歳のわたしよりも少しだけ大きい子どもでした。子どもはわたしたちが来るのをいいえ、わたしが来るのを、待っていました。そのことが、その時のわたしにはわかつていました。

黒い子どもの前まで着くと、わたしはこんばんは、と挨拶しました。

「いい夜ですね、あきとさん」

わたしは、わたしが会いたかったあきとさんはこの人なのだ、と理解していました。

あきとさんはちらりと弟に手をやつたあと、わたしに、手を出せ、とこうようなことを言いました。なんと言ったかは覚えていませんし、どんな声だったかも思い出せません。もしかしたら、声など出

していなかつたのかも知れません。わたしは手を出しました。その手にあきとさんがポンと手をのせました。そして、もう帰りなさい、というようなことを言いました。

わたしは帰りたくありませんでした。

理由は今のわたしにはわかりません。ただただその美しい砂浜とあきとさんから離れたくなかったこと、元の暮らしになど戻りたくなかつたことを覚えていています。

わたしは泣きました。

「どうしてこっちにいちゃいけないの？わたしもここがいい。あつちは五月蠅くて、みんな間違つて、一つじやないからイヤ。ずっとここにいたい。やつと会えたのに」

あきとさんはわたしの頬にキスをしました。

わたしは急に眠くなりました。まぶたが重くなつて、綺麗な海も、白い砂も、あきとさんの顔も見えなくなつていきました。目を閉じる間際、あきとさんが弟になにか言つのが見えました。わたしは悲しい気持ちと羨ましい気持ちを見つめながら眠りに落ちました。悲しい気持ちはまるいかたちをしていて、中には白い砂が閉じ込められていました。羨ましい気持ちは星のかたちをしていて、中であきとさんが弟に小さなもの渡していました。それは金色のカギでした。

わたしはほんものなのに。
よだらはちがう。

今のわたしにはそれがどういう意味だったのかわかりませんが、そのときのわたしはそんなことを思いました。

眠りに落ちたわたしは夢を見ました。

夜の白い浜辺で、二人の子どもと一緒に砂のお城をつくる夢でした。ひとりはあきとさんで、ひとりは父でした。父の子供の頃を知らないのに、その灰色の髪をした子どもが父なのだと、わたしには

わかりました。

目が覚めると、わたしは布団の中にいました。

いつも寝ている子供用の布団ではなく、父や母の使つ布団でした。部屋もわたしたちの部屋ではなく、玄関のすぐ近くの、仏壇のある部屋でした。わたしは夢をみたのかもしないと思いました。わたしの横には弟が眠っていました。弟はわたしの左手を握つたまま寝ていました。その顔は土で汚れていました。わたしの右手には『おはじき』が三個だけ握られていました。わたしの目から涙がポロポロこぼれました。夢ではありませんでした。悲しくないのに涙が止まりませんでした。弟が起きるまで、わたしはただただ泣き続けました。

それからわたしたちは手をつないだまま居間に行きました。はなしてと言つても弟が手を離してくれなかつたからです。居間には父と、複数いる母の中でわたしといちばん顔の作りが似ている咲子母さんがいました。他の母たちはみな出掛けた家にはいなうそでした。父は言いました。

「よぞら、もういいぞ。ありがとうな」

その言葉をきいて、弟はようやくわたしの手を離しました。

咲子母さんが弟の頭を何度も何度も撫でました。

「頑張つたね、よぞら。ありがとうね。 ひるまもよぞらにお礼を言つんですよ。途中で寝てしまつたあなたを家までおぶつてくれたんですから」

よく見れば弟の手足はすり傷だらけでした。わたしは弟を抱きしめてありがとうと何度も言いました。弟は恥ずかしそうに、「やくそくしたから」とだけ言いました。

「おまえたちが帰つて来てくれてよかつた」と父が言いました。

「あなたの子だもの」と母は笑いました。目が、泣いたあとのように真つ赤になつていました。

ひとしきり弟とじやれたわたしは、父にきのうの夜のことを見聞き

ました。父はつらそうに、首を横に振りました。

「きっと一生、俺から伝えられることはないだろ? 時が来たらわかる。おまえは、あの砂浜を歩いて、『彼女』に会ったんだから」「黒いひとに会つたわ。わたしはあるひとを『あきとさん』だと思つた。あのときはたしかにそう思つたの。でも今はもうわからない。あのひとのことも、あの海のことも……。ねえお父さん、あきとさんつて誰なの? どこのひとなの? どこのひとなの? 男の人なの? 女の人なの?」

父は答えず、「あのひとからなにか貰つたか?」と聞きました。わたしはおはじきを見せました。大事にしなさい」と父は言いました。母が『安産祈願』と書かれた御守りを引き出しから掘り起こし、中身をゴミ箱に捨てておはじき入れにしてくれました。弟はそのあいだ、ただ無言でわたしを見ていきました。

よぞらもなにか貰つたのか?と聞いた父に、よぞらは黙つて首を振りました。弟が嘘をついたのが心臓の音でわかりました。なぜ弟が嘘をついたのか、わたしには今もわかりません。ただ、これ以降、弟が妙に、わたしに 対して過保護になりました。

その日の夜、わたしはよぞらと田つきがそつくりの神絵母から聞きました。わたしたちの父方の祖父 父のお父さんの名前が、秋斗というのだと。

そのひとはわたしの生まれるずっと前に亡くなつていきました。

写真も、残つていないうさでした。

神絵母はわたしの頭を撫でて、悼むように笑いました。

「わかるのはあが神様にならうとした、ということ。結果は誰も知らない」

きっとあのときと似たような状況にあるのだ、とわたしは思いました。

わたしは動物の言葉を使い、森で一番強い生き物の居場所を聞き

ました。存外近かつたので、すぐにその生き物の元へと向かいました。これが四本の牙をもつ、3メートル以上もある大猪（こちらではボラボと呼ばれています）のイエシゲさんとの出会いのエピソードです。わたしはイエシゲさんにお願いして森の外まで送つてもらいました。ただ強い生き物と一緒に歩けるだけでよかつたのですが（言葉をかけるよりもはやく野生動物に攻撃されたのでは、わたしなどひとまりもありません）、彼はお亡くなりになつたお父様の牙を「邪魔になるが捨てるには惜しい」という理由でわたしにくださいました。そのうえ彼は鼻と牙で器用にわたしを持ち上げ、背中に乗せて森の外まで運んでくれたのでした。

「ゴヒヒ、ブゴゴッ、ブヒ（歩く。つかまれ、不思議な生き物よ）」「わたしはキュンとしました。

そうして途中ヒテタダ君（黄緑色の小鳥さんです。尻尾が長いです。好奇心旺盛。）を仲間にし、イエシゲさんと別れ、村でお金とヨシムネ君を手に入れ、わたしは弟探しの旅に出たのでした。

わたしたちがひとまずの目的地であつた学術都市バビに到着した頃、世界は既に薄闇のドレスと月のブローチでおめかししており、街壁の門は固く閉ざされていました。門の側では、わたしと同じく間に合わなかつた人たち（商人さん？旅人さん？）が火を炊いていました。

「あつちが空いていますね。行きましょうヨシムネ君」

わたしはヨシムネ君のお尻を撫でながら（意味はありません。ただのセクハラです）林の方へ向かいました。わたしはここを今夜の寝床に定めました。ちなみにヒテタダ君は既にコートのポケットで眠っています。彼の野生はどうしてしまつたのでしょうか。いろいろ不安です。

旅人たちの中にはときおり「ちりぢりを見る方もいるようでしたが、別段変事も無く我々は眠りについたのでした。

「見ろよ。あの馬、横になつて寝てるぜ」

「よつほど飼い主を信頼してゐるんだろうよ」

「おい馬鹿ども、そんなことより作戦をどうするんだ。どうやって

王子に近づく

「なあに、『奪う槍』のリロか騎士の野郎か、どちらかが側を離れた隙にサクッとやつちまえればいいのさ。欲を搔かなきや楽な仕事だ」

「だが、監視どもが

「

こうしてわたしの異世界生活一日は終わりました。

門が開いたのは午前四時を過ぎたころでした。通行料は銅貨五枚ということでしたが、初めて街に入る人間は滞在許可証といふものを買わねばならないそうで、これにまた銅貨五枚がかかりました。必要経費とはいえ、これでわたしの持ち金は銅貨22枚となつてしましました。落ち込んでいても仕方ありません。ヨシムネ君に物品税が課せられなかつたことを喜びましょう。

街に入ったわたしは、道の端によつて目を閉じました。

光が消え、世界が音で満たされます。鼓動、足音、衣擦れ、荷車の音、声、声、声……。迷路のような街でしたが、わたしの力の前ではそんなこと、関係ありません。わたしは無数の音がわたしを包んでいるのを感じました。その中から求めるものに認識の手を伸ばします。要らない音を消し、関係のない言葉を弾き、求める単語を吸い寄せます。やがてわたしは目を開けました。

「ヨシムネ君、ヒデタダ君、行きましょう。目的地はあつちです」

「ヒビーン」

「ピロロロロ」

わたしはイエシゲさんのお父様の牙を適正価格で買って頂くべく、この街一番のオーフショーンハウスを目指すのでした。

「つまり、その周波数といつやつは物や空気の『揺れ』の数のことなのだな？それが大きすぎたり小さすぎたりする音は、我々人間には聞こえない、と？」

「その認識であります。周波数の大きい音は高い音、小さい音は低い音として聞こえます。同じ打楽器でも、金属の楽器を叩くと高い音が、太鼓のような膜ばりの楽器を叩くと低い音がしますね？実はこれ、どちらの楽器も、聞こえる音のほかに、人間には聞こえない音も出しているのですよ」

「本当か！？」

「嘘なんてつきません。聞こえる、といつのは耳がとらえた音にだけ適用される言葉ですが、感じる、といつことでしたら、きっとツバメさんも体験したことがあるはずです。　例えば、太鼓を近くで聞いて、お腹が痛くなつたことはありませんか？」

「あるが……ああつ、そうか！『揺れ』だな？周波数が小さすぎて聞こえないが、音そのものは大きいから空気は力強く揺れる。その揺れで腹が痛くなるのだ。そうであろう！」

「はい、そのとおりです。よくおわかりになりましたね」

「むふふふ。我はまた一つ賢くなつたぞ。この調子でどんどん智を身につけて、いづれは市井で生きてゆくのだ。むふふふ。楽しみで仕方がないな！」

ツバメさんは思い描く理想の将来を語つて笑いました。

「明日は実習をまじえて、超音波と低周波音についてお勉強していくこととして、今日はこれまでにいたしました。おジャンでござります。お疲れ様でございました」

「つむ！あすも宜しく頼むぞ、ヒルマ！」

知識を得ることに喜びを感じる生徒というのは、先生にとつては可愛くて仕方のないものです。わたしの職場環境は極めて良好であります。

「お疲れ様。飲む？」

「ありがとうございます。……わつ、良い香り」

水を飲もうと居間に行くと、メイドのリロさん あぶない、スズメさんでした スズメさんがいました。彼女は桃色の、柑橘の香りのするお茶をいれてくれました。

「南のお茶でね、今がいちばん美味しいの。本当は使用人が飲むようなものじゃないけど」

「共犯者というわけですね」わたしは言いました。「隠し事は得意です」

スズメさんの『音』が少し乱れました。表情は変わりません。何事もなかつたようにカップを口にあてます。流石は王子様を任されるだけの人物でした。

「弟さんのことだけど、少なくともこの街にはいないみたいだね」彼女の音はすぐに平時のリズムに戻りました。

「一日でわかるなんて、スズメさんは優秀でいらっしゃるのですね」黒い髪なんて、いればすぐにわかるさ

また、音が揺れました。わたしはなにも言いませんでした。彼女は弟を、探してなどいないのです。

実のところ、弟がこの街にいないことは初日にわかつっていました。わたしは弟の『リズム』を正確に覚えていました。街の端から端まで歩けば、わざわざ人に聞いたりなどせずとも、いるかいないかは知れるのです。

「スズメさんは、わたしが邪魔ですか？」

わたしは正直に聞きました。彼女はカップを口からはなし、わたしをじつと見つめました。鼓動は警戒のリズムを刻んでいます。わたしは彼女から目を逸らしませんでした。やがて彼女は言いました。

「警戒はしてる」

その音に嘘はありませんでした。

「わたしにはあんたの狙いが見えない。弟さんのことだって、本當なのがどうかわからない。学長殿にも協力させてるようだけど、そ

れがカムフラージュじゃないという保証はない。……悪いね」

あたしの仕事は坊っちゃんを守ることだから、とスズメさんは言いました。もう、自分がただのメイドでないことをわたしに隠すつもりはないようでした。わたしはできるだけ自然に見えるように笑いました。

「それでいいと思います。確かにわたしは隠し事をしていますから。……ただ、わたしが弟を探しているのは本當ですし、現状わたしはこの世界の誰にも敵意を抱いていないということも事実です。信じてほしいとは言いませんが、わたしがそう宣言した、ということだけは覚えておいてください」「わたしは笑い、もうすぐここを去ります、と言いました。

「急だね。……助かるといえば、助かるけど」

「去ると言つても、街には留まります。少なくともあとひと月は」「ひと月後になにがあるの？」

「ひと月たつても見つからないのなら、弟はきっとこの国にはないな。そう思つんですね。目立つ子ですから」「あんたより？」

「片手で象を持ち上げるつて言つたら信じます？」

「あんたでもそんな冗談を言つんだね」

スズメさんはニヤリと笑いました。わたしはただスズメさんを見つめました。彼女は笑みを消し、何かを確かめるようにわたしの目を見ました。やがて彼女は眉間にシワを寄せて「本当に？」と言いました。わたしは笑いました。

「この世界にも、象がいるんですね」

彼女は答えませんでした。

アカデミーの掲示板に人事の告知が貼られたのは、わたしがここで働くよになつてから五日目のことでした。なんでも明日、姉妹都市のジンから新しい先生がいらっしゃるのだそうです。わたしは

剣術練習場の隅で授業の開始時刻を待ちながら、校舎の中でプライ

マリ高学年の学生たちが話す様子を聞くともなく聞いていました。

「学科は？面白そなならとろうかな」

「かなり面白そなだぞ。聞きたいか？」

「なんだよ、言えよ」

「聞いて驚け。新しく来る先生が受け持つのは……『異世界学』だ

！」

「なにそれ！面白そなう！」

「そうだろう、そうだろう」

「なんでおまえが威張るんだよ」

わたしは慌てて携帯電話を開きました。授業開始はもうまもなくでした（そして電池残量は末期でした）。わたしの胸は張り裂けそうなほど高鳴っていました。異世界学？異世界というのは地球のこと？それを教える先生って？すぐにでも聞きに行きたいという思いをわたしはぐつと我慢しました。

授業が終わるとわたしはすぐに学長先生の部屋へと走りました。学長先生はお留守でした。

「急ぎの御用でしたら戻り次第お伝えしますが」

わたしは秘書さんに大丈夫ですとお断りして学長室を後にしました。

落ち込んでなんていません。明日になれば異世界学の先生はいらっしゃるのですから。いいですよーだ。

トボトボ歩いて女子寮の見えるあたりまで来ると、黄緑色の小鳥がわたしの頭に軟着陸しました。ヒデタダ君でした。わたしは彼を人差し指に止ませ、干し豆を取えて『偵察』の報告を聞きました。事態は進行しているそうでした。事件は起こりつつあるようです。わたしはふむ、とうなりました。

「では、彼らは気付いていないのですね？（キロロロ、ロロ、キピ

ツ）

「ルルル、キロロ、ピロッ（ウム。屋敷の周囲だけが活動範囲で

あるようだ！」

きっと、彼らは成功するでしょう。 よそらなら間違いなく行動を起こすのでしょうか。 そんなことをして、わたしになにか得るものがあるのかしら？ むしろデメリットの方が多いんじゃ……。 綺麗な小鳥さんと話すわたしをプライマリの女子学生たちが瞳を輝かせて見つめていました。

「教えて差し上げるべきでしょうか。 でも、そんなことをして疑われるのも。 それに、あの人にはまだ利用価値がありますし……」

わたしはヒデタダ君を頭に乗せなおし、ウムウムうなりながらお屋敷へと帰るのでした。

ツバメさんのお勉強の時間が終わると、彼とお夕飯をご一緒にします。 このお屋敷でのわたしの立場は非常にデリケートです。 主人であるツバメさんに家庭教師として雇われているのですが、彼は使用者さんたちに、わたしに対しては客分として扱うように、と言いつけています。 執事のふりをした騎士さんなどは露骨に態度に出します。「どうしたらしいのだ？」と。 そんなのはわたしの台詞ですこんにやろう、と言つてさしあげたいものでした。

夕食が終わり、さてお風呂をいただきましょうか、といつとこりで、ふとわたしはあることに気付きました。

「……お給料、貰い忘れた」

わたしはスズメさんに事情を伝え、経理部へと向かいました。 暗いから送る、と申し出てくださった彼女に、わたしは真剣な声で言いました。

「スズメさんと、できれば執事さんも……お一人は可能な限り坊っちゃんの側を離れないでください」

「それは、どういう」

「それでは行つてきますね」

外は真っ暗でした。わたしには音があるので平氣ですが、少なくともこの街ではわたしのような年の女が出歩く時間ではありません

でした。

ヒデタダ君とヨシムネ君が仲良く同じ厩舎で眠っている音が聞こえました。ヒデタダ君はヨシムネ君の頭の上で寝ています。ふたりとも、元いた場所を離れ、側において安心できる相手がお互いしかいないのかもせんでした。

監視者もやはりいました。彼らは気配を消す達人です。父や弟と比べれば赤子レベルの未熟さですが、それでもおよそ普通に生きている人間では彼らを見つけることは至難でしょう。彼らは十人おり、うち四人がわたしの動きに目を向けていました。しきりに手を動かして合図を送り合っています。王子様の護衛をしていくくらいです。皆さんよほどの凄腕でいらっしゃるのでしょう。わたしには全て筒抜けでしたが。人間の考えた合図や暗号など、動物の鳴き声のパターン解析に比べれば稚拙なものです。

『大丈夫だ。気付いた様子はない』

『気付くわけがあるか』

『しかし魔女だぞ。なにがあるかわからん』

『リロから合図があった。給料の貰い忘れてアカデミー経理部へ向かうらしい。一応、自分が後を追う』

『気付いていますよ、皆さん。』

わたしはもうそくランプの頼りない灯りの中、目を閉じて校舎へと向かうのでした。

蠅燭の灯された経理部の執務室ではふたりの男性がなにやら言い争っていました。一方は経理部の職員さんで、もう一方は白い髪をした長身の男性です。彼らのやり取りは、口論というよりは、懇願と拒否の繰り返しでした。部屋の蠅燭はもう短くなっていました。

この世界には魔法の火なるものもあるそうなのですが、高価なため学校では滅多に使わない、という話を学長先生から聞いています。魔法です。魔法。なんてファンタジック。一度見てみたいものです。……なんて思いましたが、お屋敷の灯りは全部それでした。わたし

が持たされたのはろうやくランプでしたけれど。

わたしはテクテクと受付に向かいました。

「だから、前借りってかたちでいいんだって。できるだろ、それくらい？金欠なんだよ今。なあ、頼むよマジでさ」

「キンケツ？マジテ？……なにを言つているのかわかりませんが、駄目なものは駄目です。給料日まで待つていただかな」と

「頼む、この通りだ！土下座でもなんでもするから！」

「ドゲ……？さつきから何を言つてるんですか。何を言われても給料の前渡しはできませんよ。規則ですので」

「なんだよ……俺に死ねっていうのかよ…………」

とうとう男性は泣き始めました。とても上手な嘘泣きです。お給料の前借りを無心しに来るくらいですから、この人も先生なのでしょ。わたしが言うのもなんですが、それにしても随分とお若いようでした。おそらくまだ二十歳ぐらいでしょう。

わたしは事務員さんに声をかけました。

「すみません、今日の分の日当を預きに伺いました」

「ナツノ先生！ああ、もつ、お待ちしていましたよーこれでようやく帰れる」

えつ。

「もしかして、わたしのために、お待たせしてしまったのでしょうか」

だとしたら、夏野ひるま、一生の不覚です。他人様に残業させてしまふなんて。母の一人がよく言つていました。残業もうやだ、作家がどれほど偉いんだと。わたしは母と同じ苦しみを事務員さんに味合わせてしまつたのでした。なんということを。

「ああいえ、先生のせいじやありませんよ。学長がね、言つんですよ。ナツノ先生の『機嫌を損ねるようなことがあつたら、おまえはクビだ！奴隸のようにへりくだつて接する！つて。ナツノ先生はそういう人じやない、つて言つてゐのに聞きやしない』

「……うひやあ」

学長先生、必死でした。ちょっと追い詰めすぎたかもしません。わたしの株価、暴落しないといいのですけれど。

わたしはお金をポケットに入れ、事務員さんに何度も頭を下げて部屋を後にしました。校舎の外に出たところで、わたしは声を上げました。

「何の御用でしょうか？」

背後の彼が驚く『音』が聞こえました。彼は肩をすくめて言いました。

「俺もまだまだだな」

わたしは振り向き、笑ってみせました。

「足音の消し方はお上手でしたよ。気配の封じ方もまざまざでした。ただ、衣擦れがすべて台無しにしていました。次は薄着で頑張ってみてください。応援していますよ」

彼はカラカラと笑いました。先ほどの、給料クレクレ白髪の男性でした。

「いやー、かなわねえな。その年でそこまでとは」

「別に気にしていませんが、わたしはこれでも十七です」「うつそだろマジかよ！え、もしかしてそういう……」

「病気ではありません」

失礼なひとでした。

「それで、御用は何ですか？お金ならお貸しきませんよ。たとえお友達同士でも、お金の貸し借りはしません」

「金を貸してくれ」

「……わたしの話を聞いていましたか？」

「いや、キミは貸すぞ。金を貸してくれ。俺にはわかるんだ」
彼は不敵に笑いました。不思議と彼の音に嘘はありませんでした。どういう意味です、とわたしは聞きました。

しかして、彼は舞台役者のように大仰に腰を折つて名乗つたのでした。

「俺の名前はシチノミヤ・リンリ。この学校で異世界学を教える」となつてゐる。

飛行機が空を飛ぶ世界から来た人間だ」

強い風が吹きました。

どこか遠くで。

歯車の廻る、不愉快な音がしました。

金貨九枚は大金である、ということをわたしは声を大にして言いたいのですが、残念ながらそのような相手はいませんでした。怖いので、家族ぐらににしか言えないのですけれど。

オークションハウスに隣接する販取屋さん（パチンコ屋さんと換金所のような関係だそうです）で牙一本をお金にした我々『ひるまと愉快な仲間たち』は、その足でアカデミーへと向かいました。ここで、この国で使われている文字が多少崩れではいるものの平仮名と片仮名であることを知りました。いまさら驚きはありませんでした。この国の国号が『スズカゼ王国』で、王の姓が『アキト・スズカゼ』であることを知ったときもさほど驚きませんでした。ただなんとなく、ああやつぱり、と納得しました。

半径一キロの声から得た情報によると、わたしたちの今いるこのバビという街は、発明や研究が文化・産業の中心的役割を果たしている街　　いわゆる学術都市なのだそうです。街に一つしか学校がなくてなにが学術都市か、などと日本に住んでいれば思うでしょうが、海外では意外とそんなものであつたりします。この世界でもそれは変わらないようでした。

情報が集まるのはアカデミー。情報が発信されるのもアカデミー。そのようなわけでわたしはこの街唯一の学校・王立第一碩学院へとやつて來たのでした。優れた技能を持つていれば教員や研究員として採用される、という情報は既に『耳にして』いました。予約が必要なようですが、そんなコネも時間もありません。わたしは街の中にいる野良犬の皆さん、野良猫の皆さん、野鳥の皆さんを片つ端から呼びまくつて曲芸をしていただきながらアカデミーへと向かいま

した。往く路では見物客の皆さんからたくさんの輪銭、銅貨、時には銀貨をいただきました。是非うちの店の宣伝をしてくれ、金は払うから、というお誘いが何件もありました。アカデミーの正門に到着するところには大行列が出来上がっていました。列の中には学生さんもいました。彼らはみな同じ制服を着ていました。

正門に着いたわたしは、門番さんに言いました。

「わたくし、獣と言葉を交わすことができるのですが、その技能をアカデミーを通じて国中に広めたいと考え、ここにこうして参りました」

門番さんは大慌てで校舎へと駆けておいでになりました。

それからはあっという間でした。学長さんのお部屋へと案内され、一人で校庭に出て、そこに大鷲を呼び、頭を撫でて即採用、という具合でした。その時点では正式な教員になるつもりでしたので、学長先生に校内を案内され、最後に職員寮へと向かいました。そこで運命の声が聞こえました。わたしの耳に、『王子』という単語が飛び込んで来たのです。

「王子としてではなく、男として、一人で生きたいのだ」

「それは難しゅうござります、殿下」

「なぜ難しいのだ」

「一人で生きるにはお金稼がなくてはいけません。それに、争いごとに巻き込まれてもいいよう、強くなくてはなりません。殿下は剣が苦手でいらっしゃる」

学生寮の方でした。ここからは七百メートルほどの場所です。

「すぐに戻ります！」

わたしは駆け出しました。チビで運動音痴と言われるわたしですが、四十秒あれば百メートルを走れる女です（ちなみに弟は一秒を切ります）。わたしはヨシムネ君に乗つてすぐにその場所に着きました。そこはアカデミーの敷地内にある大きなお屋敷の庭でした。

赤髪赤目の中年がメイドさんらしき女性と土いじりをしていました。わたしは一人に近づき、声をかけました。

「すみません」

メイドさんの『畠』が警戒をあらわすリズムに変わりました。わたしはかまわず続けます。

「道に迷つてしまつたのですが、職員寮はどう存知でしょうか？」

メイドさんが訝しむ畠を向けてきます。わたしは「」とばかりに畠み掛けました。

「ああ、申し遅れました。わたくし、このアカデミーで動物語を教えることになりました、ナツノとこります。いやはや、広い学校で参ります」

「動物語！？なんだそれは」

思つた通り、赤髪の少年が食いついてきました。

「はい。動物語といつのは、言葉通り、動物の話す言葉のことです。わたしはどんな動物の言葉でも聞き取り、話すことができるのです」「少年はいよいよ目を輝かせました。反対にメイドさんは疑いの畠をわたしに向けてます。

「そんなことができるものですか。出鱈畠を言ひのはおよしなさい」わたしは大袈裟に手を広げました。

「出鱈目だなんてとんでもない！出鱈目で教師が務まるものですか。言葉で信じられないといつなり、その目で見てください」

わたしは小鳥さんたちを十五羽ほど呼び、航空ショーをしていただきました。メイドさんはあんぐりと口を開けて絶句し、少年は大はしゃぎでした。

「す「い、す「い、ビ「りしてそんなことができるのだ！こんなのは初めて見たぞ！」

「先生が良かつたのです。いつ覚え覚えれば簡単なこと。わたくしは一年で覚えました。わたくしのような非力な女でも、獣たちと言葉を交わすことができれば一人で生きてゆけます。芸を披露すればお金も稼げます。本当に先生には「くら感謝してもなりません」壊れた蛇口のようにドボドボ嘘を吐くわたしは酷い女でした。

「一年でそんなことができるようになるのか…？」

「一年というのはわたくしのよつたな出来損ないの話です。兄弟子は半年で鳥たちの言葉を覚え、一年で全ての獣と話せるようになります。それがふつうなのだと先生は仰いました

「その師は今どこにある…？」

「亡くなりました。山でキノコにあたって、笑い死にを…」
わたしは悲しげに俯きました。余計なことはしないほうが良かつたかもしれません。メイドさんが疑惑の目でわたしを見ていきました。わたしは調子に乗つたことを後悔しました。いつもこうです。わたしは黙黙な女です。

少年がトテトテとやつて来てわたしの肩を叩きました。

「それは、つらかったであろうな……」

ちよろいもんでした。わたしにかかれればこんなものです。幼稚園のこの夢であつた女優さんを再び目指すのも悪くはないかもしれません。わたしは某映画賞の助演女優賞を受賞した際のコメントを考えないようにするのに苦労しました。主演でないあたりにわたしという人間の謙虚さがよくあらわれていますが、今はそうではありません。王子様籠絡に集中しなくてはならないのです。

わたしは女優の卵の演技力を大盤振る舞いして言いました。

「兄弟子も川で洗濯中に流されて溺死。今となつては動物語を解する人間はこの世にわたくし一人となつてしましました。そろそろ弟子をとらねばと思っていたところにこのアカデミーを見つけたのです。　ああ、優しかった兄弟子を思つと……」

「ヨヨヨ？」

一人が首をかしげました。わたしは夢から覚めました。わたしの演技力などこんなものなのです。大根役者どころかひょろひょろのカイワレ大根役者なのです。なにがヨヨヨでしょうか。なにが助演女優賞でしょうか。馬鹿じやないでしょうか。

「ともあれ、これでわたしが獣たちと話せるることは信じていただけ

ましたね？」

「ヨヨヨッて…………あ、うむー信じるぞ！」

「では、そろそろ職員寮の場所を教えていただいてもよろしいでしょうか？」 空き部屋があればよいのですが

「むつ？そなた、まだ部屋を借りていののか？」

「そうなのです。なにしろこの街にやつて来たのが今日ですから、宿の場所さえわからず。」これで寮を借りられないとなれば野宿をするよりほかありません」

少年が、花が咲いたようにぱあっと笑顔になりました。

「ならば、ここに住めばよい！」

「でん　　坊っちゃん！　いけません！」

「よい！我が許すぞ、ここに住むがよい！弟子をとりたいと言つたな？ならばその動物語とやら、我に教えてくれ！我を弟子にするがよいぞ！」

こうして狙い通り、わたしは権力者の身内になつたのであります。メイドさんはしきりに反対を唱えましたが、少年は頑として譲りませんでした。

「なに、学長を待たせていいる？よい。そんなものはこちうで何とでもする。　誰ぞある！誰ぞ、急ぎ学長に伝えよ。ナツノ教諭は今日より我が家に住むとな！」

翌朝わたしは一番に学長室に向かい、事情を説明しました。学長先生は渋い顔をしましたが反対はしませんでした。昨日の夜、わたしにあてがわれた二階の部屋から一階で使用人さんたちがこそそそ話す声を聞いて、王子様の置かれている状況は知っていました。なんでも、この国の王様が随分な傑物だそうで、王子様と姉姫に偽名を与えてそれぞれ別のアカデミーに放り込んだのだそうです。一人はバビとジソのアカデミーに、それぞれ来月から編入するそうでした。そんな事情をアカデミーのトップが知らないはずはありません。バビは領主のいない都市です。王の直轄領ですから王が領主とい

えばそのとおりですが、実際的にはアカデミーの学長が、王の代理として領主のような仕事（のような、とこゝとこゝが重要。政治的な理由です。）も兼任しています。つまりアカデミーの学長という職は領主代行とセットなのです。王様が一声「ここつだめだ」と言えば領主代行だけでなく学長の座も追われてしまうのです。そんな彼が王子様のお言葉に反対できようはずがありませんでした。

わたしは学長先生に弟を探してくる血を伝えました。彼はなにか聞いたら伝える、と社交辞令をくださいました。あとはわたしが結果を出すだけです。わたしは彼に、剣術練習場の隅をお貸しいただけるようにお願いしました。

「動物語は年齢や経験に関係なく学ぶ」とのできるものです。一度だけでかまいませんので、どうか『自由聽講』として講義をさせていただけないでしょうか？」

そうしてわたしは結果を出しました。

動物と話せる黒髪の魔女の話は学校中を駆けまわり、貴族さまたちから多くのお誘いがわたしのもとへ届きました。中にはアカデミーへの寄付と引き替えに、とこゝお話もありました。

今や学長先生はわたしの手足となつて弟を探してくれるようになりました。

わたしの弟探しは極めて順調でした。

「先生、また明日も宜しくお願ひします！」

「先生、非常勤じゃなく本当の先生になつてください。もつと授業うけたいです」

「先生、あしたも同じ時間ですかね？明日は狼について話してくださいるんですね？」

「ナツノ君、ウシ語についてなんだが」「ナツノ君、おとなの大鷲について」

授業が終わると、わたしはすぐにお座敷へと向かいました。そして荷物を置き、アカデミーの外へと向かいました。ツバメさんは昨日の夜の内に、今日のお勉強を中止する旨を伝えてあります。「弟の手掛けりが掴めるかもしれないのです」

「彼はならば仕方がないな、と言つて笑いました。

「我も、たまには勉強を休みたいと思つて笑いました」

嘘の音でした。健気な子でした。

十歳という幼さで、彼は既に嘘の微笑みを完璧に近いカタチで身につけていたのでした。

途中、遠くから学長先生に声をかけられましたが、聞こえなかつたふりをしました。アカデミーの敷地を出ると、わたしは指定されたお店へと最短距離で（もちろん弟ではないので道を歩きましたが）向きました。小さなお店でした。店のドアには小さな木札が貼られていました。。

『ふるどいぐ／リンリ』

わたしはドアを押して中に入りました。

店の中は十畳ほどの、ほぼ何もない空間でした。家具も調度も何もありません。絨毯もなければすのこもありません。そもそも床がありません。床は土です。店全体が字面通りの意味で土間でした。その真ん中に、電気ケトルとアイフォンが置かれています。

なぜ、電気ケトル？なぜアイフォン？

「 よう。待たせたか？」

背後から声がかかりました。わたしは「いいえ」と答えました。

「 いましたところです」

アカデミーの敷地内からずつと、彼がわたしの後をつけていたこ

とは知つていました。わたしは振り返りました。そこには白髪の青年、七乃富躰裏氏しじかのむやが立っています。彼はわたしの背中と『』の隙間からタイミングよくするつと中に入ったのでした。

きのう、彼にお金を貸したあと、わたしはすぐさまこの世界のことを彼に問い合わせました。そのときに彼の名前の漢字も聞きましたが、それは正直なところどうでもいいことでした。珍しい名前だな、と思つたぐらいのものです。

彼はこの世界を遠い昔のどこかだ、と言いました。場所はわからないけれど、過去だと。

「俺はこの世界に、ある人に会つためにやつて來た」

元の世界の元の時代にはその人はもう生きていなくて、それでも会つ必要ができたので飛んできたのだ、と彼は言いました。

「それは、どうやつて？」

「どうつて、そんなもん、魔法に決まつてるだろ」
聞きたいことはたくさんありましたが、わたしはその中で最も重要なことをはじめに聞きました。

「あなたの魔法で、元の世界へ帰ることはできますか？」

「言えない」と彼は答えました。「今は言えない」

食い下がりましたが、彼は首を横に振るだけでした。

「言いたくないわけじゃない。時間を渡り歩くような魔法には色々な手順や縛りがあるんだ。今、この時間、この場所は、それを言うタイミングじゃないんだ」

明日、ある場所でなら言える、と彼は言いました。わたしたちは明日の約束をして別れました。

「さあ、もう今日ですよ。指定された場所です。話してください」
わたしは躰裏氏に詰め寄りました。

「わたしは元の世界に、帰れるのですか？帰れないのですか？」

彼は溜め息をつき、その前に、と言つて電気ケトルを指さしまし

た。

「こいつに見覚えはあるか？」

「電気ケトルですが……それがどうかしたんですか？」

「その横のは？」

「アイフォン、ですよね？」

「じゃあ

彼はそう言つと、ポケットから奇妙な物を取り出しました。

「これは？」

それは奇妙としか言いようのない物でした。

形は立方体で、大きさは一般的なルービックキューブよりちょっと小さいくらい。色は銀色です。ただ、躰裏氏の手のひらで、それはいやにグニョグニョ揺れているのです。彼はわたしにそれを放りました。わたしは咄嗟に避けてしまいました。それは地面上に落ちました。

『ごつ、という予想と異なる音がしました。てつきりベチャつと潰れるものと思つていましたが、落ちた音は硬質でした。わたしはそれを拾いました。グニョグニョなどしていませんでした。それは？と躰裏氏は言いました。聞きたいのわたしの方でした。

「これは、なんですか？」

「いや」

彼はぱつとわたしの手から立方体を取り返し、コートのポケットにしまいました。

「わからないならいい。教えると、いろいろ『バグる』

「どういう意味ですか？」

「俺とキミは、同じ世界の違う時代から来たつてことだ」

わたしはゴクリと唾を飲み込みました。

「それは、わたしにとつて未来の道具なのですか？」

「そうだ。そしてどうやら、俺はキミにとつて未来の人間らしい」

その後、躰裏氏はこの世界と元の世界の繋がりについて、彼の知

ることを語りました。

彼の生きていた時代にはある『化け物』がいました。それは人間なのですが、人間とは思えない不思議な力を持つていました。そういう不思議な力を持つ人間がその時代にはいました。もちろん表の世界には出てきませんでしたが、確かにいたのです。化け物はその中でも特に不思議な力を持つていました。

「不思議と言つても、魔法の類じやない。魔法には魔法のルールがある。条件を満たして、代償を支払わなくちゃ魔法は魔法にならんいんだ。だけど奴の 奴らの力には代償が無かつた。何も無いとこれから火を出したり、術も唱えず体を紐状にほどいたりするんだ。その中でも特に不思議な、原理のまったくわからない力を持つた連中を、俺たちはカミヤドリつて呼んでた」

躊躇氏のいた未来には魔法を研究する人たちの組織がいくつもあつたと言います。もちろんそれらは秘密の組織で、表向きはパチンコチューインだつたり、おもちゃ会社だつたり、携帯電話会社だつたり、アフリカの子どもたちを支援するという名目で設立された財団であつたりしたそうです。いくつもある魔法研究の組織は化け物を恐れました。

「別にそいつがなにか悪事をはたらいたってわけじゃない。基本的には、身内に害がない限り部屋から一歩もでないような安全な奴だつたらしい。ただ、そいつは自分の『島』に仲間を集めていたんだ。何万人も、何十万人も。その全員が、小さいとはいえ『不思議な力』を持つてるんだぜ? 何もしなくてもおつかないさ」

たくさんの組織が化け物の『島』に監視役を送り込みました。化け物はそれを拒みませんでした。ただ化け物はすべての組織に対し、次のように言つたそうです。

「ただし干渉はするな。こちらもおまえたちに干渉しない」

島はいたつて平和な小世界でした。政治があり、経済があり、道徳がありました。島民たちが化け物を神として崇めている以外は極めて『まとも』な環境でした。神云々にしても、化け物は宗教的戒

律を定めるわけでもなく、島の人々の前に姿を現すこともありません。島民が勝手に宗教をつくり、信仰の向かう先を化け物に定めただけの話でした。そこに神はいません。キリストやイスラムよりよほど健全な経済活動でした。

あるとき、島にいた、ある組織の監視役が問題行動を起こしました。島民に対するヤクザまがいのみかじめ要求です。自分たちがきちんと報告してやっているからこの島は平和でいられるのだ。それが彼の主張でした。翌日、彼は地球の裏側で発見されました。彼は魔法に関することを何も覚えておらず、もちろん組織や化け物のことも覚えていませんでした。彼はダミー企業の、カムフラージュで用意された役職の仕事内容をスラスラ答えました。脅されている様子はなく、薬物をつかつて自白を強要してもそれ以上のことは語りませんでした。「あんたたち、誰だ? バカンス中なんだ、ほつといてくれよ」。彼はそう語りました。

これに対し彼の組織は抗議しました。彼らは化け物に対し、情報の開示を要求しました。翌日、組織はただの大手自動車保険に戻っていました。組織の誰一人として魔法に関するふとを覚えていませんでした。「ご新規の契約をご検討ですか? それとも、コース変更でしょうか?」。そう語るかつてのトップを見て、他の組織はいよいよ恐れをなしました。化け物は時間を操り、人の歴史を変えてくる、と。

彼らがそのことについて組織間の垣根を取り払った合議を始めたその瞬間、化け物の島は忽然と地球から姿を消しました。

「信じられるか? 島が一つ消えたってのに、ニュースにもならなかつたんだぜ? 誰も気付いてないんだ、島が消えたことに。覚えてないんだ、そこに島があつたことを。組織の奴らでさえな!」

化け物や魔法のことを覚えていたのは、組織に属さない一匹狼たちだけでした。躡裏氏の魔法の先生もそうであつたといいます。彼はある日、躡裏氏を一人残し、妻と一緒に消えました。前日、彼は躡裏氏にダイヤの指輪を渡していました。「私を奴を追う。奴の向

かう先は知れている。先回りして驚かせてやろうと思つ」 彼は

楽しそう笑つてそう言いました。『もしもおまえが私を追つてくる

なら、その指輪が役に立つだろ』

「師匠と化け物は親友同士だったらしい。師匠の日記を読んで知つたよ」

そうして躊躇氏は先生の日記やレポートをもとにして魔法を作り出しにこの世界へやつて來たのでした。

「指輪は座標だつたんだ。まったく同じものを師匠の奥さんがしてゐる。それを探るためのものだつたんだ」

ひととおり話し終えると、躊躇氏は電気ケトルを持ち上げて、その取つ手をわたしに見せました。

『ばらぐみ・ふるやわどる』

そこには可愛らしいシールが貼られていました。

「可愛いじやありませんか。子どもつて、どんなところにもシールやテープを貼つてしまいりますよね」

「古谷サトルは最初に潰された組織の研究員の名前だ」

わたしは絶句しました。

次に彼はアイフォンの電源を入れてわたしに画面を向けました。電池が残っているのも驚きですが、さらに驚いたのは次に彼の放つた言葉でした。

「IJの電話帳、『会社』フォルダにある名前が 全部、潰された組織の名簿と一致するんだ」

彼は眉間に皺を寄せて無理やりに笑いました。

「たぶん、この世界には、化け物が時間を操つて人々の歴史を改竄するつえで、不都合だつたものが送られてきているんだ。時間を扱う魔法には縛りが多い。化け物のそれが魔法だつたかどうかは別にして、俺たちにわからないルールや縛りみたいなものがあつたんだろ。俺がこの世界で見た元の世界の物は、どれも子供の頃から大切に使つていた雰囲気のあるものとか、習慣で肌身離さず持つてい

るようなものだった。もしかしたら、記憶とか、心とか言われる曖昧な要素が関与しているのかも知れない」

話は本題に入ります。私はずっと我慢していました。「あなたは、元の時代とこの時代を自由に行き来できることを何年も代償にして、それでようやく可能なパチモンだ。しかも、それだけのことをして到着座標が一年もずれてやがった」
「寿命二十年って……それ、ちょっと奮発しそぎじゃないでしょ」

か。

「それじゃあ、どうやって元の時代へ？」

「別に、俺は戻るつもりなんてねえよ」

「脳みそを強くかき混ぜられたような気分になりました。

「それでは、戻る方法はないですか？」

「そりがつかりするなよ。言つたらうへ、俺の魔法はパチモンなんだ。オリジナルを頼ればいい

「オリジナルの魔法を扱う人 そうか、あなたの先生がこの世界にいるんですね？」

「こらはすだ。けど、時間がずれちまたから、師匠にはそう簡単には会えないだろう。そうなると、半年後にこの世界を訪れる化け物に頼むしかない

「半年? ずれたのは一年じゃありませんでしたか?」

「俺はもう半年この世界で暮らしてる」

「それは、なんというか、ご愁傷さまで……」

「……まあ、何にせよ、化け物は師匠と同じか、似たような魔法を使えるはずだ。帰りたかつたらそいつに頼むんだな

「その化け物というのは実際には、どんな人ですか? つまり、名前とか容姿とか」

「黒い 悪夢のように黒い姿をした子ビモラシー」

彼は言いました。

「 鈴風秋斗。

それが、時を操る独裁者の名前だ」

躰裏氏と別れ、のろのろとした足取りでお屋敷へ向かいながら、わたしは祖父のことを考えていました。

おじいちゃん。あなたはいったい何者なの？

あなたがわたしを、ここへ呼んだの？

あなたは、何を願つて仲間を集めたの？

考えても答えが出ないことは知っているのに、考えずにはいられませんでした。

『ふるどうぐ／リンリ』を出る間際、わたしは躰裏氏に聞きました。なぜわたしに声をかけたのかと。彼は戸惑いの音を混ぜて答えました。

「自分でもよくわからない。たぶん、この半年、俺は寂しかったんだと思う。……そういうことにしどく」

弟に似ているような気がしました。真っ直ぐなところと、臆病なところが。

アカデミーの敷地に入つてすぐに、わたしは変事に気付きました。どうどう来たか、とわたしは思いました。

夕焼けの道をわたしはお屋敷に向かつて歩きました。

お屋敷の灯りは全て消えていました。

庭にはそれぞれらばらの位置で十人の男性が倒れていきました。お屋敷の周囲とわたしの監視をしていた方々です。

そして、刃物を持った25人の男性が、メイド服姿の女性と赤髪の少年を囲んでいました。

そこから少し離れたところで、一人の男性が腕を組んで笑っていました。

ました。

それ以外には誰もいません。ここに来るまでの道でも、わたしは誰ともすれ違いました。

ああ。危惧した通りの展開になってしまった。

わたしは彼らからかわづじて見えるであらわ位置に踏み込みました。
「こんばんは」わたしは言いました。「もうすぐ夜ですね」
庭にいる、意識のある全員がこちらを振り向きました。
離れた位置で腕を組んでいた男性が、驚愕に顔を歪めました。
わたしはかまわざお屋敷の庭へと入り、彼に向かつて笑いかけました。

「挨拶にはお返事をくださいな
学長先生」

がつじぐまへひぬまひにじゆくわざわづか

お屋敷の庭をずんたか歩きながら、わたしは「」の場をわたしなりに収めることを決めていました。

正直に言えば、面倒です。

別段メリットもありません。今のところ、このお屋敷よりも学長先生とその権力の方が役に立っています。

それでもわたしは、やる気でした。ここで逃げてしまつたら、今後一度と弟を直視できなくなるような気がしたのです。

あれでよぞらは、救いを『』えない強者を嫌うからなあ……。

「ヒルマ、逃げろ！ 来るな！」

ツバメさん ノギオム王子が叫びました。

わたしは薄く笑いました。

一番上の子だからでしょ？ 幼い頃から、どいつもわたしはアマノジャクなところがありました。

助けると言われると、助ける気が起きません。

助けるなと言われると、意地でも助けたくなつてしまこます。

「ああ 本当に」

自分が死にそうなときに、逃げろ、だなんて。

ちゃんと、男の子してゐじやありませんか。

「可愛いなあ、もつ」

ほんとうに。小さな頃のよぞらみたい。

「ヒルマー逃げろ、早く逃げろ！ そなたは関係ない！」

リロさんに対するながら、絶体絶命のくせにノギオム王子は叫びます。わたしは答えず、軽い足取りで学長先生の前まで歩きました。そしてにこりと彼に笑いかけます。

「学長先生、弟は見つかりましたか？」

学長先生の音に恐怖が混じるのがわかりました。すぐ側には剣を構えた屈強な男が二十人以上もいるというのに、なぜ今、この女はそんなことを聞くのか？ そんな顔、そんな音をしていました。目は完全に、異常なものを見るそれでした。

「ああ……いや、まだだ。まだ、連絡は無い」

学長先生は一步退きました。わたしはその一步を、すぐに詰めます。

「そうですか。でも、もういいです」

「どういう意味だ。私は」

「もう。いいのです。今までありがとうございました」

「何を言っている？ ナツノ君。そもそも、ビリレキナ!! がここにいるんだ？ 結界は……」

結界？

ああ。学生寮の側を通る時に聞こえた、あの不愉快な音ですか。

わたしはくすくすとわらいました。

「なにがおかしい」

学長先生が言います。わたしはなおも笑い続けました。

あの程度の音で、わたしの行く手を阻むことができると考えた、彼の愚かしさがおかしくて。

王子とリロさんを囮む男の一人が、ザリと音を立てて一步内側に踏み込みました。リロさんが牽制に槍を振り回し、それを遠ざけます。一進一退とは既に言えません。輪は限界まで小さく縮んでいます。誰か一人が犠牲になる覚悟を決めれば、剣はすぐにも王子に届くでしょう。わたしは溜息をつきました。

「執事さん いえ、騎士さんは出掛けていらっしゃるのですね。リロさん、助けが必要ですか？」

場がざわめきました。

リロさんは敵に集中していて目をこぢらに向かせん。なぜ自分

の本名を知っているのか。なぜ自分を助けるのか。そんな間がありました。やがて、彼女は小さな声で言いました。

「……頼む。殿下だけでも」

わたしは学長先生に向き直り、笑みを深めました。

「学長先生。そういうわけで、今からわたし、あなたの敵です。やっぱり悪人の下では動けません」

卷之三

学長先生が言い終えるより先に、わたしは口を開きました。

ガツン
、と。

学長先生が自分の顔を全力で殴って倒れました

わたしの口から音は出でいません
「ぐなくとモノ聞か音と感し
る音は、出でいません。

男たち 今やわたしの敵となつた彼らの体から、驚きの『音』
が聞こえきました。それは心臓の音であり、呼吸の音であり、発
汗の音であり、瞳孔の開く音でもありました。

今何を

ざわめきが広がります。

敵さんたちの内二人が声を発します。それを見逃すリロさんではありませんでした。槍を突き刺し、二名の敵さんを行動不能にしました。見事なものです。一流と言つていいでしょう。弟やわたしのような『化け物』が相手でさえなければ、一対一ではまず負けないのではないか。

学長先生は氣を失つていました。自分で自分を殴つて氣を失うなんて、おかしな人です。わたしはくすくす笑いました。

一次はあなたたち、いってみましょうか」

わたしは敵さんたちの内二人に向かつてテクテク歩きます。恐慌

をきたしたように、三人はリロさんに背を向けてわたしに向かつてきました。一人が素早くわたしに斬りかかります。彼の剣がわたしに迫ります。　ああ、でも、少しだけ、速度が足りない……。

「勇敢なひと」

咳いて、わたしは再び大きく口を開きました。

ザクリと音がしました。私の顔に血しぶきがかかります。私を斬りとした男性は、自分で自分の胸に剣を突き刺して口をパクパクさせしていました。彼は小さく口を動かします。声にならない声を、それでもわたしの聴覚は聞き取りました。

『なにがおこつた?』　彼はそういうて絶命なさいました。

残る二人がわたしに迫ります。わたしはみたび口を開きました。彼らにわたしの叫びは聞こえません。突然ふたりは互いの首に向かって剣を突き刺しました。頸動脈をすっぱりいかれたお二人は、どちらも三歩ほど素敵なステップを踏んでお倒れになりました。

いよいよこの場の全員がわたしに目を向けました。敵視です。彼らの音は語ります。あの小さい女こそが最大の敵だと。わたしは彼らに向けて、ためらうことなく一步一歩と進んでいきます。彼らもまた一步、二歩とさがりました。その隙に、リロさんは王子の手をひいて彼らの輪から抜け出すことに成功しました。彼らにとつては逃げられたかたちです。だというのに、敵さんたちは誰もリロさんを　いえ、殺害目標であるノギオム王子を追いません。

一団のリーダーさんらしき男性がようやく口を開きました。

「貴様、何者だ」

わたしも口を開きました。そして彼らには聞こえない叫びを放ちました。

「ゲガツ」

夏の田圃道で車が大きなカエルを踏んでしまったときの、あの声を出して、リーダーさん（仮）は絶命しました。　首には自分の剣が刺さっていました。

「反射運動つて、『ご存知でしょうか?』」

わたしはトロトロ歩きます。敵たちがわたしを囲みました。

ひいふうみい……全部で19人ですね。わたしはかまわず続けます。離れた位置で、リロさんとノギオム王子が目を大きく開いてわたしを見ていきました。

「反射運動というのは、動物が特定の刺激に反応して意識せずに動く、その動きのことを言つのです。ツバメさんにはお教えしましたよね？」

ノギオム王子は口を開いたり閉じたりしたあと、やがて決心したように言いました。

「膝を叩くと、あしがぴょんと跳ね上がる あれのことだな」
わたしは「正解です」と言つて笑いました。敵たちがジリ、とすり足でわたしに近寄ります。

「反射運動には、体性反射と内臓反射があります。難しい話を省いて言つと、骨を動かすための筋肉を収縮させるものと、内臓を収縮させるものです。これは、わたしの世界の医学でも全てが解明されているわけではありません」

「ヒルマの、世界？」

王子が呟きました。

「人間や動物に限らず、あらゆる物には固有の振動数というものがあります。これは、単位時間にそのものがふるえる回数だと思ってください。その振動数で揺すられるとその物は強く反応して激しく揺れます。固有振動数からずれた力を加えてもあまり反応しません。たとえば、自然に振らせたときにつで1往復する振り子の場合、2秒に1回の速さで押せば揺れはどんどん大きくなります。1秒に3回の速さで押してもあまり揺れてはくれません。このように、すべてのものには苦手な『揺れ』があるのです。これは人間にも適用される理屈です。たとえばこのように」

わたしは一人の敵さんに向かつて『叫び』を発しました。彼はビクンと痙攣し、『反射運動のよつな速い動き』で頸動脈を切つて自害しました。血が舞いしぶき、敵たちが一斉に剣を構えました。

わたしは説明を続けます。

「 その人間の各部の固有振動数を正確に把握し、構造を完全に理解し、反射運動を知り尽くし、それを引き起こすような『揺れ』を加えてやれば、 それだけでほら。こうして手を触れることがなく人殺しをすることも可能なのです」

わたしは敵さんたちに近づいてゆきます。彼らは今や耐震を無視して作つたビル模型のようになれていました。わたしは彼らに言いました。

「 体を動かしたら殺します。嘘をついたら殺します。正直な発言と呼吸だけを許可します。さあ、わたしの質問に答えなさい」

こうしてわたしは彼らの口から、今回の事件のあらましを聞くことに成功しました。殆どは既に知つていていたが、重要な情報もいくつありました。途中、耐え切れずに襲いかかってきた一名と虚偽の発言をした二名が自死するというアクシデントはありましたが、それ以外は順調に進みました。

暗殺者の皆さん、今日の決行は決まつていた、としました。ノギオム王子を暗殺するにあたり、壁となつて立ちはだかる問題は四つありました。

一つ目はリロさんと騎士さんです。彼らはかつて凄腕の殺し屋であつたそうです。これはわたしも知りませんでした。リロさんと騎士さんのどちらか一方ならばともかく、二人が揃つていては、一人が王子を守つてもう一人が自由に動く、ということができます。これが最大の問題でした。どちらかを王子から離す必要がありました。二つ目はアカデミーの人の多さです。これは解決できない問題ではありませんでした。学長の権限で、学生寮の大規模清掃などと偽つて、王子のお屋敷から離れた建物に移動させてしまえばいいのです。アカデミーには使われていない建物や部屋がたくさんあります。一日ぐらいでしたら、学生たちはお泊り気分で従うであろう、と思われました。そして実際そうなりました。その後は結界を張つてしまえば誰も入れません。結界というのは魔法がどうこうと言つてい

ましたが、これはあとで基礎魔法学の先生から聞こうと思います。三つ目は影から王子を警護する十名のシノビ（の人たち、シノビというそうです）です。これは、お屋敷の周辺で小さな問題を起こし、出向いたシノビを各個撃破する手筈になつていきました。そしてそれは成功しました。

四つ目はわたしでした。今回の王子暗殺の依頼主は学長先生でしたが、彼にも依頼主がいました。その依頼主は王都におり、暗殺を成功させたのち、学長先生は王都に向かうことになつていきました。その際、彼は『動物を自在に操る娘』を依頼主への土産にするつもりでした。そのためには、わたしに暗殺の現場を見せるわけにはいきません。本来の予定では、今日、わたしは学長に呼び出されるとになつていたそうです。

決行の日、学長先生は王様への手紙を騎士さんに持たせました。『非常事態だ。何者かが国王陛下のお命を狙っている。すぐに伝えてほしい』

騎士さんはノギオム王子の護衛でしたが、直接に剣を捧げた主人は王様でした。彼は疑うことなく王都に向きました。

次に学長先生はわたしに声をかけました。ところがわたしは七乃富躉裏氏と会うために急いでいたので、聞こえないふりをしてアカデミーを出て行つてしましました。計画は変更されました。これは些細な事であるはずでした。すぐに結界を張つてしまえば、戻つてきても学生寮を越えられないのですから。

そうしておよそ計画通りと言つてよい流れで暗殺までの道程は進みました。シノビの皆さんも街の浮浪者さんなどを使って各個撃破することができました。

しかし、全てがうまくいくように思われたとき、わたしが現れました。

そして、全ては台無じにされたのでした。

「ぐ……うう……」

学長先生は三度目のビンタで目を覚ました。

「具合はいかがですか、学長先生？いかがであつても口を割つていただきますが」

わたしの横でリロさんがビクツとふるえ、ノギオム王子を背に隠しました。それを見てわたしは苦笑します。怖がられたものでした。「学長先生。あなたの雇い主は誰ですか？あなたに王子を殺すよう命じたのはどこのどなたですか？」

学長先生はウツ、と唸つて体を起こしました。そして、周囲に田をやり、絶句されました。彼の周りには24人分の死体が横たわっていました。わたしは二コリと笑い、手を広げてお見せしました。

「暗殺者の方々でしたら、一人を除いて皆さん自死なさいましたよ？」

実行犯の証人なんて、一人いれば充分ですものね？」

生きている一人はリロさんが縛つて転がしてあります。

学長先生は「殺さないでくれ、殺さないでくれ」と繰り返しながら何度も頭を下げました。

「殺しませんよ。殺しませんので、全て話してください」

学長先生は、今度は許してくれを繰り返しました。埒が明かない有り様でした。リロさんがスカートの中からナイフを取り出して（はしたない！）わたしに言いました。

「尋問ならあたしの領分だ。あたしがやる」

わたしは手を掴んで彼女を制しました。「あたしが始めたことですから」

学長先生は助かった、という顔をなさいました。わたしならばリロさんのように暴力で解決するようなことはない、と思つたのでしょう。わたしはリロさんに振り返りました。

「リロさん、学長先生の両手を抑えてください」「かまわないけど」

リロさんは学長先生の後ろに周り、彼の両腕を捻り上げ、地面にうつぶせに倒しました。学長先生はグツ、とひとつ声を上げましたが、我慢したようでした。ノギオム王子がわたしの袖を引っ張りま

す。

「ヒルマ、なにをするのだ？」

「私が怖いですか、王子様？」

「アーマは我々が死んでしまったんだ！」

悲しげな声でした。わたし

学長先生に向きました。

「 穏便に聞くのは最後です。学長先生、あなたの依頼主は誰ですか

17

学長先生は、言えない、と言いました。

わたしは溜息をつきました。それは深い溜息でした。

「それじゃあ、仕方ありませんね」

わたしは、学長先生の頬に鼻がくつつくほど顔を近づけ

「死ぬほど苦しみなさい」

聞こえない叫びを発しました。

わたしはすぐに王子の手をひいて彼から離れました。

学長先生の瞳孔がみるみる小さくなつていきました。

がぼろぼろあふれ、
鼻からは透明な液がだらだらこぼれました。ビ

クッ、ビクッ、と脚に力口をやを載せた学長先生が座撃します。

やがて、彼は絶叫しました。

! !

千匹の蠍で満たした水槽に落とされたかのような絶叫でした。

彼は何度も何度も頭を地面に叩きつけて叫びました。あまりの暴
れようにより口さんが背中から落とされ、慌てて距離を取りました。

それにも気付かない様子で、学長先生は両目を抑えて地面を転がり続けました。

「な、ななな、なにをしたのあんた！ こんなの、見たことない！ どんなクスリを使ったのつ！」

リロさんがわたしを掴んで叫びます。ノギオム王子はわたしの腕を抱いてガタガタ震えています。わたしは答えず、学長先生に近づきました。

「眼の奥が痛いですか？ 死ぬほどに痛いですか？」 それが群発頭痛の苦しみです

群発頭痛

それは、未だに人類の医学が原因も治療法も解明できていない『痛み』の一つです。目の裏側を通る血管が拡張し炎症を引き起こすため、目の奥に地獄のような激痛が走ります。群発頭痛による痛みは出産のそれよりもなお痛いとされ、心筋梗塞、尿路結石と並び、人間が生きているうちに味わえる三大の痛みの一つとされています。目玉をギザギザのスプーンでえぐられるような痛みに耐えかねて自ら命を絶つ者が年間何人もいるため、「自殺頭痛」の別名でも呼ばれています。

わたしは これの発生するメカニズムを『音』によるアプローチから既に解説していました。

「痛い、痛い痛い痛い、痛い痛い、痛い助けてくれ助けてやめていたい死にたくない痛い痛い燃える焼ける痛い死ぬ死ぬ死ぬやめて痛いあああ！」

学長先生は目を何度も何度もこすりながら叫びます。しまいには胃の中のものを吐瀉し、顔はよだれと涙と鼻水とゲーで酷いことになっていました。

「ま、こんなものでしうかね」、

わたしは転がり続ける彼に『叫び』をぶつけ、痛みをとめてやりました。

先ほどまでの暴れようが嘘だつたかのように、学長先生はピタリと動きを止めました。一瞬、死んだか？とも思いましたが、すぐにゲホゲホと咳をし、ゼエゼエと荒い呼吸をはじめました。わたしは彼の頭を爪先でツン、とつつきました。

「話す気になりましたか、学長先生？これ以上は気が咎めるのですが」

次はもつと酷いぞ、と言外に告げます。もちろんそんなことは不可能です。これ以上の痛みをわたしは知りません。しかして学長先生は言ったのでした。

「……言つ。……全部話すから、もうやめて」

いひして、王立第一碩学院学長による、スズカゼ王国第一王子ノギオム・アキト・スズカゼ暗殺未遂事件は幕を閉じたのでありました。

ある騎士の独白

事件はおおむねの解決をみたといつてよい。

私は己の未熟を恥じる。あんな などに騙され、王子殿下を危険に晒したのだ。あの が卑劣かつ用意周到であつたことを言い訳にはできない。敵が卑怯だから勝てませんでした、では騎士は務まらない。全ては私の未熟が招いた結果である。汚名をそそぐべく、今後はより一層厳しい鍛錬を己に課すつもりである。それにしてもあの は許せんが。

黒き魔女にはどんなに感謝してもしたたりない。たつた一人で二十以上の暗殺者をばつたばつたとなぎ倒し、王子殿下暗殺を阻止したのみならず、元学長リドレイを拷問し、悪の大元までもを暴いた功

績は陛下も高く評価しておられた。いずれ何らかの形で褒美が下るであろう。叙爵されても反対の声が上がらぬことは明白である。

リドレイに王子殿下暗殺をかけた人物は陛下の愛妾《青のルフォー》であった。なぜ彼女がそのような行動に出たか、理由は不明である。ルフォーと陛下の間にはお子が無いことであるし、女として思うところがあつたのである、とはリロの言である。

ルフォーはリドレイに取り引きを持ちかけた。彼女はリドレイに「王都で新しくアカデミーを作る計画がある。その終身的な学長の座を用意する」などと語つたらし。リドレイはすぐに飛びついたそうである。リドレイは、自分の立場がいつ奪われるとも知れないことには怯えていた。どうやら奴は財よりも色を好む性質であったようである。それも娼妓などではなく、男を知らぬ若い娘をだ。王立碩学院の学長という役職にはそれを自由にできるだけの力があつたといつことである。王都で終身学長の座を手にすれば怯えることなく未成熟な娘たちを抱ける、と考えたそうであつた。奴の手つきになつた少女たちのことを思つと胸が痛む。

今回の件のあとすぐに、碩学院入学に際して、王子殿下はその名を偽らぬものとして話がまとまつたそうである。理由は不明であり、頭の痛い話であるが、私は今度こそ私の職務を果たすつもりである。

気にかかるのは、王位などに興味は無いと仰つておられた殿下が、今やすんで『王になるための勉強』なるものをしていることである。リロ曰く、殿下は黒の魔女に誰よりも高い椅子を与えたいのだそうである。そのためならば王にさえなつてみせる、と。少年の時分の恋心とはこうも熱いものであるのかと私は大いに驚いた。どうでもよいがわたしはいつ初恋とやらをするのである。リロが睨んでいる。なぜであろうか。

参道の石段をあがると、昨夜の雨でできた水溜りが迎えた。俺はそれを飛び越え、ついでにそのまま庭も石狛も飛び越えて賽銭箱の前に着地した。そうして用意してきた五円玉を放れば今日の俺は文無しである。

「巫女、いるかあ」

ガラガラを引っ張つて拝殿に声をかける。見事に繩が切れた。慌てた俺は切れた繩を床下に押しやつて隠した。行動は迅速である。隠蔽を終えて溜息を一つ。背後から頭を殴られた。

「なにしてる、この罰当たり」

振り返ると、今代の『亜鎌』が竹箒を構えて立っていた。箒の柄には『亜鎌神社』と彫られており、『丁寧に振り仮名までふられて』いる。

あかまじんじや。

俺は頭を抑えて抗議した。

「せめて柄で殴れ。髪が葉っぱだらけになつたぞ、どうしてくれる

「黙れゆるふわ」

「ゆるふわ！？」

「性懲りも無くまた来たか。何度もこの神社を壊したら気が済むの。富大工がどれだけがめついか、あんた知つてんの？知らないでしょ。びっくりするような額、賠償させてやるんだから」

「ゆるふわ……いや、奴らは奴らで何年も修行して大工になつたんだ。自分の仕事に相応の対価を求めるのはなにも間違っちゃいないだろ。……金は払うが」

「第三者ならあたしだってそう言つたでしょ。でも駄目。あた

しは当事者なの。お金を出すのはあたしなの。あたしの財布からお金を持つてく奴はみんながめつく見えるのよ」
実に正直な女だった。

俺は本題を切り出した。

「ところで、今日は頼みがあつて来たんだ」「イヤよ。帰りなさい。あたしは忙しいの」「五百でどうだ。明日には用意できる」「さあ上がって。汚いところだけ。羊羹があるのよ、栗のやつ。食べるでしょ?」「本当に正直な女だった。

畳に腰をおろし、茶袱台を挟んで向かい合つ。ひといきに事情を話し終えた俺は薄い茶をすすつて息をついた。羊羹は巫女が一人で全部たべた。　ふむ、と巫女は言った。

「なるほどねえ。最近ひるまちゃんもよぞらの馬鹿も来ないと思つたら、そういうこと。ほんとう、あんたも薄情な男よね」「あれは決まつていたことだ。どうにもならなかつた」「それでもなんとかするのが親つてものでしょ?」「俺はもう、ずいぶん前にバターナイフを失くしてゐる」「あたしは今も箒を持つてゐるわ。知つてゐるでしょ?」「キミを犠牲にしろと/or>うのか」「あたしを犠牲にするべきだつたのよ」

亞鎌の巫女はカラリと笑つてそう言った。

「子どもと友人を測りにかける親がどこにいるの。あんた、あの子たちの父親なのよ?」

十五の少女に叱られる。

「そんなことはわかつてゐる」

俺は出涸らしを飲み干した。

わかつてゐるが、それでも、目の前のこの娘より、あの一人の方が生き残る確率があるようと思えたのだ。

「どうちもほしい、選べない。そんのは子どもの我が僕よ」
内心を見透かしたように巫女が言つ。わかつてゐ、と俺は繰り返した。わかつてなどいない。

ただ、そうすることしかできなかつたのだ。

ひるまとよぞらがこの街から　この世界から姿を消して、すでに一ヶ月が経過していた。行き先は知れている。かつて俺も行った場所だ。忘れられたもの、選ばれてしまつた者が無より招かれるそんな世界。その場所の名を口に出す者はいない。それは恐れではなく忘却から。その記憶の不在から。

向こう側に触れた者、行つて戻つてきた者はその全てを忘れてしまつのだ。

そこがどんな場所であったのか。誰と出会い、何を見て何を知つたのか。どんなことを思つたのか。　それら全てを忘れてしまう。

残るのは結果だけ。自分はその場所に行き、帰つたのだと。そんな記憶だけが残る。だからその世界のことを　『あちら側』のことを、こちらの人間は誰も知らない。

ひるまとよぞらがあちら側に招かれるとは知つていた。

十一年前のあの日、二人は虹を越え、白い海で『彼女』に会つたのだ。そうして選ばれた。正確には、呼ばれたのはひるまだけで、よぞらは無理やりついて行つた形だが、あれは自分の手で勝ち取つた。あちら側に招かれた者たちの共通点として、事前にあの海で彼女からなにかを貰つている、というものがあつた。

俺は子供の頃にバターナイフを。ひるまは十一年前に『おはじき』を。よぞらも、隠してはいたがその時になにかを貰つたはずだ。あの海で彼女からなにかを貰つた人間は、およそ十年後にあちら側へと呼ばれ、一年ほどして戻つた時には例外なく『不思議な力』を持つていた。この不思議な力を持つた人間は、ある大きな組織においては『カミヤドリ』などと呼ばれていた。そうした一連の流れは俺の知る全てのカミヤドリに共通していた。あえて言うなら目の前の

巫女だけが変わり種で、彼女は五年前、『彼女』から竹簾を貰つた二日後にあちら側へ呼ばれ、三日で戻つた。その際に持つていた力は、現在八人いるカミヤドリの中でも特に強力なものだった。

それじゃあ、と巫女は言った。

「頼みつていうのは、神主のことね？」

俺は頷いた。

「あの神秘主義者の爺さんが、どこにいるのか教えてほしい。キミなら知つているはずだ」

彼の特殊な『目』なら、二人の居場所 その正確な座標がわかるかもしれない。

巫女はウーン、と腕を組んで唸つた。

「無駄だと思うわよ？ あの人、もう人間として『閉じてる』から、人間の理屈じや動かないもの。痛みからも解き放たれて、生きることにも執着はないみたいだから、拷問したって気付いちやくれないわ」

「可能性はゼロじゃない」

「止めやしないけどね」

彼女は日めくりカレンダーを破り、その裏に目当ての老人が住む場所までの地図を描いてくれた。それは存外近場だった。我が家のはすぐ側 というか敷地内だ。はて、こんな場所に家などあつただろうか？

「まあ、いいか。これならすぐに行けるな」

「どこがよ。ここから車で一時間はかかるわよ」

「直線で走れば30分だ。今日もここまで25分で来たぞ」

「馬鹿が……。屋根の上をチーターみたいな速さで走つてるとこなんか見つかってみなさい。今度こそカミシロの宗家が動くわよ。ただでさえあんた目立つてるんだから」

走りでチーターごとに遅れはとらないが ともあれ。

「まあ、気を付けるよ。いまさら俺なんかにちょっかい出してくる奴はないと思うが」

「あのねえ。これまであんたに顔を潰された奴が何人いた？自分が恨まれてないとでも思つてるんじゃないでしょうか？もう引退してることは言え、連中、理由を手に入れたらそんな事情は無視して行動起こすわよ」

「気を付けるさ」

「どうかしらね」

巫女は少なくなつた湯のみに茶をつぎ足した。

「あ。茶柱」

「本当か！？ぐれつ！」

「子どもか！」

帰り際、巫女が紙袋を手渡してきた。

「これ、持つて行きなさい。もしまだ神主があたしを覚えていたら、役に立つかもしれない」

中には小さな木箱が入つていた。開くとエーデルワイスが流れた。オルゴールだ。

「いいのか？」

「あつても邪魔なだけだもの。今度はお饅頭の一つも持つて来なさいよ」

俺は礼を言つて境内をあとにした。

石段の手前まで歩いたところでふと思つた。俺は振り返り、巫女においと手を振つた。

「妻の一人が、漫画とかアニメとか、大好きなんだが！」

「それが、どうしたのよお！」

巫女も大声で返す。

「キミのような奴を、シンデレラといふらしい！」

巫女は一瞬きょとんとしたあと、ゲラゲラと笑い出した。

「あんたには、デレないわよ！」の、クソジジイ！」

家の山まで来たところで、見慣れたなきない背中が目に入る。不肖の弟子だつた。俺は気配を消して近づき、彼の頭をはたいた。

「げふろつファ！」

彼は失敗した竹とんぼのように不細工な飛びかたで地から足を離した。空飛ぶ彼の両肩をリフティングの要領で優しく蹴り（彼はボゴゲラ！ムゴフオ！と異国語を叫んだ）、頭から落ちないように調整してやる。結果、俺は彼を尻で着地させることに成功した。

しばらぐ尻を押さえて悶えた彼は、やがて立ち上がり、叫びながらひきしめを振り向いた。

「なにするんですか師匠！死ぬところだつた！」

「なんだ、振り返る前に俺だとわかつたのか。成長したな。もう卒業でいいんじやないか？手を出しなさい。これは我が流派に伝わる秘伝の武器で、自由自在に火を出すことができる。キミに授けよう。さあ、これで免許皆伝だ。どこへなりと行くがいい」

「田中ライターじゃないですか。しかもガス無いし。なんですかこのアハハ、どこで拾つたんですか。それから師匠に流派なんてないでしょ？何を言われても俺は修行をやめませんよ」

「ちつ」

「舌打ちされた！？」

「ジユルリ」

「舌なめずりまでされた！？」

「ところで、キミはまた懲りずにひるまに会つに来たのか？」

「あ、普通に話を続けるんですね」

「妹君にも何度も言つたが、あれとよからば今、旅行に出ていてもうしばらぐは帰らないぞ」

「しばらぐって、どれくらこですか」

「しばらぐはしばらぐだろ。正確なところは俺にもわからん

「そんなの、ただの家出じゃないですか！」

「うつとも言つな」

「そんな……」

彼はこぶしを強く握つて俯いた。実直な少年だつた。

咲坂シホウは娘のひるまに懸想している少年だ。未だに軽自動車一台も持ちあげられず、百メートルを走るのにはなんと9秒もかかる貧弱者だが、努力家ではあつた。「弟子にしてください」と門を叩かれたときには、また勘違いした馬鹿が死にに来たか、と思つたものだが、娘の反応を見て違うと氣付いた。

「あら? 咲坂君じゃありませんか。どうしたの、こんな時間に?」

「その、俺、夏野さんのことが、幼稚園のころからずつと大好きで」

「ええ、知つてゐるわ。でも、ちゃんとお断りしたはずでしょ?」

「わかつてゐ! だけどキミはこつも言つた。『弟に喧嘩で勝てないような人を好きにはなれない』つて。だから俺、鍛えてもらうために來たんだ。よぞら君に勝てる人間なんてキミのお父さんぐらいしか知らないから!」

「つまり、わたしをおとすために、わたしの父を頼るということ?」

「俺は、シホウさん、悪い人じやないとと思うから、負けてあげてもいいんだが」

「いいんだ、よぞら君。そんなのは実力じやない。俺は氣付いたんだ。結局のところ、暴力をその場でねじ伏せられるのは暴力だけなんだつて。何かあつたときにものをいうのは力なんだ。そのことに気付けたんだから、フラれてよかつたよ。これでゼロからスタートできるつてものだ。 お金は、毎月お小遣いを全部お渡します。働けるようになつたら、残りをちゃんと毎月払つていきます。だからおとうさん! どうか俺を鍛えてぐだブフォアツ!」

「誰がおとうさんだ」

それが二年前のことである。シホウは、凡人にしてはよく頑張つたほうだと思う。息子のよぞら以外で俺の修行から逃げなかつたのは彼だけだ。氣絶して干からびても水をかけるとすぐに起きるのが面白くて何度も追い詰めたものである。

俺はポン、とシホウの肩を叩いた。

「いづれ戻つてはくるんだ、そう落ち込むな。じゃあな。トレーニ

ングもほどほどにしろよ」

え、とシホウが顔を上げた。

「師匠、どこか行かれるんですか?」

「ちょっと用事があつてな。道場は好きに使つていいで。俺に虐められたいなら夜に来い」

「わかりました。夜に伺います。必ず、伺います」

本当に、頑張り屋な少年であった。

師匠の背を見送る。どうやら向かう先は、よぞら君の『おともだち』の小屋のようだ。たぶん抗議に行くのだろう。人の敷地に勝手に小屋を建てて住んでいるのだから、怒られても仕方ない。むしろ今まで放置され、尚且つよぞら君が気軽に遊びに行つていた状況こそどうかしていたのだ。

「でも、あのお爺さんが、よぞら君以外と口をきくかな……」

まあ、師匠が相手なら、わからないけれど。

全力疾走で家に向かう。たつた五キロの道のり。それでも着いた時には汗だくなつっていた。

まだ足りない。まだまだ全然無駄だらけ。師匠ならフルマラソンのあとでも汗ひとつかない。比して、なぜ俺は犬のように息荒く、鯨のように濡れていいる? 体の動きに無駄があるからだ。呼吸のリズムにむらがあるからだ。身体の作りの違いだけを理由にはできない。努力が足りない。根性がまるで足りていない。

鍵を開け、汗をボタボタたらしながら風呂場に向かう。冷たいシャワーを頭から浴びる。髪も体も、液体石鹼で一心に洗う。香料など不要。余計な要素はまったく不要。清潔に、ただ清潔に。彼女は

不潔を嫌うから。

タオルで体を拭き、下だけ穿いて脱衣所を出る。ピクリ、と耳が反応した。十メートル先、気配。殺氣はない。この家に向かつてくる。心臓のリズム、これは、母さんか？

玄関のドアが開く。ただいまー、と母さんが入ってきた。ビンゴ。やはり半径十メートル以内なら完璧だ。

「あら、あんただつたの？リホは？」

「おかげり。リホはまだ帰つてないよ」

「あんた、相変わらず凄い体してるわね。ちょっとお腹パンチしてみてもいい？ちょっとだけ」

「だめ」

「いいじゃない。お母さんソフトマッチョ大好きなのよ」

「やめなつて。怪我するよ」

「そんな体してよく言つわよ。イジワル。あんたのハンバーグ、ソース無しだからね」

「違うつてば」

俺は階段を逆立ちでのぼりながら言つた。

「母さんの手を心配してゐるんだ」

傘を持つて中学校に向かう。空はまだ曇り。雨は降るだらうか？降らなければそれに越したことはないのだが。

中学生がいっぽいいた。校門に着いても雨は降らなかつた。俺が来る意味は無かつたようだ。目を閉じて精神を集中する。音が聞こえる。無数の音。それに声も。しばらく集中し、やがて駄目だ、と目をひらく。やっぱり今の自分では、まだ人の多い場所じや音を聞き分けられない。少ない人数なら、五十メートル離れた場所のナイショ話だつて聞き取れるんだけど。

リホが現れた時にも、やはり空は涙を我慢したままだつた。

「お兄ちゃん」

リホが駆け寄つてくる。俺は手を振つて傘を見せた。田の前まで来てブレークをしたリホは、そんなことはどうでもいいんだよ、という声で言つた。

「それより、よつくんどうだつた！いた？」

真剣な顔だつた。今にも泣きそうなのを我慢しているように見えた。俺は茶化さず、首を横に振つた。

「いなかつたよ。夏野さんもいない。いつ帰るかもわからないつてさ」

リホは壊れる瞬間のガラスみたいな声で「あつ」と言つて俯いた。だがすぐにガバッと顔を上げ、笑みを浮かべて言つた。

「まあ、あの二人、そういうとこあつたしね！ フラつとビツか行つちゃつたりとかさ！ そういうの、別にあの二人なら不思議じやないつていうかさ！ あの……なんていうか、ほらつ！ ねつ、わかるつしょ？」

「いいよ」

俺はリホの頭をポン、と叩いた。

「無理しなくていい」

「…………うん」

リホは俺のコートをギュツと掴んだ。リホの同級生や後輩たちが見ていたが、気にならなかつた。リホもきっと気にしていないだろう。

一途な心は美しい。

男でも女でも、一人のためだけに輝く心は美しい。

曇り空のように涙を我慢する妹を見て、俺は本心からそう思った。

「お兄ちゃん、出かけるの？」

「なにあんた、こんな時間にどうか行くの？ きょう雪降るって言つてたわよ？」

「うん。ちょっと筋トレつていうか……そんな感じ」

「それ以上鍛えてどうすんのよ。いや、もちろんお母さんマッチョ大好物だけど、あんまり筋肉つけると身長とまるわよ。」

「止まつたら無理やり伸ばすよ」

「お兄ちゃん、『ガタ力』大好きだよね」

「努力が報われる話に憧れない男はクズだろ」

「言うねえ」

「じゃ、行ってくるから」

「帰りにアイス買って来てよ。お母さん小豆バーね！」

「あたしピノ」

「お父さんセブンに売ってる『トイバの白いやつ』

「雪降るんじやなかつたのかよ。……あと父さん高いよ。ガリガリ君でいいだろ」

道場に着くと咲子さんから頭を下げられた。なんでも、師匠から、今日は戻らないと連絡があったそうだ。

「本当にごめんなさいね、わたしの夫が。わたしの。このわたしの夫が本当に。妻のわたしが至らないばかりに」

執拗に所有権の主張を繰り返す咲子さんに、師匠の他の奥さん達が後ろで目を細めていたが、彼女は一切気にする様子もなく声高に「わたしのーわたしのー」と連呼した。

師匠がいらないなら仕方ない。俺はお辞儀をして夏野家をあとにした。そしてさあ走つて帰るか、といつとこで背後からの凄まじい殺気に粟立つた。俺はすぐに振り返り、腰を低く落とした。いつでも投げられるように土を掴むのも忘れない。全て咄嗟の判断だった。

「いいね」

初冬の山の冷たい空気に涼しげな声が響く。玄関の戸の前で、長いブロンドを後ろでまとめた美女がビニール袋を揺らして笑つていた。

「悪くない。体のつくりは『全然ダメ』だけど、気構えと対応の速さがいい」

初めて見る人だが、よぞら君からの情報で、なんとなくわかった。師匠の奥さんの一人、フィンランド人のアルマさんだろう。ストイックな女性で、嫌いな人間には挨拶も返さないと聞いている。嫌われたくないな、と思つた。もちろん彼女の身内には誰一人として。俺はぐつとこぶしを握つて答えた。

「未熟は承知しています。現状で俺の武器は心しかありません」「褒めているんだよ。キミの体は確かに、ヨゾラやシンヤに比べたら『全然ダメ』だけど、動きはとてもいい。何度も何度も同じ練習を繰り返さなければ今みたいな動きはできない。才能のある急け者よりよっぽどクールだとわたしは思うね。勤勉と愚直を両方持つた男は美しい」

アルマさんは持つて行きなさい、と言つてビニール袋を投げてよこした。俺はそれを両手でキャッチした。中身は、口が縛られていてはつきりとはわからないが、お菓子かなにかのようだつた。彼女はスッ、とちようど俺の心臓のあたりを指さした。

「もしキミが、どんな手段を用いてでも今より強くなりたいと願うなら、『ガレキヒメ』に会いなさい。彼女に会つて『フェイバリオスを知つている』と言つんだ。そうすればキミは、痛みと引き換えに、ヨゾラやシンヤが持つていらない力を手に入れることができるだろ？」「うう、ドクン、ドクン、と心臓が強く脈打つのを感じた。

強くなれる？

師匠やよぞら君にもない力を、俺が？

「シンヤは過保護だ。キミが死なないように手を抜いて鍛えている。だけど、それじゃあダメなんだ。ダメだつてことをわたしは知つてる。何故なら、わたしもかつてキミと同じだったからだ。シンヤは否定するだらうけれど、わたしやキミのような凡人は、『死んでもかまわない』というつもりで鍛えられなければ天才たちの領域には届かないんだ」

俺にはアルマさんの言つていることがよくわかつた。アルマさん

が凡人だというのが本当なのか俺への励ましなのかはわからないが、俺が師匠との稽古に不満を感じていたのは事実なのだ。

もつと虚め抜いて欲しかった。心肺停止さえ超えたその向こうへ、とにかくの可能性がある気がしていた。

弱いくせに、ではない。

弱いからこそ、物足りなく感じていたのだ。

ふふ、とアルマさんが笑つた。

「いい田だ。じゃあね、少年。わたしはキミを応援しているよ」

そう言つて彼女は玄関の向こうに消えた。

ゴクリ、と唾を飲み込む。アルマさんの言つていた《ガレキヒメ》というのは、駅裏の喫茶店《瓦礫姫》のことだろう。だが会え、というのはどういう意味だ？

ともあれ目的地は決まった。明日の放課後、早速、喫茶《瓦礫姫》に行つてみるつもりだ。

ふと思い、俺はアルマさんから受け取つたビニール袋の口を開けてみた。 中身はアイスだった。

小豆バーと、ピノと……ああ、高いのに、『デイバの白いやつまで。

俺はカツチリと足を揃え、灯りのこぼれる玄関に頭を下げるだけだった。

「シホウの奴、なにか言つてたか？」

「彼、とんでもない努力家ね。だけど次への進み方がわからなくて行き詰まってる。あの年でもう『成長を終えている』なんて並じゃないわ。わたしが拷問しても耐え抜いてみせるんじやないかしら」「心臓の音が嘘をついてる」

「嘘じやないわ。やましいことがあるだけよ」

「あいつになにか話したのか？まさか、カミヤドリのこととか」

「まさか。わたしじゃなにも教えられないから、教えられる人間を

教えたのよ」

「なにを」

「次へのステップを」

「待て、聞きたくない」

「彼きっと 魔法を使いこなすわ」

くたくたになつて帰宅した夜中、妻が弟子を『こちら側』に蹴落としたことを知る。俺は思わず頭を抱えた。シホウは今までじゅうぶん頑張つてゐる。鍛錬を怠けたりしないし、学校の勉強にも手抜きは一切していないうらしい。あれはゆっくりだが着実に、ゴールへ向かつて歩いているのだ。それなのに、そんな頑張り屋に裏道を教えるなんて。 酷い侮辱だ。彼のプライドを踏み躡つてゐる。しかしアルマは諫めるように言つた。

「プライドを持つていいのは強者だけ。彼はそのことをよくわかっているようだつたわ。天才のあなたには、努力じや辿り着けない場所があるつてことがわからないのよ。彼が頑張つてゐるのは何のため？頑張り屋さんだねつて褒めてもらつため？違うでしょ？目的のためでしょ？ヒルマの一番になるためでしょ？わたしや彼みたいな人間は、するをしてでも勝利を掴みたいものなのよ。……週に三日も稽古をつけているくせに、あなたがいちばん彼を理解していない」

なんとなく家に居場所がない氣がして、真昼間からぶらぶらと街を歩いているのが現在の俺であった。リストラされたパパの心境である。

「魔法 なあ」

それは俺には扱えない技術だ。俺も一つ、カミヤドリとして魔法じみたモノを持つてはいるが、それとは別の、人間が努力の末に手

にした力。俺のよつに才能をもつて生まれた人間には使えない技術……なのだとか。

できれば彼には、ぎりぎり一般人の領域にどじまつてほしかったのだが。

歩いていると、白と赤の見覚えのある少女がこちらに向かって歩るのに気付いた。

「あんた、昼間つからこなんところで何やつてんの」
亜鎌の巫女だった。

「キミは相変わらず気配が無いな」

「あんたに言われたくないわよ」

「……街に出るときもその恰好なんだな」

「え？ なに、おかしなところでもある？」

巫女は背やら髪やらを確認しながら言う。俺は「いや別に」と言った。言つたが思つてはいない。寂れた商店街をそれとわかる巫女さんが簞をもつて歩いているのはやはりおかしい。変だ。

巫女は不機嫌そうな顔をして言う。

「思ったことは素直に言いなさいよ」

「いかがわしい店の呼び込みみたいだ

素直に言つたのに簞で殴られた。

巫女と連れ立ち、なんだか廃墟マニアが喜びそうな名前の喫茶店に入る。金など無いぞ！ 金など無いぞ！ としきりに繰り返す巫女におごりを約束させられてテーブルに着く。ずいぶんと狭い店だった。おまけに不衛生な感じがある。巫女は別段気にする様子もなくこれでもかと注文した。

俺が事情を話し終えると、巫女はバナナジュースの氷をストローでカラカラやりながらふつん、と言つた。

「天才にはわからない、ねえ。……それって実際、ただのひがみよね？」

にべもなかつた。遠慮も配慮もまるで。

「だつて、わかるわけないじゃないそんなの。頑張つたけどあなたたちの隣には立てませんでした。だからずるします。なによそれ。人生なめてるわ」

「人生なめるかどうかは別として、キミくらいの年の『普通』の子はそういうふうに考えるものなのか?つまり、努力じやどうじようもないことが出来たとき、すぐに裏技に逃げるという意味だが」「そんなこと言われても、あたし、やろうと思つてできなかつたことつてないし。努力もしたことないし。あんたもそんな感じでしょう?」

「家庭菜園はよく失敗する」

「それでするしたことは?」

「ずるの仕方がわからん」

「そりやそうだわ」

小一時間だらだらと喋つたが、結局俺にも巫女にも普通の少年の気持ちはわからなかつた。店を出て、神社に場所を移してからは、酒を飲みながら(巫女は日本酒なら何でも飲む)アルマがシホウに紹介した相手について話し合つた。

「その男の子、お金持つてないんじょ?」このあたりでそこそこ面倒見が良くて安上がりな魔法屋つて、誰がいたかしら?「

「天乃淨あたりは親切な人間が多いだろう。毎年高価な御歳暮を持つて挨拶に来るぞ」

「それ、ただあんたを怖がつてるだけよ。あんたいつべんあそこの『隠居ボコボコ』にしてるでしょ。天乃淨が靈感商法で荒稼ぎしてるのは一般人でも知つてるわよ」

「嘘だろ……。じゃあ、奈罪は?あそこも年始は幹部が挨拶に来るんだが」

「奈罪の魔法は他人の血を使うわ」

「そんなところをアルマが紹介するとは思えないな。 鮫城はどうだ?」

鮫城はど
わめぎ

「鮫城は吉嶋に潰されたじゃない」

「知らなかつた。あいつ、教えてくれてもいいだろ?」「元でいいなら、その吉嶋はどう? あそこの《魔王》は色々と化

け物じみてるらしいじゃな?」

「確かにあそこの頭は話のわかる奴だが、今は会社が忙しい時期だ。《谷底》の物をこつちで売る仕事が軌道に乗りはじめたらしいから」「あんた吉嶋の魔王と仲いいの?」

「あいつに逃げ方を教えたのは俺だ。奴が本気になつて逃げたら見つけられる奴はいない。その点では、俺はあいつを高く評価してる」「どんな信頼よ……。でもまあ、親しいんでしょ? だつたら今度、あれ貰つてきてよ。あれ、《神の非》」

「なんだそれ」

「お酒よーあそここの長女が違法に作つてゐるの。すつゝくく美味しいのよー!」

「買えよ酒ぐらー」

「売つてないのよ。長女が趣味で作つてオトモダチに配つてるだけのお酒だから、こゝらお金を積んだつて買えないの。そもそも吉嶋の長女に会えるようなコネなんか無いわよ」

平氣で嘘をつく女だった。

神の非とやらについては今度会つた時にもうつてへる」とを約束し(指切りまでさせられた)、シホウの行き先につけては結論が出ないままこの日は御開となつた。

酒瓶やつまみの目を片していふと、ふと思つて立つたよつて巫女が言つた。

「そついえ、吉嶋の口利きで《谷底》からこゝに越してきた例のテロリスト。あいつ、何て名前だつたかしら」

「初耳だな。テロリストつていうと、西のほうからか?」

「つうん。フロイベリオスの生まれらしいけど、あー、なんだつたかしら。ここまで出てきてるんだけど」

巫女は作業の手をとめてウンウン唸りだした。

「そのテロリストがどうかしたのか？」

「うん。あいつなら、面倒見もいいみたいだし、なんだっけ？シホウ君？　の魔法の先生も務まるんじゃないかと思って」

「他にそいつの情報は無いのか？名前以外に」

「知つてるのは二つ名と能力ぐらいよ」

「なんて言うんだ？」

「あんたじゃ知らないと思つたけど、と前置きして、巫女はその名と力を口にした。

「『瓦礫姫』　自分自身をワジコンみたいに操る能力者よ」

「……巡り合わせつてのはあるもんだな」

俺は息を吐いて頭を搔いた。

それは、今日の晩に巫女と入った小汚い喫茶店の名前だった。

さうのうへしんやといじりごとめじょみならい

人気の無しを確認したわたしは、体を低くして山へと走った。制服を来た娘が真っ昼間から山の中に入つていいくところなど誰かに見られてはたまらない。こんな田舎じや、噂はすぐに蜘蛛の巣を張る。そうなれば間もなくわたしは特定されるだろう。咲坂さんちのリホちゃんは学校をサボつて山へ行つているらしい。狩りかしら？ 狩りでしょう。猪とか狩るのかしら？ 狩るでしょ？ それは避けたい。

山の中をしばらく往くと、目的の小屋が見えてくる。実情を知つても人が住んでいるとはとても思えない、家の物置よりも小さな小屋だ。わたしは体操着入れからバレーボールを取り出し、小屋の戸に向かつて投げた。ガヨン、とベニヤのたわむあの音が鳴る。やがて戸が開き、中から仙人みたいな白髪をした、背の高い老人が現れた。彼は転がっているバレーボールを見て、それからわたしを見て、フムと言つた。

「よぞら君じやかないのか。 まあいい。入りなさい」

老人はバレーボールを拾うとすぐに小屋の中に戻つて行つた。戸は開いたままだ。わたしは大きく一度深呼吸してヨシ、と腹に力を入れた。そうしてわたしは小屋へと踏み込んだのだった。

靴を脱いで小屋に入る。小屋の中はまるでおもちゃ箱だった。一畳半ほどの部屋には無数の『古い宝』が並んでいた。額に入つたスープジャーのシール、キン肉マンの小さいフィギュア（キン消し？）、ドールハウス、箱に入ったソフトビニールの怪獣、なんだかよくわからない銀色の立方体、たぶんオルゴールであろう小さな木箱……どこで寝ているのか不思議になるほど部屋の容積を埋める大量の

『たからもの』たち。一つ一つは小さくても、その数は膨大だ。わたしが十歳の少年だつたら、間違いなくここを秘密基地にしたことだろう。わたしはまるで異世界にでもやつてきたかのような錯覚に陥つた。

「自由に見てもらつてかまわんよ」

老人はコト、と床にコップを置いた。コップは黄ばんでいて、どこから出したのか、透明な液体が半分ほどまで入つていた。よつくるなら躊躇なく飲むんだろうな、と思った。あの人はそういう人だ。老人は目を細め、いろんな方向からバレーボールを眺めている。わたしはポケットから写真を取り出して老人に差し出した。

「これ、証拠の写真です」

渡したのは、ちゃんと、体育館の天井に引っかかっていたボールだ。落とすのに苦労した。テニスボールをこれでもかと投げて。

老人は写真を受け取りまたフム、と頷くと、小屋のたからものたちに目をやつて「自由に見てもらつてかまわんよ」と繰り返した。自慢したくてしようがないらしい。

水を飲むよりはマシか。わたしは埃まみれの箱を手にとつた。中には焦げ茶色の不細工な怪獣が入つていた。黄ばんだ箱にはかすれた印字があつた。

アマネ屋ソフビ『百体限定！復刻・大怪獣！』シリーズ／第

一弾・大怪獣ギモギモ

知らない怪獣だが、こうして飾られているくらいだから有名なのかもしれない。別に興味は無かつた。バルタン星人とか、ウルトラセブンとか、メジャーどころでさえその程度しかわたしは知らない。箱を裏返すと、下部に『005』と印字された金色のシールが貼られているのが見えた。百体限定と銘打つほどの代物だ。シリアルナンバーかなにかだろう。

「それはギモギモ族の族長だよ」

老人が言った。わたしは振り返る。老人の目はバレー・ボールを向いたままだった。

「名前をファイブという」

「はあ、……そうですか」

わたしは曖昧に頷く。そういう設定らしかった。

よく見ると、老人の右手には薬指が無かつた。

「どうやら本物のようだ」

バレー・ボールから目を離し、老人がニマ、と笑つた。わたしはよいよ緊張した。

「よろしい、それじゃあお嬢さんの望みを叶えよう。質問なら

三つ。お金なら百万円だ。どちらか選びなさい」

わたしはカラカラになつた口の中でいろんな方向に舌を動かした。息を吐いて、わたしは言った。望みは既に決まつていた。

「夏野よぞらの居場所と、そこへの行き方を教えて下さい。もう一つは

」

「占い師？」

「正しくはそうじゃないが、似たようなものだ。咲坂は未来予知を信じるか？」

「うーん、微妙かな。そういうことができる人は、たぶんどこかにいると思う。本物の占い師つてやつ。でも、そういう人は、お金のために他人の未来を見たりはしない」と思つ

「それはなぜだ？」

「だって、効率悪いじゃん。リスクも大きいし。お金を稼ぐだけなら、口ト6を何回か当てて、それを元手に株でもやればいいんだから

「リスクというのは？」

「人の未来を占つたりなんかしたら、当たつても外れても恨まれるよ

「そうか……咲坂も、恨むか？」

「わたしみたいな奴はそもそも占いなんかに頼らないよ。信じる信じない以前に、興味が無いもん。未来なんて知りたくないから」

「咲坂」

「なに？」

「咲坂に、会つてほしい人がいる。その人は俺の友達だ。その人の居場所は俺とシホウさんしか知らない。咲坂は俺にできた二番目の友達だ。是非、彼に紹介させてほしい」

「友達かあ。しかもお兄ちゃんより下……いいけどね。どんな人の？ 同い年？」

「ロクノミヤ・ソウマ。歳は知らないが、そういうな老人だ。彼は現在の全てと未来の一部を知っている」

礼を言つて小屋を出たわたしは、その足で学校に向かつた。教室に入ると隣の席のDが「大丈夫か」と声をかけてきた。わたしは「薬のんたら治つた」と嘘をついて着席した。時刻は三時間目の準備時間だつた。

「もしかして、夏野のどこ行つてきた？」

Dが言つ。わたしは数学のノートをめぐりながら「なんで」と聞き返した。

「おまえ、夏野と仲良かつたじやん。心配してると思つて」「過去形にしないで」

わたしはDを睨んだ。

「よつくんは親戚の家に行つてるだけでしょ。心配することなんて何もない」

Dは肩をすくめた。話はそれで終わつた。

数学の授業は退屈だつた。

中学に上がり、ひるまさんに勉強を教わるようになつてからといふもの、わたしの成績は茹で過ぎた稻庭うどんのようになんと伸び

た。「ツを掴むというのは思っていた以上に重要だったようで、毎日一時間の勉強で学年一位をとるようになるまでそう時間はかからなかつた。

「好きというのはわからないが、姉さんのような才能豊かな人間には憧れる」

あるとき、遠まわしに想い人の有無を聞いたわたしに、わたしの想い人はそう答えた。

【才能】

物事を巧みになしうる生まれつきの能力。才知の働き。わたしに無いもの。

それからのわたしは必死に自分を偽り、周りの人間を騙して回つた。努力しているからではなく、もともと要領がいいから何でもできるんだ。そう思われるために。

一日の長を才と偽り実を成す。あなたの一番になるためなら、この世の全てを騙してみせる。あなたさえも騙してみせる。

わたしは毎朝、新聞が来るより早く起きて走り込みをした。マラソン大会では新記録で女子一位を獲つた。家の勉強の時間を五時間に増やした。満点をとることが当たり前になつた。日記は見た者に馬鹿だと思われるよう文章を乱した。盗み見した父に悪文を指摘された。わたしは怒る演技をしながら内心で満足した。実の父でさえ、今やわたしの本質を忘れていた。わたしは天才を演じ続けた。それはおそらく成功していた。身近にひるまさんという本物がいたことが大きかつた。彼女の『らしさ』を真似て、彼女以上に本物の天才らしく振舞つた。

三年に上がり、わたしは彼を『デート』に誘つた。心臓が爆発しそうな思いで科学準備室に呼び出した。彼は真面目な顔で言つた。

「デートはしたことがない。よくわからないから、ちゃんと相談して手筈を決めよう」

わたしは狂喜した。叫びだしたい心をぐつと抑えつけて微笑んで

みせた。けれども涙はぽろぽろこぼれた。「どうした、病氣か」と彼が見当違いな心配をした。それさえも愛おしかった。

わたしたちは図書室でデートの段取りを決めた。

行き先は最近新しくできた水族館と、『みなどぴあ』に決まった。みなどぴあは新潟市の歴史博物館だ。名前から古臭くて味気ないイメージがあるが、新潟でずっと暮らそうと考えている彼にはうつてつけの場所だ。日取りは十日後の土曜。その日は大規模な鉄道模型運転会が開かれるとホームページで告知されていた。

わたしはその日から綿密にプランを立てた。わたしにとつても彼にとつても、初めてのデートだ。絶対に失敗なんてしたくない。成功させて、わたしこそが運命の相手だと思われたかった。

約束の日　彼は来なかつた。

そして彼はいなくなつた。

放課後、わたしは制服のまま、ロクノミヤ老人から三つ田の質問で教わつた場所に向かつた。

その喫茶店は駅裏の、寂れた商店街の一角にあつた。

「いらっしゃいませ」

カウンターの、黒いエプロンの外国人女性が言う。流暢な日本語だつた。店内は狭苦しくて汚かつたが、不思議と落ち着く雰囲気があつた。客は一人もいなかつた。

カウンターの上には高そうなお酒の箱がずらりと幾つも並んでいた。

わたしは真つ直ぐカウンターに向かい、女性に言った。

「あなたが店長さんですか？」

「店長は留守です。御用でしたら、戻り次第お伝えしますが」

嘘を付いている風はなかつた。けれどわたしは彼女の嘘を知つていた。わたしは椅子に座つて言った。

「じゃあ、店長さんにお伝えください」

「かしこまりました。どのように？」

わたしは口クノミヤ老人から渡されたメモの通りに、その台詞を口にした。

「鮫城^{さめぎ}ソウビの居場所を教えてほしい。わたしは、フェイベリオスを知っている」と

女性の目付きが変わった。

彼女はニヒルな笑みを浮かべて、わたしの前にコップを置いた。

「まあ……それなら、約束を破つたことにはならないか」

彼女は背を向けて言った。

「キミで三人目だ」

コップの中身はカラだった。

少女が小屋を去つて行く。俺は藪から顔を出した。

「なるほど、そういう仕組みだったか」

俺は溜息をついた。

先日、あれだけ聞いてもなにも答へなかつたのは、手順を間違えていたからか。

しばらくすると老人が小屋から出てきた。亜鎌神社の神主、六乃宮蒼魔だ。彼は手にバレーボールとライター、それから茶色い瓶を持っていた。

神主は俺を見つけると、無感情な目で言った。

「おまえに話すことは無いぞ」

俺は肩をすくめた。

「バレーボールを戸にぶつければいいんだろう? 俺も持つてくるさ! 神主は馬鹿め、と笑つた。『ただのボールなど要らぬわ』

「どうしたことだ」俺は首を傾げた。「バレーボールが欲しいんじやないのか？」

「おまえは大人になりすぎた」

「大人からは受け取らないということか」

「まさか。私はただ、おまえが大人になつてしまつたという、それだけのことを言つてゐる。なぜそんなふうに受け取つた？思えばおまえは早熟だつた。鈴風秋斗がそう望んでいると勘違いし、おまえは急いで大人になつた」

俺は神主を睨んだ。神主は氣にする様子もなく、着物の胸元からカツターナイフを取り出してバレーボールを裂き始めた。

「神主。俺は子どもたちを迎えて行きたいんだ。頼むから、方法を教えてくれ」

「そこに隠れて話を聞いていたのだろう？島に行けばいい。あのお嬢さんと同じように、『びょういんじま』に行つて『彼』に頼めばいい。息子の頼みなら聞いてくれるだろうよ」

「ふざけるな、『彼女』はもういない！あの偽物にそんな力は無い！」

一瞬だつた。気付けば老人の襟を掴みあげていた。

穴のひらいたバレーボールが地面に落ちた。その上に、カツターナイフがサクッと刺さつた。風が吹き、ところどころに薄く積もつた雪が粉を散らした。神主が不気味に笑つた。

「無理なんだよカミヤドリ。おまえたちじゃあ、もうあそこには『戻れない』んだ。可能性は閉じてゐる。私でさえこんなに、こんなに年をとつてしまつたんだ。この『俺』でさえ！」

「……どういう意味だ」

俺は神主から手を放し、一步、距離をとつた。

「あんた、何を知つてゐる……」

老人は答えず、ライターでバレーボールに火をつけた。白いバレーボールは、茶色くなつて裏返り、最後には黒く小さい塊になつた。そうなるまで、神主は何度も瓶から油をかけた。俺はその様子を黙

つて眺めた。やがて神主は言った。

「アカンナ王国を知つていいるか？」

「なんだつて？」

「モニアケス帝国は？ ユキオト商連合は？ 青い髪の吸魂鬼に覚えはないか？ 学術都市バビはどうだ？ 郵便局は誰が創つた？」

「なにが言いたい。それらが俺の子どもたちとどう関係があるんだ」

「…………去れ」

「なに？」

「おまえに言つことは無い。……言いたくないのではない。言つても無駄なのだ」

神主はそれだけ言つと、燃えカスを拾つて小屋へと戻つていった。老人の背中に悲しみと怒りが見えた。俺はなにも言えなかつた。

「どういう意味だよ。……クソツ」

「もしもし巫女ですが」

「俺だ。シンヤだ」

「おかげになつた電話番号は拒否られております。ピー」という発信音の真似をして首を吊つたらどうでしょう？」

「どうもこつもない。ちょっと頼みたいことがあるんだ。聞いてくれ」

「上から99・58・90よ」

「75・60・78だろ、メシ食つてない時で。見ればわかる」「あんたいま地雷踏んだから。次に来たらお茶に毒入れるから」「毒なんか効くかよ。百でどうだ。今日中に持つていぐ」「お金持ちのおじさまつてだーいすきつ」

「『おまえ』、このあたりの魔法屋に詳しいだらう?」

「なによ。さつさと言いなさい。ラーメン伸びるでじょうが」

「天乃淨と奈罪以外に、どれくらいいる?」

「八家ね。『はぐれ』も含めたら十二。それがどうしたの?」

「連絡を取つてほしいんだ。『女の子が訪ねてきても、なにも教えず穩便に帰せ』って。必要なら俺の名前を出してもかまわない」「めんつづくせー何回あたま下げんのよーあたしにもプライドつてもんがあるのよ?」

「そういうえば吉嶋のやつ、『神の非』なんていくらでも持つていつてくれて構わないと言つてたな。どうやら、他にもまだ古い酒が山ほどあるみたいで、何て言つたかな、思い出しそうなんだが」

「女の子の命が懸かってるんでしょ? あたしに任せっきりなさい!」

「そうだ、『病の祈り』だ」

「よしきたー巫女は正義のために在り!」

「なるべく急いでくれ。天乃淨と奈罪と、それから『瓦礫姫』の所には俺が直接行く」

「いいけど、あんた、あんまり強く言つんじゃないわよ? 『引退した『肅聖殺し』が俺の家で暴れていつたぞ、どうしてくれる!』って、うちに文句が来るんだから。つたく、亞鎌あかまはあんたのおもりじやないつてのに」

「暴力を振るつつもりはない。殴つていいのは言つてもわからない奴だけだ」

「ならいいけど。あ、こちおつ言つとへけど」

「なんだ」

「氣をつけなさいよ」

相変わらず、喫茶・瓦礫姫には客がいなかつた。

「いらっしゃいませ」

カウンターの女がこちらをちらりと見て言つ。すました顔をしているが、鼓動は笑えるほどのハイテンポだった。俺はカウンター席に着き、テーブルに紙袋を置いた。天乃淨と奈罪から貰つた土産だつた。

「キミが店長か？」と俺は言った。

「そうです」と女はこたえた。

俺はポケットからコインを取り出し、テーブルに置いた。

「初めてまして瓦礫姫。俺はこうじうものだ」

「じー寧に。わたしは『瓦礫姫』ビーリン・スケルダノアです」

瓦礫姫はコインを見ても動搖を抑え通した。立派なものだった。

俺はコインをしまって言った。

「今日はキミに頼みがあつて來たんだ」

「こちらに戦闘の意志はありません」

「もちろんこちらにも無い。穩便に話を進めたいものだ。そり、土

産だつてある」

俺は「これと、これと……」と書いて紙袋から酒の箱を出して力
ウンターに並べていく。巫女の分を一箱だけ紙袋に残し、残りは全
部カウンターに出した。瓦礫姫はその間、じつと俺の手を見ていた。
俺は切り出した。

「話というのは、魔法に関する」となんだが

「咲坂シホウのことでしたら、やめろと言わればすぐにでも稽古
をとりやめる用意があります」

予想外の言葉が返ってきた。俺は苦笑した。

「なんでしたら、彼の首を差し出してもかまいません

「それは困る。あれは俺の弟子だ」

「もちろんいまのは冗談です。彼の望むよつて鍛えるつもりです。
わたしは冗談が好きです」

「結構

瓦礫姫は冷たい緑茶を出した。俺はそれをひとくち飲んでから口

を開いた。

「今日このあと、この店に女の子が訪ねて來ると思つ

瓦礫姫は頷いた。

「その子はおそらくキミに『魔法を教えてくれ』と頼むだろつ。それ
を断つてもらいたい」

「わかりました。その少女の特徴は？」

「身長156センチ。体重45キロ。上から79・59・80。髪は黒で、肩より少し長いくらい。ときどき後ろで纏めていることがある。ぱっちりした目をしていて、右目の中には小さなほくろがある。鼻は低く、口は小さい。眉は少し太いくらいか?……ぱつと思いつく特徴はそれくらいだな」

「失礼ですが……愛人、ですか?」

「は?」

「いえ、忘れてください」

全て了解しました、と彼女が頷くことでこの話は終わった。あと

は巫女が上手くやつてくれるだろう。俺は茶を飲み干した。

「おわりは」

「貢おう」

それからはただの雑談だった。

「ところで、俺のことは古嶋にでも聞いたか?」

「魔王はあなたのことを高く評価しておられました」

「なんて言つてた?」

「出会つたら、ひたすら下手に出らうと」

俺は笑つた。

「それで、そのあとはどうしろって?」

「『隙を見て逃げる。無理なら忠誠を誓つて身内になれ。それがいちばん長生きできる』と。できれば一杯食わせてやりたいが、おまえじゃ無理だろ? と笑つておられました。まさか、こうして訪ねてこられるとは思いませんでしたが。……それで、わたしはどうすればいいでしょう?」

俺は席を立ち、紙袋を持つてドアへ向かつた。

「別に。俺と俺の身内に敵対しなければそれでいいさ。邪魔したな。……そうだ。迷惑をかけたお詫びに」

俺はドアを開け、店内を振り返つて笑つてみせた。

「おもての『ミ』は、俺が片付けておこう」

店の外には黒スーツの大男が銃を持って立っていた。

『死因は頭部打撲か』

十日未明、新潟県××市の建設現場で男性の変死体が通行人により発見された。

県警は男性が殺害されたものと断定。司法解剖の結果、死因は頭部打撲による脳障害の疑いと発表された。県警によると、男性は20歳から30歳代前半で身長約210センチ。九日の内に殺害されたとみられ、頭や顔に複数にわたり、鈍器のようなもので殴られ骨折した跡が残っていたという。

男性の遺体はブルーシートの上にあおむけの状態で倒れており、黒のスーツの上下を着用していた。靴ははいていなかった。現場からは男性の財布が見つかっており、物色された痕跡はなかったという。

県警は××署に特別捜査班を設置し捜査。遺体の身元の確認を急いでいる。

向かいの席の老人が読む新聞に、物騒な文字列が見えた。現場は家のすぐ近くのようだが、近所にそこまで大きい人がいただろうか

? 夏野家のお父さんでさえ2メートルはないと思つけど。

『次は、ハクオリ。ハクオリ。お乗換えはございません。お降りの際は、お足元に御注意ください。次はハクオリ』

お降

目的の駅に到着する。わたしは列車を降りた。

「ヤ」なら知つとるよ。これから巡回に出るといふだから、ついでに案内しよう」

駅を出ですぐの交番で、瓦礫姫さんから教わつた住所を聞く。なんと親切なお巡りさんに目的地まで連れて行つてもらえることになつた。

十分ほど歩くと田的の、『魔法屋』鮫城ソウビの隠れ住む家に到着した。そこは大きな武家屋敷だつた。門は開かれ、その横の壁にかかる表札には『吉嶋』と彫られていた。

ヨシジマ? キチジマ?

どつちだらう。

「ここだよ、キチジマさんち」

キチジマか。ひとり頷いていると、お巡りさんが躊躇なく門のチャイムを鳴らした。わたしは驚いた。このやう。なんてことしてくれる。案内だけしてくれればよかつたんだ。まだ心の準備ができてない。わたしはお巡りさんを睨みつけてやろうかと思い、顔を上げた。だが彼の目を見てそんな気持ちはすぐ萎えてしまった。つい先ほどまでにこやかに笑つっていた彼は、日本昔ばなしに出てくる人を騙すキツネのような目でわたしを見ていたのだった。

ガラガラと家の戸が開き、玉砂利を鳴らして一人の男が現れた。わたしは逃げようとしたが、そのときにはお巡り野郎に肩を掴まれており、怖くて体が動かなかつた。殺されるんだ、と思つた。こんな大きくて古い屋敷に住んでいる奴がまともな人間のはずがない。わたしは殺されるか、或いは売られてしまうのだ。そう思つた。やがて現れた男が「どうしました」と言つた。三十歳ぐらいの、

高そうな仕立てのスーツを着た優男だった。お巡りがわたしを突き出した。

「妙な子どもが嗅ぎまわっていました」

「これはこれは」優男はにこやかに笑つて言つた。「いつも氣を利かせていただいて」

それからは少し記憶が曖昧だ。あれよあれよという間にわたしは庭に連れ込まれ、ひらいていた門は、屋敷の中にいた一人の大男によつて閉ざされた。

閉じ込められたのだ。そう思つてわたしがガタガタ震えていると、優男が言つた。

「まったく、あの馬鹿、毎度困つたもんだぜ。人目のある内から阿呆な真似しやがつて」

「換え時ですか？」と大男の一人が言つた。「でしたら今日中に済ませますが」

「ああ」と優男が言つた。「捨て時だな」
わたしの怯え具合はいよいよピークに達つしようとしていた。ものはやいろいろ漏らしそうだつた。乙女として瀬戸際、いやさ土俵際だつた。

優男がわたしに手を伸ばした。せめて一発、と思って構えたが、暴力はやつてこなかつた。彼の手は握手を求める形で空中に固定されていた。

わたしは思わず何度もまばたきした。

「悪かったな、嬢ちゃん。怖かつたら？あの馬鹿、小遣い稼ぎで誰でも暗殺者やら密偵やらにしたがるからよ。口クノミヤ先生から連絡は貰つてるぜ。ソウビに会いに来たんだつて？」

わたしは足から崩れ落ちた。腰が抜け立てなかつた。

誰かが遠くでなにか言つているような気がしたが、頭がうまく情報を伝えてくれなかつた。

放心していたのだ。

「おいタンカだ、急げ！客間に運べ！」

「タンカどこにありましたつけ！」

「ああん？ 知らねえよ馬鹿野郎！ タンカがねえならシーツでも畳でも、ガキ一人運べるもんさつさと持つて来い！ 客に何かあつたら社長に殺されるぞ！」

「持つて来ました！」

「なんでパイプ椅子なんだ、馬鹿野郎！…」

「すいません！ すいません！」

目を覚ますと木目の天井の、あの不気味な模様が見えた。わたしは知らない部屋の、知らない布団に寝かされていた。部屋は広い和室だった。

体を起こすと、隣で正座をして腕を組んでいた、三十歳くらいのパンツスーツの女性がビクリと動いた。彼女は口をパクパクさせたあと、凄い速さで立ち上がって戸に走った。戸の外側から叫び声が聞こえた。

「起きました！ お客様、起きられました！」

「馬鹿野郎、叫ぶんじゃねえ！ お客様がビビつたらどうすんだ馬鹿野郎！ 馬鹿野郎が！」

「すいません！ すいません！」

「次から気をつけろ馬鹿野郎！」

この家では「馬鹿野郎」が挨拶なのだろうか。そんなのはいやだな、と思った。

少しするとさつきの女性が、気を失う前に握手を求めてきたあの優男を連れて現れた。優男は「立てるかい？」と言った。わたしは頷いて立ち上がった。そうしてそのまま洋部屋へと案内された。

書斎、なんだろうか？ 本がたくさんある。高そうなガラス（水晶？）のテーブルを挟み、優男と向かい合って座る。わたしの隣になぜかスーツの女性が座り、てめえはこっちだ馬鹿野郎、と耳を引っ

張られて優男の隣に移動させられた。

優男が頭を下げた。

「まず、さっきのことを謝らせてくれ。不愉快な思いをさせてすまなかつた。このとおりだ」

わたしは、ぶんぶんと両手を振った。

「いえ、大丈夫です。本当にっ。大丈夫ですから、頭を上げてください！」

「そういうわけにはいかねえ」

「本当に大丈夫ですから！」

そんなやりとりを何分も続けて、彼はようやく頭を上げた。

「口クノミヤの先生の話じや、ソウビに話があるってことだつたが、どんな用事なんだい？俺あ外したほうがいいか？」

優男（偽装）がスースの女性を親指でさして言つ。そうしてわたしは気が付いた。

この人が、鮫城ソウビさんなんだ。

わたしはいえ、と言つて女性に向き直り、そしてテーブルに頭を振り下ろした。ガン、と音が鳴る。女性の足がビクツと震えるのが見えた。

「わたし、咲坂リホといいます！中学三年です！『瓦礫姫』さんの紹介でこちらに参りました！」

「は、はい！」

鮫城さんまで大きな声で言つ。

わたしは、わたしだけしか得をしない願いを口にした。

「どうかわたしを、弟子にしてください！」

わたしに、『ロロロマワリ』の魔法を教えて下さい！」

ある少女の日記。

10/19 (晴れ)

吉報。大吉報。

今日のお昼、ノックもせずに部屋に飛び込んできたツバメさんが、抗議するわたしに「いいから見ろ」と言って羊皮紙を押し付けました。

そこには、崩れた平仮名と片仮名でこう書かれていました。

『スズカゼ王国拳闘大会予選通過者一覧』

わたしの探し求めたその名前が、名簿のいちばん上にありました。

『一位通過／ヨゾラ・ナツノ 所属：王立第一碩学院（優勝候補
筆頭）』

どうやらわたしの弟探しは終わりを迎えそうです。

てがみ／よやうとおひじよとかとどうたいかい

「魔物退治ですか」

「うむ。羨ましい限りじゃ」

「羨ましい？」

「妾も行きたいのに、ツキノネが危険だ危険だと意地悪を言っておる「なあお嬢、魔物の出る森にお姫様つれてく従者は優秀か？そこんど」、可愛らしいお顔にのつた小さい頭でよく考えてくれよ。おまえもなんか言え、ヨゾラ」

「その魔物とやらの強さはどの程度でしょ」「うへ」

「どの程度と言われても、妾は戦わんしの。……強化魔法の使い手が三人がかりで倒すのが決まりじゃったか？」

「目安はそんなもんだな。あそこの奴らは魔法が効かねえから、自分の体を強化する以外に手段がねえんだ。ま、オレなら一人で仕留めるがね」

「数は？」

「流石に百も二百も、といふことはないであろうが、それでもたくさんじゃな」

「ふむ。 その程度なら危険はありません。どうぞ観覧してください」

「よいのかー？」

「おい、ヨゾラーなに言い出す」

「いえ。むしろ俺の隣にいる方が安全なくらいです。街でなにかあつたら、森にいる俺では助けられない」

「だからオレが残るんだろうが」

「ツキノネさんが敵わないような相手も、俺なら一秒で無力化でき

ます。安全といつことだけを言つなら俺の隣以上に安全な場所はそ
うありません

「……クソッタレが。言つてくれるぜ」

「ふふふ。気持ちのいい奴じゃうつ」

「嘘は嫌いです。謙遜も苦手だ」

「知つとるよ。誰より強く、嘘と裏切りを嫌う。おぬしはまさに騎

士になるために生まれたような男じゃ。そうである、ツキノネ？」

「わかつてゐよ、文句は言つたてんだる。ヨゾラの強さは知つて
るからな。……シノビの連中が泣いてたぜ。どんなに巧く隠れても
ヨゾラが笑つて挨拶してくるつて」

「あれは隠れていたんですか？」

「うはははー言いあるわー精進せいと伝えておけいつ」

学術都市ジソの北にある森では定期的に魔物狩りが行われる。今
回、これに参加すると言い出したのは俺の雇い主・口力二王女だつ
た。彼女は騎士である俺に、討伐隊の見ている前で魔物を蹂躪させ
ることによつて、この街での自分の発言力を高めようと画策してい
るのだ。

さて、ジソの街は『力』を何より美しいとする気風のある、一風
変わつた街である。同じ学術都市で姉妹都市のバビが『智』を宝と
するのに対し、この街がひたすらに力を愛するのにはもちろん理
由がある。その理由こそが、あす俺たちが魔物の討伐に向かう森で
ある。

ジソの街の北には《ジシオ大森林》と呼ばれる大きな　それこ
そ樹海と呼んで差し支えないほど大きな森が隣国まで広がつてゐる。
そのジシオから一ヶ月に一度ほどの周期で、同じ種類の魔物が、お
よそ同じだけの数、ジソの街に向かつて侵攻して来るのだそうであ
る。

やつて來るのは《ヨロイ》と呼ばれる鎧を着た人型の魔物で、そ
いつには魔法が一切効かないらしい。

魔法というものを未だに数えるほどしか見たことのない俺は、魔法が効かないから大変ですと言わっても実はよくわからないのだが、戦いで魔法を使う人たちからすれば恐ろしい相手であるうとは想像に難くない。

ジソの街は、そんな魔法の効かないヨロイの脅威にさらされてきた。ジソの街の歴史は、絶え間ないヨロイとの闘争の歴史であった。人間は考える動物だ。街の人たちはヨロイへの対抗手段として『強化魔法』と呼ばれるものを突き詰めて研究するようになつていった。強化魔法は物や人間を強く硬くする魔法だという。彼らは考えた。魔法が効かないのであれば、魔法で強くなり、物理的手段で戦うほかない。

こうしてジソの街は何度となくヨロイの侵攻を妨げた。昨今ではヨロイが集結する時期になると街の側から果敢に森へと攻め込むようになり、大森林を挟んだアカンナ王国からは『遠く森を越えた先には戦士の街がある』とさえ評されるまでになつたのである。

そんな街で俺は既に一度、力を見せる真似をしていた。それも自主的にだ。

一度目は奴隸にされた知人を助けるために。二度目は拳闘大会の予選で。王女の野望と俺の姉探しのため、今後も可能な範囲で目立つ行動をとつていくつもりであるし、これまでの行動に後悔は無い。しかし、できれば不要な苦労は背負い込みたくなかつた。

王女は積極的に俺を売り込み、俺は街の至る所で力をふるい、人助けの真似事をした。

結果、ジソの街に架空の英雄が生まれた。

英雄は名をヨゾラといった。彼は悪を許さぬ正義の味方なのだそうである。

そんな話を俺はいま王女から聞いていたのだつた。

「ぬふふふ。順調じやのつ。おぬしの名がどんどん広まつておるぞ。ぬふふふ！」

王女が俺の背中に小石を投げながら（後ろから投げても避けるのが面白いらしい）快哉を叫ぶ。俺は屋敷の庭でシノビの人たちと『その他一名』に稽古をつけていた。

「これで入学後、雇用主である妾が正式に王女と名乗れば……ぬふふ。笑いが止まらんな！」

犬が有名になれば飼い主が儲かる。飼い主が儲かれば犬に高い餌が巡ってくる。俺と王女の関係は極めて良好で、なおかつ健全であった。これで姉さんが俺を見つけてくれればいいんだけど。

俺は姉探しにおいて、その方向性を根本から変えていた。姉の情報収集するには王女に任せ、俺のほうではひたすら有名になることだけを考えるようにしたのだ。これは俺を探しているであろう姉に、少しでも早く俺を見つけてもらうためだ。王女は『旅人組合』を使ってほうぼうに依頼を出した。その内容は、『旅先でヒルマ・ナツノ』という名の黒髪の娘を見つけたら連絡を寄せせ』というものである。単純だが、無闇矢鱈に探すよりもよほど効果的であるように思えた。

「それじゃあ、今日はここまでにしましょう」

そう言って、俺は肩の力を抜いた。庭には十人のシノビ（王族や貴族を影から警護する者をこう言つらしい）と一人の戦士が倒れている。戦士だけが目をきらつかせて「まだやれます」と言った。俺は首を横に振った。

「まだやれる人間はそんな顔をしない

「兄貴、お願ひします！」

戦士が立ち上がり頭を下げる。おいおい、ヒジュークが言った。振り返る。彼は王女の腕に抱かれて手をバタバタやっていた。

「おまえさん、稽古を始める前になんて言つた？ 相棒の言つことは何でも聞くんじゃなかつたのか？」

「ヒジュークの旦那、でも俺あ

「でもじゃない。部外者のおまえさんをここに入れるにあたつて、相棒にデメリット以外のものがあつたと思うか？ それでも相棒は時

間を割いて稽古をつけてくれたんじゃねえか。その恩をおまえさん、仇で返すのか？」

効果はてきめんであつた。戦士は俯き「軽率でした」と呟いた。軽率とか、そういう問題じやない。そう思つたが言わずにおいた。俺は目でジュークに「ありがとう」と合図をした。彼は背泳ぎみたいな動きで片手を上げた。

「終わったのか？」と王女が言つ。「ならばヨゾラ、明日の段取りを決めてしまおう」

「了解です」

俺たちは倒れて動かない十人と立つたまま動かない一人を置いて屋敷に戻つたのであつた。

突然やつて来たそいつは、変容は死だ、とわけのわからないことを言つた。

「人の心を作りえるようなことをしちゃいけねえんだ。誰かの行動の影響で誰かが変わっちゃったら、それはもう殺人と変わらねえ。……兄貴、俺は常々そんなふうに思つてるんです」

兄貴つて、俺のことだろうか。俺は顔をしかめて頭を搔いた。

「難しくてわからない」

「俺はヨゾラの兄貴に殺されたんです」

「生きてるじゃないか」

「そうじやない。昔の俺を殺されちまつたんだ。今の俺は、もうあんたと戦う前の俺じやあない」

俺は今度こそ溜息をついた。

男は名前をビーといつた。拳闘大会ジソ予選の準決勝で戦つた相手だ。大会中、こいつ以外は一人残らず一撃で意識を刈り取つた俺であつたが、この男だけは蹴りを一発入れても意識を飛ばすことが出来なかつた。いくら俺が手加減したといつても、一発目は一割程度の力で腹を蹴つたのだ。今だから言うが、当てた瞬間、殺してし

またかと思つたものであつた。だが男は立ち上がつた。異常なことだつた。勿論そのあとすぐに転倒してそれまでだつたが、それでも充分にいかれてゐる。ビーの打たれ強さは常軌を逸していた。

そんな奴がある日、俺を訪ねて屋敷にやつて來たのである。シノビは何をしているのかと思つたが、しかしどうやら王女が手を回していらしかつた。『ヨゾラを訪ねてくる者、これを拒むことを禁ず。』彼女はシノビたちに暗号でそう伝えてくれていたらしい。姉やその関係者が現れたときのためであつたのだろう。それが裏目に出たかたちであつた。

「それで、おまえは何の用があつて俺に会いに來たんだ」

「簡単なことです」

「さつさと言つてくれ」

ビーは神妙な顔で語りだした。

聞いてみればなんのことはない、要するに弟子にしてほしいとう、それだけのことであつた。本当に簡単なことだつたのだ。当然俺は快く追い出した。ビーは俺の足にしがみついて泣いた。俺はビーを庭の外まで蹴飛ばした。ビーは嬉々として戻ってきた。

「兄貴、俺を兄貴の騎士団に入れてくれ！」

「俺は騎士団長ではないし、誰かの騎士団に屬しているわけでもない。ただの騎士だ」

「なら弟子に！弟子にしてください！」

「ことわる」

ビーの主張は、大凡の人間の願いがそうであるように自己中心的なものだつた。ビーは大会当選、俺と当たるまで自分の力に自信を持つていた。自分が世界で一番だとまでは思わないが、街で一番になるくらいの強さは持つてゐると考えていたそうである。そんなとくに俺と出会つた。街一番を目指した戦士は、手抜きをした俺（文字通り手を使わなかつた）にあつさりと敗れた。そうしてビーの価値観は変容した。奴の言葉で言つながらば、死んで生まれ変わつたのだつた。

ジーは何度も駆け戻り、俺は何度も蹴り転がした。しまいには少し楽しくなつてくるくらいまで転がしたが、それでもジーは諦めなかつた。

「それだ！その力に俺あ憧れたんです！」

「憧れるのは自由だ、好きにしてくれ。だが弟子はとらない」

そこに王女が現れて言った。

「ならば従者にしてみてはジジヤ？」

「えつ？」

「えつ？」

「妾を狙つた暗殺者でもあるまい。荷物持ちにでもして、暇な時に

稽古をつけてやればよからう」

「何のために」

「縁は円じや。何の関わりもないと思つておつたとこりからふいに姉への手掛けかりが出てくるやもしれんじやろ」

「それは建前でしょ、う？」

「つむ。本音はヨゾラの広告塔に一度よいから、とこりとこりかの。見るに、そやつはおぬしの『強さ』に心酔しておるよハジヤ。あれば、おぬしが強くある限り裏切りはせんじやろう。そういう手駒は貴重じや。手付きにして、ヨゾラ・ナツノの英雄譚をこれでもかと贅云させるがよからう。そやつは稽古をつけてもりこ、ヨゾラの方は評判が上がる。ヨゾラの評判が上がれば妾の株も上がる。みんな愉快でウハウハじや」

俺は溜息をついた。これで12歳というのだから末恐ろしい。二年前の自分と比較して虚しくなつた。

「ありがとうございます、お嬢さん！広告塔の任、身命を賭して務めさせていただきます！」

「つむつ。謹んで励むよつに！」

「おこらのことは田那と呼ぶんだぞ。ジュークの田那だ、いいな？」

「つしてなんだかよくわからぬ内に、英雄ヨゾラに従者ができたのであつた。

「ところでヨゾラ。あすの討伐にはビーも連れてゆくのか？」
「王女を抱きながら狩るつもりですから、あいつまでは守りきれません」

「ほう、抱きながらやつてくれるかや」

「王女は魔物を間近で見たいんでしょ？？」

「おぬしもわかつてきただではないか」

「主人のニーズに応えるのも騎士の仕事だそうです」

「ツキノネか？」

「はい」

「ふむ。……じゃが、まだそこおし足らんな。小指の先ほど」

「それは、どのあたりが？」

「一人の時は口カニでよい。そう申したであろう？」

王女が笑う。

俺も笑つた。

「了解です、口カニ」

「それでよい」

俺たちは順調に、仲よし主従になつていた。

おいらもいるんだがな、と胸ポケットでジュークが苦笑した。

火照った肌に風が気持ちいい。俺は目を閉じて大きく背伸びした。
麗しき主から恵与にあずかったコートの着心地は実に悪かつた。
俺だから気にならないが、生地のゴワゴワ感が皮膚に痛ましく、
通気性も考慮されていないといつ、敏感肌の姉では一時間ともつま
いという代物であった。形だけは恰好いいが機能性がまるで駄目な

のだ。貰つた当初はなぜ王女がこんな安物をと不思議に思い、過去の罪を振り返つてみたほどである。しかしよくよく考えてみれば、高価でみてくれのよい衣装が機能面で安物に劣るのは元の世界も同じであった。俺はそう納得した。

事実はもつと重かつた。

騎士採用から三日目の朝、俺にえられた部屋にノックもせずにやって来た王女殿下は言つた。

「おぬしに服をやろ。」

俺はもちろん喜んだ。

「いつまでもそのような田立つ恰好であるわけにもいへま」

「助かります。替えが無いので困つていました」

「そうである。そこでほれ、作りのよいうわつぱりがある。袖を通してみよ」

素直に言つと、ちよつと恰好いいなと思つた。黒地に赤いラインが一本だけ入つた、ゴジゴツしたコートだった。

俺はすぐにそれを羽織り、そして言つた。

「かたいですね……動きづらい。それに通気性が悪い。吸汗性もよくないみたいだ」

「えつ」

「確かに丈夫だし、恰好いいけど、そんな要素は俺には不要です。これだつたら、安い布の服が欲しかつた」

「正直すぎるぜ相棒」頼もしきパートナー、ソフトビニール製怪獣人形《ギモギモ族》のジュークがポケットから声を潜めて言つ。おいおい仮にも王女だと。「まあ、そんなところがおまえさんらしきけどよ」

「そう、か……」

王女はむう、と唸つた。俺は少し慌てた。

「ああ、でも、我慢を言つつもりはありません。お金はいくらか持つてるので、街で出来合いの服を買ってきます。この世界のセン

スはよくわからないけど、ちゃんとジュークに教わって恥ずかしくないものを選ぶようにします

「任せな。同胞のモトハルがアルイの街で服屋をやっている。《ギモ通》で最近の流行りを聞いてやるよ

ギモ通 ギモギモ通信は、ギモギモ族特有の技能で、遠くにいる同族と互いの記憶を共有することができる。彼らはこの世界の各地に散らばって暮らしており、これで連絡を取り合っているのだった。

王女はなおも唸った。

「どうしても駄目かの？ そんなに風の通しが悪いか？」

「悪いです。でも、重要なのはそこじゃなく、生地の硬さです。護衛をするのに、デザイン重視の動きづらい服は邪魔でしかありません。俺は、いまこの瞬間に屋敷の使用人が束になつて襲いかかってきたも、三十秒以内に全員を無力化してあなたを守る自身がありますが

「とんでもない自信じやな……」

「それでもお金を貰つて仕事をする以上、半端な真似はしたくありません」

「しかし、そのゴートは王宮で作られたこの世に一つしかないものであるぞ？ ボラボの牙より作られたその生地は、剣も魔法も簡単に通さぬというし」

「ボラボが何かは知りませんが、俺の体に剣が届く状況がそもそもありえません。そんな敵が相手なら動きにくい服はなおさら邪魔になるでしょ？」

「むぐぐ。しかし……」

「王女様は、なんでそんなにその服を相棒に着せたがるんだ？ 戦闘での相棒の強さは筋金入りだぜ。相棒が要らねえっていうなら、それは必要の無いものなのさ」

王女はやや黙ったあと、「これは妾が父上より賜ったものなのだ」と言った。しかして事情を語られた。

国といふものには公式なものから非公式なものまで、様々な決まりごとがある。それは彼女ロカニ・アキト・スズカゼが王女を務めるこのスズカゼ王国も例外ではなかつた。ここで問題になる『決まり』は王族の護衛官に関するものであつた。すなわち、その登用に関する決まりである。

王族を護衛する騎士、これを王宮護衛官といつ。その名の通り、王宮護衛官は王宮にいるものだ。彼らはその職務において、王宮から離れることがまずないと言つてよい。何故か。これは単純な話、彼らの警護対象である王族が王宮を離れないからである。

「王や王族は国の中にあわすものであり、査察や表敬などとつて軽々しく王宮から出るものではない」

それがこの国の常識だつた。だが前王が倒れ、今の王が実権を握つて常識は破られた。

「馬鹿は要らぬ。世の中を見てこい」

王は世継ぎである一人、王子ノギオムと王女ロカニをそれぞれ王都から遠く離れたアカデミーへと送り出した。無論そうなれば身辺警護が必要である。身分を隠しての秘密裏な入学であつたが、それで護衛が不要ということにはならない。しかしこの護衛選びが大いに揉めた。

王宮護衛官は王族の護衛であるが、文字通り王宮の護衛である。彼らは王宮を守るために戦いでこそ力を発揮する。そうなるようになに訓練を受け、勝ち上がつたプロフェッショナルだからだ。彼らは極めて優秀だつた。しかし遠く離れた街のアカデミーで学生生活を送る王子・王女を、それも秘密裏に警護するとなると話は変わつてくる。そのような訓練を彼らは受けていないので。勿論、彼らだけではなく、誰もそのような訓練は受けていない。そこで一人の身辺警護には、ただただ強く忠孝に厚い者が王より直々に選抜された。事態は解決したかに思われた。寵臣たちもほつと胸を撫でおろした。

しかし王はやんちゃだつた。

あるとき王は一人の継承候補を部屋に呼んだ。

「身分を隠して学生をするといつても、おまえたちは王になるやもしけぬ身だ。学生生活の中で真に心を通わすかけがえのない友を得るようなことがあつたとき、それを友のままで終わらせるようなことがあつてはならん」

そう言つて王は一人に件のコートを一着ずつ与えた。

「もしもそんな者が現れた時には、絶対に逃すな。これを与えて生涯の忠臣とせよ。おまえたちが選び、そのコートを与えたものであれば、余はどんな者でも認めよう。各自に一着より与えぬ、ゆめゆめ軽々しい心で決めるでないぞ」

一人は揃つて頷いた。コートには赤の刺繡が入っていた。

赤。

この国・スズカゼ王国では、赤い色は大きな意味を持つ。建国より、この国の王家の間は一人の例外もなくみな赤い髪と目をもつて生まれる。赤は王家の色とされ、衣服や家具、小物に至るまで一般の衆がこの色を使うことは固く禁じられていた。王家と、王家に与えられた者だけが身に纏うことを許される色。それが赤なのだ。

その赤が入つたコートを王が手すから自分たちに渡すという。あらうことか一人の人間に下賜せよという。これは大事おおじとだつた。

しかして王女は俺を見つけた。彼女は騎士として俺を雇用し、様子を見た。一日目の夜、彼女は決断した。こいつを逃してはならぬいと。そして二日目の朝、そんなことなど知らぬ俺は見事にこの榮誉を突っぱねたのだった。

「まあでも、今日くらいはな……」

スズカゼ王国拳闘大会・ジソ予選。

いま俺はその決勝の舞台に『赤』の入つたコートを着て立つていた。公の場でこれを着るのははじめてのことである。場所は王立第二碩学院の闘技場。時刻は試合開始から十五秒。足元には意識のない対戦相手。観客席は静まり返っている。闘技場の真ん中には直径

3メートルほどのクレーターができている。俺は意識のない男に近づき、しゃがみ込んで彼の服から『名札』を剥がしとる。そうしてそれを審判に見せた。

「名札を獲りました。自分の勝ちですね？」

万雷の歓声が沸き起つた。

「優勝はヨゾラ・ナツノ！」

アカデミー護衛官、ヨゾラ・ナツノだーっ！」

予選大会を優勝した俺は、その場で賞金と本戦出場の権利を受け取ると、大会本部にお辞儀して貴賓席へとジャンプした。観衆が大いにどよめき、大会本部は賓客を害する気かと早とちりし真っ青になつて叫び声を上げた。俺は気にせず、目当ての人物のところまで人目を引くようにゆつたり歩き、そうして彼女の前で膝をついた。隣で俺の上司・ツキノネさんがニヤリと笑う。これは決まつっていた流れであった。

俺は深く頭を下げて用意された台詞を口にした。

「この勝利を殿下に捧げます。我が愛しき主……御望みどおり、本戦も無傷で優勝して御覧に入れましよう」

貴賓席の他の客がいっせいに雰囲気の色を変えた。それらは畏れの色であつたり、画策する色であつたり、単純に驚きの色であつたりした。王女はそれらを何ら気にせぬ様子で微笑み、俺に手を差し出した。

「よくやりました、わたくしの可愛い騎士。次も期待していますよ
そうして彼女は俺に手を差し出す。俺はその手に口をあてた。
儀式はこれでおしまいだ。俺は立ち上がる。

彼女が王女だと周りに確信させること。さりとて彼女が王女であると関係者が誰も名言しないこと。これが今回、王女が考えた作戦の肝であった。この作戦で、今後彼女と俺の力になるであろう大物を釣るのだ。

観衆のざわめきと視線の中、俺は王女を抱きかかえ（ここでキヤーという叫びがやたらと上がった）、闘技場を円形に囲む高い壁を飛び越えた。

トン、と地面に降りたとき、王女はくふふ、と笑っていた。俺はすぐに屋敷に向かつて走りだした。

王女を抱いたまま、馬より速く駆けながら俺は言つ。

「あれで上手くいくでしょうか」

「いくさ、と彼女はこたえた。

「妾の作戦に抜かりはない。大丈夫じゃ。それよりも今は

「今は？」

さつさと帰つてのんびりしたい、と彼女は笑つた。
俺も笑つて、そしてスピードを上げるのだった。

翌日、屋敷に客が訪ねてきた。

「王女殿下……いや、イルカ・アクリ嬢はいらっしゃるかね」

自室で王女とボードゲームをしていた俺は「釣れた」と呟いた。

「なにか申したか、ヨゾラ」

「はい。コドギン侯爵が釣れました」

「ほう」

王女は唇を二日月にして邪悪に笑つた。

「それは重畠。 まず一人目、じゃな」

王女と俺に、力強い味方ができた瞬間であった。

「コドギン侯爵？」

「うむ。その領土において魔物の侵攻を五度も食い止めた一代の怪傑じや。彼の軍の練度と『異常性』、それに爵自身の指揮力は父上

も高く評価しておられた」

「要するに強い軍の優秀な指揮官をしている貴族さまですね。その彼を、どうするんです？」

「釣る」

「釣る？」

「おうとも。餌はおぬしじゃ」

楽しげな様子の王女が居間で俺を待っていた。風呂を出たら話があると言われている。俺は許しを得てソファに座った。彼女は「これを見よ」と言って一枚のチラシを俺に差し出した。俺はそれを受け取らず、彼女の手をとつてじつと見た。そつちじゃないわ！と頭を叩かれた。最近、だんだん打ち解けてきている俺たちだった。

「『拳闘大会予選。応募締切は当日まで』……こんなスケジュール管理で大丈夫ですか？」

「問題はそこじゃねえだろ相棒」とジュークが言った。彼はテープルの上でエイトと腕相撲（もしくは奇抜な握手）をしていた。

「おぬしにはそれに参加し、優勝してもらいたい」

神妙な顔をして王女が言う。俺はいいですよ、と答えた。王女は一瞬きょとんとしたあとケラケラと笑い出した。「なんて軽い奴だとツキノネさんが言った。

「俺みたいな人間は、ひとに使われなければ活躍できません。フットワークは軽く。余計なことは極力しない。それが俺のスタンスです。やれと言われたら大抵のことはするつもりです」

「まるで優秀な奴隸だな」ツキノネさんが笑った。「尤も、首輪の毒を微塵も怖がらない奴隸だが」

「使う人間が悪事を強要したらどうするつもりじゃ？」

答えは知っているだろうに王女がそんなことを聞いてくる。俺は茶を一口飲んでこたえた。

「その時は次を探すだけです。それに、そうならないように、ジュークが俺を導いてくれます」

ジュークがぬわあ！と叫んだ。テーブルの上で横になつてジタバタしている。「修行が足りないね」とエイトが言つた。腕相撲はエイトの勝利に終わったようだつた。

今次の作戦の内容を一言で纏めると、『王女の非公式テレビ』であつた。

王女は自分の公式なお披露目会をいつにするか悩んでいた。英雄ヨゾラの飼い主が辺境の貴族の娘イルカ・アクリであることは周知の事実であつたが、イルカ嬢の正体が口カニ・アキト・スズカゼ王女殿下だということは未だ明かされていない真実だ。赤い髪と瞳は王家にあらわれるしるしであつたが、決して王家だけに生まれるものではなかつた。珍しさで言えば黒よりも劣る。そのことだけをもつて彼女を王女と判断する人間はいないであろう。いふとすれば、それはもともと何らかの情報を掴んでいる者だ。

彼女は自分という存在を街に知らしめるタイミングを見計らつていた。そんな時、アカデミーの学長から報せが届く。その内容は、『力の街』ジソの拳闘大会予選の様子をコドギン侯爵が観覧に来る。そしてその滞在先をアカデミーに定めた、といふものであつた。イルカ・アクリの正体を知る学長は言つた。この場合、侯爵に王女のことを話してよいものかと。彼は王女のことを知つてゐるのかと。そうして王女は閃いた。

「コドギン侯爵は武闘派の人物であり、力強き個を何より愛する。王女はそのことを父王から聞いていた。そして、王女がジソのアカデミーに通うことを知る者の名簿の中にコドギン侯爵の名は無かつた。チャンスだつた。

「王位継承について、有力な貴族が束ねて王子派を明言する中、コドギン侯爵は珍しい中立を宣言する人物じや。眞実の意味で国を思つて生きてきた彼は、前例や性別で王を定める愚を好しとしなかつた」

王女の言葉は少し感情的であつた。

王女は説明を続けた。

公式に「私は王女です」と名言するのはアカデミーに入つてからのこととして、非公式の「レビュー」はその前に済ませてしまおう、といふのが彼女の案であった。理由は勿論コドギン侯爵である。コドギン侯爵を王女派に引き入れるため、侯爵がこの街にやつてくるこのタイミング、拳闘大会という大きな舞台で、『赤』の入つたコートを着た優勝者・英雄ヨゾラがイルカ・アクリを『殿下』と呼ぶのだ。その際、周囲に確信を与えても、言質をとらせてはならない。俺が口を滑らせてそう呼んでしまつただけで、王女本人が正体を明かしたわけではない、という形を取らなくてはならない。これは父王に最低限の筋を通すためと、アカデミー編入まで面倒を避けるためだ。王女がアカデミーにいるとなれば様々な人間が集まつてくる。それらへの『誰がそんなことを名言した』という牽制である。侯爵は必ずおぬしを気に入る、と王女は言つた。

気に入られるように動きます、と俺は答えた。

こうして今夜の作戦会議は終わつた。

「ところで、わつを言つていた、侯爵軍の異常性といつのはじついう意味です?」

「そのまんまの意味じゃよ」

王女は目を細めて言つた。

「かの軍は、恐ろしいほどに一枚岩なのじや」

大会当日、俺は順調に予選を勝ち進んでいた。

俺は対戦相手の体に異常が残らない程度に目立つ、大袈裟な勝ち方を狙つておこなつた。全員一撃で仕留めるのは当然として、ある者は腹への張り手で五メートルほど飛ばし、ある者へはしゃがみ待ちをしてサマーソルトキックを決めた。準々決勝でスクリューパイロドライバーもどきを試してみたときなどは観客総立ちの大盛り上がりであった。わざと攻撃を外し、闘技場の土の地面にクレーターを作るなどの芸も進んで披露した。

そうしてまつたくもつて危なげなく準決勝まで進んだ時

奇妙な男に会つた。

「あんた、なかなか強いな」と男は言つた。「でも残念。俺のほう
が強い」

俺がいうのも可笑しな話だが、彼はまだ少年だった。体はそこそ
こ大きいが、肌や筋肉の質が子どもだった。

俺は試合開始の合図と同時に彼の腹を下から蹴り上げて二メート
ルほど浮かせた。彼が地面上に落ちる。俺は勝利条件であるプレート
を取るために彼に歩み寄つた。なんと、彼は立ち上がつた。

正直に言つと、驚いた。油断していたのだ。

男が立ち上がつたのを見た俺は、咄嗟にもう一度、今度は少し強
めに腹を蹴つてしまつた。タン、と音がして、彼は横に十メートル
以上も飛んだ。蹴つた瞬間、「あつ」と思った。殺してしまつた、
と。しかし彼はまた立ち上がつた。今度はさすがにフラフラしてい
たし、すぐまた転んでしまつたが、それでも一度は立つた。地面に
頬をつけたまま立ち上がりにいた彼は、歩み寄つた俺にひとこと
言つた。

「妙に頭がすつきりしてやがる」

「どこか打つたか?」と俺は聞いた。「手加減はしたつもりだが
彼は笑つた。

「あんた、名前は?」

「対戦名簿を見ていいのか」

「相手が俺の名を覚えるべきだと思ってた。弱者の義務だと、思つ
てた」

「よぞらだ。姓は夏野。おまえは名乗らなくていい
「ヨゾラ・ナツノ……覚えたよ。ありがとう」

それだけ言つと彼は氣を失つた。

この瞬間、俺の中で予選大会は終わつた。決勝の相手は弱かつた。

お披露日の『儀式』を終え、屋敷に戻ると王女が「旅人組合に行くぞ」と言い出した。

「ツキノネはまだ会場じや。帰つて来ぬ内に変装して出かけるぞ」「旅人組合?」

「ああ。そういえば、おぬしにはまだ教えておらんかつたな」

王女は旅人組合について説明してくれた。

旅人組合は、世界各地に支部を持つ大きな組織だそうであつた。支部で『旅人』として登録しておけば、不定期に荷物の配達や連絡、人探しなどの依頼を請け負うことを条件として、組合の支部のある地域への通行税が免除されるのだ。支部は殆ど全ての国にあるとう。組合で発行される名入りの札は、依頼をこなして『旅人得点』を貯めていくほど身分証明としての信頼性が高くなる。依頼には一級、二級、三級、四級があり、大概は誰でも受けられるが、一級の依頼だけは得点を五千ほど貯めて一級旅人（凄い名前だ）と認められた者にしか受けられないとのことであつた。荷物を遺失すると最悪の場合、刑罰もあるそつだ。国と密接に関わつた組織なのである。

なんと王女はその旅人組合に、大金を払つて人探しの依頼を出してくれるそつだつた。

「おぬしの姉を見つけ、それとわかる手紙を持ち帰つた者に金貨三十枚を与える、という内容で依頼を出そつと思つておる。姉に伝える内容は『ヨゾラはジソにいる。《カンジ》での手紙求む』でいいじゃろ? 異世界の文字であれば、誤魔化す者が現れたとておぬしが見抜けよう。もちろん誰でも気兼ねなく受けられるように、ランクは四級にするつもりじゃ」

「そこまで考えていてくれたなんですか

「もうちと早くできればよかつたんじやがの。拳闘大会のことといひ英雄じつのことといひ、おぬし、忙しかつたであろ? 妻も父上に手紙を出したりと、まあ、色々あつたのじや。すまんの、遅くなつて」

俺は感動した。今すぐ王女を高い高いしてあげてもいいぐらうに胸が締め付けられた。その衝動を我慢して俺は言った。

「でも、今日はコドギン侯爵が訪ねてくるんじやありませんか？」

「それはない、と王女は言った。

「当日に会いにくるほど礼儀の無い人物ではないさ。それよりもほれ、おぬしもさつさと着替えてこい。 クレリ、ケレリー・目立たぬ服を出せ！」

王女が呼び、メイド兼魔法使いの双子が現れる。俺はコートを脱いで自室へと走るのだった。

魔物退治を終えた翌日、居間でジユーラの体を磨いていると、ツキノネさんを伴つて王女が現れた。

「ヨゾラ。おぬしの姉、名をヒルマと申したな？」

「そうですが、それがどうかしましたか？」

俺はジユーラをテーブルに置いて姿勢を正した。「よぞら、次は私も頼むよ」とヒイトが言い、「おいらがまだ終わつてねえ」とジユーラが言った。

王女はニヤリと笑つて俺に封書を差し出した。

「ついさつき、旅人組合より使者が来た」

「そうですか」

「バビの街からおぬし宛の荷物を持ってきたそうじや。確かめ

るがよい。手紙が本物ならば報酬を渡してやらねばならん

「おい相棒、それつてまさか！」

俺は手紙を受け取り、急いで封を破つた。

それより早く、王女が楽しげな声で言った。

「送り主の娘はヒルマ・ナツノ。
バビのアカデミーで教師をしておるナツノ。」

セイレーナ・マリエスの誕生日 (前編)

碩学院・せきがくいん

月が見たいと女は言った。
サイゴに月が見たいのと。
ボクは女を背負つて歩いた。

やがて木々が姿を消して、――なら見えるとボクは言った。
キレイと言つて女は笑つた。
手首がダランと落ちて揺れた。
黒目が濁つて光が消えた。
呼吸が止まつて音がやんだ。
笑つたままで女は死んだ。
ボクの目から涙が落ちた。
泣きたくないのに涙が落ちた。

忘れなさいと巫女が言った。ボクはいやだと首を振つた。
忘れなさいと巫女が言った。ボクはいやだと涙を流した。
金色の鍵が静かに揺れた。

誰も知らない金色の鍵。
ボクにだけ見える金色の鍵。
ボクは鍵にお願いをした。
どうかどうかとお願いをした。
どうか、どうか、お願ひです。他にはなにも要らないから
そうしてボクは嘘を願つた。
世界を騙す嘘を願つた。

「おかあさんを　かえしてください」

月の綺麗な高速道路。

命の摂理を置き去りにして。

金色の鍵が光って消えた。

遠くで誰かの声が聞こえた。

『 その願い、鈴風秋斗が叶えてやろう』

「だから、それは絵であろう？」

「いいえ。写真です」

「写真という絵である？」

「写真という写真です」

王女のアカデミー入学から一週間、毎日尻尾を振つて自分をアップする取り巻き連中に早くも愛想を尽かした彼女のお気に入りの場所は、尖塔せんとうに隠れた狭い屋根の上であつた。誰からも気づかれず、誰も来ないのを良い事に若干の改造を施したこの場所は、日当たりもよく、実に快適な二人だけのサロンとなつていた。

そんな場所で、俺は元いた世界のことを王女に語り聞かせていた。「では、それを使えば誰でも簡単に絵が『写真』であつたか？ その、絵のようなものが描けるのか？」

「はい。枠の中に被写体を入れて、ボタンを押す。必要な作業はそれだけです」

「原理がまるでわからん」

「俺にもわかりません。でも、俺のいた世界では大抵の物がそうでした。わからないけれど便利だから使う。わからないけれど、それがなくては生活が成り立たない。そんなものばかりでした」

「そのきやめりんとこ「うやつは」

「カメラです」

「かめらんとこ「うやつは」

「カメラです」

「ぬう……かめらー！ というやつは、魂を抜かれたりはせぬのかや？ 人の本質をそのまま絵に閉じ込めるのであれば、何らかの副作用があつてしかるべきと思つが」

「それは大丈夫です。そもそも地球では魂というものの存在は実証されていません。『写真に写るのも、本質ではなくただの静止画像です。わかりやすく言つと、王女が』」

「口カニじや」

「失礼。口カニがいま見ている景色をそのまま紙に貼り付けて、同じものを別の人間に見せるようにする。そんな道具です」

「なんとまあ、不思議な道具があるものじやなあ……。いつか妾も見てみたいものじや。その写真とやらで、自分の姿を」

「自分の顔が見たいなら、鏡があるじやないですか」

「それはなにか違うじやろ」

「そういうものですか」

「そういうものじや」

「ちなみに、上位互換のビデオカメラは撮影した『動き』を映像として再生します」

「見たい！ 見たいぞ、びりおきやめりん！」

「ビデオカメラです」

「こつして俺たちは狭い楽園でぎりぎりまで時間を潰し、次の授業へと向かうのであつた。

編入前、王女に雇われることが決まった段階で、俺はここ王立第二碁学院の学長に挨拶に行き、王女づきの騎士として、アカデミーで学生生活を送る口カニ王女の護衛官を務める旨を報告した。学生ではないが校舎の中に入る許可を寄せ、といったわけた要求であ

る。学長は立場上、その場では認めなかつたが、国王に確かめることを約束した。そのあとで、王と王女と学長の間で何やら書を通じたやり取りがあつて今に至る。その際、ツキノネさんが王都に奔つて俺のことをあれこれ話したらしい。結果、「敵に回られるよりは」ということで話がまとまり、晴れて俺は王女の騎士となつたのであつた。

王女がその正体を明らかにしたことはすぐさま王宮へと報告された。王にも宰相にも連絡がいき、急遽屋敷の使用人の増員が決定された。その数なんと二十人。うち十人が周辺警護で、残りは世話係兼接客係だと言う。これでも少ないというのだから驚きである。屋敷の空き部屋は瞬く間にその数を減じていつた。シノビの人たちが交代制で一部屋を使つていてことを可哀想に思つた。無論のこと、王女はこの件を快く思つていなかつた。彼女は毎夕、俺の部屋に来ては「息が詰まる」「いなくなればいいのに」「ゲジゲジ虫ふめ」「キノコに当たれ」と愚痴をこぼす。一度俺は「警護の人たちだけでも帰つてもらうように言いましょうか?」と提案した。十人だろうが百人だろうが俺には勝てないのだから、いるだけ無駄に思えたのである。しかし彼女は渋い顔をして首を横に振つた。

「無理じゃな。奴らにもプライドがある」

「プライド!?

俺は驚いた。かつて三歳年上の友人が「弱者にプライドを持つ資格はない」と言つていた。俺には王都からやつて来た人たちが強者であるとはどうしても思えなかつた。友人もたいがい弱かつたが、歩き方や筋肉の動きを見る限り、彼らはもつと弱いであろう。そのことを言つと、王女は俺の腕をべしべし叩いて呵呵大笑した。みんながおぬしのようならいいのにな、と言つて笑い続けた。

王女はセカンドアリ（高等部）の前期クラスに編入することになつた。セカンドアリには、本来であればプライマリ（初等部）の八年の課程を修了した者が進学する。プライマリの入学条件は6歳以上であるから、セカンドアリ生は基本的に14歳以上ということになる。

王女は12歳なので特例という形であった。それというのも、本當ならば彼女はアカデミー入学に際して名前だけでなく年齢も偽るはずだったのである。王女であると明かしてしまった以上、歳を鯖読むことは不可能となつた。そのための緊急措置であった。

俺は授業中、影のように王女の後ろに控えていた。そして彼女に触れようとする全てから彼女を守つた。大袈裟な気もするが、これはツキノネさんから命じられたことだつた。何があるかわからないうからと。王女の周りには学年学級の境を超えて多くの学生が集まつた。王女はその一人一人に丁寧に言葉を返した。疲れた時には合図を出し、それを受け取つた俺が『お時間』を伝え、『秘密の場所』へ逃げることに決めていた。そこで王女は毎度、胡座をかいだ俺の膝に座つてぐつたりとするのであつた。

いつものよう、尖塔に隠れた屋根のでっぱりに、王女を後ろから抱くようにして座つていると、ふと彼女が俺の手を握つてきた。「どうしました?」と俺は言つ。彼女は楽しそうに俺の手を揉み続けた。

子どものころな、と王女が言つた。まだ子どもだ、といつ指摘はせずにおいた。

「妾は兄が欲しかったのじや」

王女は幼い日々の身の上を語つた。

王女の周りには常に17人の侍女がいた。侍女であるからにはもちろん全て女である。17という数はスズカゼ王国において特別な意味を持つてゐるそうで、他に彼女の部屋に入る召使いはなかつた。王女の身の回りの世話を男の家来に任せることにはいかない。間違いが起こらなくとも耳に好ましくないからだ。人の口に戸は立てられない。王女が男に世話を許してはいるとなれば、その噂を真つ先に耳にするのは貴族であろう。王宮に頻繁に出入りするような大貴族ともなれば、その嫡は王女にとつて婚約者候補にほかならない。彼らを無闇に刺激しないことは王家として当然の行動選択であった。

王女の周りには『男』という生き物が父王を除いて一人もいなかつた。弟王子はいたが、彼は二つも年下である。十にもならない子どもにとつて、二つ下の弟など、そんなものはもはや愛玩動物に近かつた。そんな環境の中で精神的に不健全に育てられた彼女は、いつしか健全に異性へと興味を向けるようになり、一つの願いを抱くようになった。

すなわち 兄が欲しいと。

「おそらく、頼れる男が欲しかつたのであろうな。他人の男は妾の近くまで来られぬ故、いつか自分に夫ができることなど信じられないのであつた。ならば兄が欲しいと。いま振り返つてみれば可笑しな話じや。けれどもそんなことを、当時の妾は毎晩毎晩、真剣に願つておつたのじや」

どうしてそんな話を俺に、とは聞かなかつた。ただ少しだけ誇らしく思い、空を見上げた。

「俺にも、妹が欲しいと思つていた時期があります」

王女が振り返り、ニヤリと笑つた。俺もつられて笑つた。

「でも、口力二ほど真つ直ぐな理由じやなかつた。俺はただ、俺だけを頼つてくれる、無力な人形が欲しかつたんです」

その当時、姉にとつての俺がそつたように。

「妾は無力でいることはできぬ」ぽん、と王女は俺の胸に頭をあづけた。「王になる身であるから」

俺は「ええ」と言つて彼女の体に腕を回した。

「今は力のある人を守るのも楽しいと感じています」

風は穏やかに吹いていた。王女はそれ以降なにも話さず、俺もなにも言わなかつた。やがて中庭でベルが鳴らされた。授業開始五分前の合図だ。

行きましょうか、と俺が言い、王女は無言で頷いた。

俺は彼女を抱き上げて屋根から飛び降りた。

落下してゆく数瞬の狭間。楽しいなあ、と彼女は言つた。

俺は笑みだけを返事にした。

ふいに懐かしい匂いがした。

王女の寝室で、ジューク、エイト、王女、俺、の四人で「ゴンギン（石と札を使った点取り遊び。偶数人でプレイする）」をしているときであった。客の足音と心音、それに会話も聞こえた。お密さんだと俺は言つた。ゲームを見物していたツキノネさんが顔を上げた。

「誰だ？」と彼女は言つた。

「キスイさんです。クッキーを持つてる。……ビーもいますね」

「キスイ？ ああ、おまえが助けた娘か」

ツキノネさんがふむと頷く。おいおい、ヒジュークが言つた。

「相棒に会いたいのはわかるが、いくらなんでも王女様の滞在先に訪ねてくるのはまずいだろ？」

いやいやわからんよ、とエイトがバネの弱くなつた黒ひげ危機一髪みたいな動きで肩をすくめた。

「これまで一度も来なかつたんだ。ようやく大義名分を手に入れたのかもしれない」

しかししてビーの大声が屋敷に響いた。

「兄貴、ヨゾラの兄貴い！ お密さんを連れてきました！ 女です！ 若い女です！」

盗賊みたいなことを言つた奴だった。

俺は玄関に向かつた。なぜか王女ほか部屋にいた全員がぞろぞろとついてきた。振り返ると、左右の手にジュークとエイトを持った王女が「ぬふふ。気にするな、気にするな」と言つた。ツキノネさんも下品な感じに笑つていた。一人が俺とキスイさんの仲を勘違いしていることは明白であった。完全な誤解である。俺はもう精通しているが、彼女をそういう対象として見たことはないのだから。俺は一度このことをジュークに話したことがある。ジュークは神妙な声で「おまえさんがそうでも嬢ちゃんは……」とよくわからないことを呟き、「いや、やめておこう」と押し黙つた。頬りになる相棒

はときどき意味不明だつた。

恐れ多くて死にます、もうダメです、という顔をして庭で待つていたキスイさんは、やつて来た俺を見て顔を輝かせた。彼女は布のかかったバスケットと、一辺15センチほどの小さな木箱を持っていた。王女が俺の背中をどんと押した。力が弱くて俺はびくともしなかつた。

王女が一步前に出ると、キスイさんは箱とバスケットを横に置き、膝をついて頭を下げた。なぜかビーも離れた所で跪いていた。王女はキスイさんにこの屋敷の主人としてかけるべき言葉を一言一言かけ、ツキノネさんを伴つて屋敷の中へと戻つていった。屋敷の中には無関係の平民を入れないことは常識である。ビーでも駄目なくらいだ。俺の横を通り、彼女は俺のポケットにジュークを入れていった。こつそり見ながらエイトを通してギモギモ通信の実況放送を聞く気なのだろう。ビーはまだ跪いていた。

「お久しぶりです」と俺は言つた。「ひと月以上になりますね」キスイさんは顔を真赤にして、アノとかエイトとか言つたあと、深々と頭を下げた。

「その節は本当にありがとうございました。あれ以降、嫌がらせを受けることも無く、両親ともども幸せに暮らしています」

「それはよかったです」

「それあの、これ、ヨソラさんが好きだつて言つてたクッキーなんですけど」

「いただきます。お茶を持つてきますので、一緒に庭で食べましょう。決まりで、屋敷の中に入ることはできないのです」

「ひいっ、そんな恐れ多いこと!」

彼女は大きな声を出したあと、ハツとした様子で庭の入口を振り返つた。そこでは腰に剣をさした兵が一人、真っ直ぐ前だけを見て直立していた。彼女はふう、と息をついた。俺は本題を聞いた。

「今日は、あの時のお礼にいらしてくださつたんですか?」

「あつ、いえあの、そうじやないんです。あたしつたら何やつてる

のかなあもう。　今日は、これをお届けにあがりました。ヨゾラさん宛のお荷物です」

キスイさんが木箱を差し出す。俺はバスケットを腕にかけてそれを受け取った。

俺は言った。「キスイさん、旅人でいらしたんですね」

彼女は慌てて否定した。

「まさか！あたしはただのお手伝いです。父の知り合いで一級の旅人をしている方に、ヨゾラさん宛の荷物があると聞いて、それなら是非あたしが、つてお願いしたんです」

彼女は少し俯いたままはにかんだ。

そのあと五分ほど話をしてキスイさんは帰つていった。茶を出すとか庭の椅子に座ればいいとか失礼にならないよういろいろ言ったが、彼女は断固としてこれらを固辞した。帰り際、彼女は俺に「お休みの日には家に寄つてくださいね」と二度も念を押した。次の休みは三日後の予定だつた。俺が休むと屋敷は厳戒態勢になる。王女が憂鬱そうな顔をするからあまり休みをとりたくない俺であつた。屋敷に戻ろうとして、ふと気付く。小さな木箱……もしこれが王女を狙つたテロだつたら？

俺は木箱に耳を当てた。音はしない。完全に密閉されているわけでもないし、そもそもこの世界にあるのかどうかは知らないが、爆弾ということはないだろう。可能性としては毒か。俺は木箱を開けた。毒には何度もか当たつているが、致死毒でも対処を間違えなければ死なない自信があった。最悪、嘔吐するくらいは我慢しようと思った。果たして、箱の中身は緩衝材がわりの枯葉と、眠るように丸くなつている一体の人形であつた。

「ジユーラ

「なんだ、相棒」

俺はポケットからパートナーを引っ張り出し、木箱の中がよく見えるように近付けた。

「これ、何でしょう？」

「こいつは……」

それはいわゆる『着せ替え人形』という女児を象った人形であった。姉が持っていたからわかる。外からでは肘や膝に可動部分が見えないが、中に針金が入っていて曲がるのである。俺は知っている。一度誤つて損壊してしまい、それはもう酷い目に遭つたのだ。それから今に至るまで俺は口ケツトペニシルが怖い。

相棒、とジュークが言った。手のバタバタ具合がいつもより深刻だつた。

「こいつはあれだぜ……『リカちゃん人形』ってやつだ。タカラトミーの大ヒット商品さ。おいらなんかとは違う本物のスターだ！」

リカちゃん人形、と俺は呟いた。そして脳内で検索をかける。それはすぐにヒットした。

「聞いたことがあります。夜に電話をかけてきて、GPSのように現在位置を報告する謎の存在ですね。電話を切つてもまたすぐかかってきて、最後には『今あなたの後ろにいるの』と

「惜しい。そいつはメリーアさんだ」

よく見ると、眠っている（と思う）リカちゃん人形は目が開いたままだつた。両目とも左を向いている。俺は箱からそつと人形を取り出した。人形は白いワンピースを着せられていた。

人形をバスケットに入れて木箱をひっくり返す。中には枯葉しか入つていなかつたが、箱の底に、どこかで見た筆跡でメッセージが書かれていた。

『彼女の服を探せ。世界の秘密はそこにある』

俺は迷わず人形のスカートをめくつた。きやー！と人形が叫んだ。絶叫だつた。危うく落とすところであつた。ジュークなど「ひいつ」と言つて一度ばんざいをした。目が動かないから気付かなかつたが、いつの間にか彼女は起きていたようである。俺は慌てて謝つた。

「すみませんでした！痴漢とか、そういうつもりではなかったのです！どうか警察だけは許してください！どうか警察だけは！」
「もひ、馬鹿……。服を探せっていうのは、そういう意味じゃないわよ！」

「わよ！」

人形は俺を許してくれた。彼女は名前をリカと名乗った。

「香山リカっていうの。よろしくね」

「自分は夏野よぞらといいます」

「おいらはジユークって言います！アマネ屋復刻シリーズの大怪獣ギモギモです！シリアルナンバーは019です！大先輩に会えて光栄です！」

「ええ。よろしく、ジユーク。素敵なお名前ね」

香山氏は気さくな人物であつた。テンションが変なことになつてしまつたジユークの握手にも快く応じ、俺にも「リカでいいわ。敬語もよして」とフレンドリーに接してくれた。俺は笑つて「わかつた」と答えた。

服を探せっていうのは文字通りの意味であつた。服の中を探るのでなく、彼女がこの世界で失くしてしまつた服を探す手伝いをしろ、という意味だそうだ。ジユークが少しだけ落ち着いてきた頃、彼女は言つた。

「なるほど、あなたがヨゾラ君があ。友達から聞いてるよ

「友達というのは、キミを俺宛に送つた人物か？」

「うん。『俺は忙しいからヨゾラとやらを頼れ』って。……へえ、

髪が黒いのね

「珍しいか？」

「そうじゃなくてね」

リカは言つた。

「灰色だつたら、シンヤにそつくりなのになあ、と思つて

俺は絶句した。

遠い場所で、何か大きなものが動き出すような予感があった。
強い風が吹く。

庭の隅ではまだビーが跪いていた。

おい英雄、と男が言った。魔物討伐に向かう森の中のことである。どうしました、と俺は應えた。

「おまえ、どのぐらい戦える？人間相手じゃ強いみたいだが、魔物を狩った経験はどの程度のもんだ？」

「魔物かどうかは知りませんが、大きい虎を一頭やりました」「虎だあ？」男が嘲笑つた。「あんなもん、でかいだけの猫じゃねえか」

男が俺に喧嘩を売つてていることは明白だった。大きな戦闘を前に気が高ぶっているのだ。微笑ましいな、と俺は思った。幼稚園時代にライオン七頭に囲まれたときは俺もこんな感じだった。隣で王女とビーが苛立つ様子が手に取るようにわかつたが、ここは我慢してもらうことにした。俺はそうですね、と言つて王女と手を繋ぎ直した。彼女はかつて俺のものだつた大きなコートを着て、フードまでかっぽりと被り、もはや誰だかわからなくなつていた。

「まったくもつてそのとおりです。虎も猫も同じようなものだ」

「『ヨロイ』は人型の魔物だ。おまけに硬い甲冑を着てやがる。猫退治なんかとは勝手が違つぞ」

「まったくもつてそのとおりです。猫もヨロイも同じようなものだ」

王女がクスリと笑う。ビーはムスッとしたままだった。男は尚も俺に絡み続けた。

「どこの誰かさんが三十人も戦力を減らしちまつたからな。今回

はきついかもしらんぜ、」
「

「の言葉には流石に王女が口を開けたとした。だが俺は彼女の肩に触れて制した。今にも殴りかかるとしているビーには「やめろ」と言った。

「ビー、約束を忘れたか。おとなしくするといつから連れてきたんだぞ」

ビーは障子紙を破いたことが発覚した犬のよつにしゅんとして「すみません」と言った。これをまた男が「ガキを連れて魔物退治かよ」とからかった。俺が例のコートを着ていなかつたのは彼にとつて幸運以外のなにものでもないであろう。『赤』と知つて侮辱していたなら、俺は王女の騎士として彼を裁かなければならなかつたのだから。

「アカブの坊ちゃんはそりやあ悪さをしたかもしだねえが、なにも騎士たちまでやることはなかつたんじやねえのか?俺あ直接は見てねえが、ずいぶん『酷い』ことをしたらしいじやねえか。噂になつてるぜ」

「あんた」とビーが言った。「兄貴を知らねえのか?」

「知つてゐるさ」と男は言った。「お人好しな英雄さまだろ?・拳闘大会の予選で優勝したつていう。街じや女や年寄りに人気らしいじやねえか」

「拳闘大会も見てないんだな?」

「それがどうした」

ビーが言い返そうとするのを俺は「やめる」と再び止めた。俺は溜息をつき「ひとつ伺いたいのですが」と男に言った。

「『力の街』ジソでは、あの程度の『ゴミ』を『戦力』といつのですか?」

「ああ?」

王女がくすくす笑い、男が怪訝な顔をした。俺は立ち止まり、真っ直ぐ彼の目を見て続けた。

「魔物が怖いなら観覧に徹していただいて結構。豚三十匹でヨロイ

とやらを何匹減らせたものかは存じませんが、少なくとも自分が百人分の働きをしますのであなたは不要です」

男は何も言わず、呆れたような目を俺に向けた。俺は王女の手を引いて再び目的地へと歩みを進めた。

「それじゃあ、大会の時の異常な打たれ強さ　あれが強化魔法だつたのか」

「はい。俺あガキの頃から強化だけは得意でして。親父が南の大門で衛兵をしてるんですが、強化魔法の腕だけで言うなら、この街一番は親父でしょうね。そんで、一番が俺です」

「つまりキミのお父さんはキミより打たれ強いわけか。凄いな、強化魔法っていうのは」

「俺に言わせりや、魔法も使わずに手加減した蹴りで俺を十メトウルもぶつ飛ばす兄貴の『凄さ』の方が信じられませんけどね。……親父は若い頃、ヨロイの甲冑にヒビを入れたことがあるつてのが自慢なんです」

「それは凄いのか？」

「凄いなんてもんじやありませんよ。投石機から放ったかってえ岩が当たつても、奴ら転がるだけで、鎧の方は凹みもしないんですから」

「そんなに硬い金属を身に纏つて動けるものか？凹まないといつことは、分厚いんだろう？かなり重いと思うが」

「そこは魔物ですからねえ。連中、鎧の中は空っぽなんですよ。真っ黒な鎧の中に火の玉が一個、ぽつんと浮かんでるだけ。その火の玉を割つたら甲冑が砂になっちゃうんです」

「勿体無いな。それだけ硬い金属なら色々と使い道はあるだろうに」

「火の玉を割る前に甲冑を碎くことができたら、その破片は砂にならない　つていうのが親父の主張です。家には黒くて硬い、ちつ

「火の玉があるんですけど、親父はそれをヨロイの欠片だつて言つんです。俺がヨロイにヒビを入れた時に落ちた破片がこれだ、つて。本当かどうかは知りませんがね」

「火の玉を『割る』といつのは、甲冑の隙間から水をかけてやつたんじゃ駄目なのか？」

「駄目ですね。火の玉はヨロイの核みたいなもんなんです。火の玉の真ん中にはちっちゃな宝石が入つてるんです。それを割らない限りヨロイは死にません」

「甲冑の隙間から剣を突つ込んでちまちま火の玉を狙うのか？」

「そうやって言わると聞抜けに聞こえますけど、それしか倒し方がないんですよ」

「その宝石とやらも砂になつてしまつのか？綺麗なら一個くらい欲しいものだが」

「宝石は残ります。といつも、最近はその宝石のためにヨロイを狩つてるようなもんですよ。ヨロイの宝石は倒した奴のもんですから、そいつを街に帰つて売るんです。貴族さまたちの間じやけつこうな人気らしくて、この街の特産にもなつてるんですが、兄貴、ご存知ありませんか？」

「知らないな」

「兄貴なら一人で倒しちまいそうだ。一個と言わず、二個も三個も手に入りますよ。明日が楽しみですね！」

「虐殺だった。」

「1対79の戦争。」

「1は俺、相手は魔物が79体。虐殺しているのは俺だった。」

「うははははーすごい！ 濃いぞヨゾラー。ヨロイもが『ばらばら』じやー！」

「できるだけ細かく碎くことにしましょ!」

「うむ! 甲冑の破片は多ければ多いほどいい。ジソの街の新しい名産になるやもしれんからの!」

「ビー、火の玉の始末は任せると。適当に叩いて割つておけ。どうせ動けはしないんだ、一人でできるだろ?」

「うははは! ヨロイどもめ、まるで粘土細工のよつじやーうはははは!」

「なんだ……これ……」

「ビー、聞いているのか?」

「たしかに強いとは思つていたが……まさか、ここまで……」

「おい、ビー!」

「あ、はつ、はい!」

「聞いているなら返事くらいしてくれ。そのあたりでもがいでいる火の玉を割つておけ。どうやら火の玉は甲冑から離れられないらしい。一番大きい破片のそばをウロウロしているはずだ」

「了解です、兄貴つ!」

王女を抱いて森を駆け抜けながら、見つけたヨロイを破碎していく。腕を、脚を、胴を蹴つてバラバラに壊してゆく。ヨロイの甲冑は驚くほど硬かつた。四割の力でようやく割れるほどだ。蹴り方を誤ればすぐに足を傷めるであろう。油断できない敵であつた。

ヨロイはコミカルな魔物だった。甲冑は真っ黒でデザインもなかなか格好いいのだが、武器がただ太いだけの木の棒であつたり、ときには枯れ木そのものであつたりするのだ。ハイセンスな鎧が腐った木を抱えて突っ込んできたときなどは危うく噴き出すところであつた。武器は選べと。鎧を着ているくらいなのだから剣くらい持てないのかと。稀に剣や槍といったまともな武器を持って襲いかかつて来る個体もいたが、そのどれも武器の手入れがなつていなかつた。おそらく拾つたか奪つたかしたものなのであつた。つまり『自分の武器』ではないのだ。姿だけでなく、その在り方まで『がらんどう』

な魔物だつた。

最後の一體の解体を終えた俺は、近くにあつた大きな切り株に王女と一人で腰掛けた。ヨロイは全部で84体いた。その内79体を俺が壊した。周囲に魔物がいなことは音と匂いで知っていた。王女は「一トの前を開けてパタパタと胸を扇いだ。姉がいたらはしないと叱られるのだろうな」と考えて一人で笑つた。王女もむふふふ、と笑つた。

「楽しかつたのう。こんなに笑つたのは初めてじゃ。笑いすぎて汗を搔いたわ。帰つたらぬるま湯に浸かりたい」

「ヨロイの破片はどうします。アカデミーに寄付しますか?」

「なんじゃ、おぬし要らんのか? あれだけの量の未知の金属じゃ。かなりの額になるぞ」

「お金は口力一から貰う分で足りていますよ。それに、全部自分がものにしたのでは英雄らしくないでしょ? そんなのは駄目だ。格好よくない」

「おぬしもわかつてきたではないか」

「我が主は生き様の不細工な男がいつとうお嫌いなのです」

「うはははー言いおるわ!」

王女と手を繋いで集合場所まで戻ると討伐隊の人たちが化け物でも見たような顔を一斉に俺に向けた。そこそこ大きな体躯をしたビーが子犬のように駆け寄つてくる。俺は少しだけ気持ち悪いな、と思つた。

「兄貴、お疲れ様です!」

「疲れてはいない。キミの方が面倒な仕事をして疲れているだろ?」

汗を搔いてるぞ」

「俺なんて、兄貴に比べたら全然動いてません! へっちゃらです!」

「運動量の話はしてない。が、まあ、いいか。疲れていないならあちにある欠片を回収してきてくれないか。十分の一をキミにやる。売つて駄賃にするといい」

「そ、そんなにいただけません！」

「キミは俺の従者だろ？ 給金も払っていいんだ。それくらいは受け取れ。どうしても要らないというなら壁の外の子どもたちに小屋でも建ててやれ。友達がいるんだろう？ 残りは全てアカデミーに寄付するから、そのように手配してくれ。俺たちは先に帰る」「はい！ ありがとうござります、兄貴！」

さて帰ろう、と歩き出すと、一人の男が俺たちに近寄ってきた。戦闘前に喧嘩を売ってきたあの微笑ましい男だった。彼は道を塞ぐように俺の前に立つと、深く頭を下げて「すまなかつた」と言つた。「俺あ……調子にのつてた。馬鹿な事をしちまつて、本当にすまなかつた」

気にしていません、とだけ答えて俺は彼の横を素通りした。

やがて森の外に出る頃、王女が一ヤリと笑つて俺の顔を見上げた。

「気にしていません、か。ぬふふふ」

「あれはなかつた」と俺は言つた。「もう少しマシな言つようがあつただろう？」「にじやな」

「屋敷に戻つたら会議じやな」

「議題は何ですか？」

「無論、英雄ヨゾラの恰好いい決め台詞を考えるのじや」手を繋ぎ、仲のいい兄妹のよつに俺たちは笑い合つた。吹く風は冷たく澄んでいる。

もうすぐ街に冬が来るそつであつた。

冬の香りたちこめる季節、

お変わりなくお過いじのことと思ひます。

さて、私は今ある街で教員をしております。

場所は貴方のお住まいより馬で一日離れた所ですが、走ればすぐ
でありますよ。

バビです。

是非一度遊びにいらしてくださいね。
まずは連絡まで。

敬具

なんちやつて。

ひるまです。お姉ちゃんですよ。

旅人さんからお便り頂きました。

いいひとに拾われたのですね。お姉ちゃんは嬉しいです。

私は今、バビの街で先生をしています。

お家は、詳しいことは書けないのですが、ある人のお屋敷にお世
話になつていますので、心配しないでください。

実は、バビの街で、この世界の秘密について少しだけ知つて
いる人とお知り合いになることができました。もしかしたら、意外に早
く元の世界へ帰ることができるかもしません。

いづれ私のほうから会いに行きますので、よぞらは無理をしてお
姉ちゃんに会いに来たりなどせず、自分の生活を優先してください。
お姉ちゃんは今、わりとお金持ちなので余裕があります。

私にお手紙を送るときは、王立第一碩学院のナツノ宛でお願いし
ます。二級の旅人さんに着払いで依頼していただいてかまいません。
何度も書きますが、お姉ちゃんはリッチです。そしてティヴィッドは
リンチです。

書きたいことはまだまだ山ほどありますが、今回はここまでとし

ます。

体に気を付けて、詐欺にも気を付けてください。お姉ちゃんはよぞらが心配です。

それではバイビー。

お姉ちゃんより

ある少年の日記

10/24

未来の俺には子どもがいるらしい。そんなことをあさこが言った。あさこの予言が外れたことはない。

子どもがいることよりも、この世界を出てこくことが確定しているという事実が悲しい。俺の妻になる女について聞いても、あさこは何も教えてくれなかつた。おさらく相手はあさこではないのだろう。

ここを出れば全てを忘れてしまう。俺はあさこを忘れてしまうのだ。

そもそも生きた時代が違う。俺が元の世界に戻つても、そこにはない。まだ生まれてさえいないのだ。生まれるまで待とうにも、この世界での記憶を持ち帰ることはできない。

この世界で出会い、こんなにも愛し合つていて、元の世界に戻ればこの愛も消えてしまう。そうして今は知りもしない女を抱き、子どもを産ませるのだ。

あさこが言うのだから、その未来は確定している。

俺はあさこを忘れ、顔も知らぬ女を愛し、抱くのだ。

気が狂いそうだ。

夢むえ霞む白の森。田の月が白のあかりで白い樹々を照らす。
ほかに色はなく、世界はただ白で出来ていた。
地を隠す白の粉。降る雪の白が樹の葉の白に重なり白い音を鳴らす。

ほかに色はなく、世界はただ白の中についた。
彼女に会おう、とわたしは思った。
愛した人と、顔も知らぬ女の娘に。

「いっちですね、とわたしは言いました。そうしてわたしは人様の
お庭を横断しました。もちろん挨拶は忘れません。ここにちはと言
えば庭木いじりをしていらっしゃった家主のおじい様はやあ先生と
返してくださいます。ちょっと通つていいですか。また物探しですか。
そんな感じです。お気を付けなされよ。どうも。わたしはペ
こりと頭を下げて目的地へと向かいました。てくてく歩きます。
池のある広場が見えてきた頃、助手君が体からおずおずした音を
出しながら言いました。

「先生は、いつもああのですか」
わたしは立ち止まり、振り返つて首を傾げました。「ああ、とは
?」。わたしは聞き返します。せつかく人間に生まれたのですから、
言葉は意味の伝わるように使っていただきたいものでした。

「さつきの家、結構なお屋敷でした。立地からいって、一級市民様では？」

「ええ、バロネットでいらっしゃるとか。尤も一代限りの名誉爵位で、領地なども無いそうですが」

「貴族さまぢやないですか……。いいのですか、あんな態度をとつて」

「いいんぢやありませんか？好きな時に来ていい、庭で焚き火をしたつてかまわないと仰いましたし」

「世の中には社交辞令というものがあります」

「世の中には嘘や社交辞令を見破る女がいます」

助手君はぐむむと言いました。わたしはおほほと笑いました。

「だいたい、いつの間に親しくなられたのです。接点が無いでしょう」

「七日ほど前でしょ？　八日だつたかなあ？　あのお宅の前を通つた時に、明らかに目の悪い男の子がいたので」

「はあ。いたので？」

「治してさしあげたのです」

「え？」

「だから、治してさしあげたのですよ。ちゃんと見えるように。目が見えないと危ないでしょ？」

「いや。ちょっと……待つてください。治してさしあげたつて。簡単に言いきりましたが、それは、先生以外にはできないことですからね？」

「そんなことはありませんよ。『レリ』にはまだ無いだけで、超音波治療は視力回復にそれなりの効果を認められています。安全基準と利権を無視して上手にやれば、短期間でも視力はそこそこ回復するのですよ」

「とんでもない技術ですね。異世界人はみんなそんな真似ができるのですか？」

「協力者と機械をいじる知識があればできるのではないでしょ？」

? 一年もあれば可能でしょう。一人で十分以内、となると流石に難しいでしょうが

「つまり、先生は十分で子どもの目を見えるようにしたと「正確には六分ですね。少しほ見ていたようですから

「……」

「そうしたら次の日、ツバメさんのお屋敷に男の子といふ両親、それからおじい様おばあ様が馬車一杯のお土産を持っていらっしゃいますして」

「……」

「今後なにがあつても王太子殿下の御為に乞く所存で御座居ます、つて。いやはや、皆さん大泣きで参りましたよ

「……」

「それからですね、あの御一家と仲良くなつたのは。そうやう。さつきはいらっしゃらなかつたようですが、おばあ様が服飾のお仕事をされていらっしゃるとかで、わたしが『肌が弱くて困つて』と言つたら、肌触りのいい服を何着も作つてくださつたのですよ。いま着てこるこれもそうです。わたしの世界ではこれを白衣といいます」

似合います?とくるくる回つて見せます。小学生から変わらぬ姿を生かした可愛さアピールでありました。ツバメさんからは大好評を博したもので。十歳の少年が真つ赤な顔をして「に、似合つ。とてもよい」などとのたまつた時には邪悪な感情が止めどなく溢れたものでした。しかし助手君はいつものように怖い顔でわたしの眉間あたりを見つめるだけでした。社交辞令を知つてゐるくせに実践はできないというのです。断言しますが、彼は女の子にモテません。今後もモテる」とはいはでしょ。弟と同類の匂いがします。あれもかつて「俺は嘘が苦手だ」などとおぼざきになりました。意図せぬかたちで馴熟落を言つて恥ずかしい思いをすればよい、或いは素足でミニカーレ踏んで痛みに悶えればいい。そう思います。

「そのハクイとこう上掛けですが、助手君が泣い顔のまま言います。

「その光沢はレソガニですよね？」

「レソガニ？」わたしは聞き返しました。「ブランド名ですか？」

助手君は大きな溜息をつき、「知らないならないです」と言いました。

「行きましょう。次はどっちです？」

なにやら一抹の不安を感じながらも、わたしは目的地への少しの

し歩いてゆくのでした。

用事を終え、お屋敷に帰ったわたしは真っ先に厩舎へと向かいました。以下はそこでの会話です。

「ただいま、ヨシムネ君。はい、人参ですよ」

「おかえり人間。ぼくこれ好き。これ好きだよ」

「もう一本ありますよ」

「ぼく人間すきだよ。おいしいのくれるから。でも散歩はもっと好きだよ。ぼく散歩にいきたい。ちゃんと草のどこ歩きたい」

「お散歩は明日いきましょうね。明日はわたし、お休みですから。街の外まで行きましょう」

「あした散歩つ。あした散歩にいくんだ。草のどこ歩く。ちょっと走る。ぼくすぐ忘れるから人間、ちゃんとおぼえててね。あした散歩」

「はい。明日になつたら行きましょうね」

お馬さんと美少女（調子にのりました）の心温まる会話シーンですが、実際には小っちゃいのとでつかいのが向い合つて互いにバヒ言つてゐるだけでありました。切ない話です。

お屋敷に入ると忠犬のように玄関で待つていたツバメさんが大玉花火のような笑みを浮かべられました。わたしはただいま帰りました、と言い、彼はつむと素つ氣無さを装つて頷きました。出会つたばかりの頃は「ひるまー、わーいわーい」と抱きついて来たのですが（表現には誇張があります）、学長先生ご乱心の一件以来すっかりそんな子どもらしさが引っ込んでしまわれました。あれはあれ

で、三歳くらいの頃のよぞらみたいで可愛かったのに。成長とは悲しいものです。幼児性愛のひとの気持ちがわかりかけていたのですが。まったくもって残念でした。わたしの頭も残念でした。

手洗い洗顔うがいをしてツバメさん用の居間にいると、そこではツバメさんとリロさんがそわそわした様子で待っていました。騎士のキブさんはいつもどおり執事の格好をして壁際で石像になっていました。わたしはさて、と言いました。掛けよ、とツバメさんがソファを勧めてくださいます。わたしははい、とだけ言って座りました。しかしてツバメさんは仰いました。

「して、どうであった」

ツバメさんは不安そうな表情でわたしを見ました。『音』も不安と、そして僅かばかりの期待を奏でています。リロさんからも緊張が伝わってきます。変わらないのはキブさんだけでした。

ええ、とわたしは言いました。そしてわたしは調査の結果をツバメさんに いいえ、ノギオム王子殿下に報告したのでした。『噂は真実です。報告された他にも、既に二名が殺されていました』ツバメさんはなにかを言おうとし、けれどもグッと堪えました。わたしはただ告げました。

「この街に、魔物が入り込んでいます」

「魔物、ですか？」

わたしは首を傾げました。そういえばまだ見たことがないな、と思いました。いつかは見たいのです、魔物さん。できたらうんと大きいのがいいですね。

「そう、魔物だ。魔物。ほんと、笑わせてくれるよ

「『冗談もほどほどにしてほしいぜ。街の中に魔物なんかがいたらすぐ見つかるってんだ。馬鹿貴族のガキが虐め方を間違えて殺しちまつたんだよ。そうに違いない。それが見つかってもんだから、ビビって『魔物がやつた』とかなんとか囁いたのさ。『俺は見たんだ。疑つつもりか』とも言つときや誰も突つ込んで聞きやしないからな』

「でも、調査隊が組まるのでしょうか？」

「問題はそこなんだよ。キミのせいだぜ？ 王子殿下が協力を申し出るなんて思いもしなかった。ちくしょつ」

時刻はお昼休み。場所は第一アカデミーの、わたしの研究室。話しが相手の、白髪長身の異世界学教諭は、今回彼が巻き込まれてしまった事件の概略を語つてくださったのでした。

始まりは三日前でした。

その日の夜、研究室でひとり筋トレをしていた躰裏さん（じい）、笑いどころではない（もと）に学生が訪ねてきました。彼はセカンドアリの前期生で、躰裏さんの『異世界学』を選択している人物でした。彼は躰裏さんに言いました。

「いや、参ったよ。真っ青な顔して『学校の敷地内に魔物が出ました、すぐ来てください』だからな。飲んでた茶を零しちまった」

躰裏さんは急いで現場に向きました。呼びに来た学生と二人で、警備の兵隊さんも連れずに。彼は魔法を使えるうえに魔物退治も何度も経験しているので、調子にのつていました。本人は否定していますが、そうに違ひありません。調子にのつていたのです。

「違うつづってんのに」

「どうでもいいので先をお願いします」

「キミ、俺のこと嫌いだろ」

「先をお願いします」

「もしかして魔法が羨ましいのか？ 自分に才能がないから。そうなんだろう」

「躰裏さんが面倒そうに言いました。

「どうぞ先を」

「そ」

「先を」

「…………」

お調子者で約束破り常習の躡裏さんはその時も調子にのつて忍者走りで現場に駆けつけました。場所は校舎の外にある剣術練習場でした。そこには男の子の頭部が転がっていました。体はどこにもありませんでした。彼はプライマリの3年生でした。先月9歳の誕生日を迎えたばかりでした。

「俺が着いたとき、そこには死んだ生徒の頭しかなかつた。俺を呼びに来た奴は寮で上級生に頼まれて俺の所に来たそうだ。現場にその上級生はいなかつた。呼びに来た奴の話じや、そいつが発見者だということだつた」

「呼びにこられた学生さんが嘘をついた、ということはないのでしょうか」

「俺もそこを真つ先に疑つたよ。だが結果は白だつた。彼を俺の元に走らせた学生は確かに存在したんだ。そいつはシニアの学生で、俺も知つてゐる奴だつた」

「では、犯人はその学生だと？」

「俺はそう睨んでる。ただ」

躡裏さんは目を細めて言いました。

「ただ？」

「今回の件、不可解な点があるのも事実なんだ」

躡裏さんは卑猥な目をして語りました。

「おい待て。俺のどこが」

「いいから話してください」

「…………」

躡裏さんは夜が明けるのを待たずに男子寮へと向かい、第一発見者の学生を訪ねました。その頃には学長先生（新任のおじいちゃん先生です）が被害者の家に出向いていました。

この国の司法・警察機構は日本に比べてかなり幼いものです。地方において警察の代わりは貴族軍であり、その兵隊さんは平民の子どもが一人亡くなつたくらいではそうそう動きません。王の直轄領であり、貴族や他国の王族まで通うアカデミーもあるバビにはそれなりの数の王様直属の兵隊さんが常駐していますが、それも、進んだ文化圏から飛ばされてきたわたしの目から見れば優秀なものとは言えません。強者が弱者を虐げるのがあたりまえの世界です。時代劇をこよなく愛する躰裏さんは悪の栄えを嫌つたのでした。

遺体の第一発見者は大貴族・アカブ伯爵家の長男でした。

躰裏さんが部屋を訪ねると、同室の生徒が顔を出しました。彼は無駄だと思いませんが、と言つてドアを開けました。中には真っ青な顔をしたアカブ長男氏がいました。彼は震えながら窓の外を見ていました。足音に振り返り、躰裏さんを見るなり彼は言いました。「シモンの幽霊が来る。生きていたんだ。次は僕の番だ」と。

「シモンさんってどなたですか？」亡くなつた男子生徒の名前はロブロ君だったと思いましたが

「五年前に、森で魔物に食われた生徒だそうだ。ロブロ少年を殺したのはそいつの幽霊なんだよ」

「長男氏がそう言つたのですか？」

「『間違ひなくシモンだつた。奴は白い化け物を連れていった』だどさ。曰く、殺したのはシモン君とやらじやなく、そいつと一緒にいた化け物らしい。化け物は俺と同じくらいの身長で筋肉ムキムキ。おまけに腕が四本あつたそうだ。白い大きな布を頭からかぶついたらしくて、それがずれた時に二本目と四本目の腕が見えたんだつてよ」

「それはそれは。正氣ですか？」

「人間、追い詰められるとパニクつておかしなことを言い出すからな。そういう意味で言うなら、まさしく正氣じやあなかつたんだろう」

「首だけ残して行つたのには理由があるのでしょうか？なにか、宗

教的なモチーフだと、そういうものが

「さあね。というかキミ、犯人化け物説を信じるのか？」

「純粋な好奇心というやつですよ。殺したのが長男氏であれ化け物さんであれ、首だけぽつんと残して他を持ち去る理由が私には思い付かないもので」

キミは存外ウソツキだな、と躊躇さんは言いました。わたしはにこりと笑つてとぼけました。

さて、ここからが問題がありました。

街に魔物がいる、となればそれは大事です。なんとしてでも探し出し、退治しなければなりません。本来であれば「街に魔物が」などと言わっても信じる人はまずありません。しかし今回は証言者が問題でした。大貴族の跡取りが、アカデミーの教員相手に証言したのです。第一アカデミーは王立の教育研究機関であり、その長は王の代理として領地を運営します。アカデミーの教職員は、すなわち王の直属の部下に極めて近い存在ということになります。そんな教職員の一人である躊躇さんに、王様より領地を拝領した大貴族の跡取りが証言したのです。こうなつては、十人中十人が嘘だと思つていても、無碍にできるものではありません。誰かが何らかの行動を起こさなくてはなりませんでした。しかして着任したばかりで雑務に忙殺される学長先生は、その矛先を躊躇さんに向けたのでした。

「キミが相談されたんでしょう？ 調査はキミがするように」

そう言われてしまえば躊躇さんには返す言葉がありませんでした。何せ彼は「アカデミーで起きた事件を放置することはできない」という理由を持ちだしてアカブ長男氏の部屋を訪ねたのですから。

その翌日、つまりきのう、躊躇さんは「話がある」とつてわたしの研究室を訪れました。わたしは快く彼を迎えて入れました。ようやく来たか、と思いました。わたしは『あること』を期待して彼をずっと待つていたのです。しかし予想は外れました。話は魔物調査がどうたらということでした。そういえばそんな話を学生たちがしていたなあ、とわたしは思いました。極めて興味がありませんでした

た。躰裏さんは言いました。

「キミの耳を貸してほしいんだ」

「返してくださいね。こんなのでもお気に入りなのです」

「アカブの馬鹿息子の発言、その真偽を確かめもらいたい。どうせ嘘だとは思うが、確証がほしい。キミは人の嘘を見抜くんだろう?」見抜くのではなく聞き分けるのです。いいですよ、それくらいでしたら。 ちつ

「あれ、いま舌打ち……」

「していませんが?」

「いや、いま確かに」

「していませんが?」

「こうしてわたしは彼に協力することになりました。わたしはどうせすぐ終わるのだわ、などと事態を乙女チックに楽観視しておりました。そうはなりませんでした。今では後悔しています。叶うなら

きのうのわたしの足の小指を踏んづけてやりたいものです。そしてきのうの躰裏さんの背中に爆竹を入れて差し上げたいものです。わたしと躰裏さんはアカブ長男氏の部屋を訪ねました。この時わたしは事情を深くは知らず、また興味もありませんでした。ただ長男氏の発言の真偽を躰裏さんに伝える簡単なお仕事と聞いていました。躰裏さんの音に嘘や企みのそれはありませんでしたから、別段心配も警戒もしていませんでした。

「帰つてください」
ノックをし、わたしが声をかけると、部屋の中からそんな言葉が返つてきました。
「あなたに話すことはありません。帰つてください」
アカブ長男氏はわたしを強く拒絶しました。ああそうか、とわたしは思いました。

簡単な話でした。『黒の魔女』は有名になりました。小柄な女教師が王子に向けられた暗殺者を皆殺しにして、主犯の学長を拷問した。そんな噂が今や街中に流れています。その方法を聞

いてくる方々があまりにも多くいらっしゃるので、わたしは説明が面倒になり「秘密の魔法です」などと言っていました。そのツケが回ってきたかたちでした。

「得体の知れない術を使う魔女を側に寄りせるわけにはいきません。僕はアカブ伯爵家の跡取りですから」

そう言われてしまえばこの街では誰も、王子殿下や学長でさえ言い返すことができないのでした。何故なら、わたしが口止めしているからです。対人用の奥の手である『頭痛』と『反射』はできれば隠しておきたい技能でした。

長男氏は「帰つてください」を繰り返しました。わたしは躊躇さんを見上げました。彼はドアに向かつて声をかけました。

「俺一人なら入つてもいいのか？」

「……シチノミヤ先生はかまいません。話したいこともありますから」

躊躇さんは肩をすくめました。

「悪い。そういうことみたいで」

「いいえ。かましませんよ。」

「……あのさ」

「なんでしょう」

「俺、キミに何かしたか？」

「いいえなにも。するべきこともしていませんね」

「えつ？」

「では失礼します」

そうしてわたしはわざと足音を立てて研究室まで戻るのでした。助手君は出掛けているようでした。研究室に入ると、わたしは椅子に深く腰掛けて目を閉じました。

躊躇さんがわたしの力を勘違いしていることは知っていました。彼はわたしを『嘘を見破る』ことと『動物と話す』ことができるだけの女だと思っています。頭痛や反射運動で人や動物に自殺を強制することができるとは知りません。そしてわたしが半径1キロ以内

の会話を全て聞き取れることもまた、彼は知らないのでした。

わたしはフウ、と溜息をつきました。わたしは音の取捨選択を無意識的におこなうことができます。今は男子寮の一室で教員と学生が話しているのを聞くとはなしに聞いていっているところでした。

「先生を呼ぶように指示したのは、シモンの連れていた『アレ』が異世界のものだと思ったからです」

「僕は見ました。確かに見たんです。死んだはずのシモンが、あの白い化け物に命令して平民を殺すところを」

「僕じゃない。先生が僕を疑つてるのはわかってる。でも本当に僕じゃないんですね」

「信じてください。あれはシモンの幽霊なんだ。助けてください。シモンは僕を恨んでる。僕があいつをおいて逃げたから」

「次に殺されるのは僕だ。次は僕の番なんだ」

「助けて。助けて。助けて。……死にたくない」

わたしは目を開けました。まいったなあ。事態は思つていたよりも少しばかり深刻でした。わたしは再び目を閉じ、そして誰にともなく呟くのでした。

「彼の音、これ、嘘なんてついていませんよ」

その日、お屋敷に帰つたわたしはツバメさんに『今日の出来事』をおはなししました。その日起きたことを互いに報告する。これはもはや日課になつていきました。

そうして今日のお昼休み、躰裏さんがわたしの研究室に怒鳴りこんできました。

「大事になつちまつたぞ、どうしてくれー！ガキの嘘を本気にしてくれやがつて！」

「ノックもせずに失礼な人ですね。人語はわかりやすく意味を込めて話してください」

「調査の件だ！……今朝、警備隊の連中が家まで訪ねてきた。『王

子殿下よりお言葉を賜り』とか言つてたぞ。あれ、キミが王子に言つたんだろ。連中、指揮権は俺にあるとかほざきやがつて……どうしろつてんだ！』

「なるほど。殿下は行動がお早くていらっしゃいますね」

「あくまでしらを切るか」

「白髪も切つて差し上げましょつか？男の人は短い方がいいですよ」

「まったく、冗談じやないぜ」

躊躇さんは言いました。

「魔物なんて、街のどこ探したつているわけねえつてのこ」
しかしてわたしは首を傾げ、疑問を口にするのでした。

「魔物、ですか？」

犯罪人シモン・アテラキをわたしが殺すことで事件が解決した翌日。

その夕方、ヨシムネ君との散歩から戻つたわたしにツバメさんが駆け寄つて来ました。

「ヒルマ、大変だ！そなたに客が来ておるぞ！」

ツバメさんはとても慌てた様子でした。わたしはヨシムネ君からおり、お屋敷の庭に入りました。すぐに騎士さん（学長事件のあとに補充された騎士さん。名前は知りません。）がヨシムネ君を厩舎まで連れていつてくれます。騎士さんにどうも、とお礼を言い、わたしはツバメさんに向き直りました。

「そんなに大変なお客様なのですか？」

お屋敷の中にどこかで聞いた音を発する女性がいるのがわかりました。はて、どこだつたでしょつか？

ツバメさんは「つむ、」と言ひ、わたしの手を掴んでお屋敷へと引つります。

「そなたの親戚を名乗つておる。めっぽつ強くて、リロが人質になつておる」

「人質つて……」

「いや、危害は加えられておらん。大丈夫だ。ただ、リロの奴は触られただけで石のように動かなくなつてしまつたのだ」

「それは大丈夫と言つていいのでしょうか」

「ヒルマが来たらすぐ元に戻す、と申しておる。男はひとつしりかまえているものだ。なにもできないならば尚更な。して、心当たりはあるか?」

「さあ、この世界にいる親戚といつて、よぞらぐらいしか。でも、そんな音はしませんね。うーん。この心音、どこかで聞いた気がするのですが、どこだつたか……」

「そうそう、名はアサコだそうだ。女だ」

「あさこさんですか。日本人のお名前ですね。……うーん、やつぱりわたしの親戚にそんな人は」

あれ?

なにか、頭の中に引っかかるものがありました。
あそことこいつ名前、どこかで……。

「ああ、そうだ」

思考を遮るようにツバメさんが言いました。

「せやつ、もしもそなたが信じない時にはこいつ言えと申しておつた」
そうしてツバメさんは、懐かしき友人の呼び名を音にしたのでした。

た。

「わたしはアカマのリロです」と

おひめこへひるめとつさんとかこせないわかん

放課後のことです。場所は躊躇裏さんの研究室。わたしと躊躇さんはロブロ少年殺人事件についての意見交換をしていました。躊躇さんが調査隊の指揮をとることになった原因の半分はわたしにある。そんな事実が罪悪感もどきをわたしの良心に集中砲火し、こうしてお手伝いなどしている現状を作り出しているのでありました。わたしはいい奴です。何度も言います。わたしは実にいい奴であります。

「そういえばキミ、ツチクイって知ってるか?」の国じゅう割と有名な魔物なんだが

躊躇さんが言いました。硝子のない窓から差し込む日差しで彼の白い髪はキラキラ輝いています。わたしは笑顔で答えました。

「ちつ。　いいえ、知りませんね」

「ああ、やっぱり知らないか。ツチクイっていうのは　あれ? いま、舌打ちした?」

「していませんが」

「しただろ。いま、けつこう大きく。なんで嘘つく」

「していませんが

「…………」

「していません」

「…………うん、わかった」

「それで、ツチクイっていうのはどういった魔物さんでいらっしゃるのでしょうか?」

「…………最近ずっとそんな感じだが、もしかしてキミ、本気で俺のことを嫌つていたりしないよな?俺の喋り方、ウザいか?それとも馴

れ馴れしいか？もしそうなら接し方考えるけど」「そんなことはありません」

「実際、この世界で日本人と接触したの、初めてだから、ちよつと舞い上がるといふは否定できないし」

「本当に氣にしていません。そういうた思考も理解できます」「ほんとに？」

「ええ」

「ならいいけど」

「ところで、わたしは借りたお金を返さない者を人とは思ひなと母から教わっているのですが、躊躇さんはそのあたり、どのようにお考えでしちゃう？」

躊躇さんはかつてチンピラのお兄さんに絡まれたときのシホウ君より速い動きで財布を出しました。ちなみにシホウ君といふのはお友達のお兄さんです。弱つちくて愉快な人です。

「すまなかつた。完全に俺が悪かつた。すっかり忘れてた。俺はもう、本当に、どうしようもない駄目な奴で」

「そうですね。人に借金したことを忘れるなんて、躊躇さんは本当にどうしようもない駄目な奴です。一度おくだばりになられてみてはいかがでしょうか？なにかが変わるかもしれませんよ」

「そんにか。待ってくれよ、言い訳をさせてくれ」

「申し訳ありませんが、お客様の心は着信拒否されております。ピー」という発信音のあとに首を吊つてみるのはどうでしょうか？」「自殺をすすめるな」

「ピー」

「催促するな！しねえぞ自殺なんて！」

「まあまあ、いいじやありませんか自殺ぐらい。この世にまだ死にたくて死ねない人が山ほどいるのですよ？」「キノコ残した時のお母さんみたいなこと言つのやめてくんない？俺の命は消費されるためにあるもんじやねえからな」

「いいじやんかよつ」

「キミ、打ち解けると途端に馴れ馴れしくなる奴だな

「そんなわたしにラブですか」

「それはない」

「わたしもです。今後ともその調子で宜しくお願ひします
「ちつたあ残念がれよ。」こう見えても俺、元の世界じゃモテモテだ
「つたんだぜ。女なんか取つ換え引つ換えの男前ハーレム野郎だぜ？」
「そうそう。ご存知でしょうけれど、わたし、人の嘘を見抜くこと
ができるのですよ。そのことを忘れて嘘自慢だなんて、まさか躰裏
さんはしませんよね？男前ハーレム野郎でいらっしゃる躰裏さんは
もちろん、ねえ」

「…………」

「うふふ

「女となんか、手え繋いだこともないです。……研究一筋で生きて

きたから」

「そのようですね」

「師匠の奥さん以外とは、喋つたこともあんまりないです」

「そのようですね」

「…………うん」

「その内いいことがありますよ」

「この際もう性格は悪くていいから可愛い女に愛されたいです」

「必死すぎます」

「ぶつちやけ可愛くなくともいいです。といつかもづ、人類の女な
ら誰でもいいです」

「そのアピールは逆に印象悪いです」

「でもキミはなんか違うので嫌です」

「わたしも御免です」

「…………」

「…………」

無言で交わされるハイタッチ。躰裏さん的にはミドルタッチです。
お金の貸し借りが無くなり、仲良しになつたわたしたちなのでした。

「それで、ツチクイさんとやらばどいつた方なのでしょう?」

「ツチクイってのはさ、人間と蟻と蜘蛛を足して3で割つたみたいな魔物なんだ。名前の通り、群れで土の中に住んで、土だけ食つて生きてるような奴らなんだけど」

「ふむふむ」

「そいつら、腕が四本あるんだ」

「ちょっとストップでお願いします。 踏裏さんはもしかしなくても、ロブロ少年を殺害したのがそのツチクイという魔物だとお考えになつていらつしやるので?」

「この近くに巣があるという話は聞かないが、いないとも限らないだろうや」

「……まあ、それはいいでしょ?。とにかくそのツチクイさんは、踏裏さんと同じくらいの身長をしていて、筋肉がムキムキでいらして、更には一本の足で歩くような魔物なのですか?」

「俺は実物を一度見ただけだが……まあ、腕はそんなに太くはなかつたな。一足歩行はちゃんとできてた。身長は……」

「身長は?」

「……成体で、人間の子どもぐらい」

「駄目じゃありませんか」

「突然変異ででかい奴が生まれることが有り得ないとは言いきれないだろ?」「

「『魔』を食べた動物は強く硬くなる、という話でしたらセキエ先生から聞きました。でも、体が大きくなるまで食べ続けられるよう

な個体は極めて稀で、大抵はその前に死んでしまうらしいですよ?」

「それは俺も知ってるさ。けど、アカブの馬鹿息子にツチクイのことを話したら、あいつ、言つたんだ。『たしかにツチクイを大きくしたような奴でした』って。そのときキミはいなかつたが、俺には奴が嘘をついていたとは思えない。次は自分が殺されるかもしけないと怯えている奴が、犯人の特徴に嘘を混ぜるか?」

「そんな精神状態だからこそおかしなことを口走ることもあるでしょう。だいたい躰裏さん、最初はアカブ長男氏を疑っていたじゃないませんか」

「間違いはすぐに認めろって師匠からも言われてるんだよ。それに、あの馬鹿が嘘をついてないって教えてくれたのはキミだろ?」

「それはそうなのですけれど、嘘でなかつたからといって、眞実が言葉通りであるかと言われたらそれはまた別の問題なわけで。魔物にしろシモン氏のことにしろ、わたしはアカブ長男氏の見間違いだと思っているのですよ。うーん。絵に描けませんか、そのツチクイというの?『ツチクイを大きくしたような』外見というのがどうこうものか、実物を知らないわたしにはちょっとイメージが掴めないのですよ」

「絵、下手なんだよ俺」

「なんと。お仲間さんじゃありませんか。いろいろ気が合いますね、わたしたち」

「なんだよ、キミもか。俺なんか高校時代、美術の成績2だつたぜ」「わたしは4ですね。他は全て5です」

「…………ちつ」

「絵は弟の専売特許なのですよ」

「そんなに上手いのか」

「あれの絵心は常軌を逸しています」

「下手なのか?」

「技術だけを言えば800万画素のデジタルカメラをゆうに超えるレベルです。恐ろしいのは感性です」

「わかった、あれだろ。へんなもん付け足すんだ。ははは。いるよなあ、そういう奴。上手い奴に限つてそうだ。俺の知り合いにもいたよ。ちゃんと描いたら綺麗な絵なのに、なんでか毎度毎度、随所にピーマンを散りばめるんだ」

「それはそれでなかなか面白いと思いますが、しかし弟は違います。あれは見たまま、そのままを絵に閉じ込めてしまうのです」

「閉じ込めるつていう表現はわからんねえけど、見たまま描くのは別にいいんじゃないかな? ピーマンよりよっぽど常識的な感性してるよ。写実的つてことだろ?」

「写実的……確かに、無機物を描くことに限定すればそれに近いと言えるかもしません。写実的な絵、ところは要するに、写真のよつな絵のことですよね?」

「絵には詳しくないけど、たぶん、ひとつの場所やものを細かく正確に描いたものをそういうんじやねえかな」

「ものは、ひとつの場合に同じ状態で停止してこることができるません。とりわけ生き物はそのあたりが顕著です」

「そりや、まつたく動かないってのは無理だろ? 生き物は呼吸もするしまばたきもするから」

「そのとおりです。弟はそんな微細な『動き』や『揺れ』を含めた、一定時間におけるモデルの『位置』を一枚の紙に描画するのです」

「…………うん?」

「弟の絵は、モデルが動けば動くほど、紙が黒くなつていいくのです。モデルがまばたきをすれば、目が閉じた状態から開いた状態までの『動き』を一枚の紙の同じ場所に描画します」

「それつてつまり……モデルの時間を絵に閉じ込めてるつてことか?」

「はい。動画を無理やり静止画にしているようなものです。よだらの描いた絵のタイトルは全てモデルを観察した時間になつてます。『五月十日。十五時から十六時』といった具合です」

「怖えよキミの弟。……想像と違にすざる」

わたしたちはロツフオ先生の研究室に向かいました。躰裏さんが役に立たないためです。ロツフオ先生は農業学（酪農）の技能教官ですが、躰裏さん曰く、家畜以外の動物や魔物にもたいそつお詳しいとのことでした。

「こんな感じかねえ?」

ロツフォ先生は羽根ペンでツチクイの絵を書いてくださいました。紙いっぱいに逞しい線で描くダイナミックな画風でした。

紙いっぱいに逞しい線で描くダイナミックな画風でした。

「大きさは、うーん、兵隊はナツノ君よりもまだ小さいくらいで…

女王は人間の女性と大差ないくらいかな」と

でした。

物なのでしょうか?」

「そうだが、厳密にいうとあれらは魔物ではないよ。ヒト種と同じように独自の言葉をもつた動物だ。魔物というのは魔を食べて変異した動物を言うのだよ。ツチクイが魔物などと呼ばれるのは、単純にその外見が人間にとつて『ぐろてすく』なものだからだ」

絵に描かれたツチクイは一足歩行・四本腕の蟻でした。頭は蟻、体も蟻、膨らんだお尻も蟻。羽をつけたら蜂と言えない」ともないでしょう。それが立っているだけでした。

かなか少ないのだよ」

ロッフォ先生はどこか寂しさを滲ませた声で言いました。

ツチクイ。一本の足で歩く巨大な虫……いくら頭から布を被つても、こんな生き物、衛兵さんが門を通すでしょうか？夜であればまだしも、門が開かれているのは日のある内だけです。街壁をよじ登つて侵入したと考えるのが妥当でしそうけれど、それもどうなのでしょう？王子暗殺未遂事件以降、バビの街の夜間警備はかなり厳重なものとなっています。衛兵さんたちが人間サイズの魔物の侵入を許し、あまつさえ今も捕まえられずにいるなどとは、わたしにはどうしても考えられないのです。

「やはり内通者、でしょうかね。だとすると目的は……」

「うん？ なにか言つたか？」

「いいえ、独り言です」

その後もロツフォ先生はツチクイについて解説されていることを話してくださいました。熱心に聞いてるのは犯人ツチクイ説を支持する躰裏さんで、わたしは上の空でした。わたしは頭の中で事件の内容を時系列に沿つて整理してみました。

- ・夜、アカブ長男氏とロブロ少年は剣術練習場で会っていた。
- ・そこに『謎の男』と『白い化け物』が現れる。
- ・『謎の男』が何やら咳き、『白い化け物』がロブロ少年の首を飛ばす。
- ・長男氏、男子寮へ逃走。このとき『謎の男』も『白い化け物』も何故か彼を追わなかつた。
- ・長男氏、ジュニア生に躰裏さんを呼ぶよう命じる。理由は『白い化け物』が異世界のものに思えたから。
- ・ジュニア生、躰裏さんの研究室へ。躰裏さんは彼を連れてすぐさま現場へ。
- ・躰裏さん現場到着。そこにあつたのはロブロ氏の首。
- ・アカブ長男氏は『謎の男』をシモン・アテラキ氏だと語つていて。街の警備隊は誰一人として『白い化け物』を目撃していない。
- 追記1 アカブ長男氏は嘘をついていない。
- 追記2 シモン氏は五年前に森で魔物のご飯になつている。そのとき彼を置き去りにして逃げたのがアカブ長男氏。
- 追記3 事件の際、『謎の男』とアカブ長男氏は言葉を交わしていない。

どうにもピースが足りません。わたしはなんだか頭がもやもやするのでした。一度手をつけたことは最後までやり抜かなくては気が済まない性分です。わたしはここにきて一つの決断をしました。すなわち、自分の手でこの事件を解決する決断を。

ロツフォ先生にお礼を言つて彼の研究室を辞し、わたしたちはそれぞれの下宿先へと戻ることにしました。今日の捜査はここまでです。今は雑談をしながら後者の玄関へと向かっているところでした。「そもそも躡裏さんは、なぜツチクイに思い至つたのですか?」「わたしは言いました。

「なにか切つ掛けがあるのでしょ?」

「動物と話す奴がいるんだ。魔物を操る奴がいたつておかしくはないだろ?」

「躡裏さんはなんでもない」とのよう言つます。しかし彼の『音』には明確に嘘がありました。わたしは田を細めて彼の顔を見つめました。

「勿論おかしくなんてありません。でも、それだけが理由ではないのでしょ?」

「そりゃあ、だつてキミの服装が」

「白衣がどうかしたのですか?」

「いや、なんでもない。やめてお?」

「?」

「なんでしょ? 気になりますね……。

「ところで、キミはこれからどうするつもりだ? 事件を解決しようと思つます、なんて言つてたけど」

露骨な話題転換でした。わたしは追求をひとまず諦めます。

「とりあえず、明日の放課後はアテラキさんのお宅を訪ねてみる予定です。」

「あんたらの息子は生きてるかもしれないぜ、つて?」

「まさか。ちよつとした確認ですよ。指揮官さまの方はびひなさるおつもりで?」

「その呼び名はやめてくれ。俺のほうは、調査隊連れて南の森をちよつと探してみるつもりだよ。ツチクイの巣でも見つかって儲けもんかな」

「危険はないのですか? 失礼を承知で言いますが、おそらく躡裏さ

ん、そこそこ程度にしか強くないのでしょう、弱虫臭がふんふんします」

躊躇さんはまあね、と言つて苦笑しました。

「俺は時空魔法の研究職だから。でもさ、戦闘に使える魔法こそ二流だけど、逃げ足だけは超一流なんだぜ？」

躊躇さんはニヤリと笑います。わたしはにへら、と笑い返しました。

「それを誇れる躊躇さんはわかっている人です。逃げる」とと負けることは違います。どんな人生も最大の勝利は幸福です。死以外の幸福を望むなら、幸福を手に入れるためには生きていることが絶対の条件となります。逃亡の善性を理解しない凡愚をわたしは常々悲しく思つてゐるのですよ」

「キミけつこう言つよな」

「間違つていますか？」

「なにも。まつたくもつてそのとおりだと思つね。俺に戦い方を教えてくれた人は『魔王』なんて呼ばれてたけど　　」「えつ？」

「　　その実、魔法はからつきしで、武器は逃げ足の速さと人脈だつたぜ。それでもみんなが認めてたよ。誰もこの人には勝てない、本当の最強はこの人だ、つてさ」

「魔王……？」

「そう、魔王」

魔王って、もしかして　　あのときの？

「だつさいあだ名だろ？でも実際、そう呼ばれるだけの人だつたよ。俺の知る限り、鈴風秋斗に対等と認められた人間は師匠と魔王さんだけだ」

「躊躇さん」

「うん？」

わたしの心臓はバクバクと、今にも破裂しそうに高鳴つていました。

「その人は……もしかしてキチジマといつ名前の、紫色の髪をした男性ですか？」

おつ、と躊躇さんは驚いたように言いました。

「なんだよ、知ってるのか？キミの時代にもいたのか、あの人」赤の塔で四時の鐘が鳴りました。ごおん、と重い音が響きます。

「……知っていますよ」

わたしは歯ぎしりして言いました。

そう、あの男のことは忘れもしません。

あの男は

「わたしとよぞらが協力しても勝てなかつた、ただひとりの人類ですから」

めりあさへりんりとおひじとかりまわるおとな

夏野女史と別れた俺は校門を出て下宿先へと向かった。厄介についている宿に着くまで、別れ際の彼女の顔が頭から離れなかつた。あの殺意を剥き出しにした顔が、どうしても。

『……知っていますよ』

あれはどういう意味だったのだろう。

彼女の弟、よぞらさんことは聞いている。いや、聞くまでもなく知っている。夏野よぞら。最後の殺人鬼。『瀕聖殺し』の息子。俺のいた世界、鈴風秋斗なきあの時代に、もつとも恐れられていたカミヤドリの一人。『現象全否定』のヨゾラ。俺の、命の恩人だ。サインは断られたが、ガキの頃に握手してもらつたことがある。

『わたしとよぞらが協力しても勝てなかつた、ただひとりの人類ですから』

彼は過去、一度だけ『紫天の魔王』吉嶋末紅きじまみくと戦い、引き分けている。あの魔王に負けなかつたのだ。そうして彼は有名になつた。これは史実だ。しかし、それを彼女が十七歳の夏野ひるまが知つてているのはおかしい。知つていてはいけないのだ。なぜなら『紫天の魔王』と戦つた時、夏野よぞらは既に十九歳だつたのだから。

いや、それ以前にも彼らは会つていたのか？
そして戦つていたのか？

彼女の口ぶりだと、二対一で？

だが、夏野女史に武力と呼べる力はない。アカデミー前学長の事件にしたつて、暗殺者を皆殺しにしたという話はどう考へても誇張だ。ノギオム王子は彼女に惚れているようだから、そばに置くに足る理由が必要だつたに違いない。夏野女史の能力はおそらく『嘘の拒絶』。それを上手く使い、口ハ丁で丸め込んだところをシノビがザックリ、というのが語られなかつた真相だろつ。

しかし、そんな誤魔化しや心理的な揺さぶりなど魔王には効かない。そもそもにして魔王がこの上ない策士なのだから。魔王との戦いで夏野女史が役に立つことなどありえない。けれど、あの表情は……。

わからなかつた。夏野女史はあれ以降、一言も喋らなかつたから。歩く道、目抜き通り沿いの布屋の屋根でカラスに似た鳥が喧しく鳴いた。俺は空を見上げ、すぐに顔を下げて溜息をついた。わからなることはまだあつた。もう一つの謎。そして最大の謎。俺の知る歴史 師匠から教わつた全てのカミヤドリの家族や友人、所属していた組織に至るまで 僕が暗記している彼らの交友関係。その中に、存在しない人間のこと。

そう、夏野ひるま。

彼女だ。

そもそも俺は『現象全否定』に姉がいるなど聞いたこともなかつた。

彼女はいつたい何者なんだ？

「おせーぞリンリ！」

南門を出たところでキンキン声に名を呼ばれる。俺は門番の衛兵に挨拶して声の主へと向かつた。アカデミーの教員なんぞしていると、自分一人なら通行税が不要というのが実によかつた。

俺はよう、と手を上げた。そいつはぼろを着たまだ十歳にもならない子どもだつた。名前をオモドクという。俺はボウリングの助走みたいな走り方で接敵し、オモドクの坊主頭をアンダースローでパ

シンと呴いた。

「いてえな、ばかリンリ！」

「躡裏さん、もしくは躡裏先生だつたるうが馬鹿ガキ。おら、荷物もて」

「うわあつ。なに入つてんだよこれ。重いよばかやうう！」

オモドクは不平を言いながらも鞄を持ってよひよろと歩き出す。筋トレをするときに顔にばかり力が入つて鍛えるべき箇所は全然、という奴がいる。こいつがまさしくそれだつた。口を富士山みたいに突き出した顔はなかなか愉快だ。

「だめだ、これ重いよリンリ」

「自業自得だうんこチビ。迎えなんぞ要らねえつていつも言つてんだろうが。毎日毎日門の前で出待ちしやがつて。てめえは鍛えられたファンか。俺はいつから追つかれられるほどビッグなアイドルになつたんだ。たしかに俺といつ男の恰好よわは認めるといひであるけども！」

「またわけわからんないことこいつ。なんだよあいじるつて。それにその長い白髪わりとだつせえよ。 なあ、ほんとに重いんだけど…」

「男がちょっと重いくらいでピーピー言つてんじやねえ」

「おいつ。おいてく氣かよ、おいつてばーリンリ！」

「ぐじいぞチビ」

「カツコいいリンリわん！」

「どれ貸してみなさい、重力を軽減してあげよつ。 しじうがない奴め」

「くそつたれ……」

オモドクとじやれながら南の森へ向かつ。門を出て、森に向かつて十分も歩けば目的の村は見えはじめる。そこは名前のない村だつた。村というより群れ。街の周りに人が集まり、小屋を建てただけ。バビやジソなどの大都市の周囲にはこうした集落がいくつもある。その中の一つが、バビの南の森手前にあるこの村だつた。いかにも、

俺の寝場所である。

俺は村に入るとオモドクを伴つて、集落で一番森に近い位置に建つ家へ向かう。そこに着くと俺は「おーい」と中に声をかけた。それは大きなテントだ。モンゴルの遊牧民の住居から飾り気を剥ぎ取ったような薄茶色のテントである。他の建物はみな木造の小屋にとこりどころ布を張つたものだが、この家だけは大きなテント。しかも入り口の上にはなぜか『技術準備室』という舌を噛みそな名が印字された『学校のプレー』トが取り付けられている。

ちよつと待つと中から「どうぞ、どなたですか？」と甘つたるい感じの男の声が返つてくる。俺は「俺だ」とだけ答えた。ややあって戸は中から開けられた。顔を出したのは金髪のがりがり男、このテントの家主、ニヌヨブだった。

「おかえり、リンリー」ニヌヨブはカサカサの唇とこけた頬で笑つた。「魔法つてやつも考え方のだね。戸に触れちゃいけないなんて、そんなんじゃ空き巣もできやしない」

「戸の外側だよ。正確には『入り口』だ。出口として内側から触る分には問題ない」

俺は戸に触れないようにしてテントの中に入つた。そして『一トを脱ぎ、オモドクの頭に掛ける。「わぶつ」とオモドクは言った。俺は大きく背伸びをした。

「それに、ん〜〜、空き巣は無理でも、万引きはできる。飢えても死にやしないさ。ガキどもはどうした?」

「向こうでお勉強中。キミのくれた本が気に入つたみたいだ」「拾い物だぜ? そんないいもんとも思えんがね」

「どうだか。綺麗な状態の本を十冊も捨てるような奴は余程の金持ちか馬鹿か、はたまた金持ちの馬鹿か、どれかだろうね。今に借金でもしなきやいいけど」

「物を大切にしない奴のことなんかしらねえよ」

すべてお見通しとでもいうようにニヌヨブが薄く笑う。俺はふんと鼻を鳴らした。その横を俺の鞄を抱えたオモドクが俺のコートを

ずるずる引き摺りながら横切つていく。

「おいチビ、仕切りは閉めるなよ」

「わかつてゐよ、ばかリンリ」

そうしてオモドクは奥の部屋へと消えた。その方向を「ヌヨブは

眩しそうに見つめる。やがて奴は言つた。

「夕飯にしよ。座つて待つてくれ。みんなを呼んでくるよ」

俺はああ、とだけ答えてクリーム色の絨毯に腰をおろした。「ヌ

ヨブの皿には涙の粒が見えた。

俺の診立てでは、奴の余命はもう一年も無かつた。

翌朝、俺はいつものように十人のガキどもに起された。そうして結婚してだの恋人にしてだのと騒ぐマセガキどもの足を持つて振り回し、オスのガキには『電気アンマ』をくらわすなどして、朝食をとつて下宿先を出た。玄関を出る時、ちゃんと帰つてこいや、とオモドクが言つた。不安を押し殺したような声だつた。俺は坊主頭をパシンと叩いた。

「いつてらつしゃ いだ、馬鹿チビ」

「さつさと行け、ばかリンリ」

「あいよ。いつてきます」

背後でオモドクが笑つたのがわかつた。まるで鎮だ、と思つた。動物愛護もほどほどにしろ、と頭の中では誰かが言つ。そこには酸の入つた唾を吐きかけてやつた。

街はどこか騒がしかつた。

なんだろう、と思い適當な通行人に声を掛けようとしたとき、近くから大声で俺の名が呼ばれた。

「いたぞ、シチノミヤ教諭だ！」

叫んだのはシノビだった。その声に反応して次々と仲間のシノビが集まつてくる。服装こそ平民風の装いだったが、間違ひなくシノビだった。黒尽くめでなくとも動きがシノビなのだ。彼らは足音も立てずに素早く俺を囲む。連携のとれた速やかな動き。虚を突かれ

たといつてよかつた。俺はくちをぽかんと開けたまま何もできずにいた。隠れて影から護衛することを職分とするシノビがなぜ朝っぱらから街の入口で俺を包围しているのか、俺にはさっぱりわからなかつた。

「ついてきてもらおう」

シノビの一人が言った。俺は黙つて頷いた。拉致される理由は皆目不明だったが、ここで逆らつても救い主が現れないことは自明だつた。ヒーローは女子供にしか興味がないのだ。俺は黙つて彼らのあとをついて行つた。どうやら行き先はアカデミーのようだ。嫌な予感がした。街の者たちが興味津々の様子で俺たちを見ていた。

「帰つてこない？ 夏野女史が？」

暗殺に怯える政治家のようだ大勢の人間に囲まれ、連れられてきた場所はアカデミー敷地内東部の屋敷群。その中でも一番目に大きな屋敷 即ちノギオム・アキト・スズカゼ王子殿下の別邸だつた。現在、俺はその屋敷の応接間のソファに座らされているのだつた。正面にはノギオム王子。彼の背後には騎士と執事とメイドが一人ずつひかえている。俺の背後には五人のシノビ。部屋には他にも十人以上の使用人もどきがいる。逃げたら殺すと言わんばかりのポジション取り。完全にアウェーである。

「正直に答えよ。おぬしはビルマの行方を知つてゐるな？」

俺の顔を真つ直ぐ見つめて王子が言う。彼の目には敵意と疑念の色があつた。若いな、と思つた。俺は儀礼表敬を捨ててこたえた。知りません、と。

「別に、私と彼女はそういう関係じやない。彼女は一人の自由な人間だ。どこかへ出掛けるのにいちいち私に報告なんざしませんよ。俺は陶器の茶碗から薄赤い汁を啜り、ふうと息をついて茶をまたテーブルに置いた。

「尤も、もしいま自分が彼女の居場所を知る身であつたとしても、

今の殿下にはお教えせんでしょうがね」「この態度に騎士が激怒した。

「貴様、なんという無礼！」

彼は執事やメイドや使用人もどきが止める間もなく俺に掴みかかつた。茶碗がひっくり返り、テーブルが汚れた。彼は俺の胸ぐらを掴み上げ、無理やり立たせて叫んだ。

「正直に申せ！話さんと切り捨てるぞー！」

俺は抵抗せず、両手を上げて審意なき身をアピールして見せた。そしてわざと大きめの声で騎士に言った。

「女を隠すなら、誰にも見つからぬ山奥がいいでしょ！」

「なんだと？」

俺の襟を掴んだまま怪訝な瞳で騎士が問う。俺は笑った。

王子と、彼の後ろにひかえる壮年の執事が反応を見せた。メイドも微かに目を細める。俺の勘が告げていた。この場で一番ヤバイのは執事とメイドだと。それに王子は思ったほど馬鹿ではないと。俺は続けた。

「女というのは喧しい生き物だ。手足と口は縛るのがいいでしょう。そうして魔物避けの結界札を頭に貼るのです。周りには魔を食らつた毒虫を撒き、血の滴る生肉も置きましょう。肉は、そう、羽なし鳥なんかがいいでしょう。騎士殿はご存知ですか？狼はあれの、若い女のように柔らかい肉にとことん目がないのですよ」

「よせ……やめろ……」

王子が言った。顔が真っ青だった。しかし騎士は俺の襟から手を放さない。王子の言葉が無礼者だけに向けられたものと思い違いをしているのだ。俺は更に続けた。

「結界札の効果は五時間。森からここまでは……ふむ、一時間はかかるでしうな。どなたか時計をお持ちじゃありませんか？森を出てからどれだけの時間が経過したものか、いやはや、私にはわからないのですよ。なにせ、街に入つて早々に拉致されてしまったものですからね。もしや、彼女の命はもう既に

「その手を離せ、ローオール！今すぐにだ！」

王子がテーブルを叩いて叫んだ。

絶叫とさえ言えるほどの中だつた。騎士が慌てて俺を解放する。俺は襟をたたし、ふんと鼻を鳴らしてローオールといつらしき騎士の股間を蹴り上げた。彼は「ぐうづ」と愉快な声を漏らし、体を小さく丸めて倒れ込む。俺は彼を見下ろし「忠誠心だけで食つていける仕事はさぞ気楽だらうな」と吐き捨てた。彼は俺を睨むだけでなにも言い返さなかつた。

俺はソファに座りなおし、王子に向き直つた。王子の皿にはうつすらと涙が膨らんでいた。「殿下」と俺は言つた。

「もしも今、私が『茶を用意しろ』と言つたら、殿下はどうなさいます？」

「用意する」と王子はこたえた。「……我が、自分で用意する」

「その理由は？」

「優先度。……おぬしの機嫌を損ねることで起つてゐる問題を回避するためだ」

悔しそうな顔だつた。悔しそうな声だつた。俺は満足して頷いた。「謹んでお慶び申し上げます。殿下は今日ひとつ賢くなられた。惚れた女ひとり守れぬ雑魚助が嫉妬と恐怖で力の使い方を間違えると悲惨な目に遭うということを学ばれた。嫌いな相手にも真摯な態度で接するべきだと氣付かれた。殿下はまだ王ではありません。学生が教師に頭を下げるなど、アカデミーでは日常茶飯事です」

「ここまで言うと流石に騎士だけでなく執事のほうも俺を睨んできたが、撤回はしなかつた。メイドが微かに笑つたのを俺は確かに見た。しかして王子はテーブルに手をつき頭を下げた。

「私は冷静さを欠いていた。おぬしが攫つたのでないことは考へばわかることであった。……すまなかつた。この通りだ。どうかこの我に、ヒルマの居場所を教えてくれ」

俺はこたえた。

「いやあ。実のところ、夏野女史がどこにいるかなんて俺も知らないんですね。はははは

立ち上がった騎士が俺の顔をぶん殴った。
俺は飛んだ。

「ふむ。帰つてすぐに出掛けたそれきりと……いたたつ

「動くな」

「すいません執事さん。　ええと、行き先は言わなかつたんですか?　なにかを買い物にいくとか、誰かと会うだとか。あとは、なにか様子がおかしかつたとか。何でもいいので、気になつたことを教えて下さい」

「行き先に関することはなにも。遅くなるだけ申しておつた。帰りが遅くなることはときどきあるのだ。変わつたところもなかつたように思つ。アカデミーから帰り、馬と何やら話し、庭にいた我に『ちょっと出掛けできます。遅くなるので』はんは要りません』と言つたまま……。おかしいといえば、屋敷にも入らず荷物も持つたまま出掛けたことくらいだ」

俺はむむ、と唸つた。切れた唇を執事氏に治療してもらいながら王子と話しているところだつた。

俺は頭の中で状況を整理した。

昨日、俺が夏野女史と別れたのが四時を少し過ぎた頃だつた。王子曰く、彼女がこの屋敷に一旦帰つてきたのは午後六時だつた。彼女と話している時に六時の鐘が鳴つたそうだ。研究棟からここまではのんびり歩いても十分あれば着く。いくら夏野女史が絶望的にチビで歩幅が狭いといつても、三十分もあれば着くだらう。つまり、彼女は寄り道をしたのだ。そこで用事が出来た。それは彼女にとつて予期せぬ用事だつたのだろう。そしてそれは時間の長く経かる用事だつた。彼女は一度屋敷に戻り、王子にその旨を告げた。問題は

「ならば」と王子が言った。「ならば問題は、今ヒルマがここにいなさいことが、予定の内なのかそうでないのか、ということだな?」

「ええ」俺は苦笑した。「そのとおりです」

理解の早い十歳児だった。

問題は夏野女史という人間の異常性からくる事態の曖昧さ。これに尽きる。

これが事件なのかどうなのか、彼女にとつてこの状況が異常なのかそうでないのか これがわからないのである。彼女なら『一日二日帰らなくても心配はされないだろ?』ぐらこのことは思つてはうなのだ。

夏野女史は自分のことを常識人だと思つてゐるふしがあるが、それは大きな間違いだ。彼女は根っからの化け物である。彼女は確かに常識というものを持つてはいるが、その実践発露は、彼女の性能からくるねじ曲がった主觀が邪魔をしてうまくできていないので。

ついこの間のことだ。俺たちはアカデミーの食堂で昼食をとつていた。この国的一般的な主食はジャガという植物を茹でて漬したもので、ジャガはまんま元の世界のジャガイモだ。俺はこれに少々飽きていて、そのとき、たまには米が食べたいものだと愚痴を零したものである。これに対し、彼女が返した言葉は「米だと思えばいいのです」であった。このとき俺は、彼女が軽口のつもりで言ったのだと思つた。しかし続く言葉でそんな思いは銀河の彼方に吹き飛んだ。

「わたしはいま味覚と嗅覚と触覚に、このおジャガさんをハーゲンダッツのバニラにレモン果汁を少量かけたものだと認識させています。飽きたら冷やし中華にするつもりです。思い込みつて便利でいいですよね」

彼女はこれを本氣で言つてはいたのだ。

ジャガイモがハーゲンダッツ?

飽きたら冷やし中華?

そんのはおかしい、できるはずがない。言葉を尽くして俺がそう説明しても彼女は持論を曲げなかつた。無理もない。現に彼女は 대해서、彼女は間違つたことを言つていなければなら。そう、間違つてはいないので。理屈の上では正しい。理屈の上でだけ正しいことを理屈通りにできてしまう彼女が人間として間違つてはいるだけなのだ。

「むう。躊躇さんもですか……皆さんそういう仰るのですよ。脳味噌をちょっとと騙すだけですから、コシさえ掴めば簡単なのですけれど。思い込みの力は五感すべてに勝ります。スキー場で温かい思いが、砂漠で涼しい思いができるのです。パンしか買えなくともステーキの味が楽しめるのです。これ、習得しておいて損はない技能だと思いますよ？」

損得の問題ではない。普通の人間は、ハードディスクの中身を書き換えるように脳味噌をいじくつたりはできないのだ。そのことが彼女には理解できないのだ。コツを掴めていないだけ、ぐらいにしか思つていないのである。そんな彼女が今の状況をどう考えているのか。これは非常に複雑で難解な問題だつた。彼女の「むう」がちよつと可愛かつたことが些事に落ちるレベルの難問だ。

執事氏が俺の治療を終える。茶髪のメイドが俺の茶碗に茶を足す。彫刻のように王子の後ろに立つたままの騎士ローオールがむう、と唸る（まるで可愛くない）。

俺は騎士ローオールにあたらしい持つてこさせた茶碗に口をつけた、言った。

「率直に聞きますが、この件、殿下は事件性があるとお考えですか？」

王子は少し黙つてから、目を伏せて「いや」と言つた。意外な返答だつた。「それはなぜ」と俺は聞いた。彼はつらそうな顔でこたえた。

「心配はしておる。なにかがあつたら、と考えると胸が内から裂けそうに思える……。しかし我が思つ『わ』なにか』は危険なことではな

いのだ。事件性はおそらくないであろう。ヒルマをどうにか生き物がこの世にいるとは思えぬ。嘘を見破るヒルマが企みに嵌るとも思えぬ。……事件性はないであろう。

王子の様子はまるで、自分の発する一つ一つの言葉に説き伏せられ、論破されているかのようだった。俺はひとつ疑問に思った。

「夏野女史をどうにかできる生き物がこの世にいない、というのはどういう意味です?」

「それはヒルマが

そこで王子はピタリと止まつた。彼は俺を見て驚いたような顔をした。

「おぬし、知らんのか?」王子は言った。

「何をですか?」俺は聞き返した。

王子はしばし絶句したあと、やがてニヤリと笑つて「くふふふ」と笑つた。それはもう下品な、嫌らしい笑いで、王族がそんな顔していいのかと説教したくなつたほどのものだった。しかして彼は言った。

「おお、すまぬ、シチノミヤ教諭。おぬしには教えられぬ。これは我とヒルマの秘密であつたわ。てつきりヒルマから聞いているものと思つておつたが、くふふふ。どうやらヒルマの奴め、おぬしには知られたくないらしい。すまんなあ。本当にすまんなあ。教えてやりたいのはやまやまなのだが……いやあ、こればかりはなあつ!」

ガキか。

いや、ガキだった。

どうやら夏野女史は『動物語』と『嘘の拒绝』以外にも俺の知らない力を隠し持つてゐるようだつた。前学長の事件に関する噂は、ならば真実ということなのだろうか?俺は無礼を承知でこれみよがしにため息をついた。

「まあ、なんだかよくわかりませんが、彼女は何らかの大きな力を持つていて、嘘も通じないから危険はない、ということですね?」

王子はスッと表情を引き締め、頷いた。こういうところは正に人

の上に立つ人間だ。彼は言った。

「事件性は無いものと思う。しかし危険は別だ。足を折つて動けないなど事故の可能性は充分に考えられる。私は捜索隊を撤収させるつもりはない」

捜索隊……街が騒がしかつたのはこれが理由か。

「しかし、これは我個人の感情からではなく、国のためにこそ成される行動であると思うがよい。ヒルマ・ナツノを死なせることはスズカゼ王国にとつて計り知れない損失である。そのような事態は王族の直に名を連ねる者として許容できるものではない」

なるほど。ただのマセガキってわけでもないらしい。十歳でこれが。それとも、これさえも夏野女史の影響か？

ともあれ、これで言い訳がたつ。ちょうど今日は働きたくなかつたところだ。俺はソファから立ち上がり、王子に形だけの敬礼をした。

「それでしたら、私も今日は講義を休まざるを得ませんな」

「無論だ。私はそれを命じるためにおぬしをここへ呼んだのだからな。そうであろう？」

俺は思わず噴き出した。

夕方六時、俺は捜索の結果を王子に報告してアカデミーを出た。結果から言ひと、夏野女史は見つからなかつた。手掛かりすら無しだ。

俺は街の中で彼女の行きそうな所を探した。馬を連れて行かなかつたのだからそう遠くではないだろうと考えたためだ。きのう行くと言つていたシモン・アテラキの家も訪ねてみた。昼だったが、母親は家にいた。彼女は夜勤の衛兵たちの食事を作る仕事をしているそうで、日のある内は寝ているそうだ。シモン少年のことは話さず「黒髪の少女が訪ねてこなかつたか」と聞いた。答えはノーだった。夏野女史ではないが、嘘をついているようには見えなかつた。

門を出てからも、村に向かう道ですれ違う者全員に聞いた。その殆どが夏野女史を知っていたし、彼女が行方不明だということを知っていた。今更ながらに彼女の知名度の高さを確認する。捜索隊も、貴族軍や王軍の人間よりもボランティアの一般人の方が多いくらいだ。夏野ひるまという人間はバビの街のトップアイドルなのだつた。

村の近くに見慣れない少年がいた。服もズボンも汚れだらけのまだらな茶色で、意図したのではないだろうが自衛隊の迷彩服みたいになつてゐる。随分とみすぼらしい身なりの少年だつた。だが頭が綺麗だつた。髪がこの国の王家の人の持つそれと同じ色をしているのだ。赤い髪は人気が高いため、この国の娼婦はこつそりと髪を赤に染めるのだ聞いたことがある。思い出してみれば、夜の街に立つていた女たちはみな一様に赤い髪をしていたような気がする。近づいて見ると、彼はキノコ狩りをしているようだつた。俺は試しに彼にも聞いてみた。

「ちょっといいか」

「はい？」

少年は顔を上げた。男娼で五年は食つていけそうな顔だつた。俺は言つた。

「もう誰かに聞かれたかもしれないが、黒髪の女の子を見なかつたか？白衣　　あー、レソガニの白い上掛けを前開きで着てる、利発そうな見た目をした子だ。上掛けはちょっと袖が長くて手が隠れてる」

「いえ」と彼は言つた。「見てませんね」

ふと、俺は少年の服装に気付いた。

汚れてはいるが、よく見れば少年の服は上下ともにレソガニだつた。

「このあたりはツチクイが出るのか？」

俺は言つた。

「ツチクイ？」

少年は何言ってんだこいつ、という顔をしたあと、小さく笑つた。
「おにいさん。ツチクイなんかがいたら、僕はこんな場所でキノコ
なんてとつてませんよ」

よほど俺の言葉が見当違いでおかしかつたのか、彼は饒舌に続けた。

「もしかして、この服のことを言つてるんじゃありませんか？金持
ちそつには見えないのに、なんでレソガニの服なんか着てるんだつ
て。そうでしよう？ ははは。大丈夫ですよ。盗品じゃないですから
俺は「すまん」と謝つた。思えば俺の態度はかなり失礼だった。

「ちょっと、気になつただけなんだ」

「いいですよ、と少年は笑つた。

「これ、拾い物なんですよ。この汚れも僕がつけたものじゃなくて、
元々こうだつたんです。たぶん、どこかの貴族さまがお捨てになつ
たんでしうね。まつたく勿体無いことしますよ。天然のレソガニ
なんて滅多に出回るものじゃないつていづのに」

俺は、「ああ、そうだな」とこたえた。頭の中でなにかが激しく
違和感を訴えていた。

少年はキノコの入つたかごを持つて森に入つていく。

「なあ、キミー！」

俺はなぜか咄嗟に、彼に声をかけていた。

「はい？」と彼は言つた。

「ヒルマ・ナツノつて知つてるか？」

血のよう赤い髪をした美しい少年はこたえた。

「さあ？ 知りませんけど」

そのとき、おーい、と後ろから声をかけられた。

俺は振り返つた。南門の方から、髭面の男が手を振りながらこち
らに向かつて走つてくるのが見えた。再び森のほうを見ると、赤髪
の美少年はいつの間にか消えていた。

「あんた、そこの村の人間かい？」

髭男は俺のもとに入るなりそう言つた。ハリー・ポッターの映画

のハグリッドとかいう大男をそのまま一七〇センチぐらいまで縮めたような外見の男だつた。

「もしそうなら、ひとつ、頼みがあるんだが」

「村の人間じゃないが、寝床を厄介になつてゐる身だ」

「その寝床に、俺も一晩だけ泊めてくれるようになつてゐるが? やつと目の前まで来たつてところで門が閉じちまつたんだ。外で寝て、こいつを盗られたくなえんだよ」

男はそう言つて大きな鞄を叩いた。石だらうか? ジヤリ、という音が鳴つた。俺は溜息をついた。

「頼んでみてはやるが、断られても俺にあたるなよ」

「ああ、助かつた! ありがとう!」

「それから、ナイフや武器なんかを持つていたら、そいつは俺に預けてもらつぞ。ガキがいるんでな」

「ああ。かまわん、かまわん! 宜しく頼むよ!」

そうして俺たちは村の最奥にあるテントに向かつた。

「そうだ、と俺は言つた。ものは試しである。

「あんた、黒髪の女の子を見なかつたか?」

「なんだ、彼女たちの知り合いかい?」

髭男は言つた。

「知つてゐるのか! ?」

「知つてゐるとも。今朝、ケルマの山で熊から助けてもらつたんだ。会つたらお礼を言つておいてくれよ」

「ケルマの山! ? なんだつてそんな遠くまで。それに、彼女たちつてのはどういう意味だ。誰かと一緒にいたのか?」

「ああ。黒髪のお兄さんと一緒にいたよ。仲の良さそうな様子だつた」

「兄? ああ、よぞらさんのことか。

あの身長では彼女の方が妹だと思われても無理はないだろう。俺は思わぬ情報に喜びを隠せなかつた。しかしその喜びもすぐ消えることとなる。俺は聞いた。

「それで、ナツノ姉弟きょうだいがその後どこへ向かつたか、あんた知つてるのか？」

「ナツノ？」鬚男は顔を顰めた。「すまねえ。人違ひみたいだ」

「なに？」

「黒髪つていうから、そんな珍しい奴はそう何人もいねえと思ったんだが……。俺を助けてくれた兄妹はそんな名前じゃなかつた」「ヒルマ・ナツノとヨゾラ・ナツノじゃないのか？プライマリの下級クラスみたいなチビ女と、俺ぐらいの背の男だろう。違うのか？」

「ちがう、と彼は言った。

「そんな名前じゃないし、そんなにチビやノッポじやなかつた」

そうして彼は、彼を助けたという魔法使いたちの名前を告げたのだった。

「サキサカだよ。俺を助けてくれたのは、シホウ・サキサカとリホ・サキサカっていう兄妹だ」

報告を終えたシチノミヤ教諭が屋敷を出ていった。殿下は彼が帰るまでたつたの一度も落胆の色を表に出さなかつた。殿下が立派になつていくのは少しだけ寂しかつた。

わたしは殿下をローオールに任せて庭に出た。キブが無言で後ろからついて来た。なにも言わないけれど、わたしを心配してくれていることはわかっていた。

六時の鐘が鳴つた。スカートを揺らす程度の風が吹いた。辺りは薄暗くなつていた。

「ねえキブ」わたしは言った。

「大丈夫だ」とキブは答えた。

「まだなにも言つてないんだけど」

わたしは囁き付いた。キブはいつも無表情で頷いた。

「黒の魔女は礼儀正しい。ここを去るにしても一言あるだろ?」

わたしはキブの足を軽く蹴つた。キブは避けなかつた。わたしは

小さく笑い、キブは笑わなかつた。

「あんたはいつもそう。わたしの心を読んで先に言つかけやつんだ」

「おまえはなぜ私といる時だけ子どものよつて振る舞うのだ。もし

や私は嫌われているのか?」

わたしは本気の蹴りを放つた。キブは素早く避けて、なにをする、

と言つた。無表情の中に小さな困惑が見えた。

「ときどきあんたを殺したくなるわ」

「私が何をしたというのだ」

「なにもしてないのよ。それがムカつくの」

「言葉のさす意味があるでわからん。言いたい」とがあるなりはつ

きりわかりやすく言つてくれ。私は無学だ」

「ああ、もう!」

わたしはキブの襟を掴んだ。顔が死ぬほど熱い。きつと死ぬ。こ
れをしたらきっと死ぬのだ。そんな気がした。

「リロ、どうした?」

「う、うるさい。いま名前よぶな。あと、頭の位置、あの、もじち
よつと下げて」

「何をするつもりだ。まさか毒か。私とおまえは仲間ではないのか?」

「ちがうわよ馬鹿!」

「ちがう、だと? 我々は敵同士だというのか?」

「そういう意味じゃない! いいから頭を上げてよ、ほりーわたしの氣
持ち、伝えるから!」

「むう」

キブが頭の位置を下げる。かたそうな脣の位置も低くなる。わた

しでもなんとか届く位置だ。わたしは覚悟を決めた。

「あの、キブ……一度しか言わないからよく聞いて」

「うむ」

キブが中腰で頷く。ちょっと間抜けな感じだが、この機を逃せば次はいつになるかわからない。わたしはキブの顔を両手ではさんで言った。

「わたしは、あんたのことが――」

「すいませえ――ん！手紙もって来ましたあ――――――！」

「ひよーうー！」

わたしは変な声を上げてキブから離れた。覚悟も決意も台無しだった。

強いな、とキブが中腰のまま言った。顔は声のした方を向いていた。

屋敷の庭の入り口に一人の男が立っていた。ここまで走ってきたのだろう。汗だくの彼は邪気のない笑みを浮かべ、元気よく言った。

「ヒルマの姉御いらっしゃいますか！ゾゾラの兄貴から手紙を預かってきた、ビーつて者ですが！」

おひめ4／ひるめとねねかとせかこのひみつ

「いやはや、素晴らしい出来だ。感動なんでものじやない。まったく新しい概念だ。いつにどうしたらこんなアイデアが浮かぶんです？」

「それでは、契約のほうは、」

「もちろん結ばせていただきます。わたしにはわかる。これは中国の、いや大陸中の人間を魅了しますよ。歴史が動く瞬間に立ち会えたことを嬉しく思います」

「ありがとうございます。とにかく、名前のことなのですが、できれば、」

「心配御無用。承知していますとも。神に名前は不要ですからな」

「話のわかる人はこれだから好きです」

「我々で神話をつくりましょう」

「我々が神話になります」

わたしたちは固い握手をしました。

踊^{ひるめ}さんと別れたわたしは街のとある場所である方とお会いしていました。わたしのちょっとした野望のためでするので、詳しいことは割愛します。重要なのはその帰りに出会った『彼』のことです。

お屋敷に帰る道、わたしはふと誰かに見られている気持ちに襲われました。勿論これは科学的根拠のある感覚で、要するにわたしは近くで生き物がじつとこちらに視線を向けるときの音を聞き取ったのでした。そもそも街に着いた初日から問題行動の連続です。奇異の目で見られるのはいつものことでした。前学長先生御乱心事件を経て、退屈な時に街の人たちの偏頭痛や視力聴力・心臓疾患などを

治して回るようになつてからは崇拝と信仰の目が随分と多くなりましたが、珍しがつて見られていることには変わりないのでした。しかし、『彼』は違いました。

失礼な言い方になりますが、それは青い髪のおばけでした。

彼には心臓の音がありませんでした。

わたしはこう見えて怪談など大好きな乙女であります。ツバメさんの耳元で播州皿屋敷や口裂け女のお話などして半泣きにさせ悦に入ることもしばしばの心清らかな乙女であります。おばけなどこのうえない大好物です。

青い髪のおばけはまっすぐわたしに向かってきました。わたしはわくわくして彼を待ちました。彼はわたしの前まで来るとぴたりと足を止めました。どこかで見たような顔をしたお化けでした。タイプではありませんが、人間とは思えないほど美しい肌をしていました。そしてそのことを裏付けるかのように、やはり近くで聞いても彼からは心臓の音がしないのでした。彼は懐から現代的な（日本国的な意味で現代的な）手帳を取り出し、そのページを一枚破りました。彼はそれを差し出します。勿論わたしは受け取りました。わたしはその際わざとおばけ氏の手に触れました。彼の手は今まで触れたどんな手よりも触り心地のよい手でした。わたしは破られたページに目を落としました。そこには次のように書かれていました。

『世界の秘密を知っている。七時に古道具屋で待つ』

ページの隅には『KOKUYO』の印字がありました。紙は古くなつて黄ばんでいました。文字は鉛筆で書かれており、ひどくかれています。明らかに、きのう今日に書かれたものではありませんでした。わたしの心臓が大きく鳴りました。よくわからないドキドキがありました。

どういう、とわたしは言いました。最後まで言い切る前に、彼はわたしの手になにかを握らせました。感触から紙だとわかりました。

そうして彼はわたしの髪にそっと触れました。その破廉恥な行為を拒む気が沸き起こらないことが不思議でした。彼は薄く笑いました。空っぽの微笑みでした。

わたしは突然に悲しい気持ちになりました。とても悲しい気持ちでした。なぜかと必死に考えるのに、わたしの頭の中にはその答えがありませんでした。見つからないのではなく存在しないのだと、わたしにはどうしてかわかるのでした。あの、とわたしは言いました。

「どこかで一度お会いしましたよね？……いえ、何度もお会いしているはずです。なぜでしょう、どうしてもあなたのことが思い出せないのです。でも、ずっと前に、わたしたちは何度も何度もお話をしたよくな……」

おばけ氏は一瞬だけ泣きそうな顔をして、しかしすぐに首を横に振りました。そうしてなにも言わずに去つて行きました。青い髪が夕陽を浴びて紫色に輝きました。彼はさいごまで一言も喋りませんでした。

わたしは手を開きました。そこには小さく折りたたまれたメモがありました。わたしはそれを丁寧にひらきました。口く玉の手帳とは違う紙でした。もつとずっと古い紙でした。それは小さな恋文でした。

『夏野ひるまを永遠に愛し続ける』

胸がじぐじくと痛みました。

短い手紙には、メモと同じように、この世界の人間が知らないはずの『漢字』が使われていました。滲んで、かすれて、薄くなつていましたが丁寧な字でした。

考えるな、と誰かが言いました。それは心の深い所に棲む醜い生き物の声でした。わたしはおばけ氏の消えた方を見つめ続けました。わたしの中のどこか大事な部分で、なにか大事なものが、栄養が足

りないと騒いでいるような、そんな気持ちがありました。なにかを忘れている。誰かを忘れている。けれどそれを思い出すことは許されない。そんな気持ちでした。理由もわからず大声を上げて泣きたい気分でした。

お屋敷に戻ったわたしはいちばんに厩舎へと向かいました。庭の裏側のほうでツバメさんが剣術ごっこをしているのが音でわかりました。その様子を新任のシノビの皆さんが影から警護しています。その内一人がツバメさんの後ろにしゃがみ、「殿下、ナツノ教諭がお戻りになりました」と報告しました。ツバメさんは「う、うむ」と言いました。嬉しそうな声でした。わたしはうふふと笑いました。うへへだつたかもしだせんが些細な違いです。

厩舎の中に入るとヨシムネ君がバヒヒンと喜びの声を上げてくれました。頭の上でヒテタダ君が羽を広げ『腹が減つたぞ』のポーズをとつてわたしを迎えてくれました。わたしは気持ちがじんわりと安らいでゆくのを感じました。

「ただいま帰りましたよ、ヨシムネ君、ヒテタダ君。はい、人参と干し豆さんですよ。うりうり」

「おかえり人間。ぼくこれ好き。これ好きだよ」

「毛の長い大きな生き物よ、我は虫が食べたい！柔らかい虫が食べたいぞ！」

「すみません。いま、これしかないのでよ。干し豆さんもなかなかイケるものですよ？」

「そうだ、水氣のない豆もなかなかいけるのだ！我は水氣のない豆を食すぞ！美味しい！」

「人間、ぼくもうひとつほしよ？ぼくもうひとつ食べたいんだよ？」

「もう一本ありますよ。あおどつね」

「ちょっと出掛けます。遅くなるので」はんは要りません」
厩舎を出たわたしはツバメさんに出掛ける旨を伝えました。ツバメさんは田に見えて暗い表情になりました。十歳の少年に愛され別れを惜しまれる美人女教師（勿論わたしです）。そんなシチュエーションにわたしの頭は元気いっぱい脳内麻薬を分泌しました。いろんなものがフルスロットルです。

「いつもどるのだ？シチノミヤ教諭と一緒になのか？我也ついて行つては駄目か？我は、あれだぞ、あの……邪魔にはならぬぞ？」

ぞくぞくしました。

鼻腔的 びくう な位置から血液的な物質がとめどなく自由落下するところでした。こらえたわたしは英雄と讚えられてしかるべきであります。わたしは鼻がピクピク動くのを我慢して首を横に振りました。

「何ヶ月も留守にするわけではありませんから」

はつきりとはわかりませんが、かかっても一週間程度でしょう。それよりかかるようなら一言いつて帰つてくれればいいのです。わたしはツバメさんの頭をなでなでして「それじゃあ行つてきますね」とお屋敷を後にしました。王子様の頭を撫でるなんて、わたしという女はどこまで無礼な奴なのでしょうか。それでもわたしはギリギリのラインを見極めたいと願うのでした。夏野ひるま、鋼の冒険心を持つ女であります。

アカデミーの敷地から出るとき、入れ違いに中へと戻る助手君と会いました。彼は、いつもそうですが、この時もむつりした顔で睨むようにわたしを見ました。

「先生、どこかへ出かけられるのですか？」彼は言いました。

「ええ。そうなのです」わたしはこたえました。

助手君は握った手を口に当てて少し黙つてから、「わかりました」と言いました。なにがわかったのかは、わたしにはわかりません。出会つた時からこういう不思議な所のある少年でした。わたしは「それでは」と挨拶して彼と別れました。十歩も歩かない内に後ろから「先生」と声がかかりました。

「あしたの講義は中止にするよつ、計らつておきます」

わたしは振り返つて首を傾げました。助手君は先ほどと変わらぬ睨むような目でわたしを見ていました。やつぱりなにか知ついるんだ、とわたしは思いました。それはわたしが数多くの希望者の中から彼一人だけを助手に採用した理由でもありました。彼はわたしについてなにかを知つてゐるのです。そのことにわたしが気づいていることも彼はおそらく知つてゐます。けれども彼はその『なにか』を語りません。そしてわたしも彼にそのことを聞かないのです。理由はよくわかりません。でも、わたしの中の誰かが「まだ早い」とわたしをとどめるのです。わたしは小さく溜息をつきました。家族以外では彼だけに見せる『ゆるみ』でした。わたしは言いました。「では、そのようにお願ひします」

「了解しました。それでは、またいつか。可能であれば近い「うち」に助手君は、そんな不思議な言葉を残してアカデミーへと帰つてきました。

「まあ……彼については、考へても仕方ありませんね」
不思議の世界の不思議な人。
わたしのなにかを知つてゐる人。
それでもなにも語らない人……。
気付けば、わたしは小さく笑つてゐるのでした。

目的地が見えてきた頃、聞きなれた羽ばたきの音が近づいてきました。音源は上空からわたしに接近し、肩に着地しました。ヒデタダ君でした。

「どうしたのですか、ヒデタダ君」とわたしは聞きました。
「我もゆくぞ、大きな生き物よ!」とヒデタダ君はこたえました。我はまだ見ぬ世界を見るのだ、と彼は言いました。まるでわたしがこれから行く場所が『まだ見ぬ世界』だと知つてゐるかのような言い様でした。動物の方とおはなししていふと、こうした『未来の確信』めいたことを当然のようく言われることがままあります。そ

のよつな発言は年老いた猫や鳥類の方がよくされます。これについては、わたしも未だに解明できていないのでした。

「それじゃあ、一緒に行きましょうか」

「ゆくぞー!どこへ行くかはわからんが、我もゆくのだ!」
わたしたちは連れ立つて目的地へと向かつのでした。わたしはポケットからメモを取り出します。

『世界の秘密を知つてゐる。七時に古道具屋で待つ』
この街には古道具屋がいくつもあります。けれどもわたしには理由のない確信がありました。きっとあそこだ、と。

『ふるどうぐーリンリ』の中は相変わらず空っぽでした。壁と屋根と戸があるだけ。かつてあつた電気ケトルもアイフォンも、おそらくは躊躇さんが片付けたのでしょう、今はありません。その何もない空間の土の床に彼は立つていました。

青い髪のおばけです。

遅れてしましましたか、とわたしは言いました。まだ七時の鐘は鳴つていません。

彼は黙つて懐から手帳を取り出し、そこから一枚を破つてわたしに差し出しました。

『いましたところ』

遠い昔に書かれたよつな文字でした。遠い昔に作られたよつな古い紙でした。

おばけの彼はページをもう一枚破りました。わたしはわざとそれが渡される前に口を開きました。

「わたしに『どんな』用があるのでですか?世界の秘密とは何のことでしょう?」

彼は黙つてわたしに紙を渡しました。そこには『もうすぐわかる』と書かれていました。わたしはくすりと笑いました。久々に対等の人にお会えたような気がしました。それが心音のないおばけだとうのもまた愉快でした。わたしは紙をポケットにしまおうとして、けれどやめました。ちゃんと手に持つていないとフツと消えてしま

いそうな気がしたためです。紙切れとはいえ何かの手がかりになるかもしません。

彼は再び手帳を破りました。今度は一気に一枚でした。そうして一枚をわたしの田の前に突き出し、見せました。

『この世界の裏側の一つを見せる。条件は次の約束を守ること』

わたしは頷きます。彼はもう一枚のページをわたしに見せました。『合図をしたら田を閉じる』こと。再び合図があるまで決してまぶたを開けないこと』

「わかりました」

わたしは頷きます。彼はほんのすこしだけ笑い、わたしの頭を撫でました。それは老人が子どもという服を着込んでいるような、くたびれた笑顔でした。

彼は指を三本たてました。合図です。わたしは頷きました。相手が喋らないところちらも喋つてはいけないような気になつてしまふから不思議です。指が一本になり、一本になり、そしてグーになりました。わたしはギュッと田を閉じました。

冷たい空気が頬に触れました。ドライアイスでしょうか？しかしドライアイスが氣化するときのあの音は聞こえません。ヒテタダ君がわたしの肩を掴んだまま、バタバタと羽ばたきました。どうしたのでしょうか？聞こうとしましたが、思いどどまりました。声を出すのつて、ありなのでしょうか？これについてはなにも指定がありませんでした。けれども、言いがかりをつけられてはたまりません。この世界の秘密とやらは是非とも知りたいので、おばけの彼を刺激して怒らせるような真似は避けたいところでした。どうしたものでしょうか。悩んでいると、ヒテタダ君が「おもしろい！おもしろい！」と鳴きました。ああ、ヒテタダ君、もうちょっとわかりやすい

状況報告を。

冷たい空気はいよいよわたしの全身を包みました。おばけの彼は動いていません。手も足も動かさず立つたままで。それは音でわかれます。彼はなにもしていないので。しかし、そうであるなら

この冷たさ、寒さは何なのでしょう?わたしは考えました。答えは出ませんでした。

突然、世界から音が消えました。

まつたくなにも聞こえなくなりました。

空間認識の大部分を聴覚に依存しているわたしには、叫びたくなるほど恐ろしいことでした。『普通』の方でしたら、目隠しをされ裸で戦場の真ん中に立たされているよう様子を考えていただければ、おそらく今のわたしの心情がおわかりになるでしょう。武器と防具と空間認識力の殆どをいつぺんに引っ張がされたのです。なにも見えず、なにも聞こえず、感じるのは少しの寒さと肩にとまるヒデタダ君だけ。途方も無い恐怖でした。

やがて空気の冷たさが消え、耳が聞こえるようになりました。わたしは息をのみました。

ここは どこでしよう?

正常な動作を開始したわたしの耳はすぐに周囲の音を拾い、状況を伝えてきました。わたしは音の反射でものの位置を知ることができます。おおよその位置ではなく細かい配置や質感までわかります。そのわたしの耳が告げていきました。壁が無いぞと。そればかりではありません。室内にいたはずのわたしのすぐ隣に巨大な建造物がありました。それは鉄筋コンクリートのビルでした。この世界には無いはずの建築素材・建築様式です。そこに植物が無数に巻きつき、絡みつき、生えています。わたしの鼓動は名手のマリンバのように高鳴りました。胸の中には嫌な予感と期待がぴつたり40ずつありました。残りの20はマリンバ名人です。

おばけの彼がポン、とわたしの頭に触れました。ずっと握りしめていた手帳のカケラが汗で柔らかくなっているのがわかりました。彼はもう一度わたしの頭に触れました。合図なのでしょうか?わたしは念のため五を数えてから目を開けました。

じやり、と音がしました。わたしが後退りした音でした。

柔らかい風が吹きました。バランスを崩したヒデタダ君が羽ばた

き、わたしの肩から飛び上りました。さつきまで夜だったのに、空は青空でした。その青空の下で草花が嬉しげに揺れています。わたしは後ろを振り返りました。『ふるどづぐーリンリ』はどこにもありませんでした。青い髪のおばけを見上げました。彼はなにも言わず、ただ寂しげに笑いました。わたしの手から手帳のページが落ち、風に運ばれていきました。

世界が滅亡していました。

滅び終えた世界を青い髪のおばけと手を繋いで歩きます。

青髪さんはなにも言わず、わたしも周囲をキヨロキヨロ見渡すばかりで口はポカンと開けっ放しです。そうしてよだれが垂れそうになつては慌てて口を閉じ、しかしましたすぐに開いてよだれがたまり……その繰り返しでした。

やさしい風が吹きました。暖かい風でした。どこからか黄色い花びらが飛んできてわたしの頬に張り付きました。自分でとろうとしましたが、それよりも早く青髪さんがひょいとどり、そのまま口に入れて食べてしまいました。わたしの辞書の『幽靈』の項目に『主な食べものは花』という一文が追加された瞬間でした。

すごいですね、とわたしは言いました。花のことではありません。青髪さんもそれはわかっているらしく、わたしと繋がれていらないほうの手で器用に手帳のページを破りました。そしてそれを見せてくださいます。

『真実の一端。その具象。概念としての滅亡。その世界』

わたしはええ、と頷き周囲を見渡しました。鴻大な草海原でした。すすきによく似たかたちの、けれども背の低い萌葱色の植物が、わ

たしたちの歩く道だけを残して地面全体をおおっています。彼女たちは風に揺れるたび光を反射し、マスゲームのように縦横無尽に金色の曲線を走らせます。そんな景色の中に、ビルが直立して、或いは斜めに傾いて無数に建っています。中には真ん中からポツキリと折れているものさえあります。その様は圧倒的な違和感でわたしの常識観を揺るがしました。

ビルは全て地球的な意味で現代建築です。それらが緑や赤や黄色で着飾っています。ペイントではありません。行き過ぎたガーデニングです。それらの色はすべて植物でした。その隙間からわずかばかりの自己顯示で謙虚さをアピールするように、剥き出しのコンクリートや変色した鉄骨が見えています。ビルに自生する植物たちは地面を覆つすすきもどきとは違つ種でした。

空は青に支配され、ビルは薄緑と赤と黄色に分割統治され、地面は萌葱色によつて蹂躪されています。その真ん中を土色の一本道が細く長く曲がりくねつてどこまでも通つています。

ここは文明が植物に敗北した世界でした。

少なくともわたしにはそう見えました。

冒険に出ていたヒデタダ君が戻つてきました。彼はわたしの肩に軟着陸し、白衣を何度も掴みなおし、ポジションを落ち着けてから言いました。

「なにもいな『い』。大きいのも小さいのも、虫も、鳥も、なにもいな『い』ぞ」

わたしはヒデタダ君の嘴の下を指で優しく搔きました。彼は蕩けた声を出したあとで、はつとして「もつとだ！ もつとだ！」と言いました。干し豆を一つ与えると、彼はビルの一つへとまた慌ただしく飛んで行きました。わたしは青髪さんを見上げました。

「どこへ向かつているのですか？」

青髪さんは手帳を破りました。

『真実を売る店。夏野ひるまの田的が眠る場所』
わたしの、目的……。

「ここにも人間がいるのですか？」

青髪さんは繋いでいないほの手でわたしを指しました。わたしはE・Tの有名なシーンのように、そこに自分の人差し指を当てました。ほがらかな気持ちになりました。青髪さんは口元に笑みを浮かべました。わたしもにこりと笑いました。優しい風がわたしの間を通りました。世界は平和でした。

「つて、そうではありません。わたし以外のことを教えて下さい。わたし以外に、この世界に人間はいるのですか？人間どころか動物の音さえ、いえ気配さえ、ここからはまるで感じられないのですが」

青髪さんは首を横に振りました。

「いなのですか？」

青髪さんは首を横に振りました。

「どつちですか」

彼は再び手帳を破りました。

『人間はいない。人間だったものはある』

『その手帳はどうなつてているのですか？それも魔法なのですか？』質問に対する答えが予め書かれた手帳。それも何十年も前に書かれたようなながされた字で。この素敵アイテムはわたしの乙女心をビシバシ叩いて刺激しました。青髪さんは首を横に振りました。なぜかこの質問には答えるつもりがないようでした。

「それ、もう一個ありますか？」

青髪さんは再度、首を横に振りました。

「ちょっとだけ見せてほしいなあ。きやるん」

可愛く頼んでも駄目でした。嘲笑されました。足を踏もつとしたら素早く避けられました。

手を繋いでしばらく行くと分かれ道に突き当たりました。道の一方は無限のすすきもどきの草原に、もう一方は廃墟の一つに続いています。青髪さんは廃墟の方へと足を進めました。当然、手を引かれるわたしもそちらへ向かいます。ふと、なぜ手など繋いでいるの

だろうか、という気持ちが沸き上がつてきました。あまりにも自然に手を差し出されたので、こちらも自然に「どうも」と掴んでしまいましたが、はて、わたしはこんなに軽い女だつたでしょうか？ 奇妙な気分でした。

廃墟の入り口は横に長い、長方形の大きな穴でした。おそらく遠い昔には自動ドアのガラスがはまつていたのでしょう。わたしたちは手を繋いだまま廃墟へと入つて行きました。

廃墟の中は不思議と塵や埃が積もつていませんでした。掃除が行き届いているのです。本当なら中は薄暗いはずですが、随所に配置された『光る花』の鉢植えがその黄緑色の光で蛍光灯の代役を立派に務めており、快適な明るさが保たれています。あれはなんですか、とわたしは聞きました。青髪さんは手帳を破りました。そこには『光る花』とだけ書かれていました。聞いたわたしが馬鹿でした。

建物の中はショッピングモールと言われて思い浮かぶそのような構造をしていました。地下もあるようでした。わたしたちは動かないエスカレーターで三階までのぼりました。そこには、かつては貸し店舗がたくさん入っていたであろう空っぽの部屋が道の左右にいくつもありました。青髪さんはその一つの前で足を止めました。そこだけはアンティークのドアがきちんと嵌められており、中が見えません。ドア横の壁には金釘で看板が打ち付けられていました。

『アトリエ／蒼の伽藍』

可愛らしいフォントでそう書かれています。

青髪さんはわたしの手を離しました。

「ここなのですか？」とわたしは聞きました。

彼は頷き、ドアを開けました。

そうしてわたしのよく知るひとの声で言つたのでした。

「ようこそ愛しい人。ここが世界の果てだ」

廃墟を出たわたしは再び青髪さんと手を繋ぎ、ヒデタダ君を呼びながら『出口』に向かつて歩きました。今度はどちらからともなく自然と手を繋ぎました。『出口』が見えた辺りでヒデタダ君がやってきました。彼はわたしの頭にとまり、食べ物を催促しました。わたしは干し豆を与えました。

目的の場所につくと、青髪さんはわたしの手をはなしました。この滅亡した世界で初めて目を開けたあの場所でした。出口は入り口というわけです。青髪さんは手帳を破り、ページをわたしに向けました。

『目を閉じ、前を向いたまま、ゆっくりと十七歩だけ進むこと。決して目を開けてはいけない。振り返ってもいけない』

わたしは頷きました。青髪さんはわたしの頬に触れようとして、しかし触れずに手を下ろしました。また来ますね、とわたしは言いました。方法はわかりません、けれど心からの言葉でした。わたしの頭の上でヒデタダ君が挨拶するように一度だけ羽ばたきました。青髪さんはやはりなにも言わず、ただ寂しげに笑うだけでした。

わたしは彼に背を向け、目を閉じました。そうして指示されたとおり、ゆっくりと前に向かつて進んでいきました。五歩進むと冷たい空気が頬に触れました。八歩で全身を冷たい空気が包みました。ヒデタダ君が「愉快だ！ 愉快だ！」と鳴きました。十一歩で耳が聞こえなくなりました。全ての音が死んだ世界で、わたしはそれでも進みました。十七歩進みました。音が息を吹き返しました。四方を壁で囲まれた場所、はじまりの場所です。そこには一体の生き物がいました。人間の男性の音でした。一方は知り合いで、もう一方は知らない人の音です。

わたしは目を開けました。二人の男性が口をあんぐりと開けてわたしを見つめていました。照れます。わたしはヒデタダ君を一度撫

で、言いました。

「奇遇ですね、躰裏さん。そちらの男性はどなたですか？」

「なるほど、ムラサキの野郎と一緒にだったのか」
「それなら仕方ない」と躰裏さんは言いました。時刻は朝の五時、イロキクさん（躰裏さんと一緒にいらしたヒゲもじやの男性。お友達だそうです）と別れたわたしたちはツバメさんのお屋敷へと向かつてずんたか歩いています。そうしながら、躰裏さんから青髪さんのことを聞かされているのです。彼は青髪さんとお知り合いなのでした。

「ムラサキは吸魂鬼だ」と彼は言いました。

青髪さんのお名前はムラサキさんというのだそうです。青い髪なのにムラサキ。彼は吸魂鬼と呼ばれる特殊な存在でした。吸魂鬼は命のない『システム』なのだそうです。

「吸魂鬼には寿命が無い。奴らは人間をやめて世界の一部になった監視機構なんだ」

「監視機構？誰を監視するのですか？監視してどうされるのでしょうか？」

「特定の誰かを監視するわけじゃないさ。あいつらはただ、目に止まつたものを見るだけのモノなんだ。ただそれだけのために存在している」

「なんだかよくわかりませんね」

「実際、俺もわかつてねえよ。師匠から聞いただけの知識で、実物はムラサキしか知らねえんだから。そのムラサキにしたつて神出鬼没で、用のある時だけどこからともなく現れて、こっちが呼んだ時には出て来ねえ。この街に転勤するよう言つたのもあいつだぜ。『ふるじうぐ／リンリ』だってあいつが用意した物件だ。まあ、あんな所じや寝られねえから宿は別にとつてるが」

「躰裏さんは青髪さん いえ、ムラサキさんとはいつお知り合い

になられたので？」

「この世界に来る時に、俺が到着座標をミスつちまつたって話はしたよな。その座標に、なぜかあの野郎がいたんだよ。『待っていたぞ、七乃宮躰裏』ってさ」

「え。あのひと、喋るのですか？」

躰裏さんは眉根を寄せて「は？」と言いました。

「なに言つてんだキミ。喋らないでどうやって意思疎通するんだ。筆談か？ それとも手話か？」

「まあ、似たようなものです。不思議な手帳とジェスチャーで「不思議な手帳？ よくわからんが、キミに対してはそうだったのか？」

「はい、とわたしは答えました。躰裏さんは腕を組んでむむ、と唸りました。やがて彼は言いました。

「じゃあキミは、あいつの声を聞いてないのか？」

「ええ

『『よつ』じや愛しい人。』』が世界の果てだ』

「　　聞いていません」

わたしは言いました。なにか大事なことを忘れている気がしました。けれどその気持ちは急速に薄くなつていきます。頭がぼんやりしました。足がもつれて尻餅をつきました。躰裏さんが慌ててわたしの腕を掴み、立ち上がらせました。わたしはつい今自分がなにを考えていたのか、すっかり忘れてしました。

「おいおい、どうしたってんだ」

躰裏さんがわたしを立たせて言いました。

「まさかこの『一日』、寝てないなんて言わないだろ？ な？」

「『一日』？ 何を言つてるんです？」

「何を言つてるは』じの台詞だ。『一日』も黙つて姿を消していたのはキミだろ？ が。チビ王子が心配して大変だったんだぞ」

281

わたしは混乱しました。

「ちょっと。ちょっとタイムをお願いします。一回ついて、どうこう」とですか？」

「一回は一回だら。ああいや、正確には一晩か？」

「一晩……いえ、わたしがあの世界にいたのは四時間程度のはずなのです」

「だからキミは何を言つて、あの世界？」

躊躇さんば立ち止まりました。

「待て。おい。キミまさか、吸魂鬼の家に行つたのか？」

「家というか、お店でしたね」

「そんなのはどうでもいいー！」でも地球でもない世界を見たんだな！」

躊躇さんはわたしの肩を掴んで、がくがく揺らしました。この破廉恥白虫が。わたしは躊躇さんの足を力いっぱい踏みました。彼はまるで気付きませんでした。一方わたしは足を捻つて傷めました。痛ひ。わたしは躊躇さんを睨みました。彼は「どうなんだ！どうなんだ！」と壊れたファービーのように繰り返すだけでした。

「ちつ。……見たというか、普通にお邪魔しましたよ。草と花と廃墟だけしかない世界のことでしょう？」

白毛ファービーさんはわたしの肩を放し、泣きそうな顔で「ちくしょう」と呟きました。そうしてその場にしゃがみ込んでしまいました。彼はもう一度「ちくしょう」と言いました。声が半泣きでした。朝の開店準備をしている肉スープ屋のお姉さんがこちらを見ていわあ、と言いました。それはわたしにこそ相応しい台詞でした。ちくしょうも間違いなくこちらの台詞です。仕方のない人でした。わたしはファービー氏の白い毛をナデナデして言いました。

「ほら、泣きやんで。事情をお姉さんに話してみなさい」

「泣いてねえよ。ばか」

ときどき子どもになる人でした。

やがて彼はしゃがみ込んだまま「キミが入ったのは《神域》だ

と言いました。

神域？とわたしは聞き返しました。躰裏さんは顔を上げました。「吸魂鬼や天使の住む《神域》は、地球で生まれた魔法屋なら誰もが一度は憧れる場所だ」

「憧れは美化されるものです。実際、そんなに凄い場所でもありますでしたよ？」

「《神域》からなにかを持ち帰りでもすれば百年は遊んで暮らせる」「えつ」

「歴史上、《神域》から生きて帰った人間は16人しかいない」わたしは絶句しました。彼は大きな溜め息をついて続けました。

「キミが17人目だ。ちくしう」

お屋敷に帰るとツバメさんに抱きつかれました。相手は十歳とはいえたしとの身長差はそれほどありません。危うく転ぶところでした。リロさんもキブさんも騎士さんたちも侍従組の方々も、皆さんわたしを心から心配してくださいたようでした。わたしは彼ら彼女らに何度も何度も頭を下げました。目に涙を浮かべさえしました。心のこもらない謝罪は大得意であります。そしてわたしは演技派です。反省したふりをすることに関して右に出るものはないのありました。

一頻り事情を説明し終えたところで、わたしは「そんなことよりも」と、気になっていたところを聞きました。

「あちらの男性はどなたでしょ？？」

「そんなことって」躰裏さんが言いました。「神域入りがそんなことって……」

「おお、そうであったわ」

ツバメさんはわたしの手を握つたまま言いました。しばらくは、離すつもりはないようでした。

「あやつはジー」という。ジソの街よりそなたに手紙を持って参つた

のだ。ビーよ、此れへ

「はつ」

ビー君はわたしとツバメさんの前に跪きました。なかなかいい体つきをしていますが、音を聞く限りでは歳は弟と同じくらいでしょうか。

「ビーと申します。我が主ゴジラ・ナツノより姉君様宛の手紙を預かり、いやしくも殿下の御足元まで参じた身でござります」

あれの手下とは思えないほど礼儀正しい子でした。ビー君は頭を下げたまま恭しく手紙を差し出します。わたしはそれを受け取りました。ツバメさんが「表を上げてよいぞ」と仰り、ようやく彼は頭を上げました。わたしは言いました。

「遠路遙々ありがとうございました。まつたく弟には困ったものです。旅人組合を使っていいと伝えておいたのですが

「兄貴 いえ主は、旅人組合には頼めない手紙だから直接にお渡しするよつにと」

「それは、どういう意味でしょ?」

「いえ……聞かされたのはそれだけです……」

「ヒルマ、開けてみてはどうだ? 魔法の類はかけられておらぬそうだ。そうである?」

ツバメさんが言い、キブさんが「はい」と頷きます。わたしは封を開きました。

手紙はところどころ字が抜けしていました。

内容も延伸文以外はまるで意味不明でした。

よぞら。

あなたの身に、いったい何が起きているの?

ある少年の手紙

手紙は誰にも見せず、読み終わつたら燃やしてほしい。

俺には姉さんに伝えたいことがある。しかし伝えることはできない。その方法がないのだ。

書きたいことは辞書一冊分よりもあるのに、それを書くことが俺にはできない。

代書も不可能だつた。言葉にして伝えることもできなかつた。だから、書けることだけを書く。俺への手紙はビールに持たせてほしい。

- ・この世界には　　がいる。
- ・この世界には　　の　　がいる。
- ・　　は　　だ。
- ・　　を信用するな。
- ・俺と姉さん以外の　　の関係者を絶対に信用するな。
- ・旅人組合も信用するな。奴らの頭は　　と通じている。
- ・ギモギモ族は信用していい。どんな尊があつても彼らは仲間だ。
- ・赤、青、橙の霧に迷うことがあれば、管理者に「よぞらの姉だ」と告げる。彼らは敵ではない。

追啓

好きな人ことができた。
どうか俺を心配しないでほしい。
どうか俺を信じてほしい。
いつでも姉さんを信じている。

「よつこわ愛しい人。」これが世界の果てだ

「あいあらへひのまとこぬとじかんかいけつ

視界が揺れたような気がしました。

わたしは立ち眩みの前兆を感じ、足を踏ん張りました。ふと、わたしの肩を支えるものがありました。わたしは後ろを振り向きました。そこには青い髪のおばけがいました。わたしは彼に支えられていました。

なにかが どこかが おかしい……

「ありがとう」ゼコム

わたしはお礼を言います。

「ちょっと、フラッときてしまつて」

青髪さんは微かに笑い、わたしの肩から手を離しました。そうして部屋の中央にある椅子にわたしを座らせました。彼はどこからか取り出した缶をコト、とテーブルの上に逆さまにして置きました。それはカゴメのトマトジュースでした。何かが決定的に間違つているのに、それが何であるのか、わたしにはわからないでした。

アンティークのお洒落なテーブルを挟み、お洒落な椅子に、青髪さんと向い合つて座っています。わたしは先程からキヨロキヨロと可愛らしく（大変に可愛らしく）このお店『アトリエ／蒼の伽藍』の中を見回しています。不思議な空間でした。現代アート展の、展示が終わって用済みになつた作品を一箇所に押し込んだ倉庫、と言えばおわかりいただけるでしょ？ か。正直わたしには、これを口で説明して誰かに理解させる自信がありません。それほどに奇妙で不

思議なお店でした。意味不明なものが意味不明な配置でたくさん置かれています。日本語でアトリエというからには、それらはおそらく芸術作品なのでしょう。

二十帖ほどのお部屋の中心にわたしたちの掛けているテーブルがあり、壁際には統一性の無い作品たちがずらりと展示されています。壊れたブラウン管テレビ、魔人が入つていそうなランプ、首のない犬の置物、蓋のない電気ケトル、両目に鉛筆の刺さったカーネル・サンダース……他にもいろいろあります。どれもいくつかの物を組み合わせたアートでした。統一感はありませんが、それでいて結束のようなものを感じるのは、それはそれで愉快なものでした。それらの作品が意味を持つて配置されていることがわたしにはわかりました。理由は不明です。わたしにわかる共通点は現代アートである、という点のみなのに、根拠のない理解が頭の中で羽ばたいたのでした。まったく毛色の違うものといえば、わたしのかけているテーブルと、そして足元に敷かれている虎の絨毯くらいです。それはとても大きな敷物で、こんな虎が実際にどこかに生息しているなら是非とも生きている内に会つてみたいものだ、とわたしに思わせるに十分な代物がありました。

トントン、と音がしました。それは青髪さんが指でテーブルを叩く音でした。わたしは正面に向き直りました。彼はわたしの注意をひいたことを認める、右手をゆらりといちど動かしました。人差し指だけをたて、まるで合唱コンクールの練習を一人でする指揮者役の生徒のような動きでした。ズズズ、という聞いたことのない音がしました。このわたしが一度も聞いたことのない類の音です。観念的な表現になりますが、それは大きくて柔らかくてぬめぬめした布のようなものを上下左右から無理に引っ張つて少しだけ破いたときに出そうな音でした。

突然、宙空からナイフが五本、現れました。

テーブルの上のなにも無い空中からです。それは持ち手まで金属の、少し大きなバターナイフのようなものでした。五つとも大きさ

は均等で、色もみな同じく濃い青です。そんなものが空中から上向
きに、まるで次元の裂け田から這い出でてくる一いつ田の怪物のよう、
ズズズと音を立てて現れたのです。

「おおっ」

わたしは思わずそんな少女らしからぬ声を上げ、拍手をしました。
魔法とやらは同僚の先生がたに何度も見せていただいていますが、
こんなに魔法らしい魔法は初めて見ます。心からの拍手でした。青
髪さんは「よせよ」とでもいうようにサッと手を振りました。ほん
の少しだけ照れたような顔でした。可愛いところもあるじやあります
せんか。わたしの胸はラピュタの再放送の田のよつことじめきました。
た。

青髪さんが右手を振ると、五本のナイフたちは曲芸飛行のように
くるくる回りながら飛びました。やがてそれらはほどけ、混じり合
い、形を変え、青い金属のコップになりました。ことん、と音を立
て、コップはテーブルの上に着地しました。青髪さんはその縁を指
ではじきました。キン、と綺麗な、この世のものとは思えないほ
ど綺麗な、涼やかな音が響きました。彼はそのコップをわたしの前
に突き出します。そうして逆さまに置かれたカゴメのトマトジュー
スを指さしました。

「飲め、ということでしょうか？」

青髪さんは頷き、さつさと受け取れというようにコップを揺らし
ました。わたしはコップを受け取りました。それは嘘のように軽い
コップでした。表面には龍の浮き彫りが施されており、触ると金
属特有のあの冷たさがありました。わたしはさつそくトマトジュー
スに手を伸ばしました。開きませんでした。わたしは申し訳ない気
持ちで青髪さんに缶を渡しました。青髪さんは一瞬だけ呆れた顔を
してフルタブを開けてくださいました。

期待して飲んだトマトジュースは、ただのトマトジュースでした。

わたしはぬるいドロドロした液を「これはキンキンに冷えたペプ
シコーラなのだ」と思いながら飲みました。そうしながら、わたし

は青髪さんとお話をしました。話しているのは一方的にわたしで、青髪さんは頷いたり口クロの手帳を破つたりするだけでした。それでも彼は楽しそうに笑い、わたしもまたなにやら素敵な気分でへらしたものでした。話題はつまらないものばかりでした。好きな本の話をしました。青髪さんはグレッグ・イーガンのファンでした。好きな映画の話をしました。青髪さんは『時計じかけのオレンジ』と『ブレードランナー』を愛してやまないそうでした。そのくせスタンリー・キューブリックは嫌いだそうでした。意外とわかりやすい人でした。好きな漫画家は?という質問に『漫画太郎。彼こそ全ての漫画家が目指すべき灯台』といつ答えが返ってきたときにはトマトジュースを噴き出して『ご迷惑をおかけしたものです。会話の中でわたしは、肝心のここに来た目的については聞きませんでした。聞きたくありませんでした。それをすればこの楽しい時間が終わってしまうことに気付いていたからです。わたしたちはただただ他愛も実もない言葉だけをお互いに贈り合いました。あたたかく冷めた時間でした。

「この建物は何なのですか?」

『黙秘。 いずれわかる』

「このアトリエはあなたのお店なのですか?」

『黙秘。 いずれわかる』

「ここに一人で暮らしているのですか?」

『黙秘。 いずれわかる』

「わたしを愛しているというの本当ですか?」

『秘密。 いつか気付く』

「好きな食べ物は何ですか?」

『玉子焼き。 甘くないものは認めない』

わたしは笑いました。青髪さんも笑いました。薄暗い店内に響くのはわたしの笑い声ばかりでした。青髪さんがちゃんと答えてくださるのは好きなものと嫌いなものに関する質問ばかりでした。彼の方からわたしになにかを聞いていくことはありませんでした。な

にも言わない人の正面でわたしだけが喋つていて それがなんと
も新鮮でした。

ペプシ味のトマトジュースを飲み終えたわたしは、あらためて店内を眺めました。青髪さんはどんな魔法か、コップを再び空中でナイフに戻し、また何もない空間に帰してしまいました。コップがナイフになる際、赤い雲が三滴テーブルにこぼれました。青髪さんはそれを指ですくつてペロリと舐めました。こちらはなにもしていいというのに、まるで変態行為の片棒を担がれたような恥ずかしい気持ちになりました。わたしは青髪さんの青髪にチヨップをしました。彼はいたずらっ子のように笑つて舌を出しました。わたしはぬぐぐと唸りました。

静寂が流れた頃、わたしは椅子から立ち上がりました。壁際に展示された作品たちを見て回るつと思つたのです。最初はテレビに向かいました。金色に輝く台座の上に、ブラウン管テレビが逆さまに置かれたものです。画面には野球ボールが飛んできて出来たような穴が空いており、台座の足元には破片が散らばっています。この部屋に窓はありません。わたしは訊ねました。

「これは何ですか？」

青髪さんはゆつたりとした袖の内からマッチを取り出し、それを擦つて、急須の形をした赤い香炉のようなものにポトリと落としました。赤はズカゼ王家の色ですが、そんなこと、このおばけさんは気にしないのでしょうか。急須もどきの細い口から濃い鼠色の煙が立ち上りました。煙は見る見るうちに形を変え、文字になりました。

『物語に干渉する権利を得た観測者。その符号』

とても読みやすいフォントでした。ふと見ればそれと同じ文字列の印字されたプレートがテレビの横に貼られていました。作品のタイトルなのでしょう。文字はわたしが読み終えてしばらくするとた

だの煙に戻りました。もつわたしは驚きませんでした。力チ、力チ、と逆さまの柱時計が針を鳴らします。わたしは少し考え、そして笑いました。

「なるほど、なるほど。テレビは物語と観客を同時に表しているのですね。それが割れていることで『第四の壁を破つた』ことを表現している。散らばる破片は『内側から割られた』のミステリ的意味記号つまり『わたしたちのいるこの世界こそが物語だ』という意味の作品なわけだ。どうです、違いますか？」

わたしは振り返り、犯人を指さす名探偵のポーズをとりました。青髪さんはついつと指を振りました。再び煙がわたしの前にゆらめき集まり、文字を作ります。

『逆さまの理由は？』

わたしはふむ、とひとつ頷き、文字に背を向け偉そうな口調で言いました。

「見る意味の『観賞』と関わる意味の『干渉』をかけているのですね。テレビそのもののデザインも悪くありません。いやはや、なかなか面白いではありませんか、現代芸術。馬鹿にしたものではありませんね。合格点をあげましょう」

煙が再度わたしの正面で文字化しました。

『テレビが逆さまに置かれている理由』

フォントが可愛らしいものに変わっていました。音符までついています。わたしは煙文字にえいっ、とパンチをしました。文字は霧散しました。わたしは青髪さんに向き直り、肩をすくめて言いました。

「いいはすこし乾燥していますね。なにか飲むものはありませんか？」

青髪さんは声を出さずに笑いました。字幕のように浮かぶ『負けず嫌い』の五文字をわたしは努めて無視しました。どこから取り出したのか、彼は再びテープルの上にジュースを逆さまにして置きました。今度は野菜ジュースでした。それもまた力ゴメでした。しか

し今度はストロー付きの紙パックでした。

ぬるい野菜ジュースをファンタグレープの味にしてちゅーちゅーやりながら、わたしはアトリエの中をコツコツ音を立てて歩いては一つ一つのアートについて質問して回りました。アートは全て現在の地球の物で表現されていました。その全てに意味がありました。骨を咥えたまま自分の尻尾を追いかける犬の絵は、ウロボロス即ち『完全なもの』に近づこうとし、けれどもそれができない様子を記号化したものとして自己言及が未熟な様を表現しています。それがヘレンのシユガーポットの上に絶妙なバランスで置かれていることで『虚偽の擁護で自分を見失った愚者』のタイトルを与えられていました。横に倒されたソファの上に『ガネムシのブローチ』を足で押さえつける首のない陶器の犬が置かれたものは『情愛の暴力性』。真ん中からまつぱたつに割れたビデオデッキを頭に載せ、鉛筆で目を潰されたカーネル・サンダースは『社会秩序の共同幻想』。

全ての作品にタイトルのプレートがつけられています。青髪さんは一つ一つ煙文字でその意味を教えてくださいました。指を振り、煙を動かして説明する彼はどこか楽しそうでした。聞かず理解できるものもあれば聞いても理解できないものもありました。並ぶ作品はどれをとっても閉塞的で、抑圧的で、そしてシンボリックな『意味の集合』でした。わたしは気付きました。このお店、『アトリエ／蒼の伽藍』の作品たちは全て、今日のために、わたしのためだけに作られたものなのだと。それもまた根拠のない理解でした。そのことを話すと、青髪さんは微笑み、指を振つて煙を揺らしました。

『いざれ全てが意味を失う日が来る』

意味を、失う……。

わたしは黙つて頷きました。

『そのときに今日の出会いが役に立つ』

出会いというのは、青髪さんとのそれではありません。作品たちとの出会いを言つているのです。わたしにはそれがわかりました。

柱時計の音が止まりました。

ああ……時間切れ、なのですね。

「また会えますか？」

私は言いました。

青髪さんは口を開いてなにかを言おうとして、それに気付いて苦笑し、背を向けて指を振りました。

『夏野ひるまが心から望んだ時には、必ず』

いつもしてわたしたちは今日の目的を遂げました。お別れのときです。

煙のフォントが寂しげに見えたことは、気のせいなどではなかつたと、わたしは思います。

「本当に行くのか？」

『気遣う顔でツバメさんが言いました。わたしはその頭をよしよしと撫でました。彼は口を尖らせてそっぽを向きました。

「なにも、そなたが調査せずともよいではないか。魔物など、そなたは無関係であろうに』

「責任の問題です。強者は弱者に対し一定の奉仕をする責がありますよ。弟の受け売りですけれどね。あとはまあ、好奇心とプライドです。一度フォークをつけたものは食べるのが行儀のよい女といふものなのです」

「それでは太つてしまつぞ」

「太つたわたしは嫌いですか？」

「そ……それは、あれだが。しかし、一人で行くことはなからう

！」

「一人ではありませんよ。躊躇さんも一緒にです」

りんり

ツバメさんの眉がピクリと動きました。体からは不安の音が聞こえます。彼は黙り込み、やがて背に控える忠臣さんがたを振り返りました。

「リロ、我也一緒に」

「なりません、殿下」

「キブ、社会勉強を」

「なりません、殿下」

「ロニオール、お主だけは我の味方であろう?」

「忠義の犬であればこそ、危険を見過ごすことはできません」

ツバメさんはがつぐつと肩を落とされました。

ツバメさんいじりを終えたわたしは魔物事件の捜査を開始すべく、アテラキ氏のお宅へ向かいました。わたしの三歩後ろをビー君がぴつたりついてきます。わたしが止まれば彼も止まり、わたしが振り返れば丁寧にお辞儀をしてきます。弟の従者だか弟子だかであるらしい彼は今、ツバメさんに雇われてわたしの護衛をしているのでした。他にもシノビの方が二名ほど、こそこそと約十三メートルの距離を保つてついてくるのですが、あれは尾行のつもりでしょうか。わたしを尾行しようと思うなら最低でも一百メートルは離れなくてはいけません。そのようなことは実質不可能なのですから、この場合はお友達感覚で「すいません、尾行させてください」が正解となります。それを抜きにしても、殺された前任の方々のほうが優秀というのではまったくもつて笑えないお話をしました。お仕事は真面目にしてほしいものです。

無計画な都市開発で迷路のように道の入り組むバビの街ですが、しかし住み分けという意味では、街の建物の並びには一応の規則性があります。もっともそれは単純なもので、何番地何丁目の何号などという細かい住所管理はまだされていません。およそ円に近い形に壁で囲われたバビの街は、その真ん中で交差する一本の大路によって東西南北に、およそ等分にわけられています。街は中心に近づ

くにつれて段々と高くなっています。街の中心に近いいちばん高い位置には爵位持ちの一級市民の方々の家やお店が建ち並んでいます。ここが一級区です。ここに住めるのは一級市民に限られています。それより僅かに低いのが二級区で、最下層が三級区となります。それぞの地区にはそれぞれの階級以上の市民でなければ家を持つことを認められません。住所は居住区の階級と東西南北のどこであるかだけが管理されており、毎年の税金は、各階級・東西南北の長が家々を回つて集めます。ツバメさん曰く、把握できていない建物も多いようで、こんな調子では郵便屋さんができるのはまだまだ先のことでしょう。

田的字であるアテラキ氏邸は二級区西下段の古い石造りのお家でした。

「あの、ヒルマ様」

到着し、戸を叩こうと手を上げたわたしに、ジー君がためらつて話しかけてきました。

「様は要りませんよ。そんなにかしこまりずこに、呼びたいように呼んでくださいて結構です。ひるまちやんでもひるひるでも。ジー君は弟の身内なのですから」

「それじゃあ、姐御と」

ちょっと選択肢を間違えた感がありました。

ジー君は続けます。

「姐御は屋敷で殿下に、誰かと一緒に捜査をするとか言つてらしたと思つんですが」

「破廉恥さん　　いえ躊躇さんですね。昨日の白髪のでつかいのです」

「なるほど。それで、あの人は今ジニヒーラッシャるんで?」

「この時間でしたら、アカデミーで授業の準備をしてくるのではないでしょうか。或いは筋トレしかナンパか筋トレか」

「えつ?」

ジー君はわかりやすい驚きの声を上げました。

「でも、一緒に捜査をするつて」

「あれは嘘です。今朝はツバメさん 王子殿下をからかいたい気分だったので、つにありもしない」とを言つてしまつたのです」

「…………」

「そんな『おいやべーよ』に、みたいな顔をしないでください。照れます。わたしとツバメさんは仲良しなので、よくお互いをからかつたりするのですよ」

「いえ、でも、俺には殿下が今にも泣きそうな顔をしてらしたように見えたんですが」

「それは気のせいです」

「気の…………わかりました。」了解です

賢い少年でした。わたしはビー君に可愛く（このつえなく可愛く）微笑みかけました。

「それでは、わたしはアテラキさんにお話を聞いてきますので、近くで時間を潰していくください。九時の鐘が鳴る頃には終わると思います」

やうしてわたしはアテラキ氏宅の門を叩くのでした。

シモン少年のお母様は瘦せた、佇まいの上品な女性でした。躊躇さんの言つていたとおり、夜勤のお仕事をしていらっしゃるようで、わたしが訪ねた時は眠つていたそうでした（音でわかつっていましたが）。

結論から言いますと、シモン・アテラキ氏は生きていました。ロブロ少年を殺害したのはシモン氏でした。

勿論お母様はそのことを隠そつとしました。しかしわたしに欺きは通用しません。ほんの少しかまをかけると彼女はすぐに口を滑らせました。彼女はわたしを殺そうとし、そしてわたしに鎮圧されました。わたしは彼女に幾つかの質問をし、幾つかの提案をしました。

そうしてわたしは事件の真相の一面を知り、母親という生き物の

強さを見たのでした。

「自分で切り出しあおこてなんですが、本当にいいのですね？生活は一変して、おやや文明的な生き方は不可能になりますよ。おやうく食べ物は……」

「いいんです。息子と一緒にいられるならかまこません」

「殺されない保証はありませんよ」

「息子がそれを望むならかまこません」

「たとえ息子さんが望まなくても、あなたが女であるところ理由で殺されるかもしません」

「それでもかまこません。息子の選んだひとに殺されるなら本望です」

「わかりました。では、今後の行動は全てわたしの通りおこなってください」

「本当に、何から何までお世話になります。どうお礼をしていいか。わざわざじは早まつた真似をして、すみませんでした」

「お気になさりがす。わたしにも打算がありますので」

「あの……」

「はい」

「息子にこつ余えるのでしょうか」

「明日か、明後日には」

「……直しくお願ひします。息子はこい子なんです。本当に、いっ子なんです」

「ええ。きっとそういうのだうと思つます」

「わたしはお母様の手を握りました。それはしわしわの、疲れた手でした。わたしは言いました。

「普通でない」とは必ずしも悪ではありません。悪と呼ばれるおこないもまた、必ずしも悪ではありません。息子さんは少しだけ早すぎたのです。そしておそらく、お母様も……わたしはそう思います」

お母様は俯き、肩を震わせて哭慟しました。わたしはその涙の

じゅうじゅう

意味するところがよくわかりました。そこには罪悪感などありません。流れているのは人間社会の不理解に対する悲しみの涙でした。

話を終えたわたしはアテラキ氏のお宅をあとにしました。
お家の壁に背中を預けてじっと待っていたビー君がわたしの後ろを追いかけてきます。

「お話は終わつたんですね？」

「ビー君が言います。わたしは振り返つて笑いました。
「あなたが聞いていたことは知っています。街とわたしと、ビバカラにつきますか？」

ビー君は首を横に振りました。心臓の音に乱れはありませんでした。

「どつちにもつきません。俺はヨゾラの兄貴だけのものです。俺はただ、ヨゾラの兄貴に従つだけです。ここに来る前、兄貴は言つてました。姉さんには嘘をつくな、姉さんには逆らうな、たとえ国を敵に回しても姉さんとだけは争つな、って。それがおまえのためだ、って。だから今回は、兄貴の言葉にしたがつて姐御を手伝います」

彼の言葉に嘘はありませんでした。すべて本心からの言葉でした。本心から、彼は、わたしのことなどどうでもいいと思つているのです。ただ弟の言葉だけを忠実に守つているのです。わたしは疑問に思いました。弟は確かに強いです。けれどもそれは生き物としての強さのことであつて、人間としてはてんで子どもです。百年経つても子どものままでしよう。それくらいに単純な生き物です。そんな弟に、目の前のこの少年を虜にするだけの魅力があるのでしょうか。わたしには、そんなふうには思えませんでした。成長した、ということなのでしょうか。わたしの見ていないとこりで。そんなことがあり得るでしょうか。あのよぞらが、複雑な気持ちです。

「ビー君」

「はい、なんでしょうか姐御」

「あなたから見たよぞらは、どんな人間ですか？何でもいいので教

えてください

ビー君は「どんな……」と呟き、考え込むように黙りました。やがて彼は言いました。

「ヨゾラの兄貴は、そりやあまあ、めっぽう強いんですが……それだけじゃなく、俺みたいな学のない馬鹿にも優しく接してくれて、思慮深くて、それでいつでも物事を先の先まで見通している人です。兄貴がこうなるって言つたら本当にそうなつちまう。何が起きたも絶対に失敗なんてしない、まるで未来が見えてるような人です。王女殿下も、そんな兄貴のことを……えーと、つまり

「懸想していらっしゃる、と？」

「そんな感じです」

わたしはいよいよ混乱しました。弟が王女様とどんな関係にあろうと、それはいいのです。いえ、良くないこともなくはないですが、今はよしとします。しますが、人物評が駄目です。強い、優しいはまあ、そのとおりなのでしょう。しかし他が嘘です。思慮深い？先の先まで見通す？絶対に失敗をしない？未来が見えているような人？誰ですかそれは。うちのよぞらは心優しい単細胞生物です。決して馬鹿ではありませんが、阿呆です。ちょっと口のうまい人間が現れたらすぐに騙されてしまうような弟です。どういうことなのでしょう？わたしは頭をひねりました。まるでわかりません。その理由はビー君です。彼は嘘をついていないのです。本気でよぞらを『そういう人間』だと思っているのです。なんでしょう、この認識の枝分かれ感は。わたしの知るよぞらとビー君の知るよぞらは本当に同一人物なのでしょうか？不安になつてきました。

「うーん……」

「それでヒルマの姐御。俺は何をすればいいんですか

ビー君が言います。牧羊犬みたいな少年でした。わたしはひとまず思考の卓から弟を蹴落としました。あれのことは後でじっくり考えてみることにします。手紙にも色々と書いて試しましょう。わたしは溜め息を飲み込みました。

わたしはビー君のそこそこ逞しい胸板を見上げ、「どうあれや」と言いました。

「アカデミーの、わたしの研究室に行きましょう。そこでわたしの助手をしている学生と、可能なら猥褻、いえ躊躇さんも交えて明日の細かな計画をまとめます。といいでビー君、あなた体は丈夫ですか？」

ビー君は待つてましたとばかりに爽やかな笑みを浮かべます。彼はどんと自分の胸を叩いて言いました。

「ヨゾラの兄貴に一割の力で蹴られましたが、まだ生きてます！」
彼の音に嘘はありません。充分でした。どうやら既に駒は揃っているようです。「それでは」とわたしは言いました。そうしてのんびりと宣言したのでした。

「《魔物使い》シモン・アテラキとその母親を惨殺し、バビの街に偽りの平和を取り戻しましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3019v/>

ひるまのよぞら

2011年10月10日03時22分発行